

**BigFix プラットフォーム  
構成ガイド**



# 第 1 章 概要

このガイドでは、インストール後に環境で実行できる追加の構成手順について説明します。

## V9.5 の新機能

BigFix プラットフォーム・バージョン 9.5 では、新機能および機能拡張が提供されます。

### パッチ14:

#### セキュリティの脆弱性およびライブラリーのアップグレード

- libssh2 の外部ライブラリー・レベルはバージョン 1.9.0 にアップグレードされました。
- OpenLDAP の外部ライブラリー・レベルはバージョン 2.4.48 にアップグレードされました。

#### BigFix エージェントのサポートが追加されました。

以下で実行中の BigFix エージェントのサポートが追加されました。

- SUSE Linux Enterprise 15 PPC 64 ビット。
- Red Hat Enterprise Linux 8 x86 64 ビット。
- MacOS 10.15。
- Windows 10 バージョン 1909。

### パッチ13:

#### DMZ 内のリレー

DMZ ネットワーク内の子リレーへの接続を開始するよう、非武装地帯 (DMZ) 外の親リレーを構成できます。これは、リレー間の通信が必ず親リレーから開始されることを意味します。この機能を使用して、DMZ から内部の安全なネットワークに達する

ファイアウォール・ポートを開くことを回避でき、ご使用環境のセキュリティ強化につながります。

詳細については、[DMZ 内のリレー \( \(ページ\) 151\)](#)を参照してください。

### **リレー・チェーンを BigFix クライアントに残すことで、問題のトラブルシューティングの効率を向上**

リレー・チェーンはクライアントごとに識別され、クライアントとクライアントが登録されているサーバーとの間の登録に含まれている一式のリレーからなっています。この機能を使用すると、クライアントが登録ごとにリレー・チェーンを追跡するようにでき、リレー情報がクライアント側で入手できるようになります。これにより、クライアントとサーバー間の通信に関する問題のトラブルシューティングがより効率的になり、BES クライアント診断タスクによってレポートされるデータが改善されます。

詳細については、リレー・チェーンのクライアントでの表示 ( (ページ) )を参照してください。

### **BigFix エージェントを Solaris 11 に IPS フォーマット (.p5p パッケージ) でインストールする**

Solaris 11 では、最新の Solaris パッケージング・技術である IPS (画像パッケージ・システム) として、BigFix エージェントのインストール・パッケージが使用可能となっています。以前のバージョンのインストール・パッケージも使用可能です。したがって、要件に最適なインストール・オプションを選択できます。

詳細については、Solaris 11 のインストール手順 ( (ページ) )を参照してください。

### **actionsript を使用してレジストリー・キーを削除する**

actionscripts を使用することで、クライアントに設定されたレジストリー・キーの値だけでなく、キー自体を一括して削除で

きるようになりました。この操作も 64 ビット相当です。この機能により、例えば使用しなくなっているキーを削除することで、Windows のレジストリー・キーを維持できます。

詳細については、「[regkeydelete](#)」および「[regkeydelete64](#)」を参照してください。

## Web Reports コンポーネントにおける Adobe Flash Player の依存関係の削除

2020 年の Adobe Flash Player のサポート終了 (EOS) に対応する準備ステップとして、Adobe Flash Player の依存関係が Web Reports 機能から削除されました。ただし、グラフ表示の使用感は同じです。

## クライアントのコンテキストで照会を実行する

BigFix では、照会が Fixlet Debugger または REST API を使用して送信された場合に、これを実行するようエージェントの機能が拡張されています。これによって、トラブルシューティングや検査などのタスクに関連するものは、すべてこれらのインターフェースから直接実行できます。

詳細は、「[BigFix の照会](#)」を参照してください。

## Raspberry Pi における BigFix エージェントのサポートが追加

Raspbian 9 Raspberry Pi 3 のモデル B および B+ でのエージェントの実行がサポートされるようになりました。

詳細については、Raspbian (64 ビット) のインストール手順 ( (ページ) ) を参照してください。

## Intel における BigFix Agent SLES 15 のサポートが追加

Intel での SUSE Linux Enterprise 15 x86\_64 における BigFix エージェントの実行がサポートされるようになりました。

## セキュリティーの脆弱性およびライブラリーのアップグレード

- OpenSSL ツールキットのレベルがバージョン 1.0.2r にアップグレードされました。
- libcURL ファイルの転送ライブラリーのレベルがバージョン 7.64.0 にアップグレードされました。

## パッチ12:

### セキュリティの脆弱性およびライブラリーのアップグレード

このバージョンでは、セキュリティの脆弱性が対処され、一部のライブラリーがアップグレードされました。

- OpenSSL ツールキットのレベルがバージョン 1.0.2q にアップグレードされました。
- jQuery ライブラリーのレベルがバージョン 3.0.0 にアップグレードされました。
- jQuery UI ライブラリーのレベルがバージョン 1.12.1 にアップグレードされました。
- jqPlot (jQuery プラグイン) のレベルがバージョン 1.0.9 にアップグレードされました。

## パッチ 11:

### キャッシュされたファイルをピア (PeerNest) と交換することで、ネットワーク・トラフィックとリレー・インフラストラクチャー・コストを削減する

このバージョンでは、リレー・インフラストラクチャー・コストの削減に役立つピアツーピア構成が導入されました。ピアツーピア設定では、サブネット内のエンドポイントは、リレーからバイナリーを 1 回だけダウンロードするようにダウンロード・アクティビティを調整します。そのため、サブネット外部のネットワーク・トラフィックが減少します。この設定によって、エンドポイント間でバイナリーの交換が迅速かつ直接的に行われるため、各クライアントがリレーから同じバイナ

リーをダウンロードする必要がなくなり、支社から専用リレーを除去することが可能になります。

詳細については、「[ピアツーピア・モード \( \(ページ\) 155\)](#)」を参照してください。

### **クライアントが確立した永続的な接続経路でファイアウォールを通過してクライアントに通知を配信することで、リアルタイムの可視性を実現する**

BigFix Query 機能は、リレーがクライアントに新しい照会を通知する UDP ベースの通知に依拠しています。ファイアウォールまたは NAT はこの通知メカニズムをブロックする可能性があります。新しい永続的な接続機能により、リレーはクライアントが開始した永続的な接続を使用して、UDP ベースの通知を管理できるようになりました。あらゆるタイプの通知を配信できるため、コマンド・ポーリングに取って代わる、より迅速な手段となっています。永続的に接続されたクライアントは、同じサブネット内の他のクライアントに対する UDP 通知転送機能 (プロキシ) としても機能するため、接続数を削減してリレーのパフォーマンスを最適化することができます。リレーは、クライアントが確立した永続的な接続を介して、クライアントに通知を配信できます。

詳細については、「[永続的な接続 \( \(ページ\) 148\)](#)」を参照してください。

### **フォールバック・リレーを定義することで、BES サーバーの過負荷とネットワークの輻輳を防止する**

クライアントが設定内で指定したいずれのリレーにも接続できない場合、クライアントにフォールバック・リレーを定義できるようになりました。

詳しくは、ステップ 2 - ライセンス証明書の要求とマストヘッドの作成 ( [ページ](#) ) と [Linux システムでのマストヘッドの編集 \( \[ページ\]\(#\) \) 1003](#) を参照してください。

### **WebUI コンポーネントを BigFix プラットフォーム・インストールの一部として含めることで、そのインストールとアップグレードを簡易化する**

Windows および Linux 上での BigFix プラットフォームのインストール (評価版および正規版) に、WebUI コンポーネントをインストールするオプションが追加され、fixlet ベースのインストールよりも容易にインストールできるようになりました。WebUI コンポーネントのアップグレードは、プラットフォーム・コンポーネントの更新プロセスの一部として実行され、9.5.10 で示されたように、WebUI の規模を拡大して Linux または Windows BES サーバー・インストールから 120,000 のエンドポイントを管理できるようになりました。

詳しくは、WebUI のインストール ( [ページ](#) ) (Windows) および (オプション) - スタンドアロンの WebUI のインストール ( [ページ](#) ) (Linux) を参照してください。

### **BigFix コンポーネントとインターネット間のネットワーク通信に使用できる TLS 暗号を指定することで、企業のセキュリティを強化する**

このバージョン以降、マスター・オペレーターは暗号化に使用する TLS 暗号を制御できます。マスター・オペレーターは BESAdmin を使用して、マストヘッドで適用環境の TLS 暗号リストを設定できます。

詳細については、TLS 暗号リストの使用 ( [ページ](#) ) を参照してください。

### **一定時間の無操作状態後、BigFix コンソールを自動的にシャットダウンすることで、セキュリティを強化し、BES ルート・サーバー上の負荷を低減する**

このバージョン以降、BigFix コンソールの非アクティブ・セッションをキープ・アライブする最大時間を制御できます。タイムアウト後、BigFix コンソールはクローズされます。

詳細については、詳細オプションのリスト ( [\(ページ\)](#) )を参照してください。

### **インターネットへのアクセスをオプションで無効にして、BigFix サーバーのセキュリティーを強化する**

このバージョン以降、構成設定を使用して、サーバーがライセンスの更新およびサイトの収集のためにインターネットにアクセスするかどうかを制御できます。

詳細については、[Airgap モード \( \[\\(ページ\\) 797\]\(#\) \)](#)を参照してください。

### **HTTPS 経由かつ最適化された方法で WebUI コンテンツをより安全に収集する**

- WebUI: デフォルトで HTTPS を使用して BES サイトを収集  
HTTPS プロトコルを BigFix サーバー上またはエア・ギャップ環境内で使用することで、ライセンス更新および外部サイトを収集できます。詳細については、[収集のための HTTPS のカスタマイズ \( \[\\(ページ\\) 80\]\(#\) \)](#)を参照してください。
- Synch サーバーからの収集を最適化  
収集エラーのより効率的な処理により、収集プロセスが最適化されました。

### **新規ユーザーの作成時に最小限の権限を割り当てることで、より高いレベルのセキュリティーを実現する**



ユーザーを作成する際、デフォルトでユーザーに最小限の権限 (読み取り専用) を割り当てることで、セキュリティのレベルが強化されます。

詳しくは、詳細オプションのリスト ( (ページ) ) (defaultOperatorRolePermissions を検索) および [ローカル・オペレーターの追加 \( \(ページ\) 29\)](#) を参照してください。

### より詳細なサーバー監査ログを使用することで、セキュリティと可視性を拡張する

サーバー監査ログには、次の項目が含まれるようになりました。

- コンソールから、または API を通じてコンピューターが削除されたことについてのメッセージ
- アクションの削除に関するメッセージ
- 監査項目は、単一の行で表示され、フィールド区切り文字の同じ番号が含まれます。フィールド区切り文字は、その特定フィールドに値が存在しない場合でも表示されます。監査フィールドのフォーマットは、将来変更される場合があるため、各行には、最初の項目としてバージョン番号が含まれます。現在のフォーマットでは、(古いフォーマットの) 既存の監査ログ・メッセージのテキストが含まれ、最後のフィールドに表示されます。

サーバーは、次の 2 つの新規イベントに対して監査ログを作成します: アクションの削除およびコンピューターの削除。

詳細については、サーバー監査ログ ( (ページ) ) を参照してください。

**ネットワーク全体でのリレーの正常性を要約する新規ダッシュボードにより、リレー・インフラストラクチャーを管理するコストを削減する**

リレーの正常性ダッシュボードを使用して、ネットワーク全体でリレーのステータスを監視できるようになりました。リレーの正常性ダッシュボードに、BigFix 環境のリレーに関する具体的な詳細情報が表示されます。

詳細については、リレーの正常性ダッシュボード ( [ページ](#) ) を参照してください。

## クライアントでのタイムアウト・オーバーライドのデフォルト動作を構成する

このバージョン以降、特定の wait または waithidden コマンド定義の override セクションで別の処理が指定されている場合を除いて、wait または waithidden コマンドによってトリガーされるすべてのプログラムまたはプロセスに対する、特定のクライアントでのタイムアウトおよび後処理のデフォルト動作を定義できます。

詳細については、[設定のリストと詳細な説明 \( \[ページ\]\(#\) 167 \)](#) を参照してください。

## プラットフォーム REST API インタラクションの最適化および促進

API リソース `/api/actions` および `/api/action/{action id}/status` を使用する際、`?fields=` パラメーターを使用して、特定のリソースに対して返されるフィールドの数を制限することで、REST 要求によって返されるフィールドの数を制御および削減できるようになりました。

詳しくは、『[Action](#)』と『[Computer](#)』を参照してください。

## Fixlet デバッガーで FastQuery インターフェースを使用して、fixlet の作成とテストを迅速化する

Fixlet デバッガーが拡張され、ローカル Fixlet デバッガー・エバリュエーターやローカル・クライアント・エバリュエーターのほかに FastQuery インターフェースを使用するようになりまし

た。関連度を評価するリモート・エンドポイントを選択できません。

詳しくは、『[Fixlet Debugger](#)』を参照してください。

### 余裕がない保守期間で作業する際、サブアクションのダウンロードが使用可能になる前にグループ・アクションを開始できるようにすることで、時間を節約できる

関連する最初のサブアクションのダウンロードが使用可能であれば、クライアント上ですべてのサブアクションのダウンロードが使用可能でなくても、ダウンロードの事前キャッシュを伴うグループ・アクションを開始できるようになりました。また、「ディスクに制限あり」制約がある場合でも、できるかぎり多くのダウンロード要求を続行することで、サーバーおよびリレー・キャッシュが用意されます。

詳細については、[データの事前キャッシュの有効化 \(ページ 990\)](#)を参照してください。

### その他の機能拡張

- 構成設定に関する資料が改良されました。詳細については、[BigFix 構成設定 \(##### 166\)](#)を参照してください。
- Self-Service Application (SSA) の新規バージョンを有効にするためのクライアント・コンポーネントの変更が追加されました。
- Windows Server 2019 でエージェントとリレーを実行するためのサポートが追加されました。

### パッチ 10:

#### CDT キー・ファイル・オプションおよびカスタム・インストール・パス

クライアント適用ツール (CDT) ウィザードから BigFix クライアントをインストールする場合、SSH キー認証を介してターゲット・コンピューターにアクセスできます。また、デフォルトの

インストール・パスを使用しない場合、Windows ターゲット・コンピューターに対してカスタム・インストール・パスを指定できます。

詳しくは、コンソールからのクライアントの適用 ( (ページ) ) を参照してください。

### Web レポートのための TLS で暗号化された SMTP 接続

Web レポートから E メール・アドレスを設定する場合、SMTP 接続を TLS にアップグレードできます。

詳しくは、電子メールのセットアップ ( (ページ) ) を参照してください。

### コマンド・ライン・ユーティリティーで利用される Windows 認証

Windows 資格情報を使用して、PropagateFiles.exe ツールや IEM CLI などの BigFix ユーティリティーに対して認証を行うことができます。

詳しくは、[名前が FileOnlyCustomSite で始まる特別なカスタム・サイトの作成 \( \(ページ\) 1012\)](#) を参照してください。

### Windows のパフォーマンス、効率性、および保守性の向上

- FillDB 構成が変更され、データベース一括挿入操作および更新操作をより効率的に行うことができるようになりました。FillDB がデータベースへのクライアント・レポートのプッシュを担当する場合、BigFix の応答性と効率性が向上します。
- Microsoft SQL Server の構成が更新され、BigFix の並行性とスケーラビリティ・オプションが改善されました。
- BigFix 提供の Microsoft SQL Server インデックス管理スクリプトが再作成され、改善されたフォールト・トレランスにより、インデックスをより適切に管理できるようになりました。一方で、システム・リソースの消費は少なく、またアプリケーションの影響も削減されています。

これは、BigFix の長期的なパフォーマンス、スケーラビリティ、および安定性に良い影響を与えます。


### Power 9 での BigFix エージェント SLES 11 および 12 のサポートの追加

次の BigFix エージェントのサポートが追加されました。

- Power 9 での SUSE Linux Enterprise 11 PPC (P8 互換モード)
- Power 9 での SUSE Linux Enterprise 12 PPC (P9 モード)

### Mac OS 10.14 での BigFix エージェントのサポートの追加

MacOS 10.14 で BigFix エージェントのサポートが追加されました。

 **注:** Mac OS Mojave バージョン 10.14 以降では、デフォルトのセキュリティ設定によりユーザーのライブラリーにある特定のフォルダーへのアクセスが制限されることがあり、これによりカスタム・コンテンツに影響が出る可能性があります。詳しくは、クライアント要件 (#####) を参照してください。

### Mac OS エージェントの 64 ビット対応

Mac OS エージェント・バイナリーが 64 ビット・アプリケーションになりました。

### 災害復旧、ハードウェア・マイグレーション、およびロールバックの手順の変更

一部のセキュリティ拡張によって行われた変更は、災害復旧、ハードウェア・マイグレーション、およびロールバックの手順に影響します。これらの手順について詳しくは、以下を参照してください。

サーバー・バックアップ ( (ページ) )

サーバーのリカバリー ( (ページ) )

Linux システム上の製品コンポーネントの削除 ( (ページ) )

[Linux での BigFix サーバーのマイグレーション](#)

### **Red Hat のインストール・パッケージの署名キーの変更**

BigFix バージョン 9.5.10 以降、サーバー、エージェント、およびリレー用の Red Hat RPM パッケージには、バージョン 9.5.9 で使用されていたものとは異なる新しい PGP キーを使用して署名が行われています。また、CentOS BigFix エージェントおよびリレーは同じ Red Hat バイナリーを使用します。同じことが Oracle Linux BigFix エージェントにも当てはまります。

詳しくは、「Red Hat のインストール手順 ( (ページ) )」を参照してください。

### **パッチ 9:**

#### **Red Hat インストール・パッケージへの署名の追加**

BigFix バージョン 9.5.9 以降、サーバー、エージェント、およびリレー用の Red Hat RPM パッケージには、PGP キーを使用して署名が行われています。また、CentOS BigFix エージェントおよびリレーでは、同じ Red Hat バイナリーが使用されています。同じことが Oracle Linux BigFix エージェントにも当てはまります。

詳しくは、Red Hat のインストール手順 ( (ページ) )を参照してください。

#### **エージェントが指定の (優先される) リレーに接続されていない場合、エンドポイントでダウンロード・アクションを制限可能**

BigFix 9.5.9 では、BigFix エージェントが優先リレーに接続されていない場合に、ダウンロードを必要とするアクションを開始できないようにする機能が導入されました。このシナリオでは、アクションに関連するダウンロードの合計サイズが構成値

を超えている場合に、そのアクションが実行されるのを回避できます。

詳しくは、[ダウンロード \( \(ページ\) 609\)](#)を参照してください。

### Web レポートで一部のプロパティへのアクセスを制限可能

BigFix 9.5.9 では、新しいクライアント設定が導入され、ブラックリストに登録する Web レポートのプロパティのリストを構成できるようになりました。このシナリオでは、大規模なデータまたは機密データがレポートされるのを回避でき、メモリーの使用量を制限できます。

詳しくは、[Web レポート \( \(ページ\) 857\)](#)の「\_WebReports\_Properties\_Blacklist 設定」を参照してください。

### リレーあたり 5000 のエンドポイントがサポートされ、リレーのスケラビリティが向上

Windows および Linux プラットフォームの BigFix リーフ・リレーを構成することで、最大 5000 のエンドポイントを管理できるようになりました。

実装のガイドラインについては、BigFix のキャパシティー・プランニング・ガイドを参照してください。[BigFix の性能および処理能力のプランニング](#)。

### Power 9 での AIX 7.2 のサポートの追加

Power 9 での AIX 7.2 で BigFix エージェントおよびリレーのサポートが追加されました。

## パッチ 7:

### インストール時に新しいデータベースを提供

BigFix サーバーのバージョン 9.5 パッチ 7 のフレッシュ・インストールを実行する際に、データベース・エンジンが検出されない場合、Microsoft SQL Server 2016 SP1 評価版をインストー

ルするか、SQL Server の別のバージョンを手動でインストールするかを選択できます。提供される評価版の有効期間は 180 日です。

### **Windows インストール・ファイルのサイズの削減**

フレッシュ・インストールまたはパッチ 7 へのアップグレードを実行する際、SQL Server インストーラーは別個のファイルとして提供され、BigFix サーバー・インストーラーには含まれなくなつたため、サイズが小さくなりました。

### **クライアント適用ツールの機能拡張**

- すべてのサポート対象プラットフォームにエージェントを配布する新しいウィザードの追加
- デプロイメントの結果を表示する新しいダッシュボードの追加
- ターゲット・ログ・ファイルを BigFix サーバーにアップロードする機能の追加

### **UNIX クライアントおよび Linux クライアントでローカル・エンコードを使用するファイルおよびフォルダーの名前**

UNIX クライアントおよび Linux クライアントのローカル・エンコードが BigFix サーバーでのエンコードと異なる場合でも、それらのクライアントのファイルおよびフォルダーの名前を指定できます。クライアントで実行されるアクションに応じて、[BigFix Developer サイト](#)に記載されているコマンドのセットを使用できます。

### **異なるエンコードを使用するファイルからの読み取りおよび書き込み**

エンコード・インスペクターを使用して、異なるエンコードを使用するファイルからの読み取りおよびファイルへの書き込みができます。詳しくは、「特定のエンコードでのファイルの読



み取りと書き込み ( (ページ) )」 および [BigFix Developer サイト](#) を参照してください。

### クライアント検出時のクライアント ID マッチングの機能拡張

新しい設定 (`clientIdentityMatch`) を使用すると、BigFix サーバーは既存のコンピューター情報を使用して、クライアント ID のマッチングと、ロールバックまたは復元された可能性のあるコンピューターへの同じ `ComputerID` の再割り当てを試行し、重複するコンピューター・エントリーが存在するのを防ぐことができます。

### ターゲットに対するローカル・ユーザーとしてコマンドを実行する際の新しいオプション

**override** アクション・スクリプト・コマンドが、ログオン・ユーザーとは異なるユーザーとしてターゲット・クライアント上でコマンドを実行するための新しいオプションによって改善されました。詳しくは、BigFix Developer Web サイトの [override コマンド](#) を参照してください。

### SSL 構成の資料の改善

SSL 構成の資料が、さまざまな BigFix アプリケーション間で広く整合性を確保するように更新されました。SSL 構成の概要 (認証条件、およびすべての BigFix アプリケーションの SSL 構成手順へのリンクを含む) を参照してください (複数の BigFix アプリケーションにわたる HTTPS ( (ページ) ) )。

## パッチ 6:

### セキュリティー実施の機能拡張

- デプロイメントでさらに高いレベルのセキュリティーを実施するために、2 つの新しいマストヘッド・パラメーター、`minimumSupportedClient` および `minimumSupportedRelay` が追加されました。詳しく

は、Windows サーバーの場合は追加の管理コマンド (###  
## )、Linux サーバーの場合はBigFix 管理ツールの実行 (##### )を参照してください。

- 新しい詳細オプション (`requireSignedRegistration` ) を使用して、サーバーにインストールされている BigFix と同じバージョンにアップグレードされていないリレーが登録チェーンに少なくとも 1 つある場合は、クライアント登録要求を受け入れないようにすることができます。

### Fixlet/タスク・コンテンツでの新しいセキュリティー検査

インポートまたは生成された Fixlet およびタスクのコンテンツを解析し、スクリプト・コンテンツが存在する可能性を識別するために、新しいセキュリティー検査が追加されました。そのようなコンテンツが検出された場合、コンソール・オペレーターに警告パネルが表示されます。

### OpenSSL 初期化の変更

9.5.6 以降、各 BigFix コンポーネントは、クライアント設定 `_BESClient_Cryptography_FipsMode` の有無、およびクライアント・マストヘッドに基づいて FIPS モードで OpenSSL を初期化します。

### リレー診断ページのデフォルト・ステータスの変更

サーバー・コンポーネントおよびリレー・コンポーネントのいずれでも、リレー診断ページはデフォルトで無効に設定されるようになりました。リレー診断ページは、それらのコンポーネントで `_BESRelay_Diagnostics_Enable = 1` を設定すると、再び有効にすることができます。

### その他の変更

- 新しい証明書を使用した Mac クライアントの再署名
- Windows 10 Creators Update 用のコンソール資格

## パッチ 5:

### BigFix Detect アプリケーションの有効化

#### クライアント適用ツールの機能拡張

- 新しい Fixlet を使用することにより、すべてのサポート対象プラットフォームでエージェントのディストリビューションを使用できるようにしました
- BigFix バージョン 9.5 でサポートされなくなったエージェントのバージョンを含む、以前のエージェントのバージョンのディストリビューションを使用できるようにしました

#### 特定のユーザーとして Fixlet アクションを実行し、アクションのコンテキストを指定する機能の追加

どの特定のユーザーのコンテキストで特定のアクションがエンドポイントで実行される必要があるかを指定しました

#### エア・ギャップ・ツールの機能拡張

- セキュアな適用環境で BigFix サーバーにアクセスすることなく、外部サイトで情報を収集する機能を追加しました
- ファイルのダウンロード機能を追加しました

#### マルチスレッド・アプローチを使用してエージェント・レポートを処理するための FillDB コンポーネントの機能拡張

マルチコア・サーバー・リソースを活用することにより、BigFix プラットフォームのパフォーマンスを改善しました

#### マスター以外のオペレーターが他のマスター以外のオペレーターのアクションを停止する機能の追加

#### 正規版ライセンスに移行する必要がある場合に既存の BigFix 適用環境を取り替える必要性を回避するための BigFix 評価版インストールの機能拡張

「試用版」のシナリオのユーザー・エクスペリエンスを向上させ、インストールし直すことなく、評価環境を実稼働環境にプロモートしました

### **ベースラインのサポートに対応した REST API の拡張**

REST API により、コンソールで利用できるベースラインの主要機能を実行できるようにしました

### **BigFix エージェント・アプリケーションの使用状況の要約のインスペクターの拡張**

プロセスの実行可能パスを収集します

### **Mac OS 版の BigFix エージェントおよびインスペクターの拡張**

- /Library パスにインストールされたアプリケーションを検出します
- Wi-Fi インスペクターを改善しました
- Mac にインストールされたアプリケーションを検索するためにインスペクターを使用する際にスポットライト検索を活用します
- プロセス・インスペクターがプロセスのパス名を報告できるようにしました

### **Web UI から直接アクセスできるようにするための BigFix データベース層の改善**

- Web UI が ETL に依存せずすむようにして、引き続き ETL を活用している現行の Web UI のバージョンとの後方互換性を確保しました
- Web UI のスケーラビリティとパフォーマンスを改善しました

### **クライアント UI のエンド・ユーザー・エクスペリエンスの向上**

- 実行中のメッセージ・ダイアログをオプションで破棄不能にできるようにしました
- 実行中のメッセージ・ダイアログをオプションで最上位に表示できるようにしました

### セルフサービス・アプリケーションの有効化の拡張

- ベースラインおよび MAG 定義に含まれている REST API ブロッキング「action-ui-metadata」 MIME フィールドを許可しました
- 使用可能な提案のメッセージで提案がいつ発行されたかを示すタイム・スタンプ情報を追加しました

### セキュリティの機能拡張

- 非 FIPS OpenSSL Windows ライブラリーが ASLR を使用するように変更しました
- オペレーティング・システムが FIPS モードである場合のクライアント・インストールを可能にするために、ネイティブの Red Hat Enterprise Linux (RHEL) バージョン 6 ベースのエージェントおよびリレーを作成しました

### パッチ 3:

#### リモート Web UI デプロイメントの有効化

BigFix サーバーではなくリモート・エンドポイントで Web UI をデプロイすることができます。

#### BigFix Query 機能拡張の使用可能化

動的グループを対象として BigFix Query 要求を実行できます。

#### BigFix ソフトウェア配信拡張機能の有効化

SWD アプリケーションを使用する際に、クライアント UI からセルフサービス・カタログを使用できます。

## DB2 HADR の使用可能化

BigFix サーバーのシャットダウンを行う必要なくデータベースのバックアップを実行できます。

## BigFix Patch 機能拡張の使用可能化

クライアント・インスペクターのセットに新規インスペクターが追加され、パッチ・アプリケーションで AIX エージェントの破損したファイル・セットを検出できるようになりました。

## 新規プラットフォームおよびデータベース・レベルに対するサポートの追加

- Microsoft SQL 2016 サポート
- リレーに対する Tiny Core Linux サポート。
- BigFix エージェントが以下でサポートされるようになりました。
  - SUSE Linux Enterprise 12 on Power 8 リトル・エンディアン
  - Ubuntu 16.04 on Power 8 リトル・エンディアン
  - Windows Server 2016 および System Center 2016
  - Windows 10 Anniversary Update
  - Mac OS 10.12 (Sierra)

## 新規 BigFix Developer サイトへの BigFix プラットフォーム資料の移行

以下の資料の内容が改定および拡充され、[BigFix Developer Web サイト](#) (BigFix プラットフォームの開発およびカスタマイズの資料に対する新規リポジトリ) に移行されました。

- Relevance ガイド
- アクション・ガイド
- API リファレンス・ガイド

## 追加の機能拡張

- Windows バイナリー用の SHA-2 署名証明書
- 管理者以外のユーザーとして Web レポートをインストールおよび実行するための機能。

## パッチ 2:

### BigFix Query

この機能を使用して、WebUI BigFix Query アプリケーションから、または REST API の使用により、クライアント・ワークステーションに関する情報を取得して関連度の照会を実行できます。この機能は、BigFix Lifecycle または BigFix Compliance バージョン 9.5 パッチ 2 以降のライセンスでのみ使用できません。詳しくは、[BigFix Query の使用によるクライアント情報の取得 \(##### 138\)](#)を参照してください。

## バージョン 9.5

### Unicode サポート

BigFix プラットフォーム V9.5 は、さまざまなコード・ページおよび言語でデプロイされた BigFix クライアントからデータを収集し、そのデータを UTF-8 形式にエンコードして、BigFix サーバーに報告します。

### HTTPS 収集

BigFix サーバー上またはエアー・ギャップ環境で HTTPS プロトコルを使用してライセンス更新および外部サイトを収集できます。

### SAML V2.0 の統合

コンソールに接続する BigFix LDAP オペレーター用に、シングル・サインオンと CAC/PIV 認証がサポートされます。

### データベース・クリーンアップ・ツール

BES 管理ツールのインターフェースまたは BES 管理ツールのコマンド・ラインを使用して、コンピューター、カスタム

Fixlet、プロパティ、分析、およびアクションに関するデータを削除できます。また、変更内容を適用して PropertyIDMap テーブルを更新できます。

### FillDB ログ・ローテーション

デフォルトでアクティブになっており、LogFileSizeLimit の値は 100 MB に設定されています。

V9.5 で導入された変更および機能拡張について詳しくは、「[リリース・ノート](#)」を参照してください。

## Service Management Connect

Service Management の専門技術者と連絡を取り、学習し、共有する: 製品サポートの技術専門家

[エンドポイント管理](#) で Service Management Connect にアクセスできます。Service Management Connect を使用すると、以下を行うことができます。

- 他のユーザーと HCL 開発者の間の公開された進行中の取り組みである透過的開発に参加する。初期設計、スプリント・デモ、製品ロードマップ、プレリリース・コードにアクセスすることができます。
- 共同作業する専門家と 1 対 1 で情報を交換する。
- ブログを読んで、他の人の専門知識や経験を参考にする。
- Wiki やフォーラムを使用して、より広範囲にわたるユーザー・コミュニティと共同作業を行う。

## 本書で使用される用語

BigFix の用語は、常に BigFix というラベルが付いているとは限りません。

次の用語は、すべて BigFix の用語です。これらの用語は、本書全体で、BigFix というラベルなしで随時使用されます。

### エージェント



BigFix クライアントがインストールされているコンピューター

## コンソール

BigFix コンソール

## クライアント

BigFix クライアント

## サーバー

BigFix サーバー

## リレー

BigFix リレー

# 第 2 章. BigFix サイト管理者およびコンソール・オペレーター


BigFix には、次の 2 種類の基本的なユーザー・クラスがあります。

## サイト管理者

サイト管理者は、BigFix ソフトウェアのインストールと保守、および環境全体に影響を与える管理用タスク (サイト・レベルの署名鍵管理など) の実行を担当します。BigFix 環境のサイト管理者は 1 人のみです。詳しくは、[サイト管理者 \(##### 26\)](#) を参照してください。

## コンソール・オペレーター

BigFix のユーザーであり、BigFix コンソールにアクセスして、許可されている場合には WebUI にアクセスします。BigFix コンソールの管理者ユーザーである **マスター・オペレーター (MO)** や、自身のドメインの日常的な管理を行う **オペレーター (NMO)** の場合もあります。マスター・オペレーターは他のオペレーターを作成して管理権限を割り当てることができますが、オペレーターはいずれも実行できません。詳しくは、オペレーターの概要 (##### ) を参照してください。

 **注:** オペレーターを定義する際に、ユーザー名に無効な文字 (:、@、および \) が含まれていないことを確認してください。

## サイト管理者

サイト管理者の主な責務を以下に示します。

### アクション・サイト認証情報の取得とセキュリティー保護

BigFix をインストールするために、サイト管理者は、秘密鍵の生成、HCL からのライセンス証明書の受け取り、デジタル署名と構成情報を持つマストヘッドの作成を行う必要があります。これは特殊なキーであるため、以下に示すようなサイト・レベルのタスクでのみ使用してください。

- グローバル・システム・オプションの設定
- マストヘッドの編集
- 分散サーバー・アーキテクチャー (DSA) の管理

## サーバーの準備

BigFix サーバーがインターネットと外部通信するように、およびクライアントと内部通信するように正しくセットアップする必要があります。またサーバーが BigFix データベース (または SQL Server データベースとして使用できる別のコンピューター) をホストするように構成する必要もあります。

## 各種コンポーネントのインストール

サイト管理者は、BigFix のクライアント・モジュール、サーバー・モジュール、リレー・モジュール、コンソール・モジュールをインストールして、最初のマスター・オペレーターの資格情報を構成します。マスター・オペレーターは、コンソールに接続して、ライセンスのサブスクリプションを定義し、サブスクライブしたサイトからコンテンツを収集して、BigFix ネットワーク、役割、および他のオペレーターを定義します。

サイト管理者は、災害対応サーバー・アーキテクチャー (DSA) ( [ページ](#) ) で、BigFix サーバーの自動フェイルオーバーおよび自動フェイルバックを実行するための複数の BigFix サーバーのセットアップと管理を行います。

## サーバーの保守

BigFix サーバーは、SQL Server データベースといくつかの特定のサービス (診断ツールや管理ツールの実行など) を実行します。Fixlet テクノロジーを使用して、アップグレードやフィックスなどの標準的なメンテナンス・タスクが管理されます。これらのタスクは、サイト管理者が手動で実行することもできます。

日常的なコンソール操作を実行するために、サイト管理者はマスター・オペレーター・キーを作成する必要があります。

サイト管理者は以下を実行できません。

- BigFix コンソールにアクセスします。
- インストール時に作成されたオペレーター以外のオペレーターの作成。
- BigFix WebUI にアクセスします。
- BigFix 照会の実行。

## コンソール・オペレーター

コンソール・オペレーターには以下の2つのタイプがあります。

### マスター・オペレーター (MO)

コンソールの管理ユーザーです。マスター・オペレーターは、BigFix 環境で定義されているすべてのコンピューターへのアクセス権と、他のコンソール・オペレーターの作成権限と管理権限を持っています。すべてのマスター・オペレーターが、オペレーターに対してアクションの適用を許可する管理権限の作成、割り当て、取り消しを行うことができます。

### オペレーターまたはマスター以外のオペレーター (NMO)

マスター・オペレーターによって管理を許可されたコンピューターのサブセットに対する Fixlet の管理やアクションの適用などを含む、BigFix の日常的な操作を管理します。他のオペレーターを作成することも、管理権限を割り当てることもできません。

デフォルトでは、コンソール・オペレーターは以下を実行できません。


- WebUI へのアクセス (「WebUI を使用できます」権限が「はい」に設定されている場合を除く)。
- BigFix 照会の実行依頼 (「WebUI を使用できます」と「照会を送信可能」の両方の権限が「はい」に設定されている場合を除く)。

このような権限は、マスター・オペレーターがオペレーターの説明の「詳細」タブの「権限」領域で設定できます。オペレーターの権限については、[許可されるアクティビティと許可とのマッピング \(##### 34\)](#)を参照してください。

# コンソール・オペレーターを追加するための各種の方法

コンソール・オペレーターを追加して、役割を割り当てたり、特定のコンピューターおよびサイトの表示または管理を行うためのアクセス許可を付与したりするには、いくつかの方法があります。

- オペレーターを 1 人追加する作業は、「ツール」 > 「オペレーターの作成」項目を選択するか、オペレーターの作業域を右クリックしてから「オペレーターの作成」を選択することでいつでも行うことができます。詳しくは、[ローカル・オペレーターの追加 \(##### 29\)](#)を参照してください。
- Active Directory または汎用 LDAP を使用している場合、「ツール」 > 「LDAP オペレーターの追加」項目を選択するか、オペレーターの作業域を右クリックしてから「LDAP オペレーターの追加」を選択することで、以前に定義されたユーザーを追加できます。詳しくは、[LDAP オペレーターの追加 \(##### 53\)](#)を参照してください。
- また、LDAP グループを既存の役割に関連付けることもできます。このようにして、1 回のクリックで、LDAP グループで指定された各ユーザーのオペレーターを追加したり、そのオペレーターを役割に関連付けたりします。この機能については、[LDAP グループの関連付け \(##### 56\)](#)を参照してください。

 **注:** LDAP オペレーターと LDAP グループを使用する場合は、まず Active Directory ディレクトリーまたは LDAP ディレクトリーを BigFix に追加する必要があります。

## ローカル・オペレーターの追加

ローカルの BigFix アカウントを使用してコンソールにアクセスするオペレーター用に、アカウントを作成することができます。

ローカル・オペレーターを追加するには、以下の手順を実行します。

1. 「ツール」 > 「オペレーターの作成」メニュー項目をクリックするか、オペレーター作業域で右クリックして、「オペレーターの作成」を選択します。「ユーザーの追加」ダイアログが表示されます。

The screenshot shows a dialog box titled "Add User". It has three input fields: "Username" with the text "James Baud", "Password" with seven dots, and "Verify password" with seven dots. At the bottom, there are two buttons: "OK" and "Cancel".

2. 発行者またはオペレーターとして指定するユーザーの「**ユーザー名**」を入力します。
3. 「**パスワード**」を作成し、確認のために再入力します。オペレーターにキーを知らせた場合、オペレーターは必要な場合にパスワードを変更できます。
4. 「**OK**」をクリックします。「**コンソール・オペレーター**」ウィンドウが開きます。
5. 「**詳細**」タブから、オペレーター権限を割り当てます。

Permissions		
	Explicit Permissions	Effective Permissions
Master Operator	No ▼	No
Show Other Operators' Actions	Yes ▼	Yes
Stop Other Operators' Actions	No ▼	Yes
Can Create Actions	Yes ▼	Yes
Can Lock	Yes ▼	Yes
Can Send Refresh to Multiple Computers	Yes ▼	Yes
Can Submit Queries	No ▼	No
Custom Content	Yes ▼	Yes
Unmanaged Assets	Show All ▼	Show All

BigFix 管理ツールの「**詳細オプション**」の「**defaultOperatorRolePermissions**」オプションを使用して、デフォルト設定を制御できます。詳細については、[詳細オプションのリスト \( \(ページ\) \)](#)を参照してください。

Permissions		
	Explicit Permissions	Effective Permissions
Master Operator	No ▼	No
Show Other Operators' Actions	No ▼	No
Stop Other Operators' Actions	No ▼	No
Can Create Actions	No ▼	No
Can Lock	No ▼	No
Can Send Refresh to Multiple Computers	No ▼	No
Can Submit Queries	No ▼	No
Custom Content	No ▼	No
Unmanaged Assets	Show None ▼	Show None

## マスター・オペレーター

当該オペレーターがマスター・オペレーターであるかどうかを指定します。

## 他のオペレーターのアクションの表示

当該オペレーターが他のオペレーターによって実行依頼されたアクションを表示できるかどうかを指定します。

### 注:

「他のオペレーターのアクションの表示」権限を持つオペレーターは、次の場合にのみアクションを表示できます。

- アクションの所有者である場合。
- 当該オペレーターの1つ以上の管理対象コンピューターで他のオペレーターがアクションを実行依頼し、そのコンピューターが両方のオペレーターによって管理されている場合。このケースでは、コンピューターがデータを BigFix サーバーにレポートする場合にのみ、情報を使用できます。


## 他のオペレーターのアクションの停止

BigFix プラットフォーム V9.5 パッチ 5 以降、オペレーターが他のオペレーターによって実行依頼されたアクションを停止できるかどうかを

指定できます。トリガーされていてもまだ期限切れになっていないアクションを停止するには、当該オペレーターに割り当てられている役割またはコンピューター管理権限が、アクションを実行依頼したオペレーターに割り当てられている役割またはコンピューター管理権限と同一であるか、そのスーパーセットでなければなりません。この機能を使用するには、当該オペレーターの「**他のオペレーターのアクションの表示**」権限が「はい」に設定されていることも必要です。

### アクションの作成が可能

当該オペレーターがアクションを作成できるかどうかを指定します。

 **注:** 非マスター・オペレーターがデータベースからコンピューターを削除するには、「**アクションの作成が可能**」権限が必要です。

### ロック可能

当該オペレーターがターゲットをロックできるかどうかを指定します。これは、他のオペレーターがそのターゲットでアクティビティを実行できないようにする 1 つの方法です。

### 複数クライアントへの更新の送信が可能 (Can Send Refresh to Multiple Clients)


当該オペレーターが BigFix コンソール上の「**更新**」ボタンをクリックすることにより複数のターゲットに対して同時に更新を実行できるかどうかを指定します。

### 照会を実行依頼できます (Can Submit Queries)

当該オペレーターが WebUI ユーザー・インターフェースから BigFix 照会要求を実行依頼できるかどうかを指定します。

### カスタム・コンテンツ

カスタム・コンテンツの作成が必要なアクティビティを当該オペレーターが実行できるかどうかを指定します。

 **注:** 「**カスタム・コンテンツ**」および「**アクションの作成が可能**」権限を持つ非マスター・オペレーターは、既存のコンピューター設定の編



集/削除のみ可能で、新しいコンピューター設定を追加することはできません。

## 非管理資産

BigFix コンポーネントが1つもインストールされていない資産を当該オペレーターが管理できるかどうかを指定します。

「**明示的な権限**」は、オペレーターに割り当てることになる権限です。「**有効な権限**」は、オペレーターが割り当てられた役割から継承された権限です。同じ権限に対して「**明示的な権限**」と「**有効な権限**」に表示される値が異なる場合は、より制限が少ない権限が適用されます。

再起動やシャットダウンをポスト・アクションとしてトリガーする、または BigFix アクション・スクリプトに含めるオペレーターの権限も設定します。

Restart and Shutdown [ ? ]		
	Explicit Permissions	Effective Permissions
Post-Action Behavior	Allow Restart and Shutdown ▼	Allow Restart and Shutdown
Action Script Commands	Allow Restart and Shutdown ▼	Allow Restart and Shutdown

特定のオペレーターに対して設定したシャットダウンおよび再起動の構成によっては、「アクションの実行」パネルのラジオ・ボタンがそのオペレーターに対して無効になる場合があります。この構成は、タイプが BigFix アクション・スクリプトではないアクションに対しては無効です。

BigFixユーザー・インターフェースにアクセスするための権限を設定することもできます。

Interface Login Privileges		
	Explicit Permissions	Effective Permissions
Can use Console	Yes ▼	Yes
Can use WebUI	Yes ▼	Yes
Can use REST API	Yes ▼	Yes

6. 「**管理対象コンピューター**」タブに、このオペレーターが管理できるコンピューターのリストが表示されます。このリストにデータが取り込まれるのは、「**コンピューターの割り当て**」タブに指定された条件を満たすコンピューターが、その情報を BigFix サーバーに報告した後です。

7. 「割り当てられた役割」 タブで、このオペレーターに適用する役割を選択します。
8. 「サイト」 タブで、このオペレーターにアクセスを許可するサイトを割り当てます。
9. 「コンピューターの割り当て」 タブで、このオペレーターが扱えるコンピューターが合致する必要があるプロパティを指定します。マスター・オペレーターの場合、すべてのコンピューターが割り当てられます。
10. 「WebUI アプリケーション」 タブで、オペレーターにアクセスを許可する WebUI アプリケーションを指定します。
11. 変更内容を保存するには、「**変更の保存**」をクリックします。

また、ローカル・オペレーターを、いつでも LDAP オペレーターに変換できます。これを行うには、以下のステップに従ってください。

1. 任意のローカル・オペレーター・リストで、変換したいオペレーターを右クリックします。
2. コンテキスト・メニューで、「**LDAP オペレーターに変換**」を選択します。

## 許可されるアクティビティと許可とのマッピング

次の表に、オペレーター定義の「詳細」タブで許可を割り当てることにより、オペレーターに許可できるアクティビティ、許可できないアクティビティ、および特定の条件下で許可できるアクティビティを示します。オペレーターの特定の許可については、[ローカル・オペレーターの追加 \(ページ 29\)](#)を参照してください。

表 1. 許可されるアクティビティとオペレーター許可とのマッピング

アクティビティ	演算子
Fixlet サイトの管理	いいえ
クライアントのハートビートの変更	いいえ
Fixlet の作成	「カスタム・コンテンツ」が「はい」に設定されている場合
タスクの作成	「カスタム・コンテンツ」が「はい」に設定されている場合
分析の作成	「カスタム・コンテンツ」が「はい」に設定されている場合
ベースラインの作成	「カスタム・コンテンツ」が「はい」に設定されている場合

アクティビティ	演算子
分析のアクティブ化/非アクティブ化	管理対象
Fixlet/タスク/ベースライン・アクションの実行	管理対象
カスタム・アクションの実行	「カスタム・コンテンツ」が「はい」、および「アクションの作成が可能」が「はい」に設定されている場合
アクションの停止	管理対象
管理権限の管理	いいえ
グローバル取得プロパティの管理	いいえ
Fixlet の表示	管理対象
タスクの表示	管理対象
分析の表示	管理対象
コンピューターの表示	管理対象
ベースラインの表示	管理対象
コンピューター・グループの表示	管理対象
非管理資産の表示	管理対象
アクションの表示	管理対象
コメントの作成	管理対象
コメントの表示	管理対象
全体で非表示/再表示	いいえ
ローカルで非表示/再表示	はい
ウィザードの使用	「カスタム・コンテンツ」が「はい」に設定されている場合
データベースからコンピューターを削除	「アクションの作成が可能」が「はい」に設定されている場合
手動コンピューター・グループの作成	「アクションの作成が可能」が「はい」に設定されている場合
手動コンピューター・グループの削除	「カスタム・コンテンツ」が「はい」に設定されている場合

アクティビティ	演算子
自動コンピューター・グループの作成	「カスタム・コンテンツ」が「はい」に設定されている場合
自動コンピューター・グループの削除	「カスタム・コンテンツ」が「はい」に設定されておりかつ管理対象の場合
「カスタム・サイトの作成」	いいえ
カスタム・サイト所有者の変更	いいえ
カスタム・サイト閲覧者/作成者の変更	サイト所有者
マスター・オペレーターの作成	いいえ
WebUI の使用	「WebUI を使用できます」が「はい」に設定されている場合
BigFix 照会の実行依頼	「WebUI を使用できます」と「照会を実行依頼できます」の両方が「はい」に設定されている場合
<b>管理対象:</b> オペレーターはアクセス許可を所有している必要があります。 <b>カスタムの作成が必要:</b> コンソール経由でサイト管理者によって付与されます。	

## オペレーターと分析

オペレーターが分析をアクティブにするとき、および非アクティブにするとき、各種の権限および制限が適用されます。

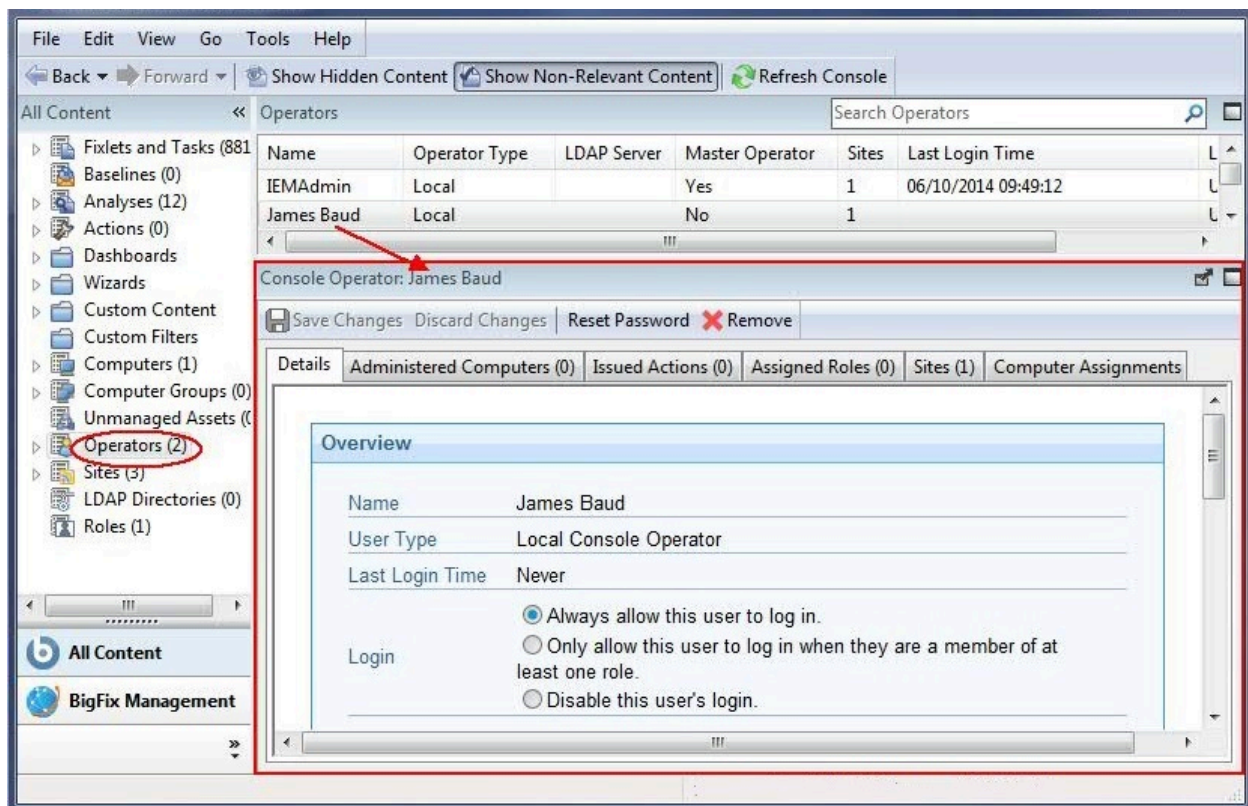
- 通常のオペレーターは、他のオペレーターが管理するコンピューターで、それらの他のオペレーターがアクティブにした分析を非アクティブにすることはできません。
- マスター・オペレーターは、通常のオペレーターが作成したカスタム分析を直接アクティブにすることはできません。ただし、マスター・オペレーターは、分析のコピーを作成し、そのコピーをアクティブにすることはできます。

## オペレーターのモニター

ユーザーがマスター・オペレーターの場合 (BigFix 管理ツールで作成され、適正に認証されたユーザー名を持っている必要があります)、他のオペレーターがどのような処理を行っているか、およびどのコンピューターの管理権限を持っているのかをモニターできます。

属性のうち各オペレーターを表すのは、「名前」、「ユーザーの種類」、および「ログインの種類 (Login type)」です。コンソール・オペレーターのリストを表示するには、「すべてのコンテンツ」ドメインを選択し、次にドメイン・パネルから「オペレーター」のラベルが付いたノードをクリックします。右のリスト・パネルに、すべての現行オペレーターがリストされます。

リスト・パネルでオペレーターをクリックすると、「オペレーター」作業域が開きます。



以下の複数のタブから選択できます。

- **詳細:** 名前と種類別にオペレーターが記述されており、ログインの種類を選択できます。ここで、オペレーターの権限を表示および変更することもできます。
- **「管理対象コンピューター」:** 選択されたコンソール・オペレーターに現在割り当てられているコンピューターのリストが表示されます。

- **「発行されたアクション」** : 選択されたコンソール・オペレーターが発行したアクションのリストが表示されます。
- **「割り当てられた役割」** : 現在割り当てられている役割が表示され、役割の再割り当てができます。
- **「サイト」** : このオペレーターに現在割り当てられているサイトが表示され、サイトの再割り当てができます。そのサイトがカスタム・サイトの場合、読み取り/書き込み/所有者権限を設定することもできます。
- **「コンピューターの割り当て」** : このオペレーターが管理できるコンピューターが一致する必要があるプロパティをリストします。一致すべきプロパティを指定すると、そのプロパティに一致するようにコンピューターが変更された場合はいつでも、オペレーターに割り当てられているコンピューターのリストにそのコンピューターが追加されます。また、コンピューターが変更されてそのプロパティに一致しなくなると、そのコンピューターはリストから削除されます。

このタブを使用できるのは、マスターではないオペレーターのみです。

## 第 3 章 LDAP との統合

Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) の関連付けを BigFix に追加することができます。これにより、自分と他のユーザーがその資格情報を使用してコンソールにログインできるようになります。この利点は Web レポートにも当てはまります。

BigFix を汎用 LDAP または Active Directory と統合する方法については、以降のトピックの説明を参照してください。

これらの 2 つのタイプの LDAP のいずれかと統合するステップを完了した後、LDAP のユーザーまたはグループを BigFix コンソール・オペレーターまたは役割に関連付けることができます。詳しくは、[LDAP オペレーターの追加 \( \(ページ\) 53\)](#)および[LDAP グループの関連付け \( \(ページ\) 56\)](#)を参照してください。

### 汎用 LDAP との統合

次のようにして、既存の LDAP ドメインをコンソールに追加することにより、汎用 LDAP との統合を構成します。

1. 「ツール」メニューから「LDAP ディレクトリーの追加」を選択するか、作業域で右クリックして、「LDAP ディレクトリーの追加」を選択します。「LDAP ディレクトリーの追加」ダイアログが表示されます。

The screenshot shows a dialog box titled "Add LDAP Directory". It has several input fields and a section for authentication. The fields are: Name (My LDAP Server), Type (Generic LDAP Server), Server (9.87.126.154), Port (636), Base DN (o=test.com), and Login attribute (uid). The "Use SSL" checkbox is checked. Under the "Authentication" section, the radio button "Use the following credentials to connect to the directory server" is selected. Below this, there are fields for "User DN" (cn=root) and "Password" (masked with dots). A "Test" button is located at the bottom left, and "Add" and "Cancel" buttons are at the bottom right.


2. 名前を入力し、「種類」プルダウンから「汎用 LDAP サーバー」が選択されていることを確認します。汎用 LDAP サーバーの場合、グローバル・カタログ・オプションは使用できません。
3. LDAP インストール済み環境に関連する情報を入力します。「サーバー」に、サーバーのホスト名または IP アドレスを入力します。
4. ポート番号を入力します。Secure Sockets Layer (SSL) を使用している場合は、通常 636 です。
5. 基本識別名（「ベース DN」）を、`dc=example,dc=com` の形式で入力します。
6. ボタンをクリックして、匿名で接続するか、または資格情報を使用して接続します。資格情報を使用して接続することを選択した場合は、「ユーザー DN」と「パスワード」を入力します。
7. 「テスト」をクリックして、入力した情報が正しいこと、および LDAP への接続を確立できることを確認します。
8. ユーザー・フィルターまたはグループ・フィルターを組み込む場合は、「詳細設定を表示」リンクをクリックします。フィルターを指定すると、それ以降のすべての LDAP 検索に適切なフィルターが適用されるようになります。
9. 「追加」をクリックして、LDAP の設定を完了します。



これで LDAP サーバーの構成が完了し、コンソールで使用できるようになります。

## Active Directory との統合

Microsoft Active Directory (AD) を使用して、BigFix での認証を処理することができます。これにより、自分と他のユーザーが Active Directory 資格情報を使用してコンソールにログインできるようになり、既存の認証ポリシーを利用できます。この利点は Web レポートにも当てはまります。

 **注:** Windows プラットフォームでは、Active Directory の呼び出しを管理するインスペクターにより、BESClient プロセスに必要な 52311 ポートに加えて、一時的なポートがユーザー・データグラム・プロトコル (UDP) に割り当てられます。このポートは、netstat -an コマンドの出力で確認できます。

## Windows サーバーと Active Directory との統合

既存の Active Directory をコンソールに追加するには、以下の手順に従います。

1. 「ツール」メニューで「LDAP ディレクトリーの追加」を選択します。「LDAP ディレクトリーの追加」ダイアログが表示されます。

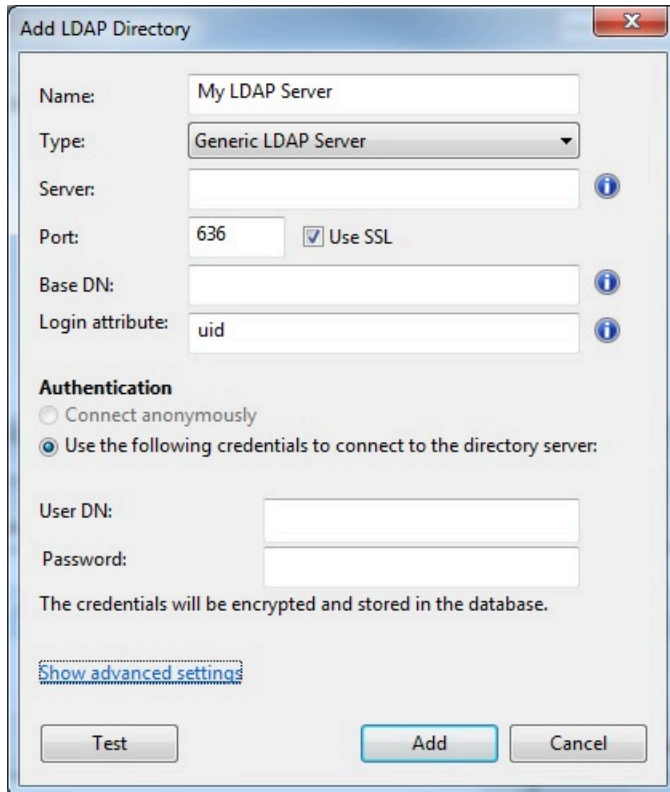


2. Active Directory の名前を入力し、「種類」プルダウンから「**Microsoft Active Directory**」が選択されていることを確認します。
3. 「**サーバー**」に、サーバーのホスト名、IP アドレス、または完全修飾ドメイン名を入力します。
4. Active Directory フォレスト全体にアクセスする場合は、「**これはグローバル・カタログ・サーバーです**」をクリックします。
5. ボタンをクリックして、**ルート・サーバーのサービス・ユーザーとして接続するか**、または**資格情報を使用して接続します**。資格情報を使用して接続することを選択した場合は、Active Directory の「**ユーザー名**」と「**パスワード**」を入力します。
6. 「**テスト**」をクリックして、入力した情報が正しいこと、および Active Directory サーバーへの接続を確立できることを確認します。
7. 「**追加**」をクリックして、Active Directory の設定を完了します。

**注:** LDAP サーバーを「**Microsoft Active Directory**」として追加する場合は、LDAP サーバー上で、各ユーザーの「**ユーザーのログイン名**」に対応する UserPrincipalName 属性を定義していることを確認してください。この属性値は、各ユーザー認証用に BigFix コンソールで使用されます。

SSL 上で稼働している既存の Active Directory を追加するには、以下の手順を実行する必要があります。

1. サーバーの種類として「汎用 LDAP サーバー」を選択します。



The screenshot shows a dialog box titled "Add LDAP Directory". The "Name" field is filled with "My LDAP Server". The "Type" dropdown menu is set to "Generic LDAP Server". The "Server" field is empty. The "Port" field is filled with "636" and the "Use SSL" checkbox is checked. The "Base DN" field is empty. The "Login attribute" field is filled with "uid". Under the "Authentication" section, the radio button for "Use the following credentials to connect to the directory server:" is selected. Below this, the "User DN" and "Password" fields are empty. A note below the password field states "The credentials will be encrypted and stored in the database." At the bottom of the dialog, there is a link for "Show advanced settings" and three buttons: "Test", "Add", and "Cancel".

2. サーバーがグローバル・カタログ・サーバーの場合、ポート番号として 3269 と指定します。
3. 「詳細設定を表示」リンクをクリックします。ユーザー・フィルターとグループ・フィルターのオプションが表示されます。

4. 「ログイン属性」に UserPrincipalName と入力します。

**注:** UserPrincipalName 属性の形式を、*domain/user*、*domain.com/user* または *user* にすることはできません。

5. 「ユーザー・フィルター」に (objectClass=user) と入力します。
6. 「グループ・フィルター」に (objectClass=group) と入力します。
7. 「ディレクトリー・サーバーへの接続に以下の資格情報を使用する」をクリックして、Active Directory の「ユーザー名」と「パスワード」を入力します。
8. 「テスト」をクリックして、入力した情報が正しいこと、および Active Directory サーバーへの接続を確立できることを確認します。
9. 「追加」をクリックして、Active Directory の設定を完了します。

これで Active Directory サーバーの設定が完了し、コンソールで使用できるようになります。

## Linux サーバーと Active Directory との統合

### Kerberos 認証の構成

Linux BigFix サーバーと Active Directory の間でセキュア通信を確保するには、Kerberos プロトコルを使用します。

Kerberos 付き LDAP 認証を使用して Linux BigFix サーバーを Windows Active Directory ドメインと統合するには、以下の手順を実行します。

1. Linux BigFix サーバーと Active Directory サーバーの両方でホスト名とタイム・サービスが正しく設定されていることの確認
2. NSS ライブラリーおよび PAM ライブラリーのインストール
3. Kerberos LDAP セキュリティーおよび認証の構成
4. ローカル LDAP ネームの変更
5. NSS ライブラリーおよび PAM ライブラリーの構成

#####

Red Hat Enterprise Linux 6 または Linux 7 システム上で稼働する BigFix サーバーと Active Directory サーバーの統合を実行する前に、以下のことを確認します。

- Red Hat Enterprise Linux 6 または Linux 7 システムと Active Directory サーバーの両方の DNS ホスト名が正しく解決されるようにします。そのためには、Red Hat Enterprise Linux 6 システムで以下の手順を実行します。
  1. ファイル `/etc/host` を開き、両方の DNS ホスト名が完全修飾ドメイン名として指定されていることを確認します。
  2. ファイル `/etc/sysconfig/network` を開き、Red Hat Enterprise Linux 6 または Linux 7 システムのホスト名が完全修飾ドメイン名として指定されていることを確認します。
- Active Directory と Linux BigFix サーバーの間で時刻を同期します。必要な場合は、Red Hat Enterprise Linux 6 または Linux 7 システムのタイム・サービスと Active Directory サーバーをタイム・ソース・サーバーと同期できます。そのためには、以下の手順を実行します。

1. Red Hat Enterprise Linux 6 または Linux 7 システム上のファイル `/etc/ntp.conf` で、以下の行を置換します。

```
server hostname
```

#### 置換後の行

```
server time_source_server_name
```

`time_source_server_name` には、時刻の同期に使用されるタイム・ソース・サーバーのサーバー・ホスト名または IP アドレスが入ります。

2. DNS ルックアップが信頼できない場合は、`/etc/resolv.conf` ファイルを以下のように編集して、Active Directory サーバーから DNS ルックアップを実行するように Red Hat Enterprise Linux システムを構成します。

```
domain my.domain.com
search my.domain.com
nameserver1 ipaddress1
nameserver2 ipaddress2
```

3. 以下の手順に従って、Red Hat Enterprise Linux 6 または Linux 7 システム上で変更を有効にします。

- **ntp** デーモンの停止:

```
service ntpd stop
```

- 時刻の更新:

```
ntpdate Red_Hat_server_IP
```

- **ntp** デーモンの開始:

```
service ntpd start
```

4. 以下を入力して、Active Directory サーバーをタイム・ソース・サーバーと同期させます。

```
w32tm /config /manualpeerlist:"time_source_server_name"
      /syncfromflags:manual /update
```

`time_source_server_name` には、Linux サーバーが同期されている NTP タイム・ソースの DNS 名または IP アドレスのリストを指定します。例えば、`time.windows.com` を NTP タイム・サーバーとして指定できます。複数のピアを指定する場合は、スペースを区切り文字として使用し、各ピアの名前を引用符で囲みます。

5. Active Directory サーバー上で、以下のコマンドを実行して時刻がタイム・ソース・サーバーと同期されていることを確認します。

```
w32tm /query /status | find "Source"
w32tm /query /status | find "source"
```


6. Red Hat Enterprise Linux 6 システム上で、**ntpd** デーモンをシステム・ブート時に開始されるように構成します。

```
chkconfig ntpd on
```

### NSS ##### PAM #####

以下の NSS および PAM の各パッケージがインストールされているようにします。

```
nss-pam-ldapd-0.7.5-18.2.el6_4.x86_64.rpm
pam_krb5-2.3.11-9.el6.x86_64.rpm
```

 **注:** 有効な RHN サブスクリプションがある場合は、以下の例に示すように yum を実行します。

```
yum install nss-pam-ldapd.x86_64 pam_krb5.x86_64
```

### #####

Active Directory の統合のために Kerberos プロトコル、LDAP セキュリティー、および認証ファイルを構成するには、以下のいずれかの方法を使用できます。

- **system-config-authentication** グラフィック・ツール
- **authconfig** コマンド行ツールの使用

## system-config-authentication #####

system-config-authentication ツールを使用して認証を構成するには、以下の手順を実行します。

1. **system-config-authentication** グラフィック・ツールを実行して、ユーザー認証用のユーザー・アカウント・データベースとして LDAP を定義します。
2. 「**識別と認証 (Identity Authentication)**」で、「**ユーザー・アカウント・データベース (User Account Database)**」ドロップダウン・リストから「**LDAP**」を選択します。「**LDAP**」オプションを選択すると、Kerberos 付き LDAP 認証を使用して Windows Active Directory ドメインに接続するようシステムを構成できます。





3. 「LDAP 検索ベース DN (LDAP Search Base DN)」で、リストされている識別名 (DN) を使用してユーザー情報を取得することを、`dc=tem,dc=test,dc=com` のように指定します。
4. 「LDAP サーバー (LDAP Server)」で、LDAP サーバーのアドレスを、`ldap://winserver.tem.test.com` のように指定します。
5. 「認証方式」で、「Kerberos パスワード」を選択します。
6. 「レルム (Realm)」で Kerberos サーバーのレルム (`TEM.TEST.COM` など) を構成します。レルム名は必ず大文字で入力してください。
7. 「KDCs」で、Kerberos チケットを発行するための##### (KDC) を、`winserver.tem.test.com` のように指定します。
8. 「管理サーバー (Admin Servers)」で、`kadmind` を実行する管理サーバーを、`winserver.tem.test.com` のように指定します。
9. 「適用」をクリックします。

このツールの使用方法について詳しくは、「[Launching the Authentication Configuration Tool UI](#)」を参照してください。

`authconfig #####`

システム認証に必要なすべての構成ファイルおよびサービスを更新するためには、以下の例に示すように、`authconfig` コマンド行ツールを実行します。

```
authconfig --enableldap --ldapserver=ldap://winserver.tem.test.com:389
--ldapbasedn="dc=tem,dc=test,dc=com" --enablekrb5
--krb5realm TEM.TEST.COM --krb5kdc winserver.tem.test.com:88
--krb5adminserver winserver.tem.test.com:749 --update
```

各部の意味は以下のとおりです。

#### **--enableldap**

Kerberos 付き LDAP 認証を使用してシステムを Windows Active Directory ドメインに接続するよう構成することを指定します。

#### **--ldapserver**

LDAP サーバーのアドレスを、`ldap://winserver.tem.test.com` のように指定します。

#### **--ldapbasedn**

リストされている識別名 (DN) を使用してユーザー情報を取得することを、`dc=tem,dc=test,dc=com` のように指定します。

#### **--enablekrb5**

Kerberos パスワード認証方式を有効化します。

#### **--krb5realm**

Kerberos サーバーのレルムを、`TEM.TEST.COM` のように構成します。レルム名は必ず大文字で指定してください。

#### **--krb5kdc**

Kerberos チケットを発行するための##### (KDC) を、`winserver.tem.test.com` のように指定します。

#### **--krb5adminserver**

`kadmind` を実行する管理サーバーを、`winserver.tem.test.com` のように指定します。

#### **--update**

すべての構成設定を適用します。

このコマンドの使用法について詳しくは、「[Configuring Authentication from the Command Line](#)」を参照してください。

### **##### LDAP #####**

ローカル LDAP ネームを変更するには、以下の手順を実行します。

1. 以下のようにして、LDAP 構成ファイルのバックアップ・コピーを作成します。

```
cp -p /etc/nslcd.conf /etc/nslcd.conf.bk
```

2. 以下の例に示すように、`/etc/nslcd.conf` ファイルの `base` 設定および `uri` 設定の値を変更します。

```
base dc=tem,dc=test,dc=com
uri ldap://winserver.tem.test.com
```

3. ローカル LDAP ネーム・サービス・デーモンを再開します。

```
service nslcd restart
```

4. ローカル LDAP ネーム・サービス・デーモン (nslcd) がサーバーと同時に開始されるよう設定されているようにします。

```
chkconfig nslcd on
```

### **NSS ##### PAM #####**

Linux システム上のユーザーを認証するために LDAP データベースを使用するには、`/etc/nsswitch.conf` を編集して、`passwd`、`shadow`、および `group` の各項目を、以下のように SSSD デーモン (`sss`) から LDAP に変更します。

```
passwd:  files sss
shadow:  files sss
group:   files sss
```


上記を (`ldap`) に変更します。

```
passwd:  files ldap
shadow:  files ldap
group:   files ldap
```

PAM ライブラリーを構成するには、`/etc/pam.d/system-auth` ファイルと `/etc/pam.d/password-auth` ファイルを編集して、以下のように `pam_krb5.so` ライブラリー項目を追加します。

```
auth      sufficient                                     pam_krb5.so
use_first_pass
...
account   [default=bad success=ok user_unknown=ignore] pam_krb5.so
...
```

```
password sufficient pam_krb5.so
use_authok
...
session optional pam_krb5.so
```

 **注:** SSSD ライブラリーの項目 (`pam_sss.so`) を削除します。

Red Hat の統合について詳しくは、「[Integrating Red Hat Enterprise Linux 6 with Active Directory](#)」を参照してください。

## サーバーと Active Directory との統合


### BigFix サーバーと Active Directory との統合

1. 「ツール」メニューで「LDAP ディレクトリーの追加」を選択します。「LDAP ディレクトリーの追加」ダイアログが表示されます。



2. Active Directory の名前を入力し、「種類」プルダウンから「**Microsoft Active Directory**」が選択されていることを確認します。
3. 「サーバー」に、サーバーのホスト名、IP アドレス、または完全修飾ドメイン名を入力します。

4. Active Directory フォレスト全体にアクセスする場合は、「これはグローバル・カタログ・サーバーです」をクリックします。
5. ボタンをクリックして、**ルート・サーバーのサービス・ユーザーとして接続**するか、または**資格情報を使用**して接続します。資格情報を使用して接続することを選択した場合は、Active Directory の「**ユーザー名**」と「**パスワード**」を入力します。
6. 「**テスト**」をクリックして、入力した情報が正しいこと、および Active Directory サーバーへの接続を確立できることを確認します。
7. 「**追加**」をクリックして、Active Directory の設定を完了します。

 **注:** LDAP サーバーを「**Microsoft Active Directory**」として追加する場合は、LDAP サーバー上で、各ユーザーの「**ユーザーのログイン名**」に対応する `UserPrincipalName` 属性を定義していることを確認してください。この属性値は、各ユーザー認証用に BigFix コンソールで使用されます。

## LDAP オペレーターへの追加

既存の Active Directory アカウントまたは LDAP アカウントを使用して、コンソールにアクセスするオペレーター用のアカウントを作成することができます。このオプションを選択すると、LDAP ディレクトリーで指定されている名前と同じ名前のオペレーターが、BigFix コンソールのドメイン・パネルの「オペレーター」ノードに追加されます。その後、これらのオペレーターは、以下の表記のいずれかを使用して、通常どおりにログインできるようになります。

```
username username@domain domain\username
```

LDAP ディレクトリーの当該ユーザーに割り当てられた許可は、新規に作成されたオペレーターに継承されません。必要な許可をオペレーターに割り当てるか、オペレーターを既存の役割に割り当てる必要があります。

 **注:**

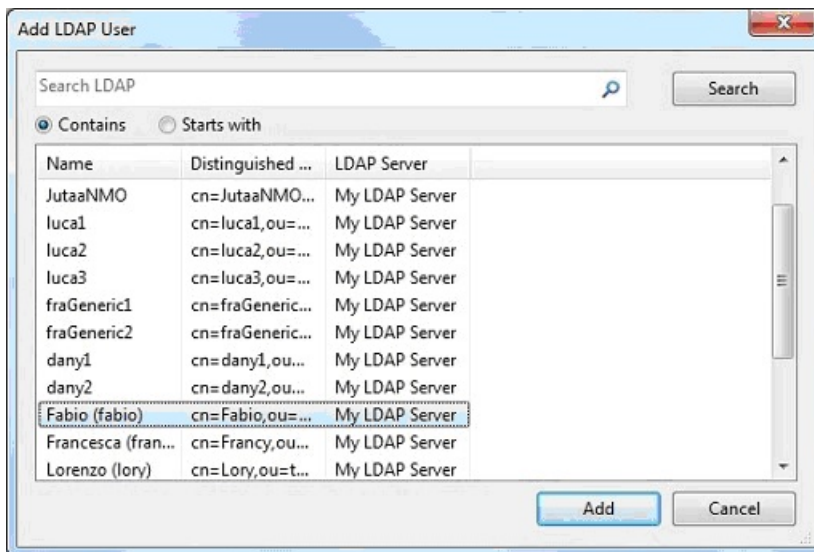
Web UI と Web レポートへのアクセスについてはバージョン 9.2.6 以降、コンソールへのアクセスについてはバージョン 9.5 以降で、BigFix LDAP オペレーターに以下を提供するために、BigFix を SAML V2.0 と統合できます。

- Common Access Card (CAC)、Personal Identity Verification (PIV) カード、またはその他の要素を使用した 2 要素認証 (ID プロバイダーによって要求された場合)。
- ID プロバイダーのログイン URL からの Web ベースのシングル・サインオン認証方式。

詳しくは、[LDAP オペレーター用の SAML V2.0 認証の有効化 \( \(ページ\) 58\)](#)を参照してください。

LDAP オペレーターを追加するには、以下の手順を実行します。

1. 必要な Active Directory または LDAP ディレクトリーが BigFix 環境に追加されていることを確認してください。
2. 「ツール」 > 「LDAP オペレーターの追加」メニュー項目をクリックするか、作業域で右クリックして、「LDAP オペレーターの追加」を選択します。「LDAP ユーザーの追加」ダイアログが表示されます。



3. 「検索」フィールドと2つのラジオ・ボタンを使用して、指定されたLDAPサーバーで定義されているユーザーの照会とフィルタリングを行うことができます。
4. LDAP オペレーターとして追加するユーザーを見つけたら、そのユーザーを選択して「追加」をクリックします。「コンソール・オペレーター」パネルが開きます。



5. 「詳細」タブから、オペレーター権限を割り当てます。

オペレーターがポストアクションとして再起動およびシャットダウンをトリガーできるようにしたり、再起動およびシャットダウンを BigFix アクション・スクリプトに含めたりすることができます。特定のオペレーターに対して設定したシャットダウンおよび再起動の構成に応じて、「アクションの実行」パネルの「ポストアクション」タブのラジオ・ボタンは、そのオペレーターに対して無効になる場合があります。この構成は、アクション・スクリプトのタイプが BigFix アクション・スクリプトではないアクションに対しては無効です。

また、BigFix コンソールおよび REST API にアクセスする権限を設定することもできます。

6. 「管理対象コンピューター」タブには、このオペレーターによって管理されているコンピューターがリストされます。
7. 「割り当てられた役割」タブで、このオペレーターについて、割り当てる役割、または割り当てを解除する役割を選択します。

8. 「**サイト**」 タブで、このオペレーターにアクセスを許可するサイトを割り当てます。または割り当てを解除します。
9. 「**コンピューターの割り当て**」 タブで、このオペレーターが管理できるコンピューターによって突き合わせを行う必要があるプロパティを指定します。
10. 変更内容を保存するには、「**変更の保存**」をクリックします。

また、ローカル・オペレーターを、いつでも LDAP オペレーターに変換することができます。これを行うには、以下のステップを実行します。

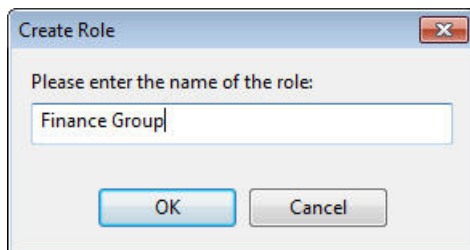
1. 任意のローカル・オペレーター・リストで、変換したいオペレーターを右クリックします。
2. コンテキスト・メニューで、「**LDAP オペレーターに変換**」を選択します。

## LDAP グループの関連付け

既存の Active Directory ディレクトリーまたは LDAP ディレクトリーで定義されている LDAP ユーザーまたは LDAP グループを、コンソールのオペレーターまたは役割に関連付けることができます。

このようなグループを追加するには、以下の手順を実行します。

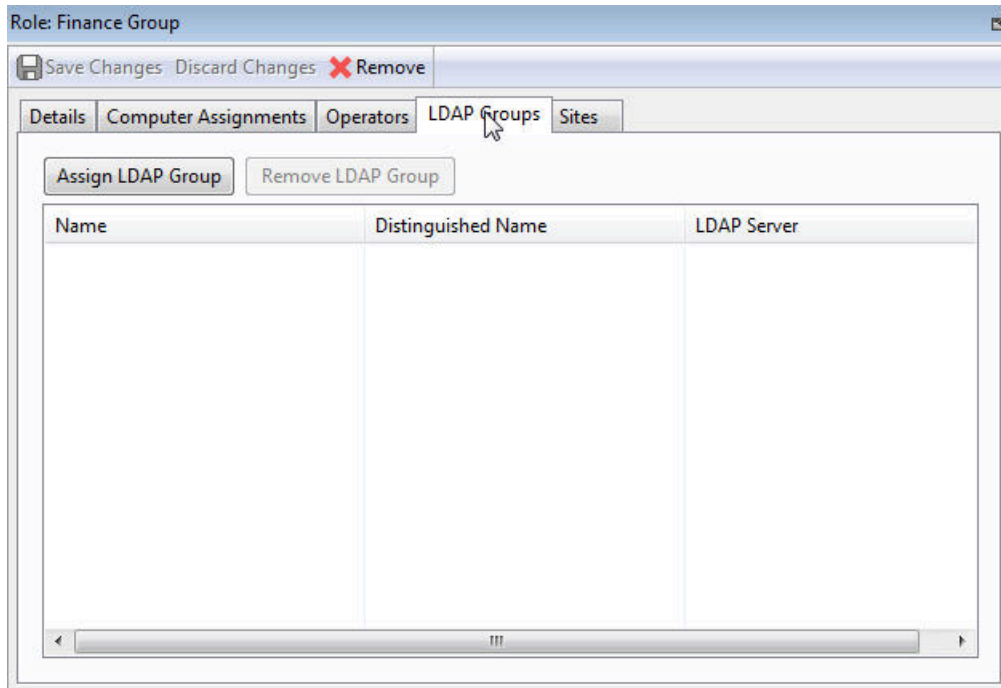
1. 必要な Active Directory または LDAP ディレクトリーが BigFix 環境に追加されていることを確認してください。
2. 「**ツール**」 > 「**役割の作成**」を選択するか、作業域で右クリックして「**役割の作成**」を選択して、新規グループを受け入れるための役割を作成します。



グループの名前を入力して「**OK**」をクリックします。

3. 「**役割**」 パネルが表示されます。





「LDAP グループ」タブをクリックします。

4. この役割に割り当てる LDAP グループを選択し、「LDAP グループの割り当て」をクリックします。
5. 変更内容を保存するには、「変更の保存」をクリックします。

LDAP グループを役割に割り当てると、そのグループのすべてのユーザーがコンソールにログインできるようになります。実際にログインしたユーザーだけがアカウントを提供され、オペレーターのリストに表示されます。これにより、不要なアカウントが作成されることがなくなります。オペレーターには、ユーザーのすべての役割とアクセス許可のうち、最も高い特権が付与されます。例えば、あるユーザーが役割 1 からコンピューター・セット A とサイト X にアクセスでき、役割 2 からコンピューター・セット B とサイト Y にアクセスできる場合、オペレーターには、コンピューター・セット A と B の両方でサイト X と Y に対するアクセス許可が付与されます。

# 第 4 章 LDAP オペレーター用の SAML V2.0 認証の有効化

BigFix のバージョン 9.5.5 以降では、LDAP を基盤とした SAML ID プロバイダー経由の SAML V2.0 認証をサポートしています。構成後、SAML V2.0 のサポートにより、以下のことが可能になります。

- Common Access Card (CAC)、Personal Identity Verification (PIV) カード、またはその他の要素を使用した、BigFix の 2 要素認証 (ID プロバイダーによって要求された場合)。
- ID プロバイダーのログイン URL からの Web ベースのシングル・サインオン認証方式。要求に応じて、ログイン・ユーザーは再度ログインしなくても、SAML V2.0 認証をサポートしている Web ベースのコンポーネントに自動的にリダイレクトされます。

## SAML 2.0 とは

OASIS の Security Assertion Markup Language (SAML) は、XML ベースのフレームワークを使用して、オンライン・エンティティー間でセキュリティー情報を記述し交換します。

SAML 2.0 は以下をサポートします。

### Web ベースのシングル・サインオン

サーバーの DNS ドメインに関係なく、Web サーバー間でユーザーについての情報を転送するための、ベンダーに依存しない標準的な文法およびプロトコルを提供します。

### ID 連携

パートナー・サービスがユーザーの共通名 ID について合意し、この ID を設定して、組織の境界を越えてユーザー自身についての情報を共有できるようにします。

このタイプの共有は、ID 管理コストを減らすのに役立ちます。

連携された ID は FIPS 201 を実装して、米国政府全体にわたって相互利用可能な ID 資格情報を定義します。この資格情報は Personal Identity Verification (PIV) と呼ばれ、連邦機関の施設への物理的アクセスおよび連邦情報システムへの論理的アクセスを制御するために使用されます。

CAC PIV カードは、PIV カード所有者認証用のマルチアプリケーション・スマート・カードであり、これには、線形バーコード、2次元バーコード、磁気ストライプ、カラーのデジタル写真、および印刷テキストが組み込まれています。このカードは、以下に対応するトークンとして機能します。

- コンピューター・システムへの論理的アクセス
- 個人の識別
- 建物への物理的アクセス
- 署名用、暗号化用、および否認防止用の Public Key Infrastructure (PKI)。

### Web サービスおよびその他の業界標準

SAML により、そのセキュリティー・アサーション形式を「ネイティブ」の SAML ベースのプロトコル・コンテキストの外部で使用できるようになります。このモジュール性は、許可サービス (IETF、OASIS)、ID フレームワーク、Web サービス (OASIS、Liberty Alliance) などを扱う他の業界の取り組みにとって有益であることが実証されています。

## SAML の仕組み

SAML 仕様では、以下の 3 つの関係者が定義されています。

- プリンシパル。通常はユーザーです。
- [ID プロバイダー](#) (IdP)。LDAP を基盤とした SAML ID プロバイダーです。
- サービス・プロバイダー (SP)。今回のケースでは、BigFix サービスです。

SAML 規格は、ID アサーションが上記の 3 つの関係者の間でどのように交換されるかを制御します。SAML は、ID プロバイダーでの認証方法は指定しません。

SAML では、1 つの ID プロバイダーが多数のサービス・プロバイダーに SAML アサーションを提供できます。

SAML V2.0 のユース・ケースのシナリオについて詳しくは、「[SAML V2.0 の概要](#)」を参照してください。

## SAML V2.0 と統合される BigFix ユーザー・インターフェースの種類

SAML 認証機能拡張が構成されると、Web UI、Web レポート、および BigFix バージョン V9.5.5 以降の BigFix コンソールにアクセスする、すべての BigFix LDAP 管理対象ユーザーに影響を及ぼします。

## BigFix と SAML V2.0 との統合の仕組み

SAML V2.0 との統合では、[passport-saml](#) 認証プロバイダーを使用して、ID プロバイダー (IdP) が開始した認証とサービス・プロバイダー (SP) が開始した認証の両方に対応します。

SAML をサポートする BigFix ユーザー・インターフェースについても、SAML の使用および要求は WebUI コンポーネントによって管理されます。

SAML との統合を構成する方法は、以下のように計画している使用方法によって異なります。

- SAML 認証を Web レポートおよび BigFix コンソールでのみ使用して、どの WebUI アプリケーションでも使用する必要がない場合は、WebUI を SAML 専用モードで開始できます。この SAML 構成では、リソース消費量を最小限に抑えることができます。この構成のセットアップ方法について詳しくは、「[SAML 専用モードでの WebUI の有効化](#)」を参照してください。
- WebUI コンポーネントの完全なセットまたは WebUI ETL 処理を含む、すべての BigFix ユーザー・インターフェースで SAML 認証を使用するには、BigFix バージョン 9.5.5 以降を使用している場合は [WebUI のインストールのチェックリスト](#) に記載されている手順に従います。

BigFix 環境で 1 つの LDAP サーバーをユーザー・リポジトリとして使用している場合、ユーザー・プロビジョニングはこの統合による影響を受けません。管理者は引き続き、BigFix サービスを使用する権限を与えるために、オペレーターおよび役割を定義します。ご使用の BigFix 環境のオペレーターが複数の LDAP サーバーで定義されている場合は、[前提事項と要件 \( \(ページ\) 61\)](#)に記載されている情報をよくお読みください。

SAML 2.0 と統合した場合、既存の監査シナリオは維持され、`server_audit.log` ファイルに SAML 認証のユーザー・エントリーが含まれます。

以下のサンプル・ユース・ケースを確認してください。

1. ユーザーが BigFix にサービスを要求します。例えば、Web UI、Web レポート、または BigFix コンソールを使用して、ページにアクセスしたり、ログインを試行したりします。
2. BigFix は、LDAP を基盤とした SAML ID プロバイダーに ID アサーションを要求します。
3. ID アサーションを配信する前に、LDAP を基盤とした SAML ID プロバイダーは、何らかのユーザー認証情報、例えば、ユーザー名とパスワードや、別の形式の認証 ([多要素認証](#) を含む) を要求する可能性があります。ディレクトリー・サービス ([LDAP](#) や [Active Directory](#) など) は、ID プロバイダーでの代表的な認証トークンのソースです。
4. ID プロバイダーが提供する ID アサーションに基づいて、BigFix は、そのユーザーによって要求されたサービスを実行するかどうかを決定します。
5. 認証情報は維持され、割り当てられた許可に応じて、ユーザーが BigFix によって提供されるサービスに自動でアクセスできるようにするために使用されます。

## 前提事項と要件

SAML V2.0 を使用するように BigFix を構成する前に、以下の前提事項および要件のリストをよくお読みください。

- BigFix は、SAML V2.0 準拠の ID プロバイダー (Active Directory フェデレーション・サービス (ADFS) など) による SAML V2.0 認証をサポートします。
- SAML V2.0 認証は、以下のように制限されています。

- 1 つ以上の LDAP ディレクトリーによって、1 つの SAML IdP のみがサポートされます。ご使用の BigFix 環境で複数の LDAP サーバーをユーザー・リポジトリとして既に定義している場合、SAML 認証を有効にした後は、選択した IdP によって管理されるユーザーおよびグループのみが BigFix 環境に引き続き認識されることに注意してください。この場合、ユーザー・リポジトリとして使用する別の LDAP 環境のユーザーを SAML IdP (ADFS または ISAM) が認証できるように、IdP 環境が正しく構成されていることを確認してください。
- ID プロバイダーは、セキュア・ハッシュ・アルゴリズムとして SHA256 を使用します。
- Web レポート・サーバーは、1 つのデータ・ソース (ルート・サーバー) のみに接続し、SSL を使用するよう構成されます。
- SAML 認証を構成して使用するには、WebUI がインストールされている必要があります。Web レポートおよび BigFix コンソール用の SAML 認証を提供するためにのみ WebUI を使用する場合、Web UI を SAML 専用モードで開始してリソース消費量を削減できます。Web UI を SAML 専用モードで開始する方法については、[https://help.hcltechsw.com/bigfix/9.5/webui/WebUI/Admin\\_Guide/c\\_saml\\_2\\_0.html?hl=saml%2C2.0](https://help.hcltechsw.com/bigfix/9.5/webui/WebUI/Admin_Guide/c_saml_2_0.html?hl=saml%2C2.0) を参照してください。
- DSA アーキテクチャーでは、構成がレプリカの DSA サーバーに複製されます。ただし、レプリカはプライマリーでない DSA での SAML 用の WebUI を有効にしません。複数 WebUI 構成はサポートされていないためです。
- Web レポートを実行時、SAML が有効な場合は、参照者に関するチェックは実行されません。設定 `_HTTPServer_Referrer_CheckEnabled` を使用して、参照者チェックを有効または無効にできます。参照者は、HTTP プロトコルのオプションのヘッダーです。これは、要求されているリソースへのリンク元である Web ページのアドレス (URI または IRI) を識別します。BigFix がどのように参照者チェックを管理するかについては、[設定のリストと詳細な説明 \(##### 167\)](#) を参照してください。

## BigFix ユーザーの観点から見た変更内容

BigFix ユーザー・インターフェースの観点から見て、この機能拡張が影響を及ぼすのは認証のみです。

LDAP ユーザーに対する SAML 認証を有効にした後:

## LDAP オペレーター:

- SAML ID プロバイダーのみから Web UI および Web レポートへの認証を行う必要があります。このためには、以下の URL にアクセスします。

https://<WebUI\_server> (Web UI サーバーの場合。ポート 443 を使用していると想定)

https://<Web\_Reports\_server>:8083 (各 Web レポート・サーバーの場合。ポート 8083 を使用していると想定)

**注:** Web UI および Web レポートからログアウトするためのボタンおよびリンクは、これらのユーザーをあるページにリダイレクトします。そのページで「再認証」ボタンをクリックすると、IdP のログイン・タイムアウトにならない限り、再度ログオンしなくても、Web UI ページおよび Web レポート・ページに戻ることができます。ログイン・タイムアウトの場合は、IdP のログイン・ページに戻されます。

- BigFix サーバーが SAML V2.0 と統合するように構成されている場合、コンソール・ログイン・パネルで「**SAML 認証を使用する**」チェック・ボックスを有効にする必要があります。

The screenshot shows a Windows-style dialog box titled "Login to IBM BigFix". It contains the following elements:

- Server:** A dropdown menu with "MyLab.test.com" selected.
- User name:** An empty text input field.
- Password:** An empty password input field.
- Use Windows session credentials
- Use SAML authentication
- Login** and **Quit** buttons at the bottom right.

選択内容は、今後のログイン要求のために、BigFix によって自動的に検証され保存されます。


## ローカルの非 LDAP オペレーター:

- 以下の通常のログイン URL にアクセスして、Web UI または Web レポートにログインします。

https://<WebUI\_server>/login (Web UI がポート 443 に設定されていると想定)

https://<Web\_Reports\_server>:8083/login (各 Web レポート・サーバーの場合。Web レポートがポート 8083 に設定されていると想定)

- 通常のログイン・パネルから BigFix コンソールにログインします。その際、「**SAML 認証を使用する**」チェック・ボックスが選択されていないことを確認してください。

 **注:** 環境内で SAML が有効化されていない場合は、「**SAML 認証を使用する**」チェック・ボックスがグレーで表示されます。

SAML が構成され有効化された後で初めて、ローカルの非 LDAP ユーザーが API を使用してログインできるようになります。4-Eye 認証の承認者はローカル・アカウントでなければなりません。

## SAML 2.0 と統合するように BigFix を構成する方法

統合を構成する前に、以下を確認してください。

- BigFix サーバーが、ID プロバイダーのログイン・ページ用の URL で使用されているホスト名を解決できる。
- ID プロバイダー (ADFS サーバー、またはサポートされている他のタイプの SAML 認証プロバイダー) が、Web UI、Web レポート、および BigFix コンソールと通信するために使用されるリダイレクト URL で指定されている BigFix ルート・サーバーのホスト名を解決できる。
- Web UI は有効かつアクティブである。

全体的な構成は、以下の 2 つの部分から成ります。

- 明示的な 2 要素認証用の SAML ID プロバイダーの構成。これは、ID プロバイダー管理者の責任下で行います。この部分については、以下を確認してください。
  - リダイレクト URL が、インデックス付きの証明書利用者信頼に、バインディング HTTPS\_POST を使用して以下の形式で追加されている。



`https://<WebUI_server>/saml` (Web UI サーバーの場合。ポート 443 で listen していると想定)

`https://<Web_Reports_server>:8083/saml` (各 Web レポート・サーバーの場合。ポート 8083 で listen していると想定)

`https://<Bigfix_server>:52311/saml` (BigFix コンソールの場合)

**注:** ID プロバイダーが ADFS である場合、ADFS の証明書利用者信頼のプロパティの「エンドポイント」タブに SAML アサーション・コンシューマー・エンドポイントとしてリダイレクト URL を追加する必要があります。

- ID プロバイダー構成で、ログイン設定が FORMS ログイン用に設定されている必要があります。
- スマート・カード認証を使用する予定の場合は、ID プロバイダーが多要素認証を使用するように正しく構成されていることを確認してください。例えば、ADFS を使用する場合は、グローバル認証ポリシー構成で、証明書認証と Windows 認証 (Windows 統合認証を使用する場合) の間で少なくとも 1 つが有効になっていることを確認してください。
- Active Directory ユーザー認証の場合、ID プロバイダーの要求規則を以下のように設定します。

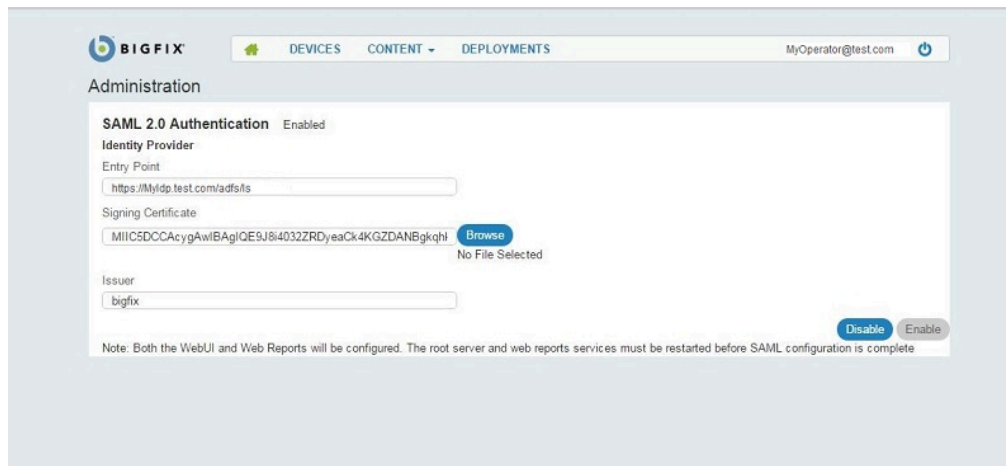
#### 属性ストア:

Active Directory

#### 発信要求タイプへの LDAP 属性のマッピング:

- LDAP 属性: User-Principal-Name
  - 発信要求: 名前 ID
- BigFix サーバーが SAML 認証を使用できるようにするための構成。これは、マスター・オペレーター (MO) および Web レポート管理者の責任下で行います。このタスクを実行するには、以下の手順を実行します。
    1. BigFix コンソールで Active Directory を使用して LDAP を構成します。詳細については、[Windows サーバーと Active Directory との統合 \(##### 41\)](#)を参照してください。
    2. LDAP オペレーターを定義します。詳細については、[LDAP オペレーターの追加 \(##### 53\)](#)を参照してください。

3. Web レポートのユーザー管理ページで Web レポートの LDAP オペレーターを定義します。
4. 「管理」 ページにアクセスして、SAML 2.0 との統合を構成します。
  - a. Web UI サーバーにログインします。
    - Web UI がポート 443 で listen している場合: `https://<WebUI_server>`
    - Web UI が 443 以外のポートで listen している場合: `https://<WebUI_server>:<webui_port_number>`
  - b. 管理者ページを開きます。
    - Web UI がポート 443 で listen している場合: `https://<WebUI_server>/administrator`
    - Web UI が 443 以外のポートで listen している場合: `https://<WebUI_server>:<webui_port_number>/administrator`



5. 「管理」 ページで、以下を指定します。

#### エントリー・ポイント:

ID プロバイダーのログイン URL。オペレーターがログインに使用できる URL で、オペレーターはここから Web UI または Web レポートにリダイレクトされます (例: `https://<idp_fqdn>/adfs/ls`)。

#### 署名証明書:

証明書ファイルを参照するか、Base-64 エンコード X.509 (.CER) 形式の ID プロバイダー証明書のキーをこのフィールドに貼り付けます。

**発行者:**

ID プロバイダーの ID をテキスト形式で入力します。例えば「BigFix」です。ADFS 構成を構成している場合、この値は ADFS 証明書利用者 ID 設定と一致している必要があります。

6. すべてのフィールドに入力したら、「有効化」をクリックします。
7. WebUI が別のリモート・サーバーにインストールされている場合は、WebUI 証明書の件名と一致することを確認し、BigFix サーバー・コンピューターの `_WebUI_AppServer_Hostname` キーを WebUI がインストールされているコンピューター (WebUI サーバー・コンピューター) のホスト名、完全修飾ドメイン・ネーム (FQDN)、または IP アドレスに設定します。
8. SAML 認証方式としてスマート・カードの使用を有効にする場合は、WebUI サーバー・コンピューターで、`_WebUIAppEnv_SAML_AUTHNCONTEXT` 設定を以下の 2 つの値のいずれかに設定します。
  - `urn:oasis:names:tc:SAML:2.0:ac:classes:TLSClient` (ID プロバイダーが Transport Layer Security (TLS) 暗号プロトコルを使用するように設定されている場合)。
  - `urn:federation:authentication:windows` (ID プロバイダーが統合 Windows 認証 (IWA) を使用するように設定されている場合)。

その後、WebUI を再始動します。

9. BigFix ルート・サーバーを再始動します。
10. BigFix Web レポート・サービスを再始動します。

この構成をセットアップして BES ルート・サーバーを再始動した後に、Web UI が再始動するまでに、少し時間がかかることがあります。

上記の手順が正常に実行されたら、これらのサービスのすべての LDAP オペレーターを、構成された ID プロバイダーを介して認証する必要があります。

管理者は「管理」ページを使用して、既存の構成を更新することもできます。

**注:** これらの手順を完了した後、BigFix コンソールにログオンする際のエラーを防ぐ処置として、分数で指定される `_BESDataServer_AuthenticationTimeoutMinutes` 構成設定に 5 分を超える値を設定してください。

## 第 5 章. 複数サーバー (DSA) の使用

以下に、複数のサーバー・インストールの重要な要素の一部を示します。

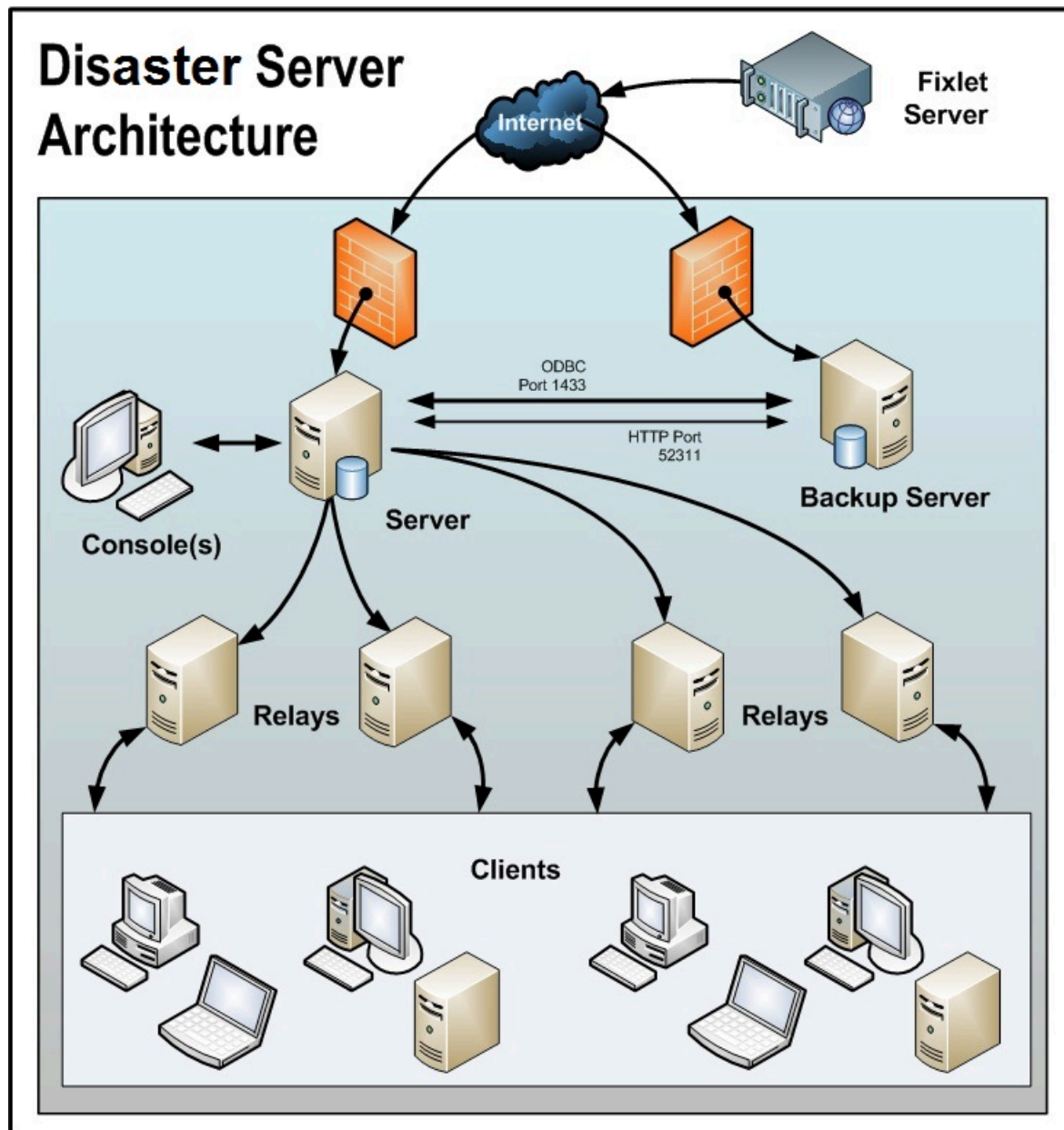
- 追加のサーバーをインストールするプラットフォームに応じて、追加 Windows サーバーのインストール (DSA) (##### ) または追加 Linux サーバーのインストール (DSA) (##### ) に説明されている手順を実行します。
- サーバーは、定期的なスケジュールに基づいて通信し、データを複製します。現在の状況を確認し、レプリケーション間隔を調整するには、[Windows システムでのレプリケーションの管理 \(DSA\) \(##### 72\)](#) または [Linux システムでのレプリケーションの管理 \(DSA\) \(##### 73\)](#) を参照してください。
- 各サーバーは、適用環境内の他のサーバーから複製を行う準備ができると、適用環境内の他のすべてのサーバーへの最短パスを計算します。プライマリー・リンクには長さ 1 が、セカンダリー・リンクには長さ 100 が、ターシャリー・リンクには長さ 10,000 がそれぞれ割り当てられます。前回使用されたときに接続が失敗に終わったリンクは未接続と見なされます。
- 停止またはその他の問題が原因でネットワークの分断が発生した場合、カスタム Fixlet または取得プロパティは、分断されたネットワークの両側で独立して変更できません。ネットワークが再接続されると、最も小さいサーバー ID を持つサーバーのバージョンが優先されます。
- **Web レポート** の複数のコピーがインストールされている場合、それらは独立して動作します。各 Web レポート・サーバーはすべて、データベースの同等のビューを所有しているため、最も便利なサーバーに接続できます。
- デフォルトでは、サーバー 0 (ゼロ) がマスター・サーバーです。マスター・サーバーに接続している場合、Windows での **BigFix 管理ツール** や Linux での **BESAdmin** コマンドを使用すると、特定の管理用タスク (ユーザーの作成、削除など) のみ実行できます。

### 災害対策サーバー・アーキテクチャー (DSA)

以下の図は、2 つのサーバーを使用した典型的な DSA セットアップを示しています。それぞれのサーバーがファイアウォールの背後にあります。複数のサーバーを単一のオフィス

にセットアップすれば簡単ですが、ここでは、それらのサーバーは別々のオフィスにあると思われる。これらのサーバーでは、BigFix データを複製するための高速な接続が必要になります (通常は、10 Mbps から 100 Mbps の LAN 速度が必要です)。BigFix サーバーは、ODBC および HTTP プロトコルを介して通信します。

フェイルオーバーが発生した場合は、特定の構成済みリレーが自動的にバックアップ・サーバーを検出し、ネットワークを再接続します。リレーの構成について詳しくは、[リレー・フェイルオーバーの構成 \(ページ 70\)](#)を参照してください。



## リレー・フェイルオーバーの構成

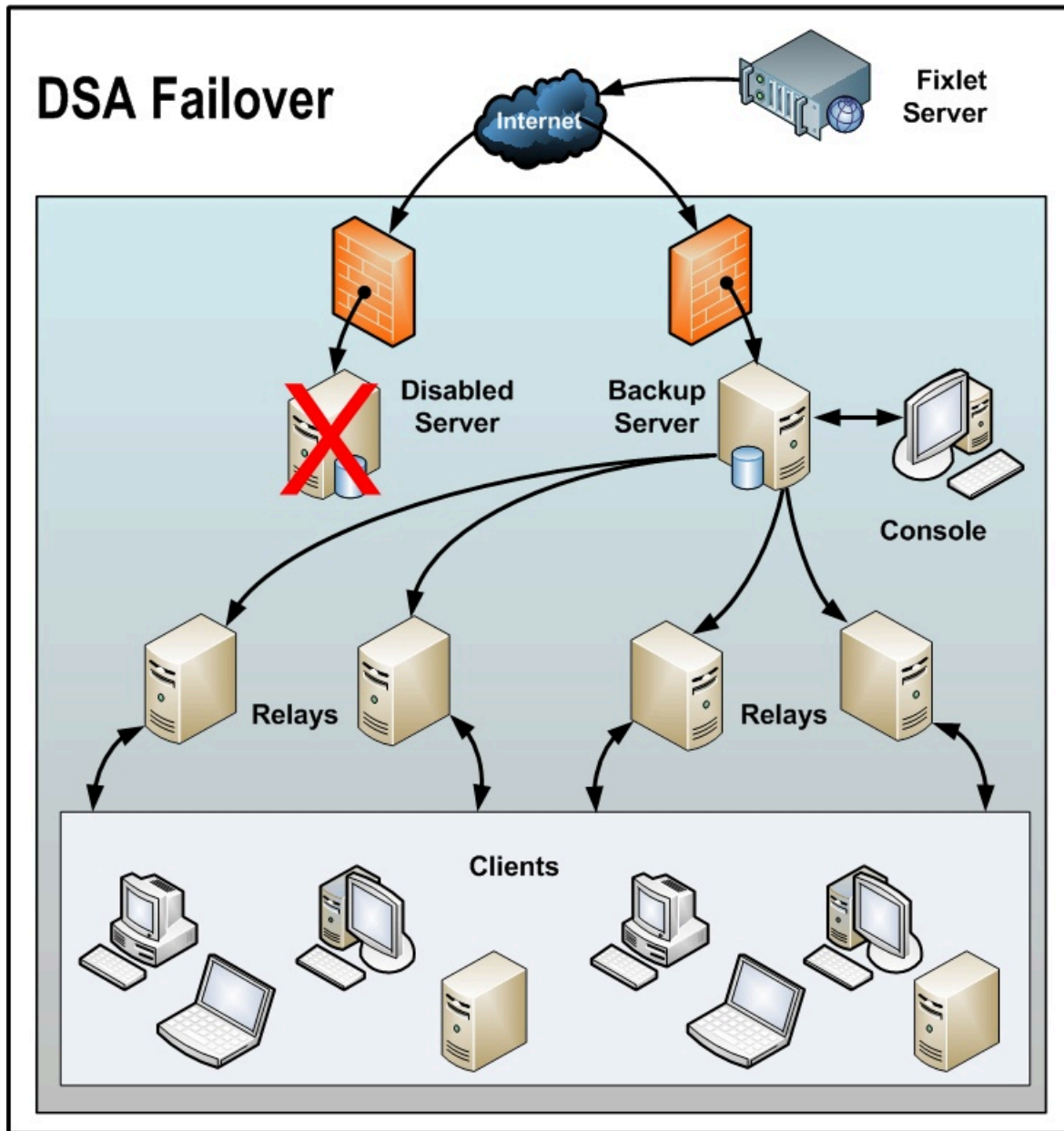
災害や計画的メンテナンスが原因で BigFix サーバーがダウンした場合に、DSA サーバーを使用して新規のサーバー接続が検出されることがあります。使用不可になっていたサーバーがオンラインに戻ると、そのサーバーのデータは自動的に正常なサーバー上のデータとマージされます。

フェイルオーバー処理が正常に行われるためには、クライアント設定で最上位リレーに対して `__RelayServer2` を使用して (あるいはコンソール・コンピューターから右クリックで設定するユーザー・インターフェースを使用して) DSA サーバーをセカンダリー・リレーとして設定します。プライマリー BigFix サーバーで障害が発生して、下位の BigFix リレーが報告できない場合は、通常のリレー選択プロセスでセカンダリー BigFix リレー値を使用してセカンダリー BigFix サーバーが検出され、そのサーバーに報告が行われます。

### 注: クライアント・システムで指定された設定

`_BESClient_RelaySelect_ResistFailureIntervalSeconds` は、フェイルオーバーのタイミングに影響を及ぼす可能性があります。その値の範囲は 0 秒から 6 時間であり、これにより、クライアントがエラー報告を無視する時間 (秒数) を定義します。これを過ぎると、クライアントは別の親リレーの検出を試行します。デフォルト値は 10 分です。フェイルオーバー構成の場合は、`_BESClient_RelaySelect_ResistFailureIntervalSeconds` (定義されている場合) を小さい値に設定するようにしてください。





## メッセージ・レベルの暗号化と DSA

メッセージ・レベルの暗号化が有効であり、かつクライアントが「**タスク: BES クライアントの設定: レポートの暗号化**」を使用して設定されている場合は、BigFix サーバー暗号化キーをセカンダリー BigFix DSA サーバーに移動します。これにより BigFix DSA サーバーは、通常の操作中、またはプライマリー BigFix サーバーで障害が発生した場合に、暗号化された BigFix クライアントからのレポートを処理できるようになります。

以下の BigFix サーバー・ディレクトリーから暗号化キー (.pvk) を選択します。

- Windows サーバー: %PROGRAM FILES%\BigFix Enterprise\BES Server\Encryption Keys\  
Keys\  
Keys\
- Linux サーバー: /var/opt/BESServer/Encryption Keys

DSA セカンダリー・サーバーにコピーします。

## Windows システムでのレプリケーションの管理 (DSA)

追加の Windows サーバーをインストールするには、追加 Windows サーバーのインストール (DSA) ( [ページ](#) ) で説明されている手順に従います。

場合により、間隔の変更や、サーバーのさまざまな割り当てを行う必要があります。これらの変更のほとんどは、BigFix 管理ツールを通じて実行します。以下の方法により、サーバーの現在の設定を確認すること、および適切な変更を加えることができます。

### Windows システムでのレプリケーション間隔の変更

Windows システムで、適用環境内に複数のサーバーが存在する場合は、それぞれのレプリケーションを行うタイミングをスケジュールすることができます。デフォルトは 5 分ですが、この時間を短くしてリカバリー可能性を向上させることや、時間を増やしてネットワーク・アクティビティを制限することができます。

1. **BigFix管理ツール** を起動します。
2. 「**レプリケーション**」タブを選択します。
3. 「更新」ボタンをクリックして、最新の「**レプリケーション・グラフ (Replication Graph)**」を表示します。
4. ドロップダウン・メニューから目的のサーバーを選択します。レプリケーション間隔を長くすると、サーバーがデータを複製する頻度が低くなりますが、1 回に転送するデータの量は多くなります。レプリケーション間隔は、「サーバーからの複製」の場合と「サーバーへの複製」の場合で異なる可能性があることに注意してください。
5. 右側のメニューからレプリケーション間隔を選択します。



6. 「OK」 をクリックします。

## Windows システムでのマスター・サーバーの切り替え

デフォルトでは、サーバー 0 (ゼロ) がマスター・サーバーです。マスター・サーバーに接続している場合のみ、管理者ツールを使用して特定の管理用タスク (ユーザーの作成や削除など) を実行することができます。マスターを別のサーバーに切り替える場合、適用オプション `masterdatabaseServerID` をその別サーバーの ID に設定する必要があります。その方法を以下に示します。

1. **BigFix管理ツール** を起動します。
2. 「**詳細オプション**」 タブを選択し、「**追加**」 をクリックします。
3. 名前として `masterDatabaseServerID` と入力し、値として別サーバーの ID を入力します。
4. 「**OK**」 をクリックします。

値が新しいサーバーに正常に複製された後は、その新しいサーバーがマスター・サーバーになります。サーバーがマスターである間にそのサーバーで障害が発生した場合、データベースの `ADMINFIELDS` テーブルを直接操作することにより、別のサーバーをマスター・サーバーにする必要があります。この詳細は本書の対象範囲外ですが、簡単に言うと、SQL Enterprise Manager などのツールを使用して `ADMINFIELDS` テーブルを表示し、変更します。変数名 `masterDatabaseServerID` を目的の値に設定します。

## Linux システムでのレプリケーションの管理 (DSA)

追加の Linux サーバーをインストールするには、追加 Linux サーバーのインストール (DSA) ( (ページ) ) で説明されている手順に従います。

場合により、間隔の変更や、サーバーのさまざまな割り当てを行う必要があります。これらの変更のほとんどは、`iem` コマンド・ラインを通じて実行します。以下の方法により、サーバーの現在の設定を確認すること、および適切な変更を加えることができます。

### Linux システムでのレプリケーション間隔の変更

Linux システムで、適用環境内に複数のサーバーが存在する場合は、それぞれのレプリケーションを行うタイミングをスケジュールすることができます。デフォルトは5分ですが、この時間を短くしてリカバリー可能性を向上させることや、時間を増やしてネットワーク・アクティビティを制限することができます。

レプリケーション間隔を変更するには、以下の手順を実行します。

1. /opt/BESServer/bin コマンド・プロンプトから、以下のようにコマンド・ラインを開始します。

```
./iem login --server=servername:serverport --user=username  
--password=password
```

2. /opt/BESServer/bin コマンド・プロンプトから、以下のコマンドを実行します。

```
./iem get replication/server/0 > /appo/replicationServer0.xml
```

3. /appo/replicationServer0.xml ファイルで、以下のキーワードを編集します。

```
<ReplicationIntervalSeconds>300</ReplicationIntervalSeconds>
```

これにより、レプリケーション間隔の秒数の値が変更されます。レプリケーション間隔を長くすると、サーバーがデータを複製する頻度が低くなりますが、1回に転送するデータの量は多くなります。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>  
<BESAPI xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"  
xsi:noNamespaceSchemaLocation="BESAPI.xsd">  
  <ReplicationServer Resource="http://9.87.126.68:52311/api/  
replication  
/server/0">  
    <ServerID>0</ServerID>  
    <URL>http://nc926068.romelab.it.ibm.com:52311</URL>  
    <DNS>nc926068.romelab.it.ibm.com</DNS>  
    <ReplicationIntervalSeconds>300</ReplicationIntervalSeconds>  
    <ReplicationLink Resource="http://9.87.126.68:52311/api/  
replication
```

```

/server/0/link/3">
  <SourceServerID>0</SourceServerID>
  <DestinationServerID>3</DestinationServerID>
  <Weight>1</Weight>
  <IsConnected>0</IsConnected>
  <LastReplication>Fri, 01 Mar 2013 11:17:12 +0000
  </LastReplication>
  <LastError>19NoMatchingRecipient - Fri, 01 Mar 2013
11:17:12 +0000
  </LastError>
</ReplicationLink>
  <ReplicationLink Resource="http://9.87.126.68:52311/api/
replication/server/
                                3/link/0">
    <SourceServerID>3</SourceServerID>
    <DestinationServerID>0</DestinationServerID>
    <Weight>1</Weight>
    <IsConnected>1</IsConnected>
    <LastReplication>Fri, 01 Mar 2013 11:17:18 +0000
    </LastReplication>
  </ReplicationLink>
</ReplicationServer>
</BESAPI>

```

4. 以下のコマンドを実行して、変更したファイルをアップロードします。

```
./iem post /appo/replicationServer0.xml replication/server/0
```

## Linux システムでのマスター・サーバーの切り替え

デフォルトでは、サーバー 0 (ゼロ) がマスター・サーバーです。マスターを別のサーバーに切り替えるには、以下のようにして適用オプション `masterDatabaseServerID` をその別のサーバーの ID に設定します。

1. /opt/BESServer/bin コマンド・プロンプトから、以下のようにコマンド・ラインを開始します。

```
./iem login --server=servername:serverport --user=username --  
password=password
```

2. /opt/BESServer/bin コマンド・プロンプトから、以下のコマンドを実行します。

```
./iem get admin/fields > /appo/switchmaster.xml
```

3. /appo/switchmaster.xml ファイルで、以下のキーワードとその値を追加または編集します。

```
<Name>masterDatabaseServerID</Name>  
<Value>0</Value>
```

以下のようにマスター・サーバーを別のマスター・サーバーに切り替えます。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>  
<BESAPI xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"  
xsi:noNamespaceSchemaLocation="BESAPI.xsd">  
  <AdminField Resource="http://9.87.126.68:52311/api/admin/field  
  /masterDatabaseServerID">  
    <Name>masterDatabaseServerID</Name>  
    <Value>3</Value>  
  </AdminField>  
</BESAPI>
```

4. 以下のコマンドを実行して、変更したファイルをアップロードします。

```
./iem post /appo/switchmaster.xml admin/fields
```

値が新しいサーバーに正常に複製された後、その新しいサーバーがマスター・サーバーになります。サーバーがマスターである間にそのサーバーで障害が発生した場合、データベースの ADMINFIELDS テーブルを直接操作することにより、別のサーバーをマスター・サーバーにする必要があります。

## アップグレード時に再生成されるスキーマ・ネクスト・テーブル

Windows と Linux システムの両方で DSA 環境を古いバージョンから BigFixバージョン 9.5 パッチ 13 にアップグレードする場合、WebUI コンポーネントで使用されるスキーマ・ネクスト・テーブルは、複製プロセスが正常に完了しなかった場合、レガシー・データベース・テーブルから再生成されます。

この動作は、`DisableReplicationOfNextTables` レジストリー設定 (Windows) または `DisableReplicationOfNextTables` 構成設定 (Linux) を有効にした DSA 環境にのみ影響します。この設定は、お使いの環境でのスキーマ・ネクスト・テーブルの複製を防ぎます。

### アップグレード前

`DisableReplicationOfNextTables` レジストリー設定 (Windows) または `DisableReplicationOfNextTables` 構成設定 (Linux) を有効にした場合、スキーマ・ネクスト・テーブルの再生成にかかる時間を短縮するために、「BigFix 管理者ツール」タブの「クリーンアップ」を使用して、環境のクリーンアップを実行することをお勧めします。詳細については、[クリーンアップ \(ページ\)](#) を参照してください。このオプションはアップグレードにかかる時間を短縮します。

### アップグレード後

`DisableReplicationOfNextTables` レジストリー/構成設定は自動的に無効になります。

## 第 6 章. サーバー・オブジェクト ID

BigFix サーバーは、Fixlet、タスク、ベースライン、プロパティ、分析、アクション、ロール、カスタム・サイト、コンピューター・グループ、管理権限、サブスクリプションなど、作成するオブジェクトの一意の ID を生成します。

これらの ID は、プラットフォーム・データベースに 32 ビット・フィールドとして保管されます。次に例を示します。

- ActionID
- FixletID
- ID
- ContentID
- RoleID

ID はコンソール、Web レポートおよび WebUI インターフェースに表示され、REST API および AdminTool や PropertyIDMapper などのツールで使用されます。

現行の実装の前は、1 つのサーバーに使用可能なオブジェクト ID の最大数は 16.777.215 であったため、使用可能な DSA サーバーの最大数は 256 でした。

オブジェクト ID の上限に達するのを避けるために、Fixlet、タスク、ベースラインなどを作成する際、オブジェクト ID に使用されるビットは次のように再配置されます。

|x\_|\_y\_|\_\_\_\_\_z\_\_\_\_\_|

各部の意味は以下のとおりです。

- x = 3 ビットで、そのうち 2 ビットはカウンターに使用されます (最初のビットは、エージェントの内部処理に使用されます)
- y = サーバー ID (以前の 8 ビットではなく 5 ビット)
- z = カウンターの最初の 24 ビット (不変)

このようにして、使用可能なオブジェクト ID の数が 1.627.389.951 に増加し、結果として使用可能な DSA サーバーの数は 32 に減少しました。

このソリューションには、32 ビットのオブジェクト ID を保持して、下位互換性の問題を回避するという利点があります。

# 第 7 章. 収集のための HTTPS のカスタマイズ

HTTPS プロトコルを BigFix サーバー上またはエアール・ギャップ環境内で使用することで、ライセンス更新および外部サイトを収集できます。

HTTPS プロトコルを有効にするには、クライアント・キーワードを設定する必要があります。

HTTPS を有効にしたら、信頼する証明書のパッケージを作成または (curl Web サイトから) ダウンロードすることができます。curl Web サイトでは、Mozilla に付属しているものと同じ証明書が含まれている事前作成パッケージが提供しています。

BigFix サーバーは、収集中に証明書の検証を開始します。その際、提供された証明書を信頼します。

## HTTPS の有効化

HTTPS プロトコルを使用して外部サイトを収集するには、以下の手順を実行します。

### BigFixサーバー上で:

クライアント・プロパティ `_BESGather_Use_Https` を 0、1、または 2 に設定します。

プロパティを 0 に設定すると、サーバーは URL で定義されているプロトコルを使用します。

プロパティを 1 に設定すると、サーバーは HTTPS プロトコルのみを使用してすべてのサイトの収集を試みます。

プロパティを 2 に設定すると、サーバーは最初に HTTPS プロトコルを使用してすべてのサイトの収集を試みます。HTTPS を使用して収集できないサイトがあった場合、サーバーは HTTP プロトコルを使用してもう一度収集を試みます。HTTPS から HTTP へのフォールバックは、`http://` から始まる URL を持つサイトにも適用されます。

この設定のデフォルト値は 2 です。

### エアール・ギャップ環境内で:

以下のように `Airgap` コマンドを起動します。



```
Airgap
```

サーバーは、最初に HTTPS プロトコルを使用してすべてのサイトの収集を試みます。失敗した場合、サーバーは HTTP プロトコルを使用してサイトを収集します。このリダイレクトは、URL が HTTP でハードコードされている場合のみ適用されます。これはデフォルトの動作です。

```
Airgap -usehttps
```

サーバーは、HTTPS プロトコルのみを使用してすべてのサイトの収集を試みます。

```
Airgap -no-usehttps
```

サーバーは URL で定義されているプロトコルを使用します。

## HTTPS 証明書の検証

デフォルトでは、HTTPS 接続を有効にするために使用される HTTPS 証明書は、BigFix サーバーのインストール済み環境に含まれている証明書バンドルを使用して検証されます。

Windows のデフォルト・パスは以下のとおりです。

```
C:\Program Files (x86)\BigFix Enterprise\BES Server\Reference\ca-bundle.crt
```

Linux のデフォルト・パスは以下のとおりです。

```
/opt/BESServer/Reference/ca-bundle.crt
```

HTTPS 収集の前に、信頼された証明書のカスタム・バンドルを使用して HTTPS 証明書を検証するには、以下の手順を実行します。

1. 信頼された証明書セットを作成するか、ダウンロードします (例えば、<http://curl.haxx.se/ca/cacert.pem>)。使用できる証明書は、以下のとおりです。
  - 「VeriSign Universal Root Certification Authority」 (サイト収集が目的の場合)
  - 「thawte Primary Root CA - G3」 (ライセンス更新の確認が目的の場合)
2. **サーバー上で:**

HTTPS プロトコルを使用するために、クライアント・プロパティ `_BESGather_Use_Https` を 1 または 2 に設定します。 `_BESGather_CACert` キーワードを、ダウンロード済みの信頼された証明書セットのパス (Windows システムでは `c:\TEM\certificates\custom-ca-bundle.crt`、Linux システムでは `/TEM/certificates/custom-ca-bundle.crt` など) に設定します。

#### エア・ギャップ環境内で:

以下のように、オプション `-cacert <path>` を指定してエア・ギャップ・ツールを起動します。

```
Airgap -cacert <path>
```

ここで、`<path>` は、保存済みの信頼された証明書セットのパスです。

## 第 8 章. セキュア通信の構成

BigFix は、自己署名証明書を使用することで Secure Socket Layer (SSL) プロトコルを自動的に有効にして、Web レポート・サーバーや REST API サーバーとそれらのサーバーにアクセスするすべてのユーザーとの間のセキュア通信を実現します。提供されている秘密鍵と自己署名証明書を使用しない場合は、以下のステップを実行します。

1. CA が署名した証明書の秘密鍵と証明書署名要求 (CSR) を生成します。秘密鍵と証明書のフォーマットの追加情報については、[秘密鍵および証明書のフォーマット \(##### 92\)](#)を参照してください。

外部の CA を使用する場合、既知の公開 CA のルート証明書は、最新の Web ブラウザーにデフォルトでインポートされているという利点があります。

**⚠ 重要:** 秘密鍵がパスワード保護されていない場合に限り、BigFix Inventory 用に生成された秘密鍵と証明書を Web レポートにも使用できます。

これらのファイルの入手方法について詳しくは、[秘密鍵および証明書の作成 \(##### 95\)](#)および[署名証明書 \(##### 96\)](#)を参照してください。

2. ファイルを、Web レポート・サーバーまたは REST API サーバー上の任意のフォルダーにコピーします。
3. [Web レポートでの HTTPS のカスタマイズ \(##### 84\)](#)および[REST API での HTTPS のカスタマイズ \(##### 89\)](#)の説明に従い、Web レポート・サーバーまたは REST API サーバーを構成します。

**📖 注:** コンソールを使用せずに手動で、Web レポートまたは REST API が Hyper Text Transport Protocol Secure (HTTPS) で機能するように構成することもできます。Web レポートの追加情報については[Windows システムでの HTTPS の手動構成 \(##### \)](#)および[Linux システムでの HTTPS の手動構成 \(##### \)](#)、REST API の追加情報については[Windows システムでの HTTPS の手動カスタマイズ \(##### 91\)](#)および[Linux システムでの HTTPS の手動構成 \(##### \)](#)を参照してください。

4. HTTPS を設定している対象のコンポーネントに応じて、対応するサービスの **BESWebReports** (Web レポート) または **BES Server** (REST API) を再開します。

**Web レポート**

- Windows の場合は、「サービス」を開いて「BESWebReports」を選択し、「操作」メニューで「再起動」をクリックします。
- Linux の場合は、プロンプトで次を実行します。`service beswebreports restart`または `/etc/init.d/beswebreports restart`

## REST API

- Windows の場合は、「サービス」を開き、「BESServer」を選択し、「操作」メニューで「再起動」をクリックします。
- Linux の場合は、プロンプトで次を実行します。`service besserver restart`または `/etc/init.d/besserver restart`。

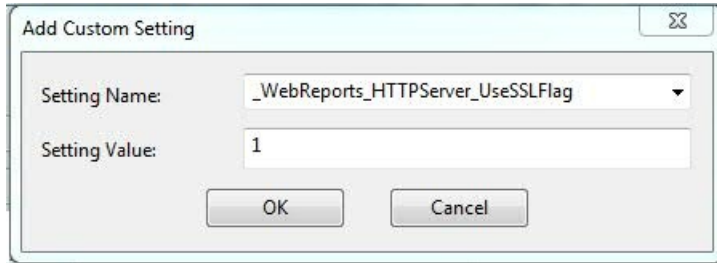
# Web レポートでの HTTPS のカスタマイズ

認証局からの信頼できる SSL セキュリティー証明書およびキーがある場合、この証明書とキーを使用してトラステッド接続を使用可能にするように、BigFix Web レポート・コンピューターを構成できます。

手順を完了して、以下のタスクを実行します。

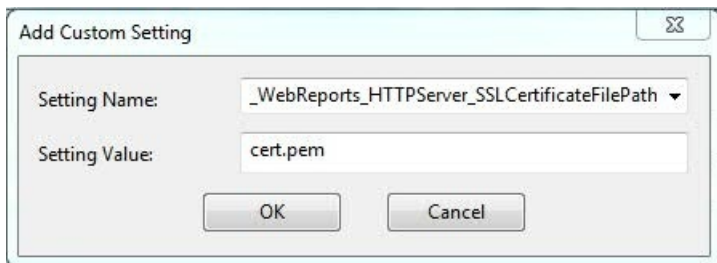
- セキュア通信を使用することを指定します。
- SSL 証明書ファイルおよび秘密鍵ファイルを配置する場所を指定します。
- SSL ポート上で HTTPS 接続を listen し、クライアントを HTTPS にリダイレクトする HTTPS ポート番号を定義します。

1. BigFix コンソールから「コンピューター」タブを選択します。
2. Web レポートを実行するコンピューターを選択し、「コンピューター設定の編集」を選択します。
3. `_WebReports_HTTPServer_UseSSLFlag` の設定を探します。存在する場合は、新たに作成せずに、その値を編集して 1 にし、HTTPS を有効にします。この設定が存在しない場合は追加します。



**⚠ 重要:** 秘密鍵ファイルと証明書ファイルを組み合わせた場合は、次のステップをスキップして、**\_WebReports\_HTTPServer\_SSLCertificateFilePath** 設定のみを設定してください。

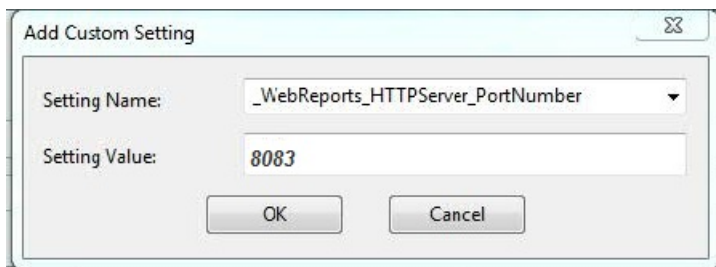
4. **\_WebReports\_HTTPServer\_SSLPrivateKeyFilePath** の設定を探します。この設定が存在する場合は、2つ目を作成せずに、その値を、サーバーの秘密鍵が格納されている秘密鍵 (.pvk ファイル) の絶対パス名に変更します。この秘密鍵にパスワードを設定することはできません。この設定が存在しない場合は追加します。
5. **\_WebReports\_HTTPServer\_SSLCertificateFilePath** の設定を探します。この設定が存在する場合は、2つ目を作成せずに、その値を .pem ファイルの絶対パス名に変更します。このファイルには、サーバーの証明書と秘密鍵の両方が格納される場合もあれば、証明書だけが格納される場合もあります。この設定が存在しない場合は追加します。



.pem ファイルが標準の pem ファイル形式になっていることを確認してください。証明書は、サーバーから接続するクライアント (ブラウザー) に渡されます。これらのクライアントは、証明書の情報を示すダイアログをユーザーに表示します。証明書が、信頼性要件をすべて満たす場合、ブラウザーはユーザーが介入しなくても接続します。証明書がブラウザーの信頼性要件を満たしていない場合、接続を続行するかどうかを尋ねるダイアログがユーザーに表示されます。ユーザーは、証明書に関する情報にアクセスすることができます。信頼された証明書とは、Verisign などの信頼できる認証局によって署名され、正しいホスト名を持ち、期限切れになっていない証明書のことです。

**注:** これらの設定は、Web レポート・コンピューターのキー **HKLM/Software/WoW6432Node/BigFix/EnterpriseClient/Settings/Client** の下にあるレジストリーに保管されます。

6. **\_WebReports\_HTTPServer\_PortNumber** の設定を探します。存在する場合は、新たに作成せずにその値を編集して、使用するポート番号にします。存在しない場合は、以下のように追加します。



7. SSL が有効な場合は、以下の設定で転送ポートを定義します。
  - **\_WebReports\_HTTPRedirect\_Enabled** を 1 に設定する
  - **\_WebReports\_HTTPRedirect\_PortNumber** を、HTTP 接続を listen し、クライアントを HTTPS にリダイレクトするポートに設定する
8. Web ブラウザー要求用の TLS12 を要求するため  
に、**\_WebReports\_HTTPServer\_RequireTLS12** を探します。存在する場合は、新たに作成せずに、その値を編集して 1 にします。Web レポート・コンポーネントは、ローカルの設定やマストヘッドの設定に関係なく、BigFix サーバーと通信する際に必ず TLS 1.2 を使用します。

**⚠ 重要:** 1.2 より前のバージョンの TLS を使用することは推奨されません。

9. **BES Web レポート・サーバー・サービス**を再始動します。
  - Windows の場合は、「サービス」を開いて「**BESWebReports**」を選択し、「操作」メニューで「再起動」をクリックします。
  - Linux の場合は、プロンプトで次を実行します。`service beswebreports restart`  
または `/etc/init.d/beswebreports restart`

[Linux システムでの HTTPS の手動カスタマイズ \( \(ページ\) 88\)](#)および[Windows システムでの HTTPS の手動カスタマイズ \( \(ページ\) 87\)](#)で説明されているように、セキュア通信は手動の手順を使用して設定することもできます。

## Windows システムでの HTTPS の手動カスタマイズ

信頼できる SSL 証明書 (.pem ファイル) を用意したら、Web レポートを実行するコンピューター (通常はサーバー) に配置し、以下の手順を実行します。

1. **regedit** を実行し、`HKEY_LOCAL_MACHINE\Software\BigFix\EnterpriseClient\Settings\Client` (x32 システムの場合) および `HKEY_LOCAL_MACHINE\Software\Wow6432Node\BigFix\EnterpriseClient\Settings\Client` (x64 システムの場合) を見つけます。  
  
HTTPS フラグ用、SSL 証明書のロケーション用、HTTPS ポート番号用、 および HTTPS へのリダイレクト用のサブキーを追加または変更する必要があります。
2. **クライアント**のサブキー `_WebReports_HTTPServer_UseSSLFlag` を作成します (まだ存在しない場合)。
3. **値**と呼ばれるキー `_WebReports_HTTPServer_UseSSLFlag` のストリング値 (reg\_sz) を作成し、それを 1 に設定して HTTPS を有効にします。
4. **クライアント**のサブキー `_WebReports_HTTPServer_SSLSertificateFilePath` を作成します (まだ存在しない場合)。
5. **値**と呼ばれるキー `_WebReports_HTTPServer_SSLSertificateFilePath` のストリング値 (reg\_sz) を作成し、それを SSL 証明書 (cert.pem) の絶対パス名に設定します。
6. **クライアント**のサブキー `_WebReports_HTTPServer_PortNumber` を作成します (まだ存在しない場合)。
7. **値**と呼ばれるキー `_WebReports_HTTPServer_PortNumber` のストリング値 (reg\_sz) を作成し、それを、使用するポート番号 (通常 443) に設定します。
8. **クライアント**のサブキー `_WebReports_HTTPRedirect_Enabled` を作成します (まだ存在しない場合)。
9. **値**と呼ばれるキー `_WebReports_HTTPRedirect_Enabled` のストリング値 (reg\_sz) を作成し、それを 1 に設定して HTTPS へのブラウザー・リダイレクトを有効にします。
10. **クライアント**のサブキー `_WebReports_HTTPRedirect_PortNumber` を作成します (まだ存在しない場合)。
11. **値**と呼ばれるキー `_WebReports_HTTPRedirect_PortNumber` のストリング値 (reg\_sz) を作成します。その値は、HTTP 接続を listen し、クライアントを HTTPS にリダイレクトするためのポートの番号に設定します。
12. **BESWebReports** サービスを再始動します。

## Linux システムでの HTTPS の手動カスタマイズ

信用された SSL 証明書 (.pem ファイル) を用意したら、Web レポートを実行するコンピューターに配置し、関連するファイル内のキーワードをカスタマイズします。

- besclient.config: Web レポートとともにクライアントがインストールされている場合
- beswebreports.config: Web レポートのみがインストールされている場合

使用するポート番号を定義するには、以下をカスタマイズします。

```
[Software\BigFix\EnterpriseClient\Settings\Client
\_WebReports_HTTPServer_PortNumber]
value = 443
```

SSL 証明書 (cert.pem) の絶対パス名を定義するには、以下をカスタマイズします。

```
[Software\BigFix\EnterpriseClient\Settings\Client
\_WebReports_HTTPServer_SSLCertificateFilePath]
value = /tmp/CERT/cert.pem
```

HTTPS を有効化するには、以下をカスタマイズします。

```
[Software\BigFix\EnterpriseClient\Settings\Client
\_WebReports_HTTPServer_UseSSLFlag]
value = 1
```

HTTP 接続から HTTPS 接続へのクライアント・リダイレクトを有効にするには、以下をカスタマイズします。

```
[Software\BigFix\EnterpriseClient\Settings\Client
\_WebReports_HTTPRedirect_Enabled]
value = 1
```

HTTP 接続を listen し、クライアントを HTTPS にリダイレクトするポートの番号を定義するには、以下をカスタマイズします。

```
[Software\BigFix\EnterpriseClient\Settings\Client
```



```
\_WebReports_HTTPRedirect_PortNumber]
value = portnumber
```

## REST API での HTTPS のカスタマイズ

信頼できる SSL セキュリティー証明書と鍵が認証局から発行されている場合は、この証明書と鍵を使用して信頼できる接続を有効にするように BigFix ルート・サーバーを構成できます。構成の完了後は、REST API およびコンソールからの接続にこの信頼できる証明書が使用されます。

手順を完了して、以下のタスクを実行します。

- セキュア通信を使用することを指定します。
- SSL 証明書ファイルおよび秘密鍵ファイルを配置する場所を指定します。

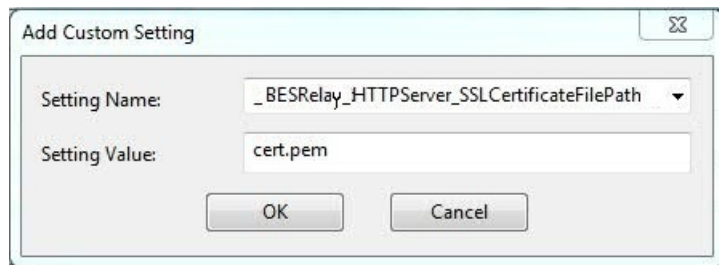
1. BigFix コンソールから「コンピューター」タブを選択します。
2. Rest API を実行するコンピューター (通常はサーバー) を選択し、「編集」メニューから「コンピューター設定の編集」を選択します。
3. **\_BESRelay\_HTTPServer\_UseSSLFlag** という設定を探します。存在する場合は、新たに作成せずに、その値を編集して 1 にし、HTTPS を有効にします。存在しない場合は、以下のように追加します。

**⚠ 重要:** 秘密鍵ファイルと証明書ファイルを組み合わせた場合は、次のステップをスキップして、**\_BESRelay\_HTTPServer\_SSLCertificateFilePath** のみを設定してください。

4. **\_BESRelay\_HTTPServer\_SSLPrivateKeyFilePath** という設定を探します。この設定が存在する場合は、2つ目を作成せずに、その値を、サーバーの秘密鍵が格納されている

秘密鍵 (.pvk ファイル) の絶対パス名に変更します。この秘密鍵にパスワードを設定することはできません。この設定が存在しない場合は追加します。

5. **\_BESRelay\_HTTPServer\_SSLSertificateFilePath** という設定を探します。この設定が存在する場合は、2 つ目を作成せずに、その値を .pem ファイルの絶対パス名に変更します。このファイルには、サーバーの証明書と秘密鍵の両方が格納される場合もあれば、証明書だけが格納される場合もあります。この設定が存在しない場合は、以下のように追加します。



.pem ファイルが標準の OpenSSL PKCS7 .pem ファイル形式になっていることを確認してください。


証明書は、サーバーから接続クライアントに渡されます。これらのクライアントは、証明書の情報を示すダイアログをユーザーに対して表示します。証明書が、接続するクライアントの信頼性要件をすべて満たす場合、クライアントはユーザーが介入しなくても接続します。証明書がクライアントの信頼性要件を満たしていない場合、接続を続行するかどうかを尋ねるダイアログがユーザーに対して表示されます。ユーザーは、証明書に関する情報にアクセスすることができます。信頼された証明書とは、Verisign などの信頼できる認証局によって署名され、正しいホスト名を持ち、期限切れになっていない証明書のことです。

6. TLS12 を要求するために、**\_BESRelay\_HTTPServer\_RequireTLS12** を探します。存在する場合は、新たに作成せずに、その値を編集して 1 にします。

**注:** REST API コンポーネントは、ローカルの設定やマストヘッドの設定に関係なく、BigFix サーバーと通信する際に必ず TLS 1.2 を使用します。

7. **BES ルート・サーバー・サービスを再始動**します。

- Windows の場合は、「サービス」を開き、「**BES Root Server**」を選択し、「操作」メニューで「再起動」をクリックします。
- Linux の場合は、プロンプトで次を実行します。 `service besserver restart` または `/etc/init.d/besserver restart`

 **注:** これらの設定は、キー `HKLM/Software/WoW6432Node/BigFix/EnterpriseClient/Settings/Client` の下にあるレジストリーに保管されます。

## Windows システムでの HTTPS の手動カスタマイズ

認証局から信頼できる SSL セキュリティーと鍵 (`.pem` ファイル) が発行されている場合は、REST API を実行するコンピューター (通常はサーバー) を構成して、信頼できる接続をカスタマイズすることができます。構成の完了後は、REST API およびコンソールからの接続にこの信頼できる証明書が使用されます。以下のステップを実行してください。

1. **regedit** を実行し、`HKEY_LOCAL_MACHINE\Software\BigFix\EnterpriseClient\Settings\Client` (x32 システムの場合) および `HKEY_LOCAL_MACHINE\Software\Wow6432Node\BigFix\EnterpriseClient\Settings\Client` (x64 システムの場合) を見つけます。  
HTTPS フラグ用、および SSL 証明書のロケーション用のサブキーを追加または変更する必要があります。
2. `_BESRelay_HTTPServer_UseSSLFlag` というクライアントのサブキーを作成します (既に存在する場合があります)。
3. 値と呼ばれるキー `_BESRelay_HTTPServer_UseSSLFlag` のストリング値 (`reg_sz`) を作成し、それを 1 に設定して HTTPS を有効にします。
4. `_BESRelay_HTTPServer_SSLCertificateFilePath` というクライアントのサブキーを作成します (既に存在する場合があります)。
5. 値と呼ばれるキー `_BESRelay_HTTPServer_SSLCertificateFilePath` のストリング値 (`reg_sz`) を作成し、それを SSL 証明書 (`cert.pem`) の絶対パス名に設定します。
6. BES Root Server サービスを再開します。

## Linux システムでの HTTPS の手動カスタマイズ

信頼できる SSL セキュリティー証明書と鍵が認証局 (`.pem` ファイル) から発行されている場合は、この証明書と鍵を使用して信頼できる接続を有効にするように BigFix ルート・サーバーを構成できます。構成の完了後は、REST API およびコンソールからの接続にこの信頼できる証明書が使用されます。

以下の手順では、Linux システムで、証明書を使用して REST API および BigFix コンソールを介した信頼できる接続を有効にするように BigFix ルート・サーバーを構成する方法を説明します。

1. 証明書と秘密鍵の両方が入ったファイル `em.pem` を、ファイル・システムの保護された領域に保存します (例えば `/etc/opt/BEServer/em.pem`)。ここで BigFix `besserver` プロセスがこのファイルにアクセスします。
2. `/var/opt/BEServer/besserver.config` ファイルを編集して以下の 2 つの項目を追加します。例として `/etc/opt/BEServer/em.pem` を使用しています。

```
[Software\BigFix\EnterpriseClient\Settings\Client\
_BESRelay_HTTPServer_SSLSertificateFilePath]
value = /etc/opt/BEServer/em.pem

[Software\BigFix\EnterpriseClient\Settings\Client\
_BESRelay_HTTPServer_UseSSLFlag]
value = 1
```

3. BigFix ルート・サーバーを停止してから再始動します。

## 秘密鍵および証明書のフォーマット

秘密鍵と証明書ファイルのフォーマットと構造が以下のようになっていることを確認してください。

### プライベート・キーのフォーマット

PEM エンコード形式で、パスワード保護機能なし。pvk フォーマットはサポートされていません。プライベート・キー (`private.key`) が以下の文で囲まれていることを確認します。

```
-----BEGIN PRIVATE KEY-----
<<base64 stringfrom private.key>>
-----END PRIVATE KEY-----
```

### X509 証明書のフォーマット

PEM エンコード形式。中間証明書とルート証明書を別々のファイルとして受け取った場合、これらすべてを 1 つのファイルに結合する必要があります。例えば、プライマリー証明書ファイル (*certificate.crt*) および中間証明書ファイル (*ca\_intermediate.crt*) がある場合、以下に示すように最初にプライマリー証明書、次に中間証明書という順序でこれらを結合する必要があります。

```
BEGIN CERTIFICATE-----
<<primary certificate: base64 stringfrom certificate.crt>>
-----END CERTIFICATE-----
-----BEGIN CERTIFICATE-----
<<intermediate certificate: base64 stringfrom
ca_intermediate.crt>>
-----END CERTIFICATE-----
```

中間証明書のほかにルート証明書 (*ca\_root.crt*) も受け取った場合は、これらを以下のように結合します。

```
BEGIN CERTIFICATE-----
<<primary certificate: base64 stringfrom certificate.crt>>
-----END CERTIFICATE-----
-----BEGIN CERTIFICATE-----
<<intermediate certificate: base64 stringfrom
ca_intermediate.crt>>
-----END CERTIFICATE-----
-----BEGIN CERTIFICATE-----
<<root certificate: base64 stringfrom ca_root.crt>>
-----END CERTIFICATE-----
```

### 単一ファイル (秘密鍵と証明書) のフォーマット

PEM エンコード形式。このファイルでは、秘密鍵と 1 次証明書の両方、または秘密鍵と証明書のチェーンが次の順序で結合され、それぞれの証明書に開始タグと終了タグがあります。

- 秘密鍵と 1 次証明書:

```

-----BEGIN CERTIFICATE-----
<<primary certificate: certificate.crt>>
-----END CERTIFICATE-----
-----BEGIN PRIVATE KEY-----
<<private key: base64 stringfrom private.key>>
-----END PRIVATE KEY-----

```

- 秘密鍵、1次証明書、および中間証明書:

```

BEGIN CERTIFICATE-----
<<primary certificate: base64 stringfrom certificate.crt>>
-----END CERTIFICATE-----
-----BEGIN CERTIFICATE-----
<<intermediate certificate: base64 stringfrom
ca_intermediate.crt>>
-----END CERTIFICATE-----
-----BEGIN PRIVATE KEY-----
<<private key: base64 stringfrom private.key>>
-----END PRIVATE KEY-----

```

- 秘密鍵、1次証明書、中間証明書、およびルート証明書:

```

BEGIN CERTIFICATE-----
<<primary certificate: base64 stringfrom certificate.crt>>
-----END CERTIFICATE-----
-----BEGIN CERTIFICATE-----
<<intermediate certificate: base64 stringfrom
ca_intermediate.crt>>
-----END CERTIFICATE-----
-----BEGIN CERTIFICATE-----
<<root certificate: base64 stringfrom ca_root.crt>>
-----END CERTIFICATE-----
-----BEGIN PRIVATE KEY-----
<<private key: base64 stringfrom private.key>>

```

```
-----END PRIVATE KEY-----
```

ファイルが DER でエンコードされているか、その他のフォーマットである場合は、OpenSSL などを使用して PEM フォーマットに変換できます。

## 秘密鍵および証明書の作成

セキュリティを強化するには、BigFix Web レポートでデフォルトで使用できる自己署名証明書を使用せずに、独自の秘密鍵と証明書を作成します。openssl を使用して、秘密鍵と証明書署名要求 (CSR) を作成することができ、その CSR は、認証局 (CA) によって署名された後に証明書に変換できます。

この手順は、openssl をサポートするすべてのオペレーティング・システムで有効です。

pkcs8 フォーマットの暗号化秘密鍵を生成している場合は、以下の行を

`installation_dir/jre/lib/security/java.security` ファイルに追加します。

```
security.provider.10=org.bouncycastle.jce.provider.BouncyCastleProvider
```

その後、BigFix Web レポート・サーバーを再始動します。

1. コマンド・ラインを開きます。
2. 新規の秘密鍵を作成します。

```
openssl genrsa -out key_name.key key_strength -sha256
```

例えば、`openssl genrsa -out private_key.key 2048 -sha256` です。

各部の意味は以下のとおりです。

### **key\_name**

新しい秘密鍵のファイル名。

### **key\_strength**

鍵の強度 (ビット単位で測定)。BigFix Web レポートで使用できる最大値は 2048 ビットです。

3. 証明書署名要求 (CSR) を作成します。この要求は秘密鍵に関連付けられ、後で証明書に変換されます。

```
openssl req -new -key path_to_private_key.key -out csr_name.csr
```

例えば、`openssl req -new -key private_key.key -out CSR.csr` です。

各部の意味は以下のとおりです。

#### **path\_to\_private\_key**

秘密鍵のパス。

#### **csr\_name**

証明書署名要求 (CSR) のファイル名。

このコマンドを実行すると、ユーザーが証明書を識別し、それが信頼できることを確認するのに役立つ情報を入力するよう求められます。

上記の手順が完了すると、秘密鍵 (`.key`) と証明書署名要求 (`.csr`) の 2 つのファイルが作成されます。次は、要求に署名して、証明書に変換する必要があります。プライベート認証局 (CA) を作成して要求に署名する方法については、「[署名証明書 \(##### 96\)](#)」を参照してください。

## 署名証明書

証明書署名要求 (CSR) を BigFix WebReports にアップロードできる証明書に変換するには、CSR が認証局 (CA) によって署名されていなければなりません。openSSL 暗号ライブラリーを使用すると、プライベート CA を作成し、要求に署名することができます。

プライベート CA を使用する方法以外にも、要求に署名する方法があります。組織の CA を使用したり、国際的なトラステッド CA (Entrust、Verisign など) に要求を送信したりすることもできます。これらの CA の証明書は、多くの場合、デフォルトで信頼されており、ブラウザーに警告が表示されることはありません。プライベート CA を使用する場合は、警告が表示される可能性があります。

1. プライベート認証局 (CA) とその CA 用の証明書を作成します。



- a. プライベート CA を作成します。このステップでは、[秘密鍵および証明書の作成 \(##### 95\)](#)で作成したものと同様の秘密鍵 (`.key`) および要求 (`.csr`) を作成します。

```
openssl req -new -newkey rsa:key_strength -nodes
-out CA_csr_name.csr -keyout CA_key_name.key -sha256
```

例えば、`openssl req -new -newkey rsa:2048 -nodes -out CA_CSR.csr -keyout CA_private_key.key -sha256` です。

各部の意味は以下のとおりです。

### **key\_strength**

鍵の強度 (ビット単位で測定)。BigFix Web レポートで使用できる最大値は 2048 ビットです。

### **CA\_csr\_name**

証明書署名要求 (CSR) のファイル名。認証局 (CA) では、個別の要求が必要になります。

### **CA\_key\_name**

秘密鍵のファイル名。認証局 (CA) では、個別の秘密鍵が必要になります。

- b. プライベート CA 用の証明書を作成します。このステップでは、CSR の署名に使用できる証明書 (`.arm`) を作成します。

```
openssl x509 -signkey path_to_CA_key.key -
days
number_of_days -req -in path_to_CA_csr.csr
-out CA_certificate_name.arm -sha256
```

例えば、`openssl x509 -signkey CA_private_key.key -days 90 -req -in CA_CSR.csr -out CA_certificate.arm -sha256` です。

各部の意味は以下のとおりです。

### **key\_strength**

鍵の強度 (ビット単位で測定)。BigFix Web レポートで使用できる最大値は 2048 ビットです。

**path\_to\_CA\_csr**

認証局 (CA) 用に作成した証明書署名要求 (CSR) のファイル名。

**path\_to\_CA\_key**

認証局 (CA) 用に作成した秘密鍵のファイル名。

**number\_of\_days**

新規証明書が有効である日数。

**CA\_certificate\_name**

CA 用の証明書のファイル名。この証明書は、CSR の署名に使用されます。

2. CA 証明書を使用して、「[秘密鍵および証明書の作成 \(##### 95\)](#)」で作成した証明書署名要求に署名します。

```
openssl x509 -req -days number_of_days -in path_to_csr.csr -  
CA path_to_CA_certificate.arm  
-CAkey path_to_CA_key.key -out new_certificate.arm -set_serial 01 -  
sha256
```

例えば、`openssl x509 -req -days 90 -in CSR.csr -CA CA_certificate.arm -CAkey CA_private_key.key -out certificate.arm -set_serial 01 -sha256` です。

各部の意味は以下のとおりです。

**number\_of\_days**

新規証明書が有効である日数。

**path\_to\_csr**

署名する証明書署名要求 (CSR) のパス。

**path\_to\_CA\_certificate**

認証局 (CA) 用に作成した証明書のパス。

**path\_to\_CA\_key**

認証局 (CA) 用に作成した秘密鍵のパス。

**new\_certificate**

証明書署名要求 (CSR) から作成された新規証明書のファイル名。この証明書を秘密鍵と一緒に BigFix Web レポートにアップロードします。

証明書署名要求に署名して、新規証明書を取得しました。これで、BigFix Web レポートで SSL を有効にし、秘密鍵と証明書をアップロードすることができます。これらのファイルは、BigFix Web レポートで既に使用可能な自己署名証明書に代わって使用されるので、セキュア通信が実現されます。

# 第 9 章. エアー・ギャップ環境でのファイルのダウンロード

エアー・ギャップ環境で、メインの BigFix サーバーにファイルをダウンロードおよび転送するには、Airgap ユーティリティおよび BES Download Cacher ユーティリティを使用します。

## 概要

エアー・ギャップ環境 (パブリック・インターネットや非セキュア・ローカル・エリア・ネットワークなどのセキュアではないネットワークからセキュアなネットワークが物理的に分離され、エアー・ギャップの反対側にあるコンピューター同士は通信できない環境) の場合、Airgap ユーティリティと BES Download Cacher ユーティリティを使用して、メインの BigFix サーバーにファイルをダウンロードおよび転送することができます。

**注:** Airgap ユーティリティでは、メインの BigFix サーバーとは別個にクライアントがエアー・ギャップされている構成はサポートされません。メインの BigFix サーバーからネットワーク全体にわたってクライアントをまとめて機能させるには、クライアントがメインの BigFix サーバーと一緒にエアー・ギャップされている必要があります。

BigFix バージョン 9.5.5 以降、エアー・ギャップ環境で 2 つの異なるモードを使用できます。バージョン 9.5.5 より前に既に使用可能であった「抽出使用」モードと新しい「非抽出使用」モードを使用できます。

## 非抽出使用の概要

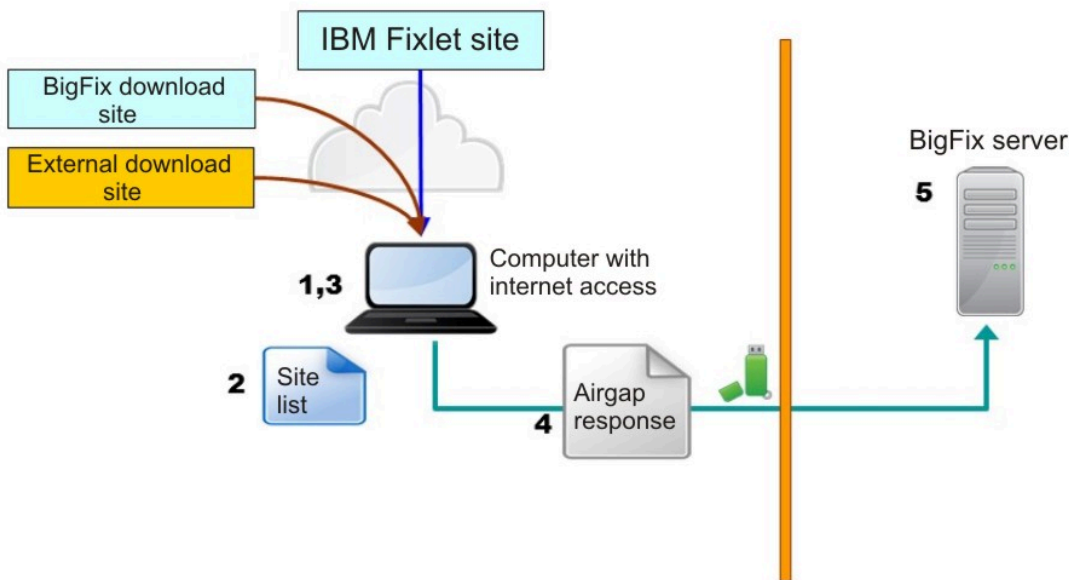
「非抽出使用」モードは、BigFix バージョン 9.5.5 以降でのみ使用できます。

場所によっては、ルールによってセキュア・ネットワーク内の情報を抽出してインターネットなどの外部ネットワークに移動することが禁止されているため、エアー・ギャップが BigFix サーバーから情報を抽出せずに機能しなければならないことがあります。このような要件を満たすために、エアー・ギャップ・ツールは、エアー・ギャップ要求を作成せずに機能できるようになりました。

エアール・ギャップ・ツールは、以下の 3 つの方法で使用できます。

### サイト・コンテンツの収集

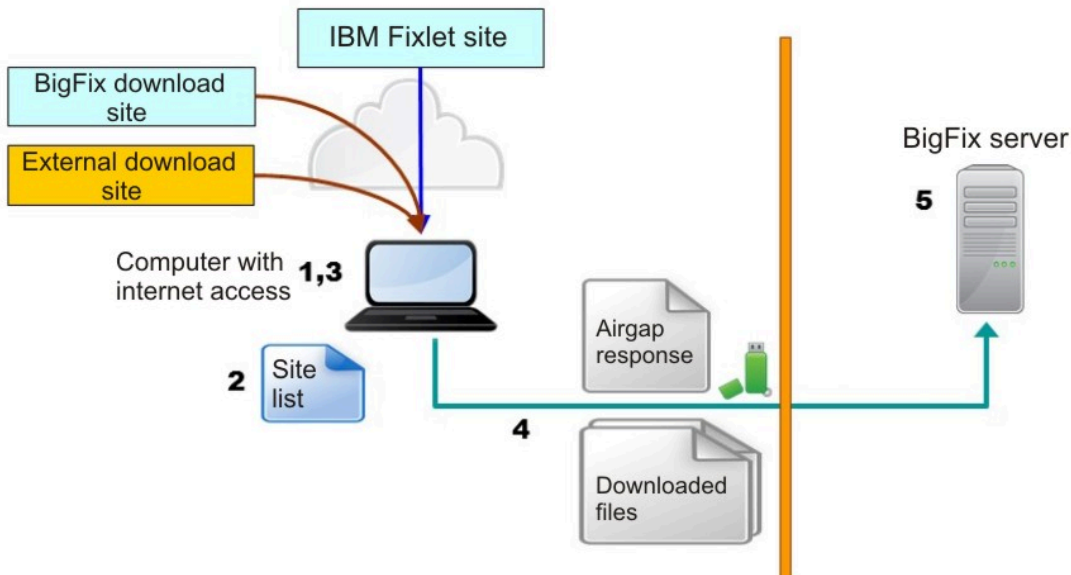
1. インターネットにアクセスできるコンピューターでエアール・ギャップ・ツールを実行して、ライセンス情報を収集し、ライセンス交付を受けているサイトに関連した情報が入ったサイト・リスト・ファイルを作成します。
2. サイト・リスト・ファイルを編集して、フラグを変更し、コンテンツの収集元のサイトを指定します。
3. インターネット側のコンピューターでエアール・ギャップ・ツールを実行して、サイト・リスト・ファイルで指定されているようにライセンス情報およびサイト・コンテンツを収集し、エアール・ギャップ応答に入れます。
4. エアール・ギャップ応答を BigFix サーバーに移動します。
5. BigFix サーバーでエアール・ギャップ・ツールを実行して、エアール・ギャップ応答を BigFix サーバーにロードします。



## サイト・コンテンツの収集およびファイルのダウンロード

1. インターネットにアクセスできるコンピューターでエアール・ギャップ・ツールを実行して、ライセンス情報を収集し、ライセンス交付を受けているサイトに関連した情報が入ったサイト・リスト・ファイルを作成します。
2. サイト・リスト・ファイルを編集して、フラグを変更し、コンテンツの収集元のサイト、および参照されているファイルのダウンロード元のサイトを指定します。
3. インターネット側のコンピューターでエアール・ギャップ・ツールを実行して、サイト・リスト・ファイルで指定されているようにライセンス情報およびサイト・コンテンツを収集し、エアール・ギャップ応答に入れてから、Fixlet によって参照されるファイルをダウンロードします。
4. エアール・ギャップ応答およびダウンロードしたファイルを BigFix サーバーに移動します。

- BigFix サーバーでエアール・ギャップ・ツールを実行して、エアール・ギャップ応答を BigFix サーバーにロードし、ダウンロードしたファイルを BigFix サーバーのキャッシュ・フォルダーにコピーします。

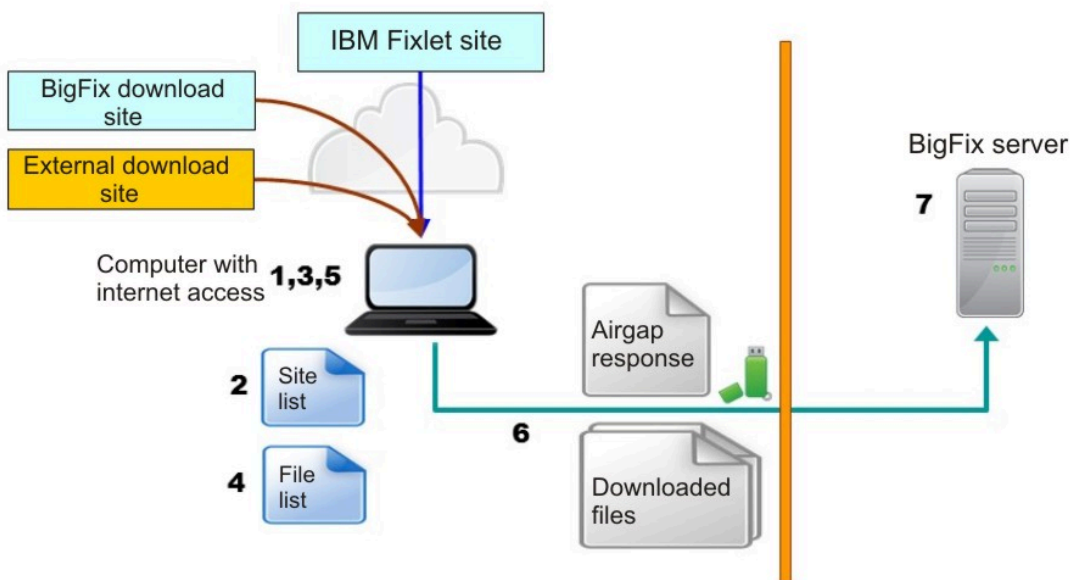


### サイト・コンテンツの収集およびファイルの選択的なダウンロード

- インターネットにアクセスできるコンピューターでエアール・ギャップ・ツールを実行して、ライセンス情報を収集し、ライセンス交付を受けているサイトに関連した情報が入ったサイト・リスト・ファイルを作成します。
- サイト・リスト・ファイルを編集して、フラグを変更し、コンテンツの収集元のサイト、および参照されているファイルのダウンロード元のサイトを指定します。
- インターネット側のコンピューターでエアール・ギャップ・ツールを実行して、サイト・リスト・ファイルで指定されているようにライセンス情報およびサイト・コンテ

ンツを収集し、エアー・ギャップ応答に入れてから、参照されているファイルに関する情報が入ったファイル・リスト・ファイルを作成します。

4. ファイル・リスト・ファイルを編集して、ダウンロードするファイルを指定します。
5. インターネット側のコンピューターでエアー・ギャップ・ツールを実行して、ファイル・リスト・ファイルで指定されているようにファイルをダウンロードします。
6. エアー・ギャップ応答およびダウンロードしたファイルを BigFix サーバーに移動します。
7. BigFix サーバーでエアー・ギャップ・ツールを実行して、エアー・ギャップ応答を BigFix サーバーにロードし、ダウンロードしたファイルを BigFix サーバーのキャッシュ・フォルダーにコピーします。

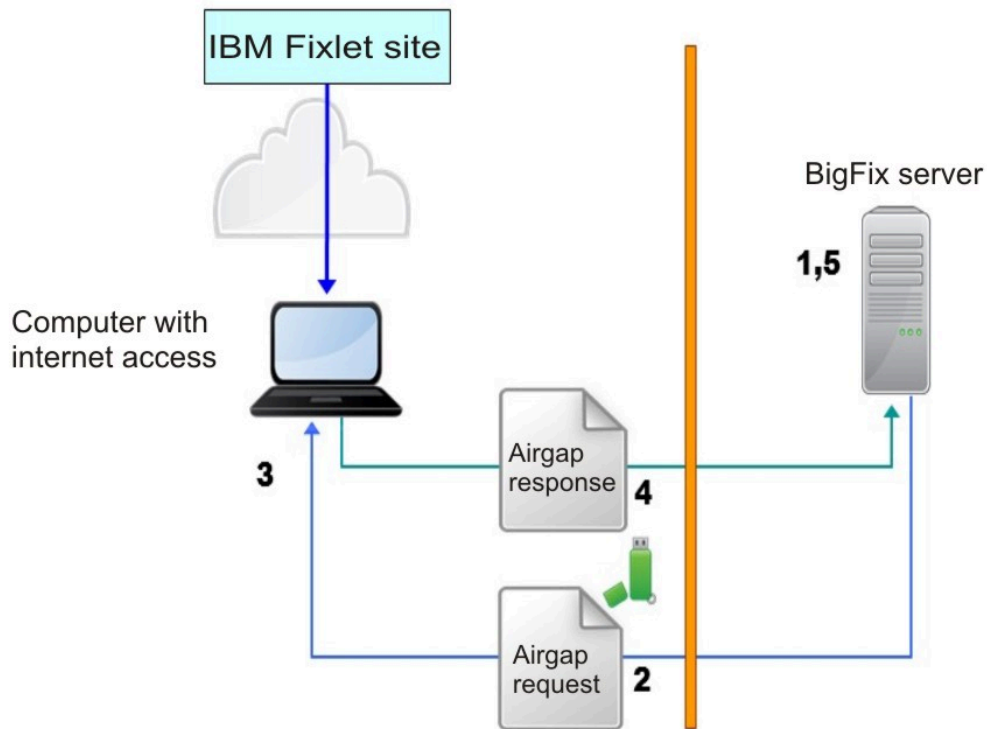


## 抽出使用の概要



このモードでは、エアー・ギャップ・ツールは BigFix サーバーから情報を抽出します。以下のステップを実行することにより、BigFix サーバーから開始してエアー・ギャップ・ツールを実行します。

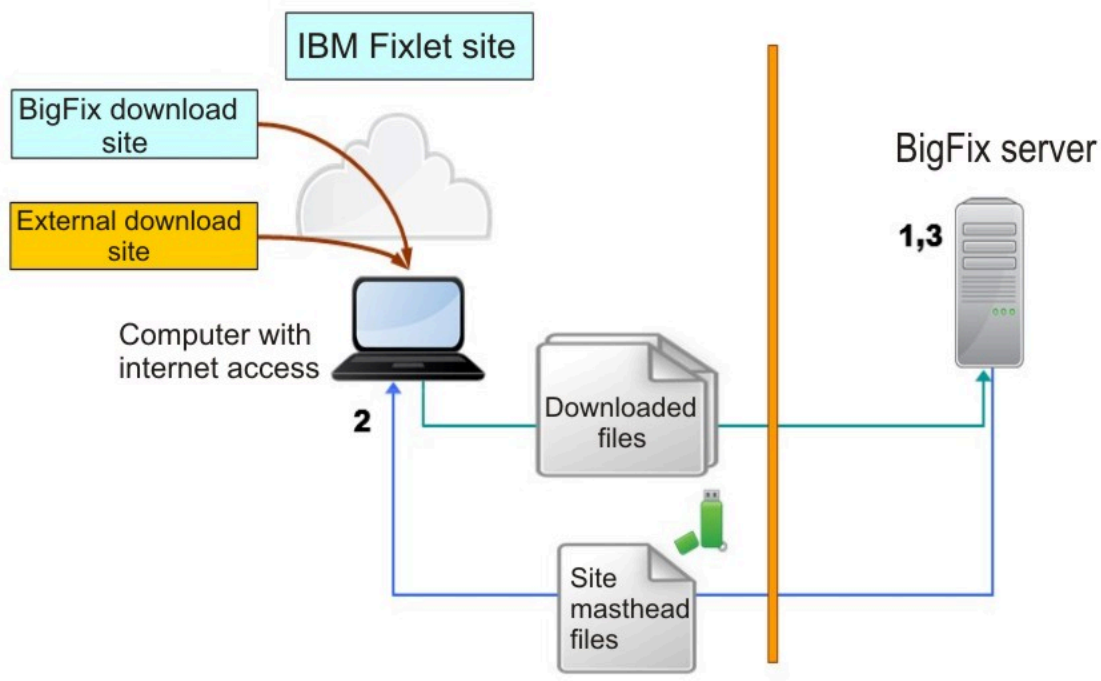
1. エアー・ギャップ・ツールを BigFix サーバーで実行して、エアー・ギャップ要求を作成します。
2. エアー・ギャップ要求をインターネット側のコンピューターに移動します。
3. インターネット側のコンピューターでエアー・ギャップ・ツールを実行して、ライセンス情報およびサイト・コンテンツを収集し、エアー・ギャップ応答に入れます。
4. エアー・ギャップ応答を BigFix サーバーに移動します。
5. BigFix サーバーでエアー・ギャップ・ツールを実行して、エアー・ギャップ応答を BigFix サーバーにロードします。



このモードでは、エアー・ギャップは、ファイルではなく、サイトのコンテンツを収集します。パッチ・モジュールなど、Fixlet によって参照されるファイルをダウンロードするには、以下のステップを実行して BES Download Cacher ユーティリティを実行します。

1. ファイルをダウンロードするサイトのサイト・マストヘッド・ファイルを見つけて、インターネットにアクセスできるコンピューターにサイト・マストヘッド・ファイルをコピーします。

2. インターネット側のコンピューターで、各サイト・マストヘッド・ファイルに対して BES Download Cacher ユーティリティを実行し、サイト・マストヘッド・ファイルが表すサイトから参照されるファイルをダウンロードします。
3. ダウンロードしたファイルを BigFix サーバーのキャッシュ・フォルダーに移動します。



## 要件

エアール・ギャップ環境 (パブリック・インターネットや非セキュア・ローカル・エリア・ネットワークなどのセキュアではないネットワークからセキュアなネットワークが物理的

に分離され、エアー・ギャップの反対側にあるコンピューター同士は通信できない環境) に BigFix サーバーがインストールされている場合、エアー・ギャップ・ツールを使用して Fixlet サイト・コンテンツをダウンロードし、Fixlet アクション・スクリプトで参照されているファイルをダウンロードするには、パブリック・インターネットにアクセスできるワークステーションが必要です。このワークステーションは、BigFix サーバーにすることも、BigFix リレーにすることもできません。

エアー・ギャップ・ツールはプラットフォーム依存ですが、`AirgapRequest.xml` ファイル (抽出使用のみ) および `AirgapResponse` ファイルはそうではありません。パブリック・インターネットにアクセスできるワークステーションで、さまざまなオペレーティング・システムを BigFix サーバーに使用できます。

収集されるサイトによっては、`AirgapResponse` ファイルのサイズが 4 GB を超える可能性があります。ワークステーションには、エアー・ギャップ・ツール、`AirgapResponse` ファイル、およびダウンロードするファイルを保存するのに十分な空きディスク・スペースが必要です。

Windows コンピューターでエアー・ギャップ・ツールを実行するには、以下のライブラリーおよびファイルがインストールされている必要があります。

```
BESAirgapTool.exe  
libBEScrypto.dll  
libBEScryptoFIPS.dll  
msvcm90.dll  
msvc90.dll  
msvcr90.dll  
Microsoft.VC90.CRT.manifest  
ca-bundle.crt
```

上記のすべてのファイルは、[Utilities](#) ページから圧縮ファイル (Airgap Tool) をダウンロードすることで入手できます。

Linux コンピューターでエアー・ギャップ・ツールを実行するには、以下のファイルがインストールされている必要があります。

```
Airgap  
Airgap.sh
```

```
libBEScripto.so  
libBEScriptoFIPS.so  
ca-bundle.crt
```

パブリック・インターネットにアクセスできる Linux コンピューターに DB2 がインストールされていない場合、エアール・ギャップ・ツールを実行するには、`db2setup` コマンドを使用して HCL Data Server Client または HCL Data Server Runtime Client をインストールしておく必要があります。DB2 インスタンスはユーザー `db2inst1` で作成される必要があります。

## エアール・ギャップ・ツールの使用

### 非抽出使用

「非抽出使用」モードは、BigFix バージョン 9.5.5 以降でのみ使用できます。

エアール・ギャップ・コマンド・ライン・インターフェースは、BigFix サーバーにアクセスする必要なしにサイト情報を収集でき、オプションでダウンロード・キャッシャーを経由せずにファイルをダウンロードできます。

非抽出使用では、エアール・ギャップ・ツールは、認証する必要のない Windows などのダウンロード・サイトから Fixlet で指定されたファイルをダウンロードできます。ユーザー ID およびパスワードで認証する必要があるサイトからファイルをダウンロードする必要がある場合、または Fixlet のプリフェッチ・コマンドやダウンロード・コマンドで指定されていないファイルをダウンロードする必要がある場合 (AIX、CentOS、HP-UX、RedHat、Solaris、または SUSE のパッチ・モジュールの場合など) は、ダウンロード・キャッシャーを使用する必要があります。

以下の手順を行うための前提条件として、エアール・ギャップ・ツールの実行に必要なファイルが存在することを確認してください。

#### Windows では

必要なファイルを [Airgap Tool](#) ページからダウンロードできます。

#### Linux の場合

BigFix サーバー・コンピューターにアクセスし、`/opt/BESServer/bin` フォルダを開き、次のコマンドを実行します。

```
# cd /opt/BESServer/bin
# ./Airgap.sh -remotedir directory
```

ここで、*directory* は任意のフォルダです。

上記のコマンドで生成された出力が入っているディレクトリーに移動し、`airgap.tar` というファイルを見つけ、これを解凍します。このディレクトリーから `AirgapRequest.xml` ファイルを削除し、他のファイルをすべてポータブル・ドライブにコピーします。

BigFix サーバーにアクセスせずにサイト情報を収集するには、以下のステップを実行します。

### 1. サイト・リストを作成します

パブリック・インターネットにアクセスできるワークステーションで、ライセンスのシリアル番号、ライセンスの登録に使用した E メール・アドレス、およびツールによってライセンスの対象のサイトがリストされたファイルの名前を指定して、ツールを実行します。エアール・ギャップ・ツールが配置されているフォルダに対する書き込み権限が必要です。次のコマンドを入力します。

#### Windows オペレーティング・システムの場合:

```
BESAirgapTool.exe -serial serial_number -
email
mail_address -createSiteList site_list_filename [-
proxy
[user:password@]hostname:port] [-usehttps]
[-cacert crt_filename] [-othersites site_foldername]
```

#### Linux オペレーティング・システムの場合:

```
./Airgap.sh -serial serial_number -
email
```

```
mail_address -createSiteList site_list_filename [-
proxy
[user:password@]hostname:port] [-usehttps]
[-cacert crt_filename] [-othersites site_foldername]
```

各部の意味は以下のとおりです。

### **mail\_address**

ライセンスで指定したメール・アドレスです。一致しない場合、エアー・ギャップ・ツールは失敗します。オプション `-email` は、オプション `-createSiteList` と一緒の場合のみ使用できます。

### **-proxy**

パブリック・インターネットにアクセスできるワークステーションがプロキシー・サーバー経由でのみ接続できる場合に使用されるオプションです。この場合、`-proxy` オプションの後にプロキシー・サーバーのホスト名およびポートを `hostname:port` 形式で指定します。プロキシーが認証プロキシーである場合は、ユーザー ID およびパスワードも `userid:password@hostname:port` 形式で追加してください。

### **-usehttps**

このオプションが指定された場合、ライセンス・サーバーと通信するために「https」が使用されます。エアー・ギャップ・ツールの実行場所とは別のフォルダーを使用する場合は、オプション `-cacert` を使用してファイル `ca-bundle.crt` を保管するパスを指定します。`-usehttps` オプションを使用する場合、または Fixlet 内で URL が「https」で始まっている場合、サーバー証明書を検証するためにファイル `ca-bundle.crt` が使用されません。


### **-cacert**

このオプションは、オプション `-usehttps` と一緒の場合のみ使用できます。

### **-othersites**

ご使用のライセンスで `AllowOtherSites` の使用が許諾されている場合は、このオプションを使用して任意のサイトをサイト・リストに含めます。サイト・リストを作成する場合は、フォルダーを作成して、ライセンスに含まれていないマストヘッドに関連するマストヘッド・ファイル (\*.efxm ファイル) をすべてそのフォルダーにコピーし、このフォルダーの名前とオプション `-othersites` を指定します。

ツールの実行後、`site_list_filename` に指定した名前でファイルが作成されます。

 **注:** 作成されたサイト・リスト・ファイルは、ライセンスを変更するまで、または HCL が既存のライセンスに新規サイトを追加するまで使用できます。何らかの理由でサイト・リスト・ファイルを削除しても、ライセンスのシリアル番号が変更されない限り、ダウンロードしたファイルの履歴が維持されるため、同じコマンドでファイルを再作成することができます。

## **2. サイト・リスト・ファイルを編集します**

ステップ 1 で作成されたファイルの各行には、以下のように 3 つの情報が 2 つのコロンで区切られて入っています。

```
flag::site_name::site_url
```

`flag` パラメーターのみを編集でき、以下のいずれかの値を指定できます。

### **A**

サイト・コンテンツは、より新しいサイト・バージョンが使用可能になったときに収集されて、`AirgapResponse` ファイルに保管され、ファイルのダウンロードまたはファイル・リストの作成に使用されます。

### **R**



サイト・コンテンツは、サイトのバージョンに関係なく、常に収集されて AirgapResponse ファイルに保管され、ファイルのダウンロードに使用されます。

## G

サイト・コンテンツは、より新しいサイト・バージョンが使用可能になったときに収集されて、AirgapResponse ファイルに保管されますが、ファイルのダウンロードにもファイル・リストの作成にも使用されません。

## Q


サイト・コンテンツは、サイトのバージョンに関係なく、常に収集されて AirgapResponse ファイルに保管されますが、ファイルのダウンロードにもファイル・リストの作成にも使用されません。

## D

サイト・コンテンツは収集されませんが、ファイルのダウンロードまたはファイル・リストの作成に使用されます。このフラグは、サイトの現在のコンテンツを更新せずに維持した状態で、ファイルをダウンロードして現行のサイトで Fixlet を実行する場合に有用です。このオプションは、サイト・コンテンツが既に収集されている場合にのみ有効です。

## N

サイトは無視されますが、サイト情報は今後参照できるようにファイル内に保持されます。

 **注:** サイト・リスト・ファイルを作成する際、BES サポートおよび Web UI Common のコンポーネントのデフォルト値は G に設定されています。Web UI コンポーネントが必要でない場合は、デフォルトの Web UI Common 値を G から N に変更してください。その他のコンポーネントのデフォルト値は N に設定されています。BigFix サーバーをインストールした後、初回実行時に、ライセンス情報、BES サポートおよび Web UI Common のコンポー

メントが収集される必要があります。パブリック・インターネットにアクセスできるワークステーションで生成されたこの最初のエアー・ギャップ応答を BigFix サーバーに移動した後でのみ、コンソールの「ライセンスの概要」ダッシュボードからアクセスできる他のコンポーネントを有効にして、プロセスを続行することができます。収集する前に、デフォルト以外の必要なコンポーネントを必ず有効にしてください。

### 3. サイト・コンテンツを収集してエアー・ギャップ応答ファイルを作成します

サイト・リスト・ファイルでフラグを編集した後、エアー・ギャップ・ツールを再び実行して、以下のいずれかのサイト操作を実行します。

#### a. サイト・コンテンツの収集

フラグ **A**、**R**、**G**、または **Q** が指定されたサイトのサイト・コンテンツを収集するには、以下のコマンドを実行します。

##### Windows オペレーティング・システムの場合:

```
BESAirgapTool.exe -  
site site_list_filename
```

##### Linux オペレーティング・システムの場合:

```
./Airgap.sh -site site_list_filename
```

完了時に、Airgapresponse ファイルが作成されます。

#### b. サイト・コンテンツの収集およびファイルのダウンロード

フラグ **A**、**R**、**G**、または **Q** が指定されたサイトのサイト・コンテンツを収集し、フラグ **A**、**R**、または **D** が指定されたサイト上の Fixlet によって参照されているファイルをダウンロードするには、以下のコマンドを実行します。

##### Windows オペレーティング・システムの場合:

```
BESAirgapTool.exe -  
site site_list_filename -download  
[-cache cache_name]
```

**Linux オペレーティング・システムの場合:**

```
./Airgap.sh -site site_list_filename -
download
[-cache cache_name]
```

ここで、*cache\_name* は、ダウンロードしたファイルを保管するフォルダー・パスです。完了時に、Airgapresponse ファイルが作成され、ファイルが *cache\_name* フォルダーにダウンロードされます。

**c. サイト・コンテンツの収集およびファイルの選択的なダウンロード**

フラグ **A**、**R**、**G**、または **Q** が指定されたサイトのサイト・コンテンツを収集し、フラグ **A**、**R**、または **D** が指定されたサイト上の Fixlet によって参照されているファイルのリストを作成するには、以下のコマンドを実行します。

**Windows オペレーティング・システムの場合:**

```
BESAirgapTool.exe -
site site_list_filename
-createFileList referenced_list
```

**Linux オペレーティング・システムの場合:**

```
./Airgap.sh -site site_list_filename
-createFileList referenced_list
```

完了時に、Airgapresponse ファイル、および *referenced\_list* で指定された名前のファイル・リストが作成されます。

いずれの場合も、フラグ **A**、**R**、**G**、または **Q** が指定されたサイトで収集されたサイト・コンテンツは AirgapResponse ファイル内に配置されます。エアール・ギャップ・ツールを初めて実行する際、フラグ **A**、**R**、**G**、または **Q** が指定されたすべてのサイトが収集されます。それ以降は、フラグ **A** または **G** が指定されたサイトのコンテンツが以前に収集されていない場合、またはより新しいサイトのバージョンが使用可能になった場合に限り、それらのコン

テンツが収集されます。フラグ **R** または **Q** が指定されたサイトのコンテンツは常に収集されます。

オプションで、以下のオプションも指定できます。

**-usehttps**

ライセンス情報およびサイト・コンテンツは「https」を使用して収集されます。『b. サイト・コンテンツの収集およびファイルのダウンロード』の場合、「http」で始まるすべての URL で強制的に「https」が使用されます。Fixlet 内の一部の URL が「https」で始まり、一部のパッチ・サイトが「https」で始まる URL に要求をリダイレクトする可能性があることに注意してください。

**-proxy [user:password@]hostname:port**

パブリック・インターネットにアクセスできるワークステーションがプロキシ・サーバー経由でのみ接続できる場合に使用されます。この場合、`-proxy` オプションの後にプロキシ・サーバーのホスト名およびポートを `hostname:port` 形式で指定します。プロキシが認証プロキシである場合は、ユーザー ID およびパスワードも `userid:password@hostname:port` 形式で追加してください。

**-cacert crt\_filename**

エアー・ギャップ・ツールの実行場所とは別のフォルダーを使用する場合は、ファイル `ca-bundle.crt` を保管するパスを指定します。`-usehttps` オプションを使用する場合、または Fixlet 内で URL が「https」で始まっている場合、サーバー証明書を検証するためにファイル `ca-bundle.crt` が使用されます。オプション `-cacert` はオプション `-usehttps` と一緒の場合のみ使用できます。

**-timeout timeout\_seconds**

このオプションは、V9.5.7 から使用可能になりました。これは、http タイムアウト間隔を秒単位で指定します。値は 30 か

ら 3600 までの範囲です。デフォルト値は 30 です。プロキシの使用中にエラー「HTTP エラー 28: タイムアウトに達しました」が発生する場合は、オプション `-usehttps` も使用してみてください。こうすると、プロキシはトンネリング・モードで作動して、タイムアウトの回避に役立つ可能性があるためです。

**b** および **c** の場合は、ダウンロードするファイルまたはファイル・リストで収集するファイルの数を減らすために、他のオプションも使用できます。これらのフィルタリング・オプションは、ファイル自体ではなく、ファイルを参照する Fixlet を選択します。例えば、過去 5 日間を指定する場合、過去 5 日間にベンダーによって追加または変更されたファイルではなく、過去 5 日間に変更された Fixlet によって参照されているファイルを意味します。フィルタリング・オプションに使用できる値のリストを作成するには、以下のコマンドを実行します。

#### Windows オペレーティング・システムの場合:

```
BESAirgapTool.exe -site site_list_filename -
createfilterList
filter_list
```

#### Linux オペレーティング・システムの場合:

```
./Airgap.sh -site site_list_filename -
createfilterList
filter_list
```

使用できる値のリストは、オプション `-fcategory`、`-fcve`、`-fproduct`、`-fseverity`、`-fsource`、および `-fsourceid` に制限されています。以下のオプションをフィルタリングに使用できます。

##### **-fcategory**

Fixlet カテゴリーのプロパティ。

##### **-fcve**

セキュリティー・パッチに関連付けられている CVE (共通脆弱性と暴露) ID を指定します。

**-fdays**

最終変更日がコマンドの実行日から指定された日数以内にある Fixlet を選択します。

**-fproduct**

Fixlet を適用できる製品名を指定します (Win2008 や Win7 など)。この情報はコンソールには表示されません。このオプションは、Windows オペレーティング・システムのパッチに関連したサイトでのみ使用できます。

**-fseverity**

ベンダーがセキュリティー・パッチに関連付ける重大度を指定します。

**-fsource**

ファイルのプロバイダー (BigFix、Adobe、または Microsoft など)。

**-fsourceid**

プロバイダーによって指定された ID。

**-includeCorrupt**

このオプションが指定されない場合はデフォルトで除外される、「破損」のマークが付けられた Fixlet を組み込みます。

**-includeSuperseded**

このオプションが指定されない場合はデフォルトで除外される、「置き換え済み」のマークが付けられた Fixlet を組み込みます。

複数のフィルター条件が指定された場合、すべての条件を満たす Fixlet のみが選択されます。オプション `-fsource`、`-fsourceid`、`-fcve`、`-fcategory`、および `-fseverity` では、複数のコンマ区切り値を指定できます (例えば、-

fseverity "Critical, Important")。コンマを使用して値を区切る場合、または値にスペースが含まれている場合は、上記の例のように、パラメーターを二重引用符で囲んでください。値の大/小文字が区別されることに注意してください。

#### 4. ファイル・リストを編集します

ステップ3の『**c. サイト・コンテンツの収集およびファイルの選択的なダウンロード**』にのみ適用されます。

-createFileList オプションにより、ファイルのリストが入ったファイルを作成できます。リストの各行には、以下のように情報が2つのコロンで区切られて入っています。

```
flag::site_name::Fixlet_id::site_url::
size::hash_value::hash_algorithm
```

例:

```
N::site=site_name::fixletid=fixlet_id::
url=url_address::size=file_size::hash=hash_value::
hashtype=hash_type
```

*flag* 値のみを編集できます。ファイルをダウンロードする場合は **Y** に変更し、ファイルをダウンロードしない場合は **N** に変更します。

#### 5. インターネット側のワークステーションでツールを実行してファイルをダウンロードします

ステップ3の「**c. サイト・コンテンツの収集およびファイルの選択的なダウンロード**」にのみ適用されます。

ステップ4でファイル・リストを編集した後、ファイル・リストでフラグ **Y** が指定されたファイルのみをダウンロードするには、以下のコマンドを発行してエアール・ギャップ・ツールを実行します。

**Windows オペレーティング・システムの場合:**

```
BESAirgapTool.exe -file file_list_filename -
download
```

```
-cache cache_foldername
[-proxy [user:password@]hostname:port] [-usehttps]
[-cacert crt_filename]
```

### Linux オペレーティング・システムの場合:

```
./Airgap.sh -file file_list_filename -download
-cache cache_foldername
[-proxy [user:password@]hostname:port] [-usehttps]
[-cacert crt_filename]
```

ここで、*cache\_foldername* は、ダウンロードしたファイルを保管するフォルダー・パスです。既にキャッシュ・フォルダー内にあるファイルが再びダウンロードされることはありません。

## 6. エアール・ギャップ応答ファイルを BigFix サーバーに移動して、BigFix サーバーでエアール・ギャップ・ツールを実行します

AirgapResponse ファイル、およびステップ 3 で作成したファイル・リストまたはステップ 5 で収集してダウンロードしたファイルをポータブル・ドライブにコピーして、それらを BigFix サーバー・コンピューターに転送します。AirgapResponse ファイルがエアール・ギャップ・ツールと同じフォルダーにあることを確認し、以下のコマンドを発行して実行します。

### Windows オペレーティング・システムの場合:

```
BESAirgapTool.exe
```

### Linux オペレーティング・システムの場合:

```
./Airgap.sh -run [-temp temp_folder]
```

これにより、Fixlet コンテンツとライセンスの更新を持つ応答ファイルが現在の適用環境にインポートされます。

**注:** エアール・ギャップ・ツールは、BigFix サーバーの GatherDB コンポーネントにサイト・コンテンツを応答ファイルで渡します。GatherDB コンポーネントは、サイト・コンテンツをインポートします。WebUI サイト以外のサ



イトの場合、インポートの進行状況を GatherDB コンポーネントの DebugOut (デフォルトの名前は GatherDB.log) でモニターできます。

ダウンロードしたファイルを BigFix サーバーのキャッシュ・フォルダーにもコピーします。キャッシュ・フォルダーのデフォルトの場所は以下のとおりです。

#### Windows オペレーティング・システムの場合:

```
%PROGRAM FILES%\BigFix Enterprise\BES Server\wwwrootbes
\bfmirror\downloads\sha1
```

#### Linux オペレーティング・システムの場合:


```
/var/opt/BESServer/wwwrootbes/bfmirror/downloads/sha1
```

上記のステップを定期的に繰り返して、メインの BigFix サーバーの Fixlet コンテンツが常に更新されるようにしてください。新しい Fixlet メーリング・リストに参加すると、Fixlet の更新時に通知を受け取ることができます。必ず、エアール・ギャップ・ツールのバージョンが、インストールされている BigFix サーバーのバージョンと互換性があることを確認してください。

#### 使用法のヒント:

1. ステップ 1 で使用された AirgapTool とまったく同じバージョンを BigFix ルート・サーバーのディレクトリーの中に解凍します。
2. ディレクトリーに airgapresponsefile をコピーします。
3. オプションを指定せずに **BESAirgapTool.exe** を実行します。

airgapresponsefile のコンテンツがディレクトリーにインポートされます。ステップ 5 で任意のファイルをダウンロードする場合、ルートサーバーの SHA1 ディレクトリーにこれらのファイルもコピーします。エアール・ギャップ・ツールはファイルをダウンロードし、SHA256 の値で名前を付けるため、これが必要になる場合があります。

 **注:** SHA 1 ディレクトリーにペーストした後、SHA256 の値を SHA1 の値として名前変更する必要ありません。

#### オプションのアクション:

## すべての必要なファイルがダウンロードされたことの確認

適用する予定の Fixlet に必要なすべてのファイルをダウンロードしたことを確認するには、エアー・ギャップ・ツールの実行時にオプション `-checkfixlet` を使用します。例:

### Windows オペレーティング・システムの場合:

```
BESAirgapTool.exe -site site_list.txt -  
checkfixlet  
-fdays 100 -fseverity Critical -cache  
MyCache
```

### Linux オペレーティング・システムの場合:

```
./Airgap.sh -site site_list.txt -  
checkfixlet  
-fdays 100 -fseverity Critical -cache  
MyCache
```

指定されたフィルタリング条件を満たす Fixlet について、ツールは、ダウンロード履歴および宛先フォルダーの内容を検査します。ダウンロードすべきファイルがまだある場合は、Fixlet 名および URL が表示されます。

## 手動でダウンロードされるファイル

Fixlet によって参照される一部のファイルをダウンロードできない場合があります。それは、ベンダーのサポート・センターに連絡することでのみ取得可能であるため、またはダウンロード・サイトでライセンス条項を明示的に受け入れる必要があり、法律上の理由からそのアクションを自動化できないためです。このような場合、関与するファイルにストリング `MANUAL_BES_CACHING_REQUIRED` を含むダウンロード URL が指定されています。そのファイルは手動でダウンロードする必要があります。このようなファイルのリストを作成するには、次の例のようにオプション `-createmauallist` を使用します。

**Windows オペレーティング・システムの場合:**

```
BESAirgapTool.exe -site site_list.txt -
createmauallist
manual_list -fseverity Critical
```

**Linux オペレーティング・システムの場合:**

```
./Airgap.sh -site site_list.txt -
createmauallist
manual_list -fseverity Critical
```

手動でダウンロードする必要があるすべてのファイルが宛先フォルダーに入っているかどうかを確認するために、次の例のように `-checkmanual` オプションを使用することもできます。

**Windows オペレーティング・システムの場合:**

```
BESAirgapTool.exe -site site_list.txt -
checkmanual
-fseverity Critical
-fdays 30 -cache MyCache
```

**Linux オペレーティング・システムの場合:**

```
./Airgap.sh -site site_list.txt -
checkmanual
-fseverity Critical
-fdays 30 -cache MyCache
```

**履歴のリセット**

エアール・ギャップ・ツールは、ダウンロードしたファイルの履歴を維持します。ダウンロードしたすべてのファイルをパブリック・インターネット側のワークステーションから BigFix サーバーに移動しても、この履歴は維持され、以前にダウンロードされたファイルが再びダウンロードされることはない

め、時間とディスク・スペースを節約できます。以前にダウンロードしたファイルの一部またはすべてを削除した後で、再び必要になった場合は、`-resync` オプションを使用できます。このオプションは、ダウンロード履歴をクリアして、`-cache` オプションで指定されたフォルダー内のファイルを検査します。新しく作成されたダウンロード履歴が `-cache` オプションで指定されたフォルダーに含まれているファイルのみに基づいていることに注意してください。

## ライセンスの変更

別のライセンスを管理する場合は、収集したサイトおよびダウンロードしたファイルの履歴を消去する必要があります。このアクションを実行するには、次の例のように `-force` オプションを使用します。

### Windows オペレーティング・システムの場合:

```
BESAirgapTool.exe -serial serial_number
-
email
mail_address -
createSiteList site_list_filename -force
```

### Linux オペレーティング・システムの場合:

```
./Airgap.sh -serial serial_number -email
mail_address -
createSiteList site_list_filename -force
```

## その他のオプション

デフォルトでは、エアール・ギャップ・ツールは2つのファイルを同時にダウンロードします。`-download` オプションの後に数字を指定することにより、同時にダウンロードするファイルの数を変更できます。この数字は1から8の範囲内にすることができます。例えば、3つのファイルを同時にダウンロードする

には、`-download 3` と指定します。3 つ以上のファイルを同時にダウンロードする場合は、さらに大きな帯域幅が必要になることに注意してください。

Fixlet で指定されている URL が「https」で始まる場合、または `-useHttps` オプションを指定する場合、エアール・ギャップ・ツールは、URL で指定されたサーバーに適切な SSL サーバー証明書があることを検証しようとします。何らかの理由で、この検査をスキップして、エアール・ギャップ・ツールがサーバー証明書を検証できない場合のダウンロードの失敗を回避するには、`-noverify` オプションを使用します。このオプションを使用すると、エアール・ギャップ・ツールはサーバー証明書を検証しないため、ご使用のワークステーションが DNS を検査してホスト名を正しく変換することを確認する必要があります。

エアール・ギャップ・ツールが通常よりも多くの情報を出力するようにするには、`-verbose` オプションを使用します。

### 複数の BigFix サーバーでの作業

テスト・サーバーと実動サーバーなど、複数の BigFix サーバーで同じパブリック・インターネット側のワークステーションを使用する場合は、エアール・ギャップ・ツールを各フォルダーにコピーして、各フォルダーで別々に作業します。別々のフォルダーで同じサイト・リストを共有できますが、各サーバーは独自の履歴をフォルダーで維持します。別々のサーバーで複数のエアール・ギャップ・ツールを使用する場合は、さまざまなサーバーに共通のファイルを 1 回のみダウンロードするためにキャッシュ・フォルダーを共有することもできますが、同時に実行されるエアール・ギャップ・ツールのインスタンスが 1 つのみであることを確認する必要があります。

サイトのセットを収集して、それらをテスト・サーバーにロードしてから、収集したサイトでテストを実行し、最新のサイトではなく、テストしたサイトを実動サーバーにロードする場合、複数の BigFix サーバーに同じ製品 (BigFix Lifecycle、BigFix

Compliance など) のライセンスが提供されるときに、それらのサーバーに 1 つの AirgapResponse ファイルをロードすることができます。1 つの AirgapResponse ファイルを複数の BigFix サーバーにロードする場合、すべての BigFix サーバーで有効になっているサイトのみを収集することをお勧めします。

**注:** BigFix サーバーをインストールした後、初回実行時に、各インストール済み環境のライセンス情報、BES サポートおよび Web UI Common のコンポーネントが収集される必要があります。ライセンス情報はシリアル番号ごとに固有であるため、このステップでは、BigFix サーバーごとに AirgapResponse ファイルが作成される必要があります。

どのサイトでもバージョンを変更することなく、特定の BigFix サーバーのライセンス情報を更新する場合、行が含まれていないサイト・ファイル、またはすべてのサイトにフラグ **N** が指定されているサイト・ファイルを指定してエアー・ギャップ・ツールを実行することにより、ライセンス情報のみが入った AirgapResponse ファイルを作成できます。次のコマンドを実行します。

#### Windows オペレーティング・システムの場合:

```
BESAirgapTool.exe -  
site empty_site_list_filename  
-allowemptysite
```

#### Linux オペレーティング・システムの場合:

```
./Airgap.sh -  
site empty_site_list_filename  
-allowemptysite
```

### エアー・ギャップ環境での WebUI の有効化

エアール・ギャップ環境に WebUI をインストールするには、以下のステップを実行します。

1. 最新の BES サポートおよび WebUI Common のサイトを収集して、WebUI サービスのインストールに必要なファイルをダウンロードします。それらのファイルを BigFix サーバーにロードします。
2. BES サポート・サイトのタスク「HCL BigFix WebUI サービスのインストール」を使用して、WebUI サービスをインストールします。
3. インストールが完了した後、WebUI ターゲット・システムで WebUI サービス (Windows オペレーティング・システム) またはプロセス (Linux オペレーティング・システム) がアクティブ化されるまで待ちます。WebUI の初期化が開始されます。完了するまで待ちます。初期化は通常は数分間で完了しますが、30 分以上待ってからステップ 4 に進むことをお勧めします。
4. すべての最新の WebUI サイトを収集して、BigFix サーバーにロードします。WebUI サービスをインストールするタスクを実行する前に WebUI サイトを収集できますが、ロードできるのは、WebUI の初期化が完了した後のみです。

## 抽出使用

**⚠ 重要:** BigFix 9.5.7 のフレッシュ・インストールを実行する場合、WebUI サイトを使用できるようにするには、以下のステップを実行する必要があります。

1. WebUI をインストールして、エアール・ギャップ・ツールを実行します。
2. WebUI の初期化が完了するまで数分間待機します。
3. エアール・ギャップ・ツールを再実行します。

分離されたネットワークで Fixlet コンテンツと製品ライセンスの更新を使用できるようにするには、以下の手順を実行して、インターネットに接続できるコンピューターからこのユーティリティーを転送する必要があります。

## Windows オペレーティング・システム

### 1. BigFix サーバーで実行します

BigFix サーバーのインストール・ディレクトリーから `BESAirgapTool.exe` をダブルクリックするか、またはパラメーターを指定せずにコマンド・ラインからこのファイルを実行します。グラフィカル・ユーザー・インターフェースが開かれます。

エアー・ギャップ・ツールのサイト要求と、このツールの実行に必要なすべてのファイルを格納するために、このツールの宛先フォルダーを指定します。エアー・ギャップ・ツールによるファイルのコピーが完了した後、フォルダー全体をポータブル・ドライブにコピーします。

### 2. エアー・ギャップ要求を移動して、インターネット側のコンピューターで実行します

上記のポータブル・ドライブをインターネットに接続できるコンピューターに移動します。ユーザーには、`BESAirgapTool.exe` が配置されたフォルダーに対する書き込み権限が必要です。このフォルダーに移動して `BESAirgapTool.exe` をダブルクリックしてエアー・ギャップ・ツールを実行するか、またはコマンド・ラインからこのツールを起動します。

オプションで、以下のコマンド・ライン・パラメーターも指定できます。

#### **-usehttps**

「http」で始まるすべての URL は、ライセンス情報とサイト・コンテンツを収集するために強制的に「https」を使用するようになります。Fixlet 内の一部の URL が「https」で始まり、一部のパッチ・サイトが「https」で始まる URL に要求をリダイレクトする可能性があることに注意してください。

#### **-proxy [user.password@]hostname:port**

このオプションは、BigFix バージョン 9.5.5 以降でのみ使用可能です。パブリック・インターネットにアクセスできるワークステーションがプロキシ・サーバー経由でのみ接続できる場合に使用されま



す。この場合、`-proxy` オプションの後にプロキシー・サーバーのホスト名およびポートを `hostname:port` 形式で指定します。プロキシーが認証プロキシーである場合は、ユーザー ID およびパスワードも `userid:password@hostname:port` 形式で追加してください。抽出使用では、現行ユーザーのクライアント・レジストリー設定または Internet Explorer 設定でプロキシー・サーバーが構成されていて、`-proxy` オプションが指定されていない場合、プロキシー設定は以前のバージョンのエアール・ギャップ・ツールと同じように使用されます。`-proxy` オプションを使用する場合、他の設定に関係なく、指定された値が使用されます。

**`-cacert <full_path_to_ca-bundle.crt_file>`**

エアール・ギャップ・ツールの実行場所とは別のフォルダーを使用する場合に、ファイル `ca-bundle.crt` を保管するパスを指定します。`-usehttps` オプションを使用する場合、または Fixlet 内で URL が「https」で始まっている場合、サーバー証明書を検証するためにファイル `ca-bundle.crt` が使用されます。オプション `-cacert` は `-usehttps` オプションと一緒にの場合のみ使用できます。

グラフィカル・ユーザー・インターフェースが開かれます。エアール・ギャップ・ツールは、エアール・ギャップ要求で必要なファイルをすべて `BESAirgapTool.exe` と同じフォルダーにダウンロードします。これにより、エアール・ギャップ要求ファイルがエアール・ギャップ応答ファイルに交換されます。エアール・ギャップ応答ファイルをポータブル・ドライブにコピーします。

**3. エアール・ギャップ応答を BigFix サーバーに移動して、BigFix サーバーでエアール・ギャップ・ツールを実行します**

ポータブル・ドライブを BigFix サーバー・コンピューターに戻し、`BESAirgapTool.exe` をダブルクリックするか、またはパラメーターを指定せずにコマンド・ラインから起動することにより、`BESAirgapTool.exe` をもう一度実行します。この際、必ず以下の権限と許可が与えられたユーザーとしてログオンして実行してください。

- 管理者権限。
- BFEnterprise データベースにコンテンツを追加する上で必要なデータベース許可。

グラフィカル・ユーザー・インターフェースが開かれます。

これにより、Fixlet コンテンツとライセンスの更新を持つエアー・ギャップ応答ファイルが現在のデプロイメントにインポートされます。

エアー・ギャップ・ツールは、TEMP 環境変数で指定されたフォルダー内に一時ファイルを作成します。一時ファイル用に別のフォルダーを使用する場合は、BESAirgapTool.exe を実行する前に、TEMP 環境変数をそのフォルダーに設定します。

メインの BigFix サーバーの Fixlet コンテンツを更新するには、上記の手順を定期的に繰り返します。新しい Fixlet メーリング・リストに参加すると、Fixlet の更新時に通知を受け取ることができます。

エアー・ギャップ・ツールのバージョンが、インストールされている BigFix サーバーのバージョンと互換性があることを確認してください。

## Linux オペレーティング・システムの場合

### 1. BigFix サーバーで実行します

Linux コンピューターで、BigFix サーバーがインストールされているのと同じパス内にエアー・ギャップ・ツールが存在することを確認します。デフォルト・パスは `/opt/BESServer/bin` です。Linux 端末を開き、以下のコマンドを入力して、`airgap.tar` という tar ファイルを作成します。このファイルには、BigFix データベースに関する情報に基づいて `AirgapRequest.xml` ファイルが格納されます。

```
# cd /opt/BESServer/bin
# ./Airgap.sh -remotedir directory
```

各部の意味は以下のとおりです。

#### **-remotedir *directory***

Airgap を実行して、指定されたフォルダー内に要求ファイルを生成します。

### 2. エアー・ギャップ要求を移動して、インターネット側のコンピューターで実行します

`airgap.tar` ファイルをポータブル・ドライブにコピーして、以下のコマンドを発行し、`airgap.tar` ファイルのコンテンツを解凍します。

```
# tar -xf airgap.tar
```

システムに `LD_LIBRARY_PATH` という環境変数が存在し、この環境変数が `DB2` ライブラリー `libdb2.so.1` が含まれるフォルダーのパスに設定されていることを確認してください。 `Airgap.sh` ファイルと `AirgapRequest.xml` ファイルが同じフォルダーに存在し、そのフォルダーへの書き込み権限を持っていることを確認してください。 `Airgap.sh` コマンドを実行します。

オプションで、以下のコマンド・ライン・パラメーターも指定できます。

### **-usehttps**

「http」で始まるすべての URL は、ライセンス情報とサイト・コンテンツを収集するために強制的に「https」を使用するようになります。 Fixlet 内の一部の URL が「https」で始まり、一部のパッチ・サイトが「https」で始まる URL に要求をリダイレクトする可能性があることに注意してください。

### **-proxy [user.password@]hostname:port**

パブリック・インターネットにアクセスできるワークステーションがプロキシ・サーバー経由でのみ接続できる場合に使用されます。この場合、 `-proxy` オプションの後にプロキシ・サーバーのホスト名およびポートを `hostname:port` 形式で指定します。プロキシが認証プロキシである場合は、ユーザー ID およびパスワードも `userid:password@hostname:port` 形式で追加してください。

### **-cacert <full\_path\_to\_ca-bundle.crt file>**

エアール・ギャップ・ツールの実行場所とは別のフォルダーを使用する場合に、ファイル `ca-bundle.crt` を保管するパスを指定します。 `-usehttps` オプションを使用する場合、または Fixlet 内で URL が「https」で始まっている場合、サーバー証明書を検証するためにファイル `ca-bundle.crt` が使用されます。オプション `-cacert` は `-usehttps` オプションと一緒にの場合のみ使用できます。

これにより、エアール・ギャップ要求ファイルがエアール・ギャップ応答ファイルに交換されます。エアール・ギャップ応答ファイルをポータブル・ドライブにコピーします。

エアー・ギャップ・ツールの実行時に次のエラー・メッセージが表示されることがあります。

```
./Airgap: error while loading shared libraries: libdb2.so.1:
cannot open shared object file: No such file or directory
```

この場合、次のコマンドを実行することにより、LD\_LIBRARY\_PATH 変数を作成してエクスポートしてください。

```
export LD_LIBRARY_PATH="$LD_LIBRARY_PATH:/your/path/"
```

各部の意味は以下のとおりです。

#### **/your/path**

これは、DB2 ライブラリー libdb2.so.1 が含まれるフォルダーのパスです。

### 3. エアー・ギャップ応答を BigFix サーバーに移動して、BigFix サーバーでエアー・ギャップ・ツールを実行します

ポータブル・ドライブを BigFix サーバー・コンピューターに再び接続して、Airgap.sh コマンドを実行します。これにより、Fixlet コンテンツとライセンスの更新を持つ応答ファイルが現在の適用環境にインポートされます。

```
# cd airgap
# ./Airgap.sh -run
```

オプションで、以下のオプションも指定できます。

#### **-temp directory**

エアー・ギャップ・ツールは /tmp ディレクトリーに一時ファイルを作成しますが、十分なスペースが残っていない場合は、このオプションを使用して、十分なスペースがある別のフォルダーを指定できます。

Airgap.sh ファイルと AirgapRequest.xml ファイルが同じフォルダー内に存在する必要があることに注意してください。

メインの BigFix サーバーの Fixlet コンテンツを更新するには、上記の手順を定期的に繰り返します。新しい Fixlet メーリング・リストに参加すると、Fixlet の更新時に通知を受け取ることができます。

エアール・ギャップ・ツールのバージョンが、インストールされている BigFix のバージョンと互換性があることを確認してください。

## ダウンロードしたファイルの転送

メインの BigFix サーバーに Fixlet を適用するには、インターネットからダウンロードしたパッチやその他のファイルが必要になります。エアール・ギャップ・ツールは、サイト・コンテンツを収集するために抽出使用で使用したり、ファイルをダウンロードするために非抽出使用で使用したりすることができます (非抽出使用で生成される AirgapResponse ファイルを無視できます)。あるいは、BES Download Cacher ユーティリティーを使用できます。このユーティリティーは以下を行う際に役立ちます。

- ファイルをダウンロードし、メインの BigFix サーバーに転送する。
- Fixlet サイトのパッチ・コンテンツのダウンロード、または URL からの単一ファイル・ダウンロードを行う。

現在のユーティリティーは <http://software.bigfix.com/download/bes/util/BESDownloadCacher.exe> からダウンロードできます。使用可能なオプションのリストを表示するには、`BESDownloadCacher.exe /?` を実行します。BES Download Cacher ユーティリティーを実行するシステムに BigFix サーバーまたは BigFix リレーがインストールされている場合は、ユーティリティーが関連するローカルの BES 設定を検出してデフォルトとして再使用するため、`-x` ユーティリティー・パラメーターはオプションとなります。

一部のサイトでは、アクセスを制限しているパッチ・ベンダーからコンテンツをダウンロードするための追加ステップが必要になります。追加情報については、以下のリンクをクリックして、それぞれのナレッジ文書を参照してください。これらの文書には、[Solaris](#)、[Red Hat](#)、[SuSE](#)、および [AIX](#) の場合に、ツールを使用してパッチを手動でダウンロードする方法が記載されています。

こうしたサイトでは、3 ステップのプロセスが必要になります。

1. BESAirgapTool.exe を実行して、各サイトの Fixlet とタスクをダウンロードします。

2. BES Download Cacher ユーティリティーを実行して、BigFix からサイト用のツールをダウンロードします。
3. 各ベンダーのダウンロード・ツールを実行して、パッチ・コンテンツをダウンロードします。

### Fixlet #####

Fixlet サイトからファイルを転送するには、以下の手順を実行します。

1. ダウンロードの収集元となるサイトの `efxm` ファイル (BES Asset Discovery.efxm など) を探します。
2. 以下のコマンドを使用して BES Download Cacher ユーティリティーを実行します。

```
BESDownloadCacher.exe -m BES Asset Discovery.efxm -x downloads
```

**注:** このコマンドの実行は、Fixlet サイトで参照されているすべてのファイルがダウンロードされてダウンロード・フォルダーに格納されるため、非常に長時間かかる可能性があります。ダウンロード・フォルダー内に既に存在しているファイルについては、もう一度ダウンロードされることはありません。ファイルは、その sha1 チェックサムを使用して名前が付けられます。

3. ダウンロードが終了したら、ダウンロード・フォルダーの内容 (フォルダーではなく、ファイルのみ) をメインの BigFix サーバーの sha1 フォルダーにコピーします。sha1 フォルダーのデフォルト・ロケーションは以下のとおりです。

- Windows システムの場合: `%PROGRAM FILES%\BigFix Enterprise\BES Server\wwwrootbes\bfmirror\downloads\sha1`
- Linux システムの場合: `/var/opt/BESServer/wwwrootbes/bfmirror/downloads/sha1`

BigFix サーバーは、インターネットからダウンロードする代わりに上記のファイルを使用します。

**注:** BES Download Cacher ユーティリティーを後で実行する場合は、ファイルの変更時刻を調べて、どのファイルが最新かを確認することができます。この方法では、毎回すべてのファイルをコピーするのではなく、最新のファイルだけをメインの BigFix サーバーに転送します。

場合によっては、メインの BigFix サーバーによってキャッシュからファイルが削除されないように、サーバー上のキャッシュのサイズを増やす必要があります。BES Download Cacher ユーティリティを実行してキャッシュのサイズを増やすには、以下のコマンドを使用します。

```
BESDownloadCacher.exe -c 1024
```

キャッシュのデフォルト・サイズは 1024 MB です。

**注:** `-c` オプションは、BES Download Cacher ユーティリティを実行するシステムに BigFix サーバーまたはリレーがインストールされている場合にのみ使用します。BigFix コンポーネントがインストールされていない場合は、キャッシュが無制限になります。

これらのファイルが BigFix サーバーの sha1 フォルダーにキャッシュされた後で、ダウンロード済みファイルを参照する Fixlet メッセージ内のアクションをクリックすると、これらのファイルが自動的に BigFix リレーと BigFix クライアントに配信されます。ファイルがキャッシュされていない状態でアクションを適用すると、BigFix コンソールから「waiting for Mirror Server」という状況が返されます。BigFix キャッシュの機能に関する追加情報については、『[How does the TEM Server and TEM Relay cache work?](#)』を参照してください。

#####

単一のファイルを Fixlet サイトから転送するには、以下の手順を実行します。

1. 以下のコマンドを使用して BES Download Cacher ユーティリティを実行します。

```
BESDownloadCacher.exe -u http://www.mysite/downloads/myplugin.exe -x
downloads
```

2. ダウンロードが終了したら、ダウンロード・フォルダーの内容 (フォルダーではなく、ファイルのみ) をメインの BigFix サーバーの sha1 フォルダーにコピーします。sha1 フォルダーのデフォルト・ロケーションは以下のとおりです。


- Windows システムの場合: %PROGRAM FILES%\BigFix Enterprise\BES Server \wwwrootbes\bfmirror\downloads\sha1

- **Linux システムの場合:** `/var/opt/BESServer/wwwrootbes/bfmirror/downloads/sha1`

場合によっては、メインの BigFix サーバーによってキャッシュからファイルが削除されないように、サーバー上のキャッシュのサイズを増やす必要があります。BES Download Cacher ユーティリティーを実行してキャッシュのサイズを増やすには、以下のコマンドを使用します。

```
BESDownloadCacher.exe -c 1024
```

キャッシュのデフォルト・サイズは 1024 MB です。

 **注:** `-c` オプションは、BES Download Cacher ユーティリティーを実行するシステムに BigFix サーバーまたはリレーがインストールされている場合にのみ使用します。BigFix コンポーネントがインストールされていない場合は、キャッシュが無制限になります。

これらのファイルが BigFix サーバーの sha1 フォルダーにキャッシュされた後で、ダウンロード済みファイルを参照する Fixlet メッセージ内のアクションをクリックすると、これらのファイルが自動的に BigFix リレーと BigFix クライアントに配信されます。ファイルがキャッシュされていない状態でアクションを適用すると、BigFix コンソールから「Waiting for Mirror Server」という状況が返されます。BigFix キャッシュの機能に関する追加情報については、「[How does the TEM Server and TEM Relay cache work?](#)」を参照してください。

## ログ・ファイル

エアー・ギャップ・ツールは、通常ログ・ファイルとデバッグ・ログ・ファイルの 2 つのタイプのログ・ファイルを作成します。

通常ログ・ファイルには、コマンド・ウィンドウに表示されるメッセージが記録されるため、特定の日付に収集されたサイトなどのエアー・ギャップ・タスクを確認できます。デバッグ・ログ・ファイルは、HCL サポート・チーム向けのもので、通常ログ・ファイルの命名規則は次のとおりです。

### Windows オペレーティング・システムの場合:

```
BESAirgapTool_YYYY-mm-dd.log
```



## Linux オペレーティング・システムの場合:

`Airgap_YYYY-mm-dd.log`

ここで、`YYYY-mm-dd` はファイルの作成日付です。V9.5.7 以降、30 日間を経過したファイルは削除されます。

デバッグ・ログ・ファイルは、`AirgapDebugOut.txt` です。V9.5.7 以降、このファイルには最終日の情報のみが格納され、それより前のログ・ファイルは `AirgapDebugOutYYYYmmdd.txt` に名前変更されます。ここで、`YYYYmmdd` はファイルの作成日付です。10 日間を経過したファイルは削除されます。エアール・ギャップ・ツールは、詳細オプション `-verbose` を使用することで、さらに多くの情報をデバッグ・ログ・ファイルに書き込むことができます。

# 第 10 章 BigFix Query の使用によるクライアント情報の取得

BigFix Query 機能により、WebUI BigFix Query アプリケーションから、または REST API を使用して、クライアント・ワークステーションに関する情報を取得して関連度の照会を実行できます。

BigFix Query 機能を使用すると、以下のことを行うことができます。

- BigFix 環境のパフォーマンスに影響を与えずにクライアントからデータを素早く収集する。
- 適用可能性の関連度を使用して識別されたターゲット、または一連のターゲット・エージェント ID に関して、Relevance Language で照会を実行する。
- 収集された結果を WebUI Query アプリケーションに表示する (オプションで結果をページングする)。表示される結果は、クライアントから新規の値を受信するにつれて、定期的に更新されます。
- 正規版を展開する前に、いくつかの選択したクライアント上で関連式をテストする。

このガイドには、BigFix Query を使用するために、BigFix を構成する方法に関する情報が記載されています。追加情報は、以下のリンクをクリックすると参照できます。

- [「WebUI ユーザーズ・ガイド」の『BigFix Query』セクション](#)
- [クエリー \(##### 728\) \(設定のリストと詳細な説明 \(##### 167\) 内\)](#)

## BigFix Query 要件

BigFix Query 要求の対象となるクライアントは、特定の条件を満たす必要があります。

クライアント上で BigFix Query を実行するには、以下の要件を満たす必要があります。

- クライアントが UDP 通知を受信できる。BigFix Query 機能は、プロキシまたはファイアウォール経由で BigFix サーバーに接続されたコンポーネントをサポートしていません。

- BigFix V9.5 パッチ 2 以降が、クライアント・マシン、およびそのクライアントに到達するために通過しなければならない中間リレーすべてにインストールされている必要がある。

## BigFix Query の制約事項

BigFix Query 機能の使用時には、いくつかの制約事項が適用されます。

以下の制約は、BigFix Query 機能の使用に影響を及ぼします。

- この機能は、BigFix Lifecycle または BigFix Compliance バージョン 9.5 パッチ 2 以降のバージョンに対してのみ使用可能です。
- バージョン 9.5.13 以降でこの機能は、エージェント・コンテキストを必要とする要求をサポートします。
- 災害対策サーバー・アーキテクチャー (DSA) 内に環境を構成した場合は、以下に注意してください。
  - BigFix Query に関する情報は、複数サーバー間で複製されません。
  - 各サーバーは、BigFix Query 要求を、照会が送信されたサーバーに直接またはリレー経由で接続するクライアント上でのみ実行できます。

## BigFix Query を使用できるユーザー

BigFix Query 要求は、マスター・オペレーターおよびマスター以外のオペレーターによって実行できます。オペレーターがこの機能を使用できるようにするには、特定のアクセス許可を設定する必要があります。

### WebUI ツールバーから WebUI Query アプリケーションにアクセスする場合:

ユーザーは、オペレーターまたは役割のレベルで、**query** WebUI アプリケーションに対する「有効な権限」が「許可」に設定されている必要があります。以下はその例です。

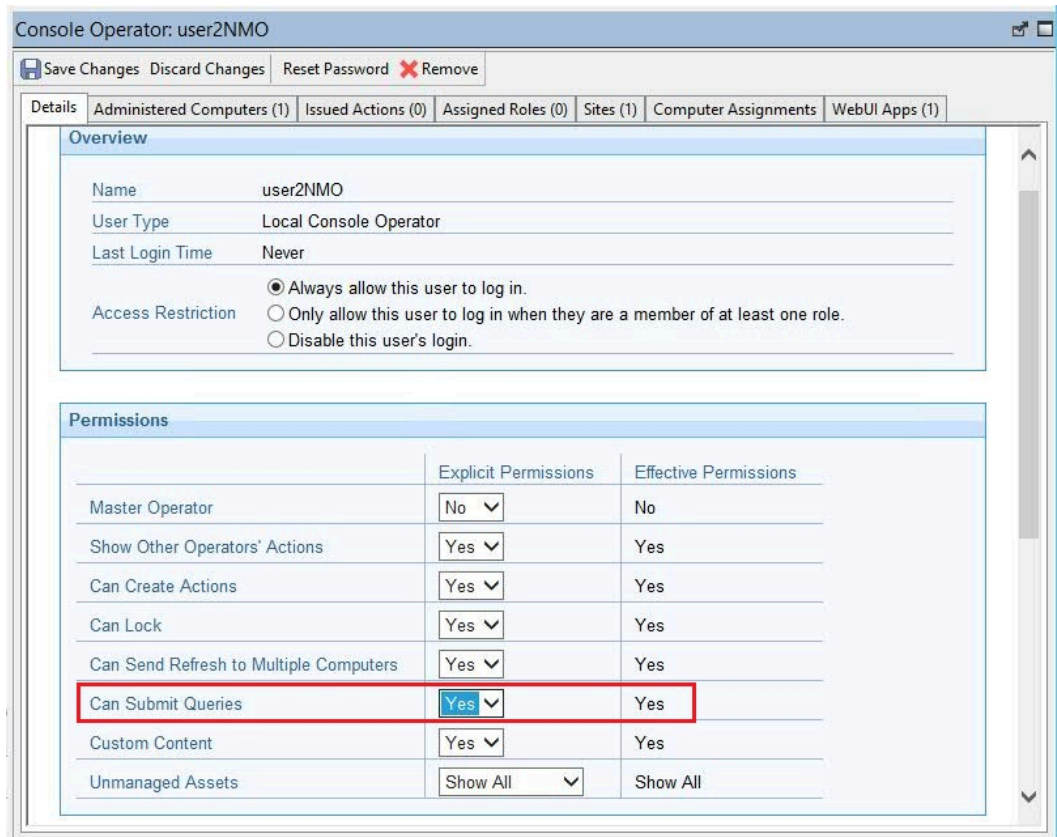


別の方法として、「WebUi アプリケーション」ドメインの作業域内で、どの権限が WebUI アプリケーション上のユーザーに割り当てられているか参照できます。「WebUi アプリケーション」ドメインは、WebUI を有効にした後、「すべてのコンテンツ」の下で使用可能になります。

WebUI Query アプリケーションへのアクセス方法については、[WebUI からの BigFix Query の実行方法 \(##### 141\)](#)を参照してください。

#### BigFix Query 要求を実行して、それらの結果を参照する場合:

マスター・オペレーターは、デフォルトで照会を実行できます。マスター以外のオペレーターは、オペレーターまたは役割のレベルで、以下のように「詳細」タブの「照会を送信可能」権限が「はい」に設定されている必要があります。



マスター・オペレーター以外の「照会を送信可能」権限のデフォルト値は、「いいえ」です。

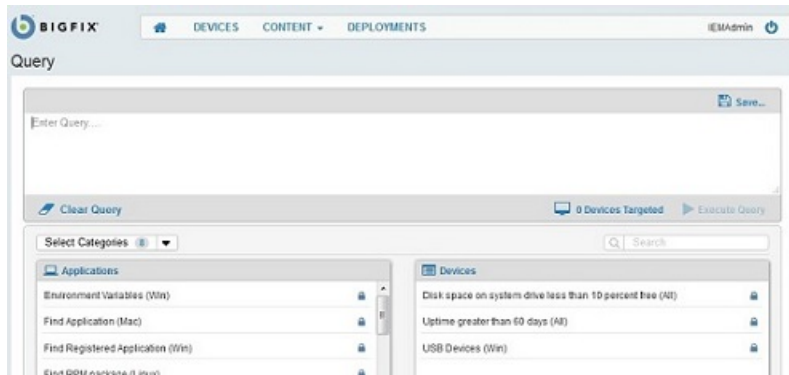
オペレーター権限および役割について詳しくは、「[ローカル・オペレーターの追加 \(ページ 29\)](#)」を参照してください。

## WebUI からの BigFix Query の実行方法

「コンテンツ」->「クエリー」を選択して、WebUI ユーザー・インターフェース上の BigFix Query にアクセスできます。



以下のような「クエリー」パネルが開きます。

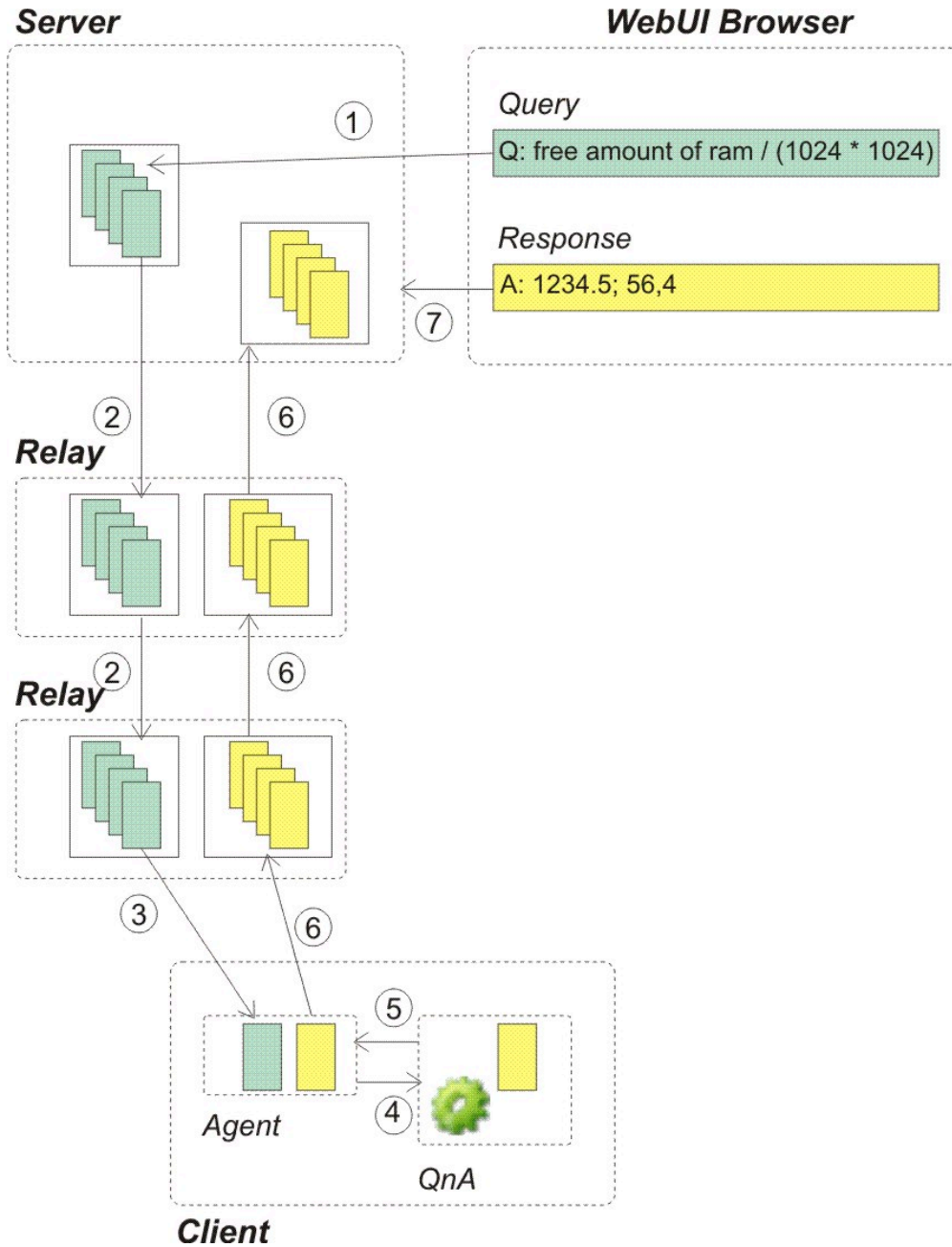


「クエリー」パネルからこの機能を使用する方法については、「[WebUI の使用可能化](#)」を参照してください。

## BigFix による BigFix Query 要求の管理方法

BigFix Query 要求は、カスタマイズ可能な一連のステップで処理されます。

以下の図に、BigFix Query の内部フローを示します。各ステップには、BigFix Query の要求および応答の管理方法を調整するために、構成できる変数をリストしています。




1. WebUI にログインしたオペレーターは、BigFix Query アプリケーションから要求を送信します。

### このステップでカスタマイズできること

このステップをマスター・オペレーターではないオペレーターとして実行することを決定できます。この場合、オペレーター権限、または

そのオペレーターに割り当てられた役割に指定された権限のいずれかに、「**照会を送信可能**」の値を「**はい**」に設定して必ず含めるようにしてください。

 **注:** 照会を管理するために REST API を使用している場合は、照会を実行するオペレーターのみがその応答を参照できることに注意してください。

2. 送信された要求は、各リレー上の専用メモリー・キューを使用して、リレー階層を経由してターゲット・クライアントに伝搬されます。これにより、通常の BigFix 処理に影響を与えることなく、要求がターゲットに迅速に到達するようになります。ターゲットまたは子リレーが指定された時間内に応答しない場合は、応答するように要求されなくなります。

### このステップでカスタマイズできること

BigFix コンソールから、サーバー用および各リレー用にメモリー・キューがクリーンアップされる方法をカスタマイズできます。

#### クリーンアップ・タスクを実行する頻度。

デフォルト値は 10 分で、設定の名前は **\_BESRelay\_Query\_ReplacementTask** です。

#### 要求がクリーンアップ・タスクによって削除するまでにキューに存在できる期間。

デフォルト値は 60 分で、設定の名前は **\_BESRelay\_Query\_MinTime** です。

#### BigFix Query 要求の専用のメモリー・キューの最大サイズ。

クリーンアップ・タスクを実行する前に、BigFix は、このメモリー・キューのサイズが、指定された最大サイズを超えているかどうかを検査します。超えている場合は、クリーンアップ・タスクの実行時に、キューのサイズがしきい値内に戻るまでキュー内のエントリが削除されます。デフォルト値は 100 MB で、設定の名前は **\_BESRelay\_Query\_ReplacementTask** です。



これらの設定について詳しくは、[クエリー \(##### 728\)](#) を参照してください。

3. 要求がターゲット・クライアントの親リレーに到達したら、そのリレーは UDP プロトコルを使用して、処理すべき新規要求があることをクライアントに通知します。そして次に、エージェントがその要求を取得します。
4. 応答するターゲットごとに、クライアントは、照会を実行して結果を返すために、照会をローカル QnA に渡します。

### このステップでカスタマイズできること

BigFix コンソールから、クライアント用に以下をカスタマイズできます。

#### 要求タイムアウトが経過する前に、QnA がマスター・オペレーターによって発行された照会を処理できる期間

デフォルト値は 60 秒で、設定の名前は `_BESClient_Query_MOMaxQueryTime` です。

#### 要求タイムアウトが経過する前に、QnA がマスター・オペレーター以外によって発行された照会を処理できる期間

デフォルト値は 10 秒で、設定の名前は `_BESClient_Query_NMOMaxQueryTime` です。

#### QnA が停止するまでに、処理すべき新規照会を待機する時間。

デフォルト値は 600 秒で、設定の名前は `_BESClient_Query_IdleTimeout` です。

#### QnA プロセスが照会を実行することにより使用する CPU 量。

QnA が実行される時間スロットを定義することで、QnA プロセスで使用される CPU を制限できます。デフォルトでは、照会を実行する QnA は 10 ミリ秒間実行され、その後、480 ミリ秒間スリープします。これは、CPU 使用率 1 から 2 % 未満に相当します。また、この動作を定義する設定の名前は `_BESClient_Query_WorkTime` および `_BESClient_Query_SleepTime` です。

これらの設定について詳しくは、「[クエリー \(##### 728\)](#)」を参照してください。

**注:** これらの設定は、ローカル・ユーザーとしてクライアント・システムに接続された QnA ツールを実行時には考慮されません。

5. エージェントが QnA から応答を受信すると、エージェントはその応答を含むレポートを作成し、他のレポートと同時に親リレーに配信します。
6. レポートは、リレー階層を経由してサーバーに返信されます。各リレー上で、レポートは親リレーに配信されるのを待つ間、メモリー・キューに保管されます。親リレーが使用できない場合、レポートはキューで待機し、親リレーが再び使用可能になるとすぐに配信されます。標準レポートに使用される暗号化および署名の基準と同じ基準が、これらのレポートにも適用されます。

### このステップでカスタマイズできること

BigFix コンソールから、各リレー用に以下をカスタマイズできます。

#### BigFix Query 結果の専用のメモリー・キューの最大サイズ。

クリーンアップ・タスクを実行する前に、BigFix は、このメモリー・キューのサイズが、指定された最大サイズを超えているかどうか検査します。超えている場合は、クリーンアップ・タスクの実行時に、キューのサイズがしきい値内に戻るまでキュー内のエントリーが削除されます。デフォルト値は 100 MBで、設定の名前は **\_BESRelay\_Query\_ResultsMemoryLimit** です。

この設定について詳しくは、[クエリー \(##### 728\)](#)を参照してください。

7. サーバーが結果を受信すると、サーバーは専用キューに結果を保管します。そのキューから専用の FillDB スレッドがデータを取得して、データベースに保管します。このように、BigFix サーバー上の通常処理は影響を受けません。

データベースは、指定した期間中、BigFix Query 要求とその応答の両方を保管します。これらは、例えば、フィルタリング、表示、レポート作成を行うために使用できます。適時、BigFix Query アプリケーションは、更新があるかデータベースを確認し、表示されている結果を適宜更新します。

## このステップでカスタマイズできること

BigFix 管理ツールから、サーバーに関して以下をカスタマイズできます。

### **BigFix Query 要求を削除するまでにデータベースに保管する期間。**

デフォルト値は 1440 時間 (60 日) で、この詳細オプションの名前は **queryHoursToLive** です。

### **BigFix Query 応答を削除するまでにデータベースに保管する期間。**

デフォルト値は 4 時間で、この詳細オプションの名前は **queryResultsHoursToLive** です。

### **queryHoursToLive または queryResultsHoursToLive の期間が経過した要求および応答をデータベースから一度に削除する件数。**

デフォルト値は 100,000 個のエントリで、この詳細オプションの名前は **queryPurgeBatchSize** です。

これらの詳細オプションについて詳しくは、「詳細オプション (##### )」を参照してください。

コンピューター設定の編集方法については、「コンピューターの設定の編集 ( (ページ) )」を参照してください。



## リレーでの永続的な接続の有効化

1. BigFix コンソールにマスター・オペレーターとしてログインします。
2. リレー・コンピューターを見つけ、右クリックします。「**コンピューター設定の編集...**」を選択します。
3. コンピューターに次の設定を追加します。

```
_BESRelay_PersistentConnection_Enabled = 1
```

4. 設定を有効にするため、リレー・プロセスを再始動します。

**注:** 9.5 パッチ 11 よりも前のバージョンが含まれるリレー・コンピューターにこの設定を追加した場合、その子クライアントの動作は変化しません。

**注:** この設定は、BigFix サーバー・コンピューターには使用できません。

## クライアントでの永続的な接続の有効化

1. BigFix コンソールにマスター・オペレーターとしてログインします。
2. クライアント・コンピューターを見つけ、右クリックします。「**コンピューター設定の編集...**」を選択します。
3. コンピューターに次の設定を追加します。

```
_BESClient_PersistentConnection_Enabled = 1
```

## 永続的な接続の確立

有効に設定した後、通常、クライアントの次の登録時にクライアントとその親リレーの間の持続的な TCP 接続が確立されます。

次の登録が発生するときには、クライアントの登録対象であるリレーにより、そのリレーが既に処理している永続的な接続の総数とサブネット別のそれらの区分に基づき、そのクライアントに永続的な接続を開く資格があるかどうかチェックされます。クライアントに資格がある場合、リレーはそのことを適宜通知します。クライアントは、通知を受けてから 60 秒待ちます。この時間内にテスト UDP 通知がリレーから届かなければ、クライアントは永続的な接続を開くことができます。

永続的な接続の確立に失敗した場合、クライアントは 3 分後に永続的な接続のオープンをもう一度試します (合計で最大 4 回試行)。

通常、永続的な接続は、すべての前提条件が引き続き満たされている限り、クライアントが新しい登録を実行するたびにいったん閉じて再確立できます。永続的な接続の遮断は、クライアントまたはリレーが再起動操作と停止操作に対応しなければならない場合にも発生する可能性があります。

## 永続的な接続での通信

直接:

持続的に接続しているクライアント (PCC) にリレーが UDP 通知を送信する必要がある場合、リレーはその永続的な接続を使用し、対象クライアントに直接通知を送信します。

同じサブネットの別のクライアントによって対応されている場合:

PCC によって対応されている、サブネット内の特定のクライアントにリレーが UDP 通知を送信する必要がある場合、リレーはその通知と対象クライアント情報 (登録段階で格納されたホスト名/IP アドレス) を PCC に送信します。PCC は、その通知を読み取り、UDP を通じてその通知を対象クライアントに送信します。対象クライアントは、その通知を通常どおり処理し、通常どおり応答を直接リレーに返します。クライアントに対応できる、利用可能な PCC が同じサブネット内に複数存在する場合、リレーは利用可能な PCC すべてではなく 1 台の PCC にのみ通知を送信します。

## 永続的な接続の管理

永続的な接続は、いくつかの設定を構成することによって管理できます。詳細は、「[永続的な TCP 接続 \( \(ページ\) 591\)](#)」を参照してください。

## 第 12 章 DMZ 内のリレー

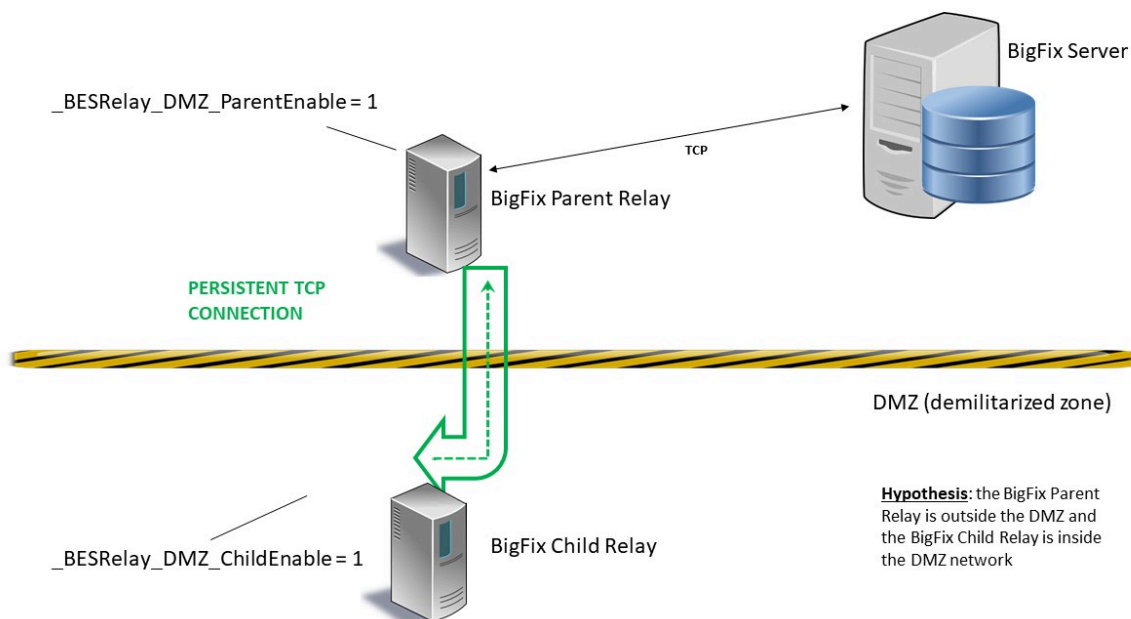
パッチ 13 以降では、より安全なゾーンにある親リレーと DMZ ネットワーク内のその子リレーの間に持続的な TCP 接続を確立する機能が製品に追加されています。この機能を使用することで、非武装地帯 (DMZ ネットワーク) 内のシステムを管理できます。

DMZ 内のリレーがそのイントラネット・ネットワーク内の親リレーの制御下にある環境では、イントラネットと DMZ 間の通信はすべて、どのようなアップストリーム通信も許可しないファイアウォールを通じて行われると見なすことができます。この場合、DMZ 内の子リレーによる親リレーとの通信開始の試みはすべて失敗します。

この制限は、親リレーと DMZ 内のその子リレーの間に持続的な TCP 接続を確立することで打開できます。永続的な接続は、常に親リレーによって開始されます。ネットワーク制限があるため、通信を子リレーによって開始することはできません。

### 概要

次の図は、親リレーと子リレー間に確立された持続的な TCP 接続を示しています。




この図には以下のものが示されています。

- 緑色: より安全なゾーンにある親リレーと非武装地帯にある子リレー間で確立された持続的な TCP 接続。
- 黄色と黒: 非武装地帯 (DMZ ネットワーク) の範囲を示す線。


## 親リレーと子リレー双方での永続的な接続の有効化

### BigFix クライアントがまだ BigFix サーバーに登録されていなかった子リレーでは

1. BigFix コンソールにログインします。
2. 親リレー・コンピューターで `Relays in DMZ: Enable Parent Relay and set Child Relay List Fixlet` を実行します。

 **注:** Fixlet を実行する前に、「説明」タブのテキスト・フィールドで子リレーのリストを指定する必要があります。

3. 子コンピューターに BigFix クライアントを手動でインストールします。詳細は、「クライアントの手動インストール (##### )」を参照してください。
4. 次の Web サイトから、お使いのオペレーティング・システムに適応するパッケージをダウンロードして、子コンピューターに BigFix リレーを手動でインストールします。  
<http://support.bigfix.com/bes/release/>

 **注:** 一般的なシナリオでは、まず親リレーで Fixlet を実行してから、子リレーを手動で設定します。

5. 子コンピューターで、クライアントとリレーのプロセスが停止していることを確認します。
6. Windows の子リレーで、Windows レジストリーに `HKEY_LOCAL_MACHINE \SOFTWARE\Wow6432Node\BigFix\EnterpriseClient\Settings\Client \_BESRelay_DMZ_ChildEnable` キーを追加し、その文字列値 (REG\_SZ) を 1 に設定します。
7. Linux の子リレーでは、`besclient.config` ファイルがまだ存在していない場合、`/var/opt/BESClient/` ディレクトリーにあるファイル `besclient.config.default` をコピーして名前を `besclient.config` に変更します。次の新しいセクションを追加して、`besclient.config` を手動で編集します。



```
[Software\BigFix\EnterpriseClient\Settings\Client
\_BESRelay_DMZ_ChildEnable]
value = 1
```

8. まずリレー・プロセスを再起動します。
9. リレー・プロセスを再起動して最低 1 分待ってから、クライアント・プロセスを再起動します。

**注:** 親リレーが認証リレーとして設定されている場合、リレー認証を一時的に無効にし、子リレーの初めての登録が正常にできるようにする必要があります。子リレーが正常に登録されたら、リレー認証を再び有効にします。

### BigFix クライアントが BigFix サーバーに既に登録されていた子リレー

1. BigFix コンソールにログインします。
2. 親リレー・コンピューターで `Relays in DMZ: Enable Parent Relay and set Child Relay List Fixlet` を実行します。

**注:** Fixlet を実行する前に、「説明」タブのテキスト・フィールドで子リレーのリストを指定する必要があります。

3. 子リレー・コンピューターで `Relays in DMZ: Enable Child Relay Fixlet` を実行します。

**注:** 一般的なシナリオでは、まず親リレーで Fixlet を実行してから、子リレーで実行します。

4. 両方の Fixlet がリレー・プロセスを再起動します。

### 永続的な接続の確立

親リレーは、ポート 52311 で子リレーに対してソケットを開こうとします。

子リレーは、親と通信するために親が使用しているソケットをGrabでき、ping メッセージを定期的を送信することによってそのソケットを維持できます。同時に、子リレーはそのループバック・アドレスでのみ、52312 などの異なるポートでの listen を開始します。このポートが使用され、以前にGrabされたソケット (親によって開かれたソケット) を通じてすべてのトラフィックが転送されます。

子リレーに到着するすべての要求のうち (子リレーの下のクライアントの登録が行われるときやレポート目的などで) アップストリームへ伝播する必要があるものは、イントラネット内の親リレーに送信されるようにするため、内部的にループバック・アドレスにルーティングされます。

## 永続的な接続での通信

この要件を達成するため、親リレーはそれ自体の子リレーと通信を開始し、後で子リレーがアップストリーム通信を必要とする場合に子リレーから親リレーに対して使用できるように、接続が確立した状態を持続させます。

## 永続的な接続の管理

いくつかの設定を構成することによって DMZ の持続的な接続でリレーを管理できます。詳しくは、[BigFix 構成設定 \( \(ページ\) 166\)](#)の[DMZ 内のリレー \( \(ページ\) 884\)](#)を参照してください。

# 第 13 章. ピアツーピア・モード

パッチ 11 以降、BigFix クライアントには PeerNest という新機能が搭載されており、この機能を使用すると、同じサブネット内にあるクライアント間でバイナリー・ファイルを共有できます。

PeerNest は数多くのユース・ケースに適用可能ですが、例として低速リンクを介してデータ・センターに接続されている支店のユース・ケースを検討します。以前の BigFix バージョンで提案された構成では、大きなペイロードをダウンロードしてキャッシュするには、支店でリレーをダウンロードする必要がありました。PeerNest では、BigFix クライアントはダウンロードしたバイナリーを共有できるため、リレーがローカルにインストールされていない場合でも、支店から送信される通信の数が削減されます。

PeerNest が有効になっている場合、BigFix クライアントはアクションの実行に必要なバイナリーのダウンロードを自己最適化できます。複数のクライアントがバイナリー・ファイルのプリフェッチを必要とするアクションを実行する場合、クライアントはファイルがサブネット内で既にキャッシュされているかどうかピアに確認します。バイナリーがまだキャッシュされていない場合、クライアントはリレーからのダウンロードを担当するクライアントを 1 つ選択し、ピアと共有できます。このようにして、リレー上で複数のクライアントが単一クライアントのダウンロード負荷を生成します。1 つのクライアントのみがリレーからダウンロードし、ダウンロードをピアと共有できるためです。

**注:** プリフェッチ・ステートメント内でファイルのハッシュが指定されているときのみ、BigFix クライアントはアクションの実行に必要なバイナリーのダウンロードを自己最適化できます。

## このモードの使用要件

PeerNest では、BigFix クライアント同士が通信できるようにする処置として、UDP 通信を有効にする必要があります。UDP 通信を許可していないか、クライアントで 52311 UDP ポートを開いていない場合は、この新しい機能を利用することはできません。

PeerNest では、BigFix クライアントがピアからファイルをダウンロードできるようにするために、ピア間で TCP ポート 52311 が開いている必要もあります。このポートが開いていない場合、クライアントはピアからファイルをダウンロードできません。このポート

を開けないクライアントでは、( `_BESClient_PeerNest_IsPassive` 構成設定を使用して) PeerNest をパッシブ・モードで設定することが推奨されます。

また、PeerNest では、サブネットがマルチキャストをサポートしている必要があります。マルチキャスト機能をサポートしていないサブネットでは、この新機能を利用できません。

さらに、PeerNest では多くのディスク・ストレージ・スペースが必要になります。

## このモードの最大限の使用効率

PeerNest 機能は、BigFix クライアントをホストしているすべてエンドポイントが同じバージョンの IP プロトコルを使用しているサブネットで最大限の効率を達成します。この条件が満たされないと、同じファイルが複数のクライアントによって BigFix リレーからダウンロードされる可能性があり、関与するすべての BigFix クライアントが連携してファイルを取得する上で必要な時間を最小限に抑えることができません。

## PeerNest の有効化

PeerNest 機能を有効にするには、クライアントで次の構成設定を 1 に設定します。

```
_BESClient_PeerNest_Enabled = 1
```

クライアントは、バイナリーのダウンロードをローカルに最適化するために、すべての PeerNest 機能を有効にします。

この構成設定を有効にするには、クライアントを再始動する必要があります。

## PeerNest のフロー

PeerNest モードを有効にした後、**ファイル・ダウンロード**のフローは次のようになります。

1. ダウンロードを必要とするアクションを実行している間、クライアントはファイルが使用可能かどうかを確認するために、サブネット経由で UDP メッセージをブロードキャストします。このブロードキャストは、エージェント UDP ポートであるポート 52311 でサブネット・ブロードキャスト・アドレスを使用して行われます。
2. クライアントが受け取る応答に基づき、以下のように処理がなされます。

- 1 つ以上のピアに既にそのファイルが存在する場合: クライアントは、そのファイルを提供可能な状態にしているピアの 1 つをランダムに選択し、ダウンロードを開始します。
  - ピアの 1 つが現在リレーからそのファイルをダウンロードしている場合: クライアントは、スリープ・モードに入り、ダウンロードが完了するのを待ちます。
  - そのファイルを現在ダウンロードしているピアが他に存在しない場合: クライアントは、そのファイルをダウンロード保留リストに追加します。ファイルが使用可能かどうか、リレーに確認します。リレーがファイルを提供できる場合、クライアントはファイル・ダウンロードを開始します。
3. ダウンロードの完了後、クライアントはピアにダウンロードが可能になったことを通知します。通知は、ポート 52311 上でサブネット経由でマルチキャスト UDP メッセージを送信して行われます。

## トラブルシューティング・シナリオ 1

インターネット・プロトコル・バージョン 6 (IPv6) が無効または構成されていないオペレーティング・システムでホストされる BigFix クライアント:

PeerNest 機能を使用する場合は、以下を行う必要があります。

1. これらのクライアントで、`_BESClient_Comm_IPCommunicationsMode` 構成設定を次のように設定します。

```
_BESClient_Comm_IPCommunicationsMode = OnlyIpv4
```

2. 変更内容を有効にするために、クライアントを再始動します。

## トラブルシューティング・シナリオ 2

`_BESClient_Comm_CommandPollEnable` および

`_BESClient_Comm_CommandPollIntervalSeconds` 構成設定を使用して、アクティブなポーリングが設定されている BigFix クライアント:

PeerNest 機能を使用する場合、これらのクライアントを「パッシブ」PeerNest

エージェントになるように構成しないでください。これらのクライアントで

`_BESClient_PeerNest_IsPassive` 構成設定を有効にしないでください。有効にすると、

ポーリングのタイミングによっては、サブネット内の複数のクライアントが同じバイナリーを共有せずにダウンロードできてしまいます。

## クライアントの構成

いくつかの設定を使用して、ピアツーピア・モードのクライアントを構成できます。詳しくは、[BigFix 構成設定 \( \(ページ\) 166\)](#)の[ピアツーピア・モード \( \(ページ\) 155\)](#)を参照してください。

# 第章14. BigFix でのクライアント・ファイルのアーカイブ

BigFix クライアントから複数のファイルを 1 つのアーカイブに収集し、それらをリレー・システム経由でサーバーに移動することができます。こうすることで、BigFix 管理者は、特定の管理対象コンピューターのデータを自動的にログに記録することができます。

これを行うために、定期的にまたはコマンドに応じてファイルを収集できる **Archive Manager** という新規コンポーネントが BigFix クライアントに追加されています。これは、結果として圧縮された tarball を BigFix クライアントの **Upload Manager** に渡します。Upload Manager には、アップロードするファイルをキューに入れる入力ディレクトリーがあります。

Upload Manager はアップロード操作を一度に 1 つ実行して、ネットワーク・トラフィックを削減するために、管理しやすいチャンク形式でデータを移動させます。チャンクは一番近い BigFix リレーまたはサーバーに送信されます。そこで、チャンクは **PostFile** プログラムによって元のファイルに再アSEMBルされます。

次に、PostFile はこのファイルをチェーンの上流である、次の BigFix リレーまたは BigFix サーバー上の最終的な宛先に渡します。ここでも Upload Manager を使用して、ファイルをチャンクにスライスし、それを階層内の次の PostFile プログラムに送信します。ファイルが最終的に BigFix サーバーに到達すると、クライアント・コンピューターの ID に基づいて、特別なディレクトリー・ロケーションに保存されます。ここまでの段階で、Upload Manager と PostFile プログラムのどちらでも、ネットワーク・トラフィックを滑らかにするために、チャンク・サイズを変更したり、アップロード速度のスロットリングを実行したりできます。

これらのコンポーネントに関連する構成設定については、[クライアント・ファイルのアーカイブ \( \(ページ\) 229\)](#)を参照してください。

**注:** Upload Manager は、未登録の BigFix クライアントが検出されると、一時停止します。これは、ネットワークのダウン、サーバーのビジー状態、またはクライアントの切断など、さまざまな理由で発生する場合があります。BigFix クライアントを BigFix システムに再び登録できるようになるとすぐに Upload Manager が再起動され、中断した場所から処理が続行されます。

## Archive Manager の設定

標準的なアーカイブとは、定期的にコンパイルされてサーバーに送信される、ログと構成ファイルのコレクションです。ロギング・ニーズをカスタマイズできるように、多数の設定が用意されています。

このコンポーネントに関連する構成設定について詳しくは、[BigFix 構成設定 \( \(ページ\) 166\)](#)の「[Archive Manager \( \(ページ\) 230\)](#)」を参照してください。

## カスタム・アクションの作成

BigFix クライアントに関する属性をアーカイブ・ファイルに送信することができるカスタム・アクションを作成できます。

カスタム・アクションを作成するには、以下の手順を実行します。

1. BigFix コンソールを起動します。
2. 「コンピューター」タブを選択します。
3. フィルターまたはリストから、アクションのターゲットとするコンピューターのセットを選択します。
4. 「ツール」メニューから「カスタム・アクションの実行」を選択します。
5. 「アクション・スクリプト」タブを選択します。
6. 表示された「アクション・スクリプト」テキスト・ボックスに、目的のアクション・スクリプトを入力します。

## Archive Manager

Archive Manager は、定期的にまたはコマンドに応じてファイルを収集できる、BigFix クライアントのコンポーネントです。これは、結果として圧縮された tarball を BigFix クライアントの Upload Manager に渡します。

このコンポーネントに関連する構成設定について詳しくは、[BigFix 構成設定 \( \(ページ\) 166\)](#)の「[Archive Manager \( \(ページ\) 230\)](#)」を参照してください。

## Archive Manager の内部変数



Archive Manager コンポーネントの内部変数を以下に示します。

### **\_\_BESClient\_ArchiveManager\_LastArchive**

Archive Manager は、アーカイブを送信するたびにこの設定を更新します。設定の値は、送信されたファイルのセキュア・ハッシュ・アルゴリズム (sha1) です。

### **\_\_BESClient\_ArchiveManager\_LastIntervalNumber**

BigFix クライアントは、アーカイブを送信するたびこの設定を更新します。これは、1970 年から、アーカイブが最後に収集されたときまでの間隔数を表します。この間隔が 1 日単位 (デフォルト) の場合、設定には、1970 年から、アーカイブを最後に作成した日までの日数が示されます。この値は、間隔数が変わるときが新規アーカイブが作成される時であるものとして計算されます。

この値は、アーカイブの収集が重ならないよう、コンピューター ID に対応した時間によるオフセットも行なわれます。

## Archive Manager のインデックス・ファイル形式

Archive Manager はアーカイブの構築時に、アーカイブに関するメタデータが含まれたインデックスを作成します。以下は、単一ファイルでのアーカイブのインデックス例です。

```
MIME-Version: 1.0
Content-Type: multipart/x-directory2; boundary="==="
Unique-ID: 1077307147
Archive-Size: 105
SendAll: 0
Date: Wed, 17 Mar 2004 02:23:01 +0000
FileSet-(LOG): c:\temp\log\newfile.log

-----
```

URL: file:///c:/temp/log/newfile.log

```
NAME: (LOG)newfile.log
```

```
SIZE: 105
TYPE: FILE
HASH: 3a2952e0db8b1e31683f801c6384943aae7fb273
MODIFIED: Sun, 14 Mar 2004 18:32:58 +0000

-----
```

## Upload Manager

Upload Manager は、PostFile プログラムへのチャンク形式でのファイル送信を調整します。帯域幅を確保するためにアップロード・データ・フローをスロットリングすることができます。ファイル・システムは 64 ビットを使用しており、最大バイト長  $2^{64} - 1$  のファイル・サイズにも十分に対応できます。

このコンポーネントに関連する構成設定については、[BigFix 構成設定 \( \(ページ\) 166\)](#)の「[Upload Manager \( \(ページ\) 258\)](#)」を参照してください。

## PostFile

PostFile プログラムは、Upload Manager によって送信されたファイルのチャンクを受け取り、それをファイルの独自のコピーに追加します。Upload Manager では、送信されるバイトの範囲と、ファイル名として使用される、ファイルの sha1 を指定します。このコンポーネントに関連する構成設定については、[BigFix 構成設定 \( \(ページ\) 166\)](#)の「[PostFile \( \(ページ\) 251\)](#)」を参照してください。

これらのパラメーターは、以下の例のように URL に追加されます。

```
postfile.exe?
sha1=51ee4cf2196c4cb73abc6c6698944cd321593007&range=1000,1999,20000
```

ここで、sha1 値はファイルを識別します。この場合の範囲は、20,000 バイトを 1,000 バイトずつのチャンクに分けたときの 2 つ目のチャンクを指定しています。

PostFile は、ファイルのチャンクを受け取ると、まずそれが正しいセグメントであることを確認します。そうである場合は、送信されたデータをそのファイルのローカル・コピー

に追加します。そして、このファイルのサイズに加えて、現在のチャンク・サイズ、およびスロットリングの BPS 設定を返します。

PostFile は、このプログラムにデータを提供する複数の BigFix クライアントを同時に処理する必要があります。その負荷の平衡を取るために、スロットリング比率を調整します。効果的なスロットリング比率は、PostFile の制限比率を、同時にアップロード中のファイル数で除算して判別されます。

例えば、PostFile のスロットリング設定が 100 KBPS であり、50 のクライアントが同時にファイルをアップロードしている場合、各クライアントに返されるスロットリング値は 2 KBPS に調整されます。カスタムのスロットリング値を個別の BigFix リレーに設定することで、ネットワーク内のボトルネックを効率的に処理できます。

PostFile は、部分的にアップロードされたファイルを、そのファイル名の前に下線を付けて Upload Manager のバッファ・ディレクトリーに保管します (Upload Manager は、下線が先頭に付くファイルをアップロードしません)。PostFile は、そのファイルの最後のチャンクを受け取ると、ファイルの sha1 を計算して、それが URL の sha1 パラメーターと一致しているかどうかを確認します。一致している場合は、先行する下線を削除します。

これで、Upload Manager は、ファイルを階層の上位にある次のリレー (あるいは、他のサーバーが指定されている場合はそのサーバー) にアップロードできます。

PostFile は、Upload Manager が稼働中かどうかを判別します。稼働中でなければ、PostFile はすでにそのルート・サーバー宛先に到達したと想定します。その場合、アップロードされたファイルの名前を変更し、アーカイブからファイルを解凍して、Upload Manager のバッファ・ディレクトリーのサブフォルダーにファイルを保管します。

プログラムは、コンピューター ID のモジュラスを使用して、サブフォルダー・パスを計算します。こうすると、ファイル・ディレクトリーへのアクセスを拡散して、単一のディレクトリーにアクセスが集中することを防ぐ効果があります。

例えば、コンピューター ID1076028615 からファイル「log」へのパスは、パス「BufferDir/sha1/15/1076028615/log」に変換されます。ここで、**15** は ID のモジュロ 100 の余り (下位 2 桁) です。

アップロードされたファイルが有効な BigFix アーカイブで、正常に解凍された場合、元のアップロード・ファイルは削除されます。

## リソースの例

### 例 1

この例では、`c:\log` フォルダ内のすべてのファイルと `c:\myapp` フォルダ内のすべての `.ini` ファイルを、1 時間に 1 回収集します。サイズが 1,000,000 バイトを超える場合には、異なる部分だけを送信し、アーカイブは送信しないようにします。これを設定するには、BigFix コンソールで以下の設定を作成します。

```
_BESClient_ArchiveManager_FileSet-(Log) = c:\log
_BESClient_ArchiveManager_FileSet-(Ini) = c:\myapp\*.ini
_BESClient_ArchiveManager_OperatingMode = 1
_BESClient_ArchiveManager_Interval_Seconds = 3600
_BESClient_ArchiveManager_SendAll = 0
_BESClient_ArchiveManager_MaxArchiveSize = 1000000
```

### 例 2

この例では、上記と同じファイル・セットだけでなく、クライアント・コンピューターから一部の有用な属性 (取得したプロパティ) も収集する必要があります。カスタム・アクションを使用すると、これらの属性を生成して、完了時にアーカイブをトリガーできます。使用する設定は上記と同じですが、次のように操作モードを 2 に設定して、**archive now** アクション・コマンドを有効にします。

```
_BESClient_ArchiveManager_OperatingMode = 2
```

ここで、カスタム・アクションを作成して、収集する属性を指定します。例えば、オペレーティング・システム、コンピューター名、および DNS 名をログ・ファイルに追加する場合には、次のようなカスタム・アクションを作成します。

```
appendfile {"System:" & name of operating system}
appendfile {"Computer:" & computer name}
appendfile {"DNS name:" & dns name}
delete "c:\log\properties.log"
copy __appendfile "c:\log\properties.log"
archive now
```

**appendfile** コマンドにより、**\_\_appendfile** という名前の一時テキスト・ファイルが作成されます。このコマンドを呼び出すたびに、指定したテキストがこの一時ファイルの末尾に付加されます。

**delete** コマンドと **copy** コマンドは、古いログ・ファイル (存在する場合) を消去し、**\_\_appendfile** をログにコピーします。これにより、新しい `properties.log` ファイルが作成されることとなります。OperatingMode が 2 に設定されている限り、**archive now** コマンドによって、アーカイブがすぐに作成されます。

選択した任意のスケジューリングを使用して、このアクションのターゲットを BigFix クライアントの任意のサブセットにすることができます。この方式のバリエーションを使用して、毎晩の差異部分の送信に加えて、週に一度の完全アーカイブを実行できます。

# 第 15 章 BigFix 構成設定

BigFix には、BigFix スイートの動作を実質的に制御する手段として使用できる詳細な構成設定がいくつかあります。これらのオプションを使用することで、ネットワーク内の BigFix サーバー、リレー、およびクライアントの動作をカスタマイズできます。

## 概要

この構成設定は、BigFix サーバー、リレー、およびクライアントに適用され、コンソールの「**コンピューターの状態**」ダイアログのカスタム設定構成で管理できます。

- 設定は、ユーザーが変更するまでデフォルト値を使用します。
- 設定に無効な値を指定すると、デフォルト値に戻ります。
- 構成値はすべて、文字列としてレジストリー (または構成ファイル) に格納されます。
- 古い設定が新しい設定をオーバーライドしないように、各設定には「開始日」が関連付けられています。古い開始日のアクションが、新しい開始日の設定を上書きすることはありません。開始日は、アクションが実行された時間に設定されます。
- 数値は文字列として格納され、最大 32 ビットの符号なし整数に収まると想定されます (最大値は 4,294,967,296)。
- 負の数値、最大値より大きい数値、または数値以外の文字を含む数値は、無効な値として処理されます。このような場合、設定はデフォルト値に戻ります。
- ブール値は文字列として格納されます。 *true* および *false* に対応して、それぞれ “1” または “0” として格納されます。これらのいずれの許容値も含まないブール値は、無効な値として処理されます。このような場合、設定はデフォルト値に戻ります。

**⚠ 警告:** 構成設定は慎重に使用してください。誤って使用すると、動作が最適でなくなったり、BigFix が適切に機能しなくなる可能性があります。確信が持てない場合は、サポート技術者にお問い合わせください。

## 設定のリストと詳細な説明


構成設定の中にはよく使用されるものがあり、こうした構成設定には BigFix サポート・サイトで既に説明されているタスクがあります。このようなタスクが存在する場合、表の「**使用可能なタスク**」行に示されていて使用できます。タスクが存在しない場合は、構成設定を手動で作成します。

### 構成設定の作成

構成設定は 2 通りあります。BES コンソールを使用するかエンドポイントで手動で作成

#### BES コンソールを使用して作成

1. BES コンソールを開き、「**すべてのコンテンツ**」ドメインの下の「**コンピューター**」セクションに移動します。
2. 構成設定を適用するコンピューターを選択します。

 **注:** このやり方でサーバーまたはリレーの構成設定を変更するには、そのサーバーまたはリレーがインストールされているコンピューターを選択する必要があります。

3. コンピューターを右クリックして、「**コンピューター設定の編集**」を選択します。
4. 構成表から「**名前**」と「**値**」のペアを使用して、カスタム設定を作成します。
5. 「**OK**」をクリックし、「**複数の設定の変更**」などの名前のアクションを使用して構成設定を送信します。

この設定は、アクションが完了した後に有効になります。

6. コンピューターの更新された設定を表示します。更新内容を表示するには、コンピューターを右クリックして「**コンピューター設定の編集**」を選択するか、コンピューター・リストでコンピューターをクリックして「**要約**」タブを選択します。次に、「**クライアント設定**」セクションまでスクロール・ダウンします。


#### エンドポイントで手動で作成

クライアントの構成設定は、次の場所で Windows レジストリーのキーとして管理されています `HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Wow6432Node\BigFix\EnterpriseClient\Settings\Client`。設定を更新するには、以下のステップを実行します。

1. レジストリーの場所でキーを作成して名前を付けます。

2. キー内に value という名前の文字列値 (REG\_SZ タイプ) を作成します。
3. 値に value のデータを設定します。

詳細については、既存のクライアント設定のキーを参照してください。

 **注:** Windows では、クライアント設定を手動で適用するために BESClient サービスを停止する必要はありません。ただし、設定によっては、BESClient サービスを再始動するまで有効にならないことがあります。Unix/Linux では、手動で `besclient.config` ファイルの構成設定を適用するために、BESClient サービスを停止する必要があります。

## 説明、値、参照

構成設定は、次の BigFix 機能に分類されます。

- [インスペクターの動作 \(##### 169\)](#)
- [アクションの実行 \(##### 187\)](#)
- [アクション管理 \(##### 213\)](#)
- [クライアント・ファイルのアーカイブ \(##### 229\)](#)
  - [Archive Manager \(##### 230\)](#)
  - [PostFile \(##### 251\)](#)
  - [Upload Manager \(##### 258\)](#)
- [コンテンツの収集 \(##### 349\)](#)
  - [HTTPS \(##### 385\)](#)
- [デプロイメントのエンコーディング \(##### 390\)](#)
- [ロギング \(##### 398\)](#)
  - [監査 \(##### 408\)](#)
- [CPU 使用率 \(##### 413\)](#)
- [プロキシ構成 \(##### 489\)](#)
  - [クライアント \(##### 489\)](#)
  - [サーバー/リレー \(##### 503\)](#)
- [登録 \(##### 521\)](#)
  - [リレーの選択 \(##### 539\)](#)
  - [リレーの管理 \(##### 565\)](#)
  - [アフィリエイト \(##### 571\)](#)
  - [子の数の制限 \(##### 574\)](#)



- [クライアント通知 \(##### 576\)](#)
  - [コマンド・ポーリング \(##### 576\)](#)
  - [UDP 通知 \(##### 580\)](#)
  - [永続的な TCP 接続 \(##### 591\)](#)
- [通信 \(##### 602\)](#)
  - [認証 \(##### 604\)](#)
- [ダウンロード \(##### 609\)](#)
- [レポート管理 \(##### 714\)](#)
- [クエリー \(##### 728\)](#)
- [アプリケーション使用状況の収集 \(##### 742\)](#)
- [帯域幅スロットリング \(##### 764\)](#)
- [Airgap モード \(##### 797\)](#)
- [HTTP サーバー \(##### 806\)](#)
  - [HTTPS \(##### 812\)](#)
  - [ロギング \(##### 822\)](#)
- [リレーの正常性チェック \(##### 836\)](#)
- [リレー診断 \(##### 843\)](#)
- [ユーザー認証 \(##### 855\)](#)
- [Web レポート \(##### 857\)](#)
- [テレメトリーのデプロイメント \(##### 868\)](#)
- [UI 履歴 \(##### 877\)](#)
- [DMZ 内のリレー \(##### 884\)](#)
  - [親リレー \(##### 884\)](#)
  - [子リレー \(##### 892\)](#)
- [ピアツーピア・モード \(##### 900\)](#)
- [各種 \(##### 916\)](#)

並列 FillDB の構成に関連する情報については、[並列 FillDB の構成 \( \(ページ\) 936\)](#)を参照してください。

## インスペクターの動作

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
BigFix クライアントが Active Directory 情報をポーリングする頻度を制御し	_BESClientInspector_	43200 (12 時間)	Active Directory Refresh Seconds アント		<a href="#">Active Directory property updating</a>
	設定タイプ	数値 (秒)			
	値の範囲	1200 ~ 2147483648 (20 分 ~ 25,000 日)			
	使用可能なタスク	いいえ			
	コンポーネントの再起動が必要	いいえ			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照										
ます。														
<p><b>_BESClientInspector (無AdminPrivilegeFromToken)</b></p> <p>ローカル・ドメイン・グループに属するユーザー・アカウントを持つ</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="375 678 467 827">フォルト値</td> <td data-bbox="467 678 558 827">0 (無効)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="375 827 467 976">設定タイプ</td> <td data-bbox="467 827 558 976">ブール値</td> </tr> <tr> <td data-bbox="375 976 467 1136">値の範囲</td> <td data-bbox="467 976 558 1136">0 (無効) - 1 (有効)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="375 1136 467 1352">使用可能なタスク</td> <td data-bbox="467 1136 558 1352">いいえ</td> </tr> <tr> <td data-bbox="375 1352 467 1711">コンポーネントの再起動が必要</td> <td data-bbox="467 1352 558 1711">いいえ</td> </tr> </table>	フォルト値	0 (無効)	設定タイプ	ブール値	値の範囲	0 (無効) - 1 (有効)	使用可能なタスク	いいえ	コンポーネントの再起動が必要	いいえ	<p>アカウント</p>	<p>降</p>	
フォルト値	0 (無効)													
設定タイプ	ブール値													
値の範囲	0 (無効) - 1 (有効)													
使用可能なタスク	いいえ													
コンポーネントの再起動が必要	いいえ													

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
ていて、そのローカル・ドメイン・グループが管理者グループに属する				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
場合、この設定を有効にします。この設定が有効になっていない				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
場合、これらのユーザー・アカウントの管理者権限は正しく取得さ				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
れません。この設定はデフォルトでは有効になっていません。有効				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
にするには、「1」に設定します。				
<p><b>_BESClientInspectOfRPMForceCacheRefresh</b></p> <p>rpm インスタンス・クター・キャッシュを強制的</p>	<p>フォルト値</p> <p>設定タイプ</p> <p>値の範囲</p> <p>プラットフォーム</p>	<p>0 (無効)</p> <p>1 (有効)</p> <p>Linux/AIX</p>	<p>プラットフォーム</p>	<p>参照</p>



名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>に更新するには、1 に設定します。この場合、インスペクターの起動</p>	<p>フォーム コンポーネントの再起動が必要</p>	<p>いいえ</p>			


名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
時に、rpm キャッシュが最後に更新されてから60分を過ぎている場合、キャッシュ				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
シュ された 情報と 実際の オペレー ティング・ システム の rpm ステータス				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
との不一致を排除するために、rpm キャッシュは強制的に更新されます。				

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p><b>_BESClientInspector</b> (使用) rpm インスタンスペクタ・キャッシュを無効にするには、1 に設定します。この</p>	<p>フォルト値</p>	<p>用不可)</p>	<p>PMDisableCache アント</p>		<ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">ダウンロードの管理 (##### 987)</a></li> <li>• <a href="#">Problems experienced when attempting to start the Unix/Linux BigFix Client after installation?</a></li> <li>• <a href="#">Stopping the BESClientUI from running on every local user session on a Citrix Server</a></li> </ul>
	<p>設定タイプ</p>	<p>プール値</p>			
	<p>値の範囲</p>	<p>0 (無効) - 1 (有効)</p>			
	<p>プラットフォーム</p>	<p>Linux/AIX</p>			
	<p>コンポーネントの再起動が必要</p>	<p>いいえ</p>			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
ケースでは、子プロセスが有効になっている場合、クライアントの				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>パフォーマンスが大幅に低下することが予想されます。</p> <p> <b>注:</b> キャッシュ操</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
作は子プロセスとは無関係です。特に、子プロセスが無効な場				



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
合でも、キャッシュが有効化されていることがあります。				
<p><b>_BESClient_Inspector_DisableWMI</b></p> <p>この設定は、Windows WMI を呼び出すイ</p>	<p>0 (無効)</p> <p>フォルト値</p>	<p>クライアント</p>	<p>9.2 以降</p>	<p><a href="#">High Disk I/O and/or CPU on the client related to WMI queries</a></p>

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
ンスペクターの使用を無効にします。WMIは、一部のコンピューターで、特に古いバージョンのWindows (95と 98) で問題を引き起こすことが分かっています。問題には、CPU使用率が高くなる、Windowsのクラッシュ (ブルー画面) などがあります。WMIは、オプションで取	設定タイプ	ブール値			
	値の範囲	1 (true): WMIインスペクターは無効 0 (false): WMIインスペクターは有効			
	使用可能なタスク	いいえ			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
得された一部のプロパティで使用されています。				

[上 \( \(ページ\) 168\)](#)

## アクションの実行

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照										
この構成設定では、プリフェッチ	<table border="1"> <tr> <td>フォルト値</td> <td></td> </tr> <tr> <td>設定タイプ</td> <td>数値 (秒)</td> </tr> <tr> <td>値の範囲</td> <td>60 ~ 6000</td> </tr> <tr> <td>プラットフォーム</td> <td>すべて</td> </tr> </table>	フォルト値		設定タイプ	数値 (秒)	値の範囲	60 ~ 6000	プラットフォーム	すべて	<table border="1"> <tr> <td>コンポーネント</td> <td></td> </tr> </table>	コンポーネント			<p><a href="#">Seconds plug-in took too long</a></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">How to troubleshoot Redhat patches failed problem</a></li> <li>• <a href="#">Linux Prefetch Plug-in Management and related Messages in Client Log</a></li> <li>• <a href="#">クライアント・ログに、Fixletが正常に完了しないプリフェッチ・プラグイン・エラーが表示されています。エラーの原因は何でしょうか。どうすればよいですか?</a></li> </ul>
フォルト値														
設定タイプ	数値 (秒)													
値の範囲	60 ~ 6000													
プラットフォーム	すべて													
コンポーネント														

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
チ・プラグインの実行後に、プラグインが回答を生成するのをク	フォーム				
	コンポーネントの再起動が必要	いいえ			

名前/説明	値	影響を受け るコンポー ネント	適用 可能 なバー ジョン	参照
ライアントが待機する時間をカスタマイズできます。時間は秒				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
単位で表します。				
提案として構成されているアクションを管理	フォルト値	(False)	プレゼンテーション	降
	設定タイプ	ブール値		
	値の範囲	0 または 1		
	プラットフォーム	Windows と Mac		
	コンポーネントの再起	いいえ		

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>する際に、クライアントの動作を制御します。1 (True) に設定されています。</p>	動が必要				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
る場合、アクションの開始時にクライアントUIで提案が提示され				



名前/説明	値	影響を受け るコンポー ネント	適用 可能 なバー ジョン	参照
<p>ま す。0 (False)  に 設 定 さ れ て い る 場 合、 エー ジェ ント (BESClient)  に よっ て ア ク シ ョ ン が 取</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
得られるとすぐに、クライアントUIで提案が提示されます。				
<b>_BESClient_ActionManager</b>	false	クライアント	MissingHoldMode	<a href="#">user interface process unable to launch</a>

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
ユーザー制約や表示するUIを「考慮せず」に、アクションに対するクライ	ルト値				
	設定タイプ	String (ストリング)			
	値	<p>「none」、 「failed」、 「all」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「none」: 唯一のUIセッションが無効または失敗し</li> </ul>			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>アントの動作を制御します。この設定は、リモート・クライアントを</p>		<p>た場合、アクションは自動的に実行されません。          • 「failed」 : 失敗したUIセッション</p>		

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>コンピューターに接続していて、リモート・セッションで「ユーザー」のためユーザー・イ</p>		<p>がある場合、アクションをメッセージの保留中状態にします。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「all」：無効ま</li> </ul>		

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>インターフェース・プロセスを起動できない (XX.YYYY)」というエラーが発生していない</p>		<p>または失敗したUIセッションがある場合、アクションをメッセージの保留中</p>		

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
る (例: ユー ザー の た め に ユー ザー・ イン ター フェー ス・ プ ロ セ ス を 起 動 で き な い (22.1008))		状 態 に し ま す。			
	使用 可能 なタ スク	いい え			
	プ ラッ ト フォ ーム	すべ て			
	コン ポー ネン トの 再起 動が 必要	はい			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
場合に非常に便利です。これは一般に、リモート接続への接続が存				



名前/説明	値	影響を受け るコンポー ネント	適用 可能 なバー ジョン	参照
在 し て い た が 切 断 さ れ た、 と い う エ ラ ー 状 態 を 示 し て い ま す。 中 止				

名前/説明	値	影響を受け るコンポー ネント	適用 可能 なバー ジョン	参照
されたユーザー接続はアクティブなままですが、正しく切断されていない				

名前/説明	値	影響を受け るコンポー ネント	適用 可能 なバー ジョン	参照
ないため、使用されているユーザー名を検出できません。これに関連				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
するその他の例および情報として、中止されたセッション・トークンの				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
状態が挙げられます。				
再起動が必要かどうか判断する際、BigFix クラ	_BESClient_ActionManager_PendingRestartExclusions フォルト値 設定タイプ 値の範囲 使用可能なタスク プラット	PendingRestartExclusions シンク String (ストリング) 該当なし いいえ Windows		<a href="#">PendingRestartExclusions</a> <a href="#">PendingRestartExclusions</a>


名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
イ ア ン ト に よ つ て 無 視 さ れ る レ ジ ス ト リ ー ・ キ ー X に あ る 文 字 列。 文 字	フォー ム				
	コン ポー ネン トの 再 起 動 が 必 要	いい え			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
列はセミコロンの区切り、文字列の最後はセミコロンので終了				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>る必要がありません (「exclude1;exclude2;exclude3;」など)。</p> <p>設定</p> <p><code>_BESClient_ActionManager_PendingRestartExclusions=;</code></p> <p>では、すべてのエントリが常に</p>				



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>コロンを含むパスであるため、Microsoft レジストリー・キー HKLM \System \CurrentControlSet \Control \Session ManagerPendingFileRenameOperations の</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>すべてのエントリが無視されます。</p> <p> <b>注:</b> 文字列は大文字/小文字が区</p>				

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
別されます。					
翻訳ファイルが存在する場合、この構成設定により	フォルト値	効)	コンポーネント	すべて	
	設定タイプ	ブール値			
	値の範囲	1 (有効)、0 (無効)			
	使用可能なタスク	はい			
	プラットフォーム	Linux、Unix			
	コンポーネン	はい			

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
BigFix クライアントは英語以外のメッセージを表示できません (TEM 6.0+)。	トの再起動が必要				

## アクション管理

このセクションで説明する設定を BigFix クライアント上で行って、アクションをローカルに実行する方法を構成します。

### クライアント上のデータのダウンロードに影響する設定

1 つ以上のファイルのダウンロードが必要なアクションを実行する際、アクションに関連するダウンロードの合計サイズが `_BESClient_Download_SizeLimitMB` で設定された値を超える場合、ターゲット・エージェントはクライアントでのアクションの実行を阻止し、クライアントは優先されるリレーに接続されません。

サーバーにインストールされたクライアントおよびクライアント/リレーは、`_BESClient_Download_SizeLimitMB` 設定を考慮しないため、ダウンロードは常に許可されます (リレーがアクティブな場合、リレー/クライアントで条件は `true` です)。

接続されているリレーは、次の場合に優先されるリレーとなります。

- クライアントに関連するリレー選択が手動リレー選択で、接続されているリレーがプライマリーまたはセカンダリー・リレーである場合。
- クライアントに関連するリレー選択がアフィリエーションによる自動選択で、接続されているリレーがアフィリエーション・リストに属するアフィリエーション・グループのメンバーである場合。アフィリエーション・リストに属するアフィリエーション・グループの数は、`_BESClient_PreferredRelay_MaxAffiliationsToCheck` 設定を使用して構成できます。特別なアフィリエーション・グループ「\*」は、優先されるリレーの設定には使用されません。
- 接続されているリレーが、クライアントの同じサブネットワーク内にあるか、クライアントからリレーへのネットワーク・ホップ数が `_BESClient_PreferredRelay_MaximumHopCount` 設定で構成されている値よりも小さい場合。この場合、クライアントで選択されたリレー関連付け方法からの依存性はありません。

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<code>_BESClient_PreferredRelay_MaxAffiliationsToCheck</code>	デフォルト値		9.5.9 以降	

名前/説明	値		影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
この設定を使用して、優先されるリレーを評価する際に考慮する、アフィリエーション・リストに属するアフィリエーション・	設定タイプ	数値			
	値の範囲	1 ~ 255			
	使用可能なタスク	いいえ			
	コンポーネントの再起動が必要	いいえ			


名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
グループの数を指定します。デフォルトでは、アフィリエーション・リストの最初のグループの任意のメンバーが優先				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
されるリレーとなります。				
<b>_BESClient_PreferedRelay(MaximumHopCount)</b>			9.5.9 以降	
この設定を使用して、クライアントから優先されるリレーへの最大ネットワーク・ホップ数を指定	ルト値	接サブネットワーク)		
	設定タイプ	数値 (ホップ数)		
	値の範囲	0 ~ 255		
	使用可能なタスク	いいえ		
	コンポーネントの再起動が必要	いいえ		



名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
し ま す。 ク ラ イ ア ン ト か ら 優 先 さ れ る リ レ ー へ の ネ ッ ト ワ ー ク ・ ホ ッ プ 数 は、 こ の 設 定 で 指 定 さ れ た 値 よ り も 小 さ く な け ね ば な り				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
ません。 デフォルトでは、接続されているリレーがクライアントの同じサブネットワーク内にある場合、優先されるリレーとな				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<p>りま す。</p> <p> <b>注:</b> 値を 0に 設定 する と、 同じ サブ ネッ ト ワー ク内 にあ るリ レー は 優先 され るリ レー では ない と見 なさ れま す。</p>				

クライアント上の wait および waithidden コマンドに影響する設定

アクションの一部として [wait](#) コマンドを使用して、次の actionscript コマンドに進むまで、特定のプロセスまたはプログラムの完了を待機することができます。 [waithidden](#) コマンドを使用して、プロセスまたはプログラムを非表示ウィンドウで実行することもできます。 wait コマンドを定義する際、オプションで [override](#) セクションを指定して、ターゲット・クライアントで実行時に適用される、キーワードで表される一部のデフォルト動作を変更することができます。この操作を行った場合、異なる動作が適用されるのは、アクションを実行するすべてのクライアント上で wait または waithidden コマンドによってトリガーされるプログラムまたはプロセスのみです。特定の wait または waithidden コマンド定義の override セクションで違うように指定されている場合を除いて、次の表に示す設定により、wait または waithidden コマンドによってトリガーされるすべてのプログラムまたはプロセスに対する、特定のクライアントでのタイムアウトおよび後処理のデフォルト動作を定義できます。

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
この設定を使用して、特定のクラ	_BESClient_ActionManager_OverrideTimeoutSeconds	デフォルト値	クライアント	以降	
	設定タイプ	数値 (秒)			
	使用可能なタスク	いいえ			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
イアント上でアクション処理が <a href="#">wait</a> または <a href="#">waithidden</a> コマンドのプロセスが完了するのをタイムアウト				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>ウトするまで待機すべき秒数を指定します。タイムアウトが経過すると、後処理で指定され</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>た動作が <a href="#">wait</a> または <a href="#">waithidden</a> コマンドのプロセスに適用され、アクション全体が処理を停止し</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照						
<p>て## ### ## ## ##ステータスで終了します。</p>										
<p><b>_BESClient_ActionManager_OverrideDisposition</b></p> <p>この設定を使用して、タイムアウトが経</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="440 1341 565 1446">ルト値</td> <td data-bbox="565 1341 688 1446"></td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 1446 565 1608">設定タイプ</td> <td data-bbox="565 1446 688 1608">String (ストリング)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 1608 565 1761">使用可能なタスク</td> <td data-bbox="565 1608 688 1761">いいえ</td> </tr> </table>	ルト値		設定タイプ	String (ストリング)	使用可能なタスク	いいえ	バー	以降	
ルト値										
設定タイプ	String (ストリング)									
使用可能なタスク	いいえ									



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>過した後、<a href="#">wait</a> または <a href="#">waithidden</a> コマンドによってトリガーされたプロセスまたはプロセスに</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
対して、特定のクライアント上で行う操作を指定します。使用可能な値を以下に示します。				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<ul style="list-style-type: none"> <li>中止。残りのアクションから wait または waithidden コマンドの</li> </ul>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>プロセスの関連付けを解除します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>終了。wait</li> <li>または waithidden</li> </ul>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
コマンドのプロセスを停止します。				

[上 \( ページ 168 \)](#)

## クライアント・ファイルのアーカイブ

BigFix クライアントから複数のファイルを 1 つのアーカイブに収集し、それらをリレー・システム経由でサーバーに移動することができます。こうすることで、BigFix 管理者は、特定の管理対象コンピューターのデータを自動的にログに記録することができます。

詳細については、[BigFix でのクライアント・ファイルのアーカイブ \( \(ページ\) 159\)](#)を参照してください。

## Archive Manager

Archive Manager の詳しい説明については、[Archive Manager \( \(ページ\) 160\)](#)を参照してください。

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
_BESClient_ArchiveManager_OperatingMode  OperatingMode で は、 アーカイブのスタイルを指定して、定期的アーカイブまたはトリ	値 設定タイプ 値の範囲	数値  • 0- すべてのアーカイブ操作を無効に	イア 以降	<a href="#">Archive Manager (##### 160)</a>

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>ガー に よる アー カイブ を可 能に しま す。</p>		<p>する</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 1 - BESClient_ArchiveManager_IntervalSeconds</li> </ul> <p>で 指 定 さ れ た 期 間 で 自 動 的 に 実 行 す る</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 2 - archive now</li> </ul> <p>ア</p>			<p>参照</p>

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
		クシヨ ン・ コ マ ン ド を 有 効 化 す る。 カ ス タ ム ・ ア ク シ ヨ ン が ク ラ イ		



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
		アント属性をアーカイブ・ファイルに送信できるようにするに		

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
		は、を必ず2に設定してください。	OperatingMode		
<p><b>&lt;tag&gt;</b></p> <p>この設定(またはオプションの</p>	<p>使用可能なタスク</p>	<p>いいえ</p>		<p>9.2以降</p>	<p><a href="#">Archive Manager (##### 160)</a></p>

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>タグが付いた設定のグループ) は、アーカイブされるファイルを指定します。この方法では、複数の名前</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>付き バツ チ・ ファ イル を指 定で きま す。 各設 定の 先頭 は 「_BESClient_ArchiveManager_FileSet-」、 末 尾は バツ チ名 (&lt;tag&gt; の部 分) にな りま す。</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>各設定の値は、クライアント・ファイル・システム上のパスです。この値には、単一のファイルを指</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
定することも (この場合、そのファイルがアーカイブに含まれます)、単一のディレクトリーを指定するこ				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
とも (この場合、ディレクトリー内のすべてのファイルがアーカイブに含まれます)、ワイルドカードで終				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
わるディレクトリー・パスを指定することもできます(この場合、そのワイルドカードに一致するディレクト				



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>リー内のすべてのファイルがアーカイブに含まれます)。例えば、一時ログ・フォルダー内のすべての口</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>グ・ファイルを表す設定</p> <p><code>_BESClient_ArchiveManager_FileSet-</code></p> <p>(log)</p> <p>の値は、<code>c:templog</code>のようになります。ダッシュ (-) より後の部分は、ファイルが</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>ルート・サーバーで解凍される際に、ファイルのデフォルトの接頭部として使用されます。したがって、c:templog フォ</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照						
<p>ル ダー 内の x.log とい う名 前の ファ イル は、 (Log)x.log とし て解 凍さ れま す。</p>										
<p><b>_BESClient_ArchiveManager_SendAll</b></p> <p>こ の設 定を 使用 する と、 変更 され</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="440 1394 561 1499">バリエーション</td> <td data-bbox="561 1394 688 1499">0</td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 1499 561 1604">設定タイプ</td> <td data-bbox="561 1499 688 1604">ブール値</td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 1604 561 1873">値の範囲</td> <td data-bbox="561 1604 688 1873">• 0 - 最後のアー</td> </tr> </table>	バリエーション	0	設定タイプ	ブール値	値の範囲	• 0 - 最後のアー	クライアント	9.2以降	<a href="#">Archive Manager (##### 160)</a>
バリエーション	0									
設定タイプ	ブール値									
値の範囲	• 0 - 最後のアー									

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>たアーカイブだけを送信して、冗長なアップロードを防ぐことができます。以下に、この設定で使用</p>		<p>カ イ ブ 操 作 以 降 に 変 更 さ れ た フ ア イ ル だ け を 送 信 す る。 •1- フ ア</p>			

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>きる2つの値を示します。ほとんどのアプリケーションには、デフォルト値の0が推奨されます。</p>		<p>イルが変更されていなくても、すべてのファイルを送信する。</p>			

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
	使用可能なタスク	いいえ			
<p><code>_BESClient_ArchiveManager_MaxArchiveSize</code></p> <p>この設定は、アップロードするアーカイブのサイズ (バイト数) を制限します。通</p>	<p>ルト値</p>	<p>(100 万バイト)。Endpoint Manager バージョン 8.0 以降、ファイル・システムは 64 ビットです。そのため、実際の最大ファイル・サイズは <math>2^{64}</math> (2</p>	<p>イア以降</p>	<p>以降</p>	<p><a href="#">Archive Manager (##### 160)</a></p>

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
常のアーカイブは複数のファイルから構成されるため、アーカイブ・サイズはファイル・サイズの合計にな		の 64 乗) - 1 になり、大きなサイズのファイルにも十分に対応することができます。			
	設定タイプ	数値			
	値の範囲	$0 - (2^{64} - 1)$			
	使用可能なタスク	いいえ			



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>り ま す。 制 限 を 超 え る 場 合 、 Archive Manager は イン デッ ク ス・ ファ イル の み が 含 ま れ る アー カイ ブ を 作成 して アッ</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照				
<p>プロードします。このインデックスには、次のヘッダー行が含まれません。MaxArchiveSize: Exceeded Copy。</p>								
<p><b>_BESClient_ArchiveManagerIntervalSeconds</b> OperatingMode が 1に 設定</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="440 1598 565 1759">ルット値</td> <td data-bbox="565 1598 688 1759">秒 (24 時間)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 1759 565 1862">設定タイプ</td> <td data-bbox="565 1759 688 1862">数値</td> </tr> </table>	ルット値	秒 (24 時間)	設定タイプ	数値	インター	以降	<a href="#">Archive Manager (##### 160)</a>
ルット値	秒 (24 時間)							
設定タイプ	数値							

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>されている場合、この設定はクライアントがアーカイブをトリガーする間隔を決定します。</p>	<p>値の範囲</p>	<p>0 ~ 4294967295</p>			
	<p>使用可能なタスク</p>	<p>いいえ</p>			

[上 \( ページ 168 \)](#)

**PostFile**

PostFile プログラムは、Upload Manager によって送信されたファイルのチャンクを受け取り、それをファイルの独自のコピーに追加します。Upload Manager では、送信されるバイトの範囲と、ファイル名として使用される、ファイルの sha1 を指定します。このコンポーネントに関連する構成設定について詳しくは、[BigFix 構成設定 \( \(ページ\) 166\)](#)の「[PostFile \( \(ページ\) 251\)](#)」を参照してください。

詳細については、「[PostFile \( \(ページ\) 162\)](#)」を参照してください。

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照										
BigFix の PostFile コンポーネントは、この設定を使用して着信データの	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="446 907 560 1003">_BESRelay_PostFile_Throttle (KBPS)</td> <td data-bbox="560 907 677 1003">不可)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="446 1003 560 1100">ルト値</td> <td data-bbox="560 1003 677 1100">数値</td> </tr> <tr> <td data-bbox="446 1100 560 1197">設定タイプ</td> <td data-bbox="560 1100 677 1197">(KBPS)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="446 1197 560 1293">値の範囲</td> <td data-bbox="560 1197 677 1293">1 ~ 65536</td> </tr> <tr> <td data-bbox="446 1293 560 1369">使用可能なタスク</td> <td data-bbox="560 1293 677 1369">いいえ</td> </tr> </table>	_BESRelay_PostFile_Throttle (KBPS)	不可)	ルト値	数値	設定タイプ	(KBPS)	値の範囲	1 ~ 65536	使用可能なタスク	いいえ	リレー、ルーター・サーバー	9.2 以降	<a href="#">帯域幅スロットリング (##### 976)</a>
_BESRelay_PostFile_Throttle (KBPS)	不可)													
ルト値	数値													
設定タイプ	(KBPS)													
値の範囲	1 ~ 65536													
使用可能なタスク	いいえ													

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>ロツトリング値を制御します。この設定の値は、さまざまな接続速度やその他のネットワークの異常に応じて</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>調整できません。PostFile は Upload Manager との通信時にこの値を渡します。2つのコンピューター間でこれらの設定が競合す</p>				

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>る場合、小さい方の値が優先されます。</p>					
<p><b>_BESRelay_PostFileChunkSize</b></p> <p>BigFix の PostFile コンポーネントは、この設定を使用して着信デー</p>	<p>デフォルト値</p> <p>設定タイプ</p> <p>値の範囲</p>	<p>数値 (バイト)</p> <p>1024 - (2<sup>64</sup> - 1)</p> <p>1 から 1023 までの値は 1024 にリセットされま</p> <p>す。</p>	<p>リレー、サーバー</p>	<p>9.2 以降</p>	<p><a href="#">帯域幅スロットリング (##### 976)</a></p>

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>他のチャック・サイズを制御します。この設定の値は、さまざまな接続速度やその他のネットワークの異常</p>	使用可能なタスク	いいえ			



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>に応じて調整できません。PostFile は Upload Manager との通信時にこの値を渡します。2 つのコンピューター間でこれらの設定</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
が競合する場合、小さい方の値が優先されます。				

[上 \( \(ページ\) 168\)](#)


## Upload Manager

Upload Manager は、PostFile プログラムへのチャンク形式でのファイル送信を調整します。帯域幅を確保するためにアップロード・データ・フローをスロットリングすることができます。ファイル・システムは 64 ビットを使用しており、最大バイト長  $2^{64} - 1$  のファイル・サイズにも十分に対応できます。

**注:** BigFix Inventory および BigFix License Metric Tool は、BigFix クライアントから大量のデータをアップロードします。これらの 2 つのアプリケーションのいずれかを使用する予定の場合、次の表で説明する設定 `_BESRelay_UploadManager_BufferDirectoryMaxSize` および `_BESRelay_UploadManager_BufferDirectoryMaxCount` の値を指定して、ディスク・スペース使用量を制限することをお勧めします。

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
ファイルとしてリレーにアップロードする「コンソール・アップロード」	_BESRelay_UploadManager.AllowConsoleUploads	(無効)	レール・サーバー	以降	<a href="#">Upload Manager (##### 162)</a>
	設定タイプ	ブール値			
	値の範囲	0 ~ 1			
	使用可能なタスク	いいえ			
	コンポーネントの再起動が必要	いいえ			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
る機能を制御します。再び有効にするには、1に設定します。				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p> <b>注:</b> リレーが一切認証を必要としないため、このタイプのアッ</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照		
<p>プロードを有効にすることは安全ではありません。</p>						
<p><code>_BESClient_UploadManager</code></p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="396 1703 586 1745">設定タイプ</td> <td data-bbox="586 1703 781 1745">String (ストリング)</td> </tr> </table>	設定タイプ	String (ストリング)	<p>クライアント</p>	<p>9.2以降</p>	<p><a href="#">Upload Manager (##### 162)</a></p>
設定タイプ	String (ストリング)					

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
の入力バッテリー・ディレクトリ。このディレクトリは、クライアント・	使用可能なタスク	いいえ			
	コンポーネントの再起動が必要	いいえ			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
コンピューター上のBigFixクライアント・フォルダー内にあります。				



名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p><b>_BESClient_UploadManagerChunkSize</b></p> <p>アップロードは一度に1つのチャンクで実行されます。この</p>	値	13076 (128KB)	クライアント	9.2以降	<a href="#">Upload Manager (##### 162)</a>
	設定タイプ	数値 (バイト)			
	値の範囲	1024 ~ 4294967295  注: 値を1024未満に設定すると、自動的に1024にリセットされます。			
	使用可能なタスク	いいえ			
	コンポーネントの再起動が必要	はい			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
コンピューターとアップストリーム・コンピューターとの間で値の不一致				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>が生じた場合、チャックのサイズは2つのうち小さい方の</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
値に設定されます。ローカル・チャンク・サイズ設定はバイト単				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照								
位で指定されます。												
<p><b>_BESClient_UploadManager_Throttle</b> (無効)</p> <p>各チャネルがアップロードされた後に、Upload Manager</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="396 1031 586 1083">設定タイプ</td> <td data-bbox="586 1031 777 1083">数値 (KBPS)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="396 1083 586 1136">値の範囲</td> <td data-bbox="586 1083 777 1136">1 ~ 65536</td> </tr> <tr> <td data-bbox="396 1136 586 1188">使用可能なタスク</td> <td data-bbox="586 1136 777 1188">いいえ</td> </tr> <tr> <td data-bbox="396 1188 586 1455">コンポーネントの再起動が必要</td> <td data-bbox="586 1188 777 1455">いいえ</td> </tr> </table>	設定タイプ	数値 (KBPS)	値の範囲	1 ~ 65536	使用可能なタスク	いいえ	コンポーネントの再起動が必要	いいえ	クライアント	9.2以降	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">Upload Manager (##### 162)</a></li> <li>• <a href="#">帯域幅スロットリング (##### 976)</a></li> </ul>
設定タイプ	数値 (KBPS)											
値の範囲	1 ~ 65536											
使用可能なタスク	いいえ											
コンポーネントの再起動が必要	いいえ											

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
は、1 秒当たりのキロバイト単位のスロットリング速度 (ThrottleKBPS) を				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
維持するために、スリープする時間を計算します。これによ				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
り、ネットワークのボトルネックを補正できません。例えば、低速の				



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
VPN 経由でリレーに接続されている BigFix クライアントでは、そ				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
のネットワーク・セグメントでの帯域幅を最小限にするため				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
に、アップロードのスロットリング速度が低くなることがあります				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
ます。 この コン ピュー ター と アッ プ ス ト リー ム・ リ レー (ま た は サー バー) との				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>間で値の不一致が生じた場合は2つのうち小さい方の</p>	<p>ThrottleKBPS</p>			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照								
値に設定されます。												
BigFix クライアントと同じく、BigFix リレーにも	<table border="1"> <tr> <td colspan="2" data-bbox="402 1039 771 1081"><b>_BESRelay_UploadManager.BufferDirectory</b></td> </tr> <tr> <td data-bbox="402 1081 586 1188">設定タイプ</td> <td data-bbox="586 1081 771 1188">String (ストリング)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="402 1188 586 1295">使用可能なタスク</td> <td data-bbox="586 1188 771 1295">いいえ</td> </tr> <tr> <td data-bbox="402 1295 586 1451">コンポーネントの再起動が必要</td> <td data-bbox="586 1295 771 1451">いいえ</td> </tr> </table>	<b>_BESRelay_UploadManager.BufferDirectory</b>		設定タイプ	String (ストリング)	使用可能なタスク	いいえ	コンポーネントの再起動が必要	いいえ	レール、サーバー	9.2以降	<a href="#">Upload Manager (##### 162)</a>
<b>_BESRelay_UploadManager.BufferDirectory</b>												
設定タイプ	String (ストリング)											
使用可能なタスク	いいえ											
コンポーネントの再起動が必要	いいえ											

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
Upload Manager およびバッファ・ディレクトリがあります。バッファ・ディレクトリ				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>のパスは、この設定によって指定されます。Upload Manager は、指定された</p>				



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
ディレクトリーの <code>shal</code> サブディレクトリー内のファイルをアップロード				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
します。ファイルは変更時刻でソートされてから、BigFix クライアン				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
トと同様に、帯域幅の要件を満たすためにチャック形式で				

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
アップロードされます。					
Upload Manager を使用して BigFix クライアントか	<code>_BESRelay_UploadManager_BufferDirectoryMaxSize</code>	レーおよび 9.5.4 まではサーバー $\cdot 2^{64} - 1$ 、9.5.5 以降はサーバー	レー、以降		<a href="#">Upload Manager (##### 162)</a>
	設定タイプ	数値 (バイト)			
	値の範囲	$0 \sim 2^{64} - 1$			
	使用可能なタスク	はい			
	コンポーネントの再起動が必要	いいえ			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>ら アッ プ ロー ド さ れ る デー タ を 保 管 す る た め に 使 用 で き る デー</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>スクの最大スペース容量を示します。この設定は、BigFix サーバーまた</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>は BigFix リレーで指定できません。BigFix トポロジにおけるシステムの</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
役割に応じて、この設定の動作は以下のように異なります				



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>ます。</p> <p><b>BigFix</b></p> <p>リレー</p> <p>最大ファイル・サイズとして <math>2^{64}</math> (2 の 64 乗)</p> <p>- 1 バ</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
イトまで設定できません。デフォルト値は1 GBです。新しいファ				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>メールを受信するたびに、この設定に対する検査が実行さ</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
れます。 <b>BigFix</b> サー バー デ フォ ルト では、この設定はシステムで指定				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>されていません。つまり、バッファオーバーフローの最大サイズは</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
無制限です。バッファードイレクトリーのしきい値サイズを定義す				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>るには、この設定を指定します。デフォルト値を復元するに</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>は、設定を解除する必要があります。BigFix サーバーは、15分ごとに、バッファ・</p>				




名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
ディレクトリーのサイズが _BESRelay_UploadManager_BufferDirectoryMaxSize に設定された値を超えている				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>かどうかを検査します。この検査が true である場合、BigFix サーバーは、</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
アップロードされるファイルをそれ以上受け入れません。ファイ				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
ルのアップロードを再開するには、設定の値を手動で変更す				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>るか、適切な Fixlet を使用して変更するか、バッファロー・ディレクトリーの</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>内容を減らしてください。</p> <p> <b>注:</b> バージョン 9.5 パッチ 5 以降、_BESRelay_UploadManager_BufferDirectoryMaxSize 検査は、</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
アップグレードを実行するための前提条件チェックの中にリス				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
ト さ れ ま す。 詳 し く は、Windows シ ス テ ム で の ア ッ プ グ レ ー ド (### ## ) ま た				



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>は Linux システムでのアップグレード(### ##)を参照してください。</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
Upload Manager バッファ・ディレクトリで保管可能なファイルの最大数を	BESRelay_UploadManager_BufferDirectoryMaxCount	とリレーの両方で10,000、バージョン9.5.4まで • $2^{64} - 1$ 、 サーバー (バージョン9.5.4以降)	レー、以降	<a href="#">Upload Manager (##### 162)</a>
	設定タイプ	数値		
	値の範囲	$0 \sim 2^{64} - 1$		
	使用可能なタスク	はい		
	コンポーネントの再起動が必要	いいえ		

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>示します。この設定は、BigFix サーバーまたは BigFix リレーで指定できます。BigFix</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
トポロジにおけるシステムの役割に応じて、この設定の				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>動作は以下のように異なります。</p> <p><b>BigFix</b></p> <p>リレー</p> <p>新しいファイルを</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
受信するたびに、この設定に対する検査が実行されます。				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<b>BigFix</b> サーバー デフォルトでは、この設定はシステムで指定されて				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
いません。つまり、バッファオーバーディレクトリ内のファイルの最大数は				



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
無制限です。バッファードイレクトリーに保管されるファイルの数に				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
対するしきい値を定義するには、この設定を指定します。				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
デフォルト値を復元するには、設定を解除する必要があります。				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>ます。</p> <p>BigFix サーバーは、15分ごとに、バッファードイレクトリーに保管されています。</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>る ア ッ プ ロ ー ド 済 み フ ァ イ ル の 数 が _BESRelay_UploadManager_BufferDirectoryMaxCount に 設 定 さ れ た 値 を 超 え</p>				


名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
ているかどうかをチェックします。このチェックが true である場合、BigFix				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
サーバーは、アップロードされるファイルをそれ以上受け入れませ				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
ん。 ファイルのアップロードを再開するには、設定の値を手動で				



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
変更するか、適切な Fixlet を使用して変更するか、バッファードイレク				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>トリーの内容を減らしてください。</p> <p> <b>注:</b> バージョン 9.5 パッチ 5 以降、<code>_BESRelay_UploadManager_BufferDirectoryMaxCount</code></p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>検査は、アップグレードを実行するための前提条件チェックの中</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
にリストされます。詳しくは、Windows システムでのアップグレード (###)				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>##  )ま  た  は  Linux  シ  ス  テ  ム  で  の  ア  ッ  グ  レ  ー  ド  (###  ##  )を  参  照  し  て  く</p>				


名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
だ さ い。				
こ の 設 定 は、Upload Manager が 処 理 で き る 最 大 圧 縮 フ ァ イ ル の	<b>_BESRelay_UploadManager2(CompressedFileMaxSize)</b>			<a href="#">Upload Manager (##### 162)</a>
	設定タイプ	数値	レ、以降	
	値の範囲	0 - 2 <sup>64</sup> - 1	ルー	
	使用可能なタスク	いいえ	ト・	
	コンポーネントの再起動が必要	いいえ	サー バー	

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
スペース量を示します。最大ファイル・サイズとして $2^{64}$ (2 の 64				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
乗) - 1 バイト まで 設定 でき ます。 この 値は サー バー にの み適				



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
用され、アップロードされたアーカイブの圧縮解除中に評価さ				

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
れます。					
アップロードは一度に1つのチャックで実行されます。	_BESRelay_UploadManager.ChunkSize (KB)	値	リレー、ルー・ト・サーバー	9.2以降	<a href="#">Upload Manager (##### 162)</a>
	設定タイプ	数値			
	値の範囲	1024 ~ 4294967295  注: 値を1024未満に設定すると、自動的に1024にリセットされます。			
	使用可能なタスク	いいえ			
	コンポーネントの再起動が必要	はい			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>す。 この コン ピュー ター と アッ プ ス ト リー ム・ コン ピュー ター と の 間 で 値 の</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
不一致が生じた場合、チャックのサイズは2つのうち小さ				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照									
<p>い方の値に設定されます。</p>													
<p>各チャックがアップロードされた</p>	<table border="1"> <tr> <td colspan="2" data-bbox="396 1184 586 1241"><b>_BESRelay_UploadManager_ThrottleKBPS</b> (無効)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="396 1241 586 1297">設定タイプ</td> <td data-bbox="586 1241 777 1297">数値 (KBPS)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="396 1297 586 1354">値の範囲</td> <td data-bbox="586 1297 777 1354">1 ~ 65536</td> </tr> <tr> <td data-bbox="396 1354 586 1451">使用可能なタスク</td> <td data-bbox="586 1354 777 1451">いいえ</td> </tr> <tr> <td data-bbox="396 1451 586 1608">コンポーネントの再起動が必要</td> <td data-bbox="586 1451 777 1608">いいえ</td> </tr> </table>	<b>_BESRelay_UploadManager_ThrottleKBPS</b> (無効)		設定タイプ	数値 (KBPS)	値の範囲	1 ~ 65536	使用可能なタスク	いいえ	コンポーネントの再起動が必要	いいえ	<p>9.2</p> <p>レー、以降 ルー ト・ サー バー</p>	<p><a href="#">Upload Manager (##### 162)</a></p>
<b>_BESRelay_UploadManager_ThrottleKBPS</b> (無効)													
設定タイプ	数値 (KBPS)												
値の範囲	1 ~ 65536												
使用可能なタスク	いいえ												
コンポーネントの再起動が必要	いいえ												

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
後に、Upload Manager は、1 秒当たりのキロバイト単位のスロットリング速度				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>度 (ThrottleKBPS) を維持するために、スリープする時間を計算します。こ</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
れにより、ネットワークのボトルネックを補正できません。例えば、				



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
低速のVPN経由でサーバーに接続されているBigFixリレーでは、その				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
ネットワーク・セグメントでの帯域幅を最小限にするために、				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
アップロードのスロットリング速度が低くなる可能性があります				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
ます。 このコンピューターとアップストリーム・サーバー(またはリレー)との				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>間で値の不一致が生じた場合は 2 つのうち小さい方の</p>	<p>ThrottleKBPS</p>			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
値に設定されます。デフォルト値は0で、スロットリングを使				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照						
用不可にします。										
アーカイブ・ファイルが累積される一方で、	<table border="1"> <tr> <td colspan="2" data-bbox="402 987 771 1031"><b>_BESRelay_UploadManager72(Clear)Hours</b></td> </tr> <tr> <td data-bbox="402 1031 586 1075">設定タイプ</td> <td data-bbox="586 1031 771 1075">数値</td> </tr> <tr> <td data-bbox="402 1075 586 1140">値の範囲</td> <td data-bbox="586 1075 771 1140">0 ~ 2<sup>32</sup> - 1</td> </tr> </table>	<b>_BESRelay_UploadManager72(Clear)Hours</b>		設定タイプ	数値	値の範囲	0 ~ 2 <sup>32</sup> - 1	レー、 ルー ト・ サー バー	9.2 以降	<a href="#">Upload Manager (##### 162)</a>
<b>_BESRelay_UploadManager72(Clear)Hours</b>										
設定タイプ	数値									
値の範囲	0 ~ 2 <sup>32</sup> - 1									

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
アップロードされない場合があります。これは、ネットワーク障害、				



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
サーバーのダウン、またはその他の通信上の問題で発生する				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
可能性があります。システムの過負荷を防ぐため、これら				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
の古いファイルは削除されるか、クリーンアップされます。この				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
設定は、ファイルが削除されるまでの期間を決定します。				

## コンテンツの収集

名前/説明	値		影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
この設定は、リレー (または DSA デプロイメントのルート・サーバー) がサイトの新規バージョンをチェックする合間に	BESRelay_GatherMirrorUpstreamCheckPeriodMinutes 以降	ルート値			
	設定タイプ	数値 (分数)			
	値の範囲	N/A			
	使用可能なタスク	いいえ			

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
待機する最小時間を制御します。完全な接続性を持つネットワークでは、新しいサイトが使用可能になるとリレーは必ず通知				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
を受信するため、このポーリング動作は重要ではありません。しかし、通知を受信し損ねた場合、リレーはこのポーリング動作に				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<p>よつて「挽回」することができません。頻繁にポーリングするマイナス面は、親に不必要な負荷がかかる可能性があります。</p>				



名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
ポーリングはクライアント要求への応答としてのみ行われるため、リリースの子がサイトを要求していない場合、ポーリング期間が				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
過ぎてもアップストリームに移動してサイトをチェックしません。この場合の「要求」は、サイトのステータスについての照会				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
を意味するため、いずれかのサイトを直接要求していない場合でも、クライアントからのコマンド・ポーリング要求によってこの				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
アップ スト リーム・ チェツ クを トリ ガー で きま す。 この 設定 は、 「リ レー 収 集間 隔」 を直 接 制御 する もの では あり ませ ん。 その				


名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
よう なも のは 存在 しな いた ため です。 リ レー は、 親 から 受信 した 通知 への 応答 とし て収 集要 求を 開始 する か、 い ず れか の子 から 受信				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
した 要求 を収 集す るの みで す。 ただ し、 リ レー に 多く の子 があ る場 合、 収 集要 求が 頻繁 に発 生す るた め、 最終 的に アッ プ スト				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
リレー・チェック間隔がこの設定で指定された最小時間に非常に近くなります。				
<b>_BESGather_Download_ChildParentFlag</b> BigFix リレーからファイルを要求されたら、ファ	デフォルト値 設定タイプ 値の範囲	サーバー: 0 (False) BigFix リレー: 1 (True) ブール 値 1 (True): 最初に BigFix	リレー、リレー 9.2 以降	<ul style="list-style-type: none"> <li>• プロキシ接続のセットアップ (### ## )</li> <li>• <a href="#">リレーはインターネットから直接パッチをダウンロードします。</a></li> <li>• <a href="#">リレーでインターネットから直接パッチ</a></li> </ul>

名前/説明	値		影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
イル を BigFix サー バー か らダ ウン ロー ド する か、 イン ター ネッ トか ら直 接ダ ウン ロー ド する こと がで きま す。 この 設定 が1 (True)		サー バーを 確認し てファ イル をダウ ンロー ド、0 (False): ファ イル をダウ ンロー ドする 際に BigFix サー バーを 確認し ない			<a href="#">をダウンロードする方法</a>
	使用可 能なタ スク	いいえ			




名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<p>に設定されている場合、BigFix リレーはまず BigFix サーバーからファイルをダウンロードしようとします。</p> <p> <b>注:</b> BigFix サーバーでは、</p>				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照						
この設定は0 (False)のままにする必要がありません。										
<b>_BESGather_Download_ChildInternetFlag</b> BigFix リレーからファイルが要求されたら、BigFix サーバーからでなくインターネット	<table border="1"> <tr> <td>ルト値</td> <td>サーバー: 1 (True) BigFix リレー: 0 (False)</td> </tr> <tr> <td>設定タイプ</td> <td>ブール値</td> </tr> <tr> <td>値の範囲</td> <td>1 (True): インターネットから直接ファイルをダウンロード 0 (False):</td> </tr> </table>	ルト値	サーバー: 1 (True) BigFix リレー: 0 (False)	設定タイプ	ブール値	値の範囲	1 (True): インターネットから直接ファイルをダウンロード 0 (False):	リレー	9.2 以降	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">プロキシ接続のセットアップ (### #)</a></li> <li>• <a href="#">リレーはインターネットから直接パッチをダウンロードします。</a></li> <li>• <a href="#">リレーでインターネットから直接パッチをダウンロードする方法</a></li> </ul>
ルト値	サーバー: 1 (True) BigFix リレー: 0 (False)									
設定タイプ	ブール値									
値の範囲	1 (True): インターネットから直接ファイルをダウンロード 0 (False):									

名前/説明	値		影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
ト から 直接 ファ イル をダ ウン ロー ドで きま す。 この 設定 が1 (True) に設 定さ れて いる 場 合、BigFix リ レー はま ず BigFix サー バー に接 続し		イン ター ネット から直 接ファ イルを ダウン ロード しない			
	使用可 能なタ スク	いいえ			

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<p>よう とし (_BESGather_Download_CheckParentFlag が 1に 設定 され てい る場 合)、BigFix サー バー から のダ ウン ロー ドに 失敗 する と、 次に イン ター ネッ トか ら直 接ダ ウン ロー ド</p>				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照								
<p>します。</p> <p> <b>注:</b> BigFix サー バー で は、 この 設定 は1 (True) のま まに する 必要 があ りま す。</p>												
<p><b>_BESGather_Download_CacheLimit</b></p> <p>BigFix 収 集で は、 ダ ウン ロー ドし た</p>	<table border="1"> <tr> <td>ルト値</td> <td></td> </tr> <tr> <td>設定タイプ</td> <td>数値 (MB)</td> </tr> <tr> <td>値の範囲</td> <td>1 ~ 4,294,967,296</td> </tr> <tr> <td>使用可能なタスク</td> <td>はい</td> </tr> </table>	ルト値		設定タイプ	数値 (MB)	値の範囲	1 ~ 4,294,967,296	使用可能なタスク	はい	<p>バー、リレー</p>	<p>9.2 以降</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">BigFix Actions</a></li> <li>• <a href="#">ファイルのキャッシング</a></li> </ul>
ルト値												
設定タイプ	数値 (MB)											
値の範囲	1 ~ 4,294,967,296											
使用可能なタスク	はい											

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
ファイル を BigFix サー バー また は BigFix リ レー・ コン ピュー ター に キャッ シュ する た め、 アク シヨ ンを再 発行 する 場合 に、 ファ イル				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
を再びダウンロードする必要はありません。この設定は、古いファイルを上書きする前にキャッシュするMB数を指定します。キャッシュ				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
が いっ ぱ い に な る と、 最 も 長 い 間 使 用 さ れ て い な い フ ァ イ ル が 置 き 換 え ら れ ま す。 こ の 設 定 で は BES リ レー サー ビ ス を 再 起 動				



名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照								
する必要がありません。												
<b>_BESGather_Download_RetryMinutes</b>		サーバー、リレー	9.2 以降									
BigFix 収集 がア ク シヨ ン 中に インター ネットま たは 親か らの ファイル のダ ウン ロー ドに 失 敗し た場 合、	<table border="1"> <tr> <td>ルト値</td> <td></td> </tr> <tr> <td>設定タイプ</td> <td>数値 (分)</td> </tr> <tr> <td>値の範囲</td> <td>0 ~ 1440</td> </tr> <tr> <td>使用可能なタスク</td> <td>いいえ</td> </tr> </table>	ルト値		設定タイプ	数値 (分)	値の範囲	0 ~ 1440	使用可能なタスク	いいえ			
ルト値												
設定タイプ	数値 (分)											
値の範囲	0 ~ 1440											
使用可能なタスク	いいえ											

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
指定された時間だけ待機してから再試行します。				
<b>_BESGather_Download_RetryLimit</b>		サーバー、リレー	9.2 以降	
アクション中に BigFix 収集がインターネットまたは親からのファイルのダウンロード	ルト値			
	設定タイプ	数値 (再試行制限)		
	値の範囲	最大 32 (整数)		
	使用可能なタスク	いいえ		

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
ロードに失敗した場合、指定された回数だけ再試行します (毎回、前回再試行を待機した時間の2倍の時間を待機します)。				

名前/説明	値		影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
BigFix 収集 は1 つの 「メ イ ン・ チャ ネ ル」 と1 つの 「シ ン・ チャ ネ ル」 を使 用し て、 一度 に2 つの ファ イル を 同時 にダ ウン	Default	500,000	リレー	9.2 以降	
	ルト値				
	設定タイプ	数値 (バイト)			
	値の範囲	1 ~ 100,000,000 (シン・ チャネ ルを 無効に するに は、0 に 設定し ます)			
	使用可能なタスク	いいえ			

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
ロードできます。メイン・チャンネルはすべてのダウンロードに使用されますが、メイン・チャンネルが現在大きいファイルをダウンロード				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
ド中の場合、ダウンロード・サイズが指定されたしきい値よりも小さければ、シン・チャネルを使用して小さいファイルをダウン				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
ロードできません。この設定が高く指定されている場合、BigFix 収集はシン・チャネルを使用して大きいファイルをダウンロードしますが、				


名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
ファイル を1 つず つダ ウン ロー ドす るの では なく、 同時 に 2つ の大 きい ファ イル をダ ウン ロー ドす るた め (そ れぞ れが 帯域 幅の				



名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
半分 を 使 用)、 ア ク シ ョ ン が 遅 く な る こ と が あ り ま す。 こ の 設 定 が 低 く 指 定 さ れ て い る 場 合、 シ ン ・ チャ ネル は 非 常 に 小 さい ファ				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
イル のダ ウン ロー ド にの み使 用さ れま す。				
<b>_BESGather_Download_InactivityTimeout</b> 、リレー			9.2 以降	
BigFix 収集 サー ビ スが イン ター ネッ ト また は親 から ファ イル をダ ウン ロー ドす る	ルト値 設定タ イプ 値の範 囲 使用可 能なタ スク	数値 (秒) 0 ~ 4,294,967,296 (タイ ムア ウト・ メカニ ズムを 無効に するに は、0 に 設定) いいえ		

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<p>際、ネットワークの問題、切断などにより、無操作状態が発生することがあります。無操作状態が発生している場合、BigFix 収集はダ</p>				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<p>ウンロードを中止する前に指定された秒数の間、データを受信するのを待機します。</p> <p> <b>注:</b> この設定は、BigFixバージョン9.0から非推奨に</p>				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
なり まし た。				
この 値に よっ て、 接続 状態 にお ける 最後 のアク ティ ビ ティー から の最 大経 過時 間を 指定 しま す。BigFix 収集 サー ビス は指	<b>_BESGather_Download_TimeoutSeconds</b>	サーバー、リレー	9.5.7 以降	
	ルト値			
	設定タイプ	数値 (秒)		
	値の範囲	0 ~ 4,294,967,296		
	使用可能なタスク	いいえ		

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
定された秒数だけ待機してから、ダウンロード操作を中止します。ダウンロード接続確立後、最後のアクティビティから				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照						
<p>の時間がこのパラメーターで設定した値よりも大きくなった場合、ダウンロード操作は停止します。</p>										
<p><b>_GatherService_ForwardGet_UserAgentOverride</b></p> <p>この文字列は、BES 収集サー</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="440 1495 561 1600">ルト値</td> <td data-bbox="561 1495 688 1600"></td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 1600 561 1759">設定タイプ</td> <td data-bbox="561 1600 688 1759">String (ストリング)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 1759 561 1873">値の範囲</td> <td data-bbox="561 1759 688 1873">N/A</td> </tr> </table>	ルト値		設定タイプ	String (ストリング)	値の範囲	N/A	<p><b>ForwardGet_UserAgentOverride</b></p> <p>レー、エージェント</p>	<p>9.2 以降</p>	<p><a href="#">IV85244: USER AGENT NOT ALWAYS SET TO THE VALUE SPECIFIED WITH _GATHERSERVICE_FORWARDGET</a></p>
ルト値										
設定タイプ	String (ストリング)									
値の範囲	N/A									

名前/説明	値		影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
ビス が使 用す る HTTP ヘッ ダー の User- Agent: 文字 列を 決定 しま す。 これ は、 厳格 なプ ロキ シー 構成 を機 能さ せる のに 役立 ちま す。	使用可 能なタ スク	いいえ			
	コン ポーネ ントの 再起動 が必要	はい			



## HTTPS

名前/説明	値		影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
_BESGather_UseHttps BigFix サー バー 上で 直接 また はエ アー・ ギャッ プ環 境内 で、HTTPS プロ トコ ルを 使用 して ライ セン ス更 新を 取得 した り外 部サ イト を収 集し	2		サーバー	9.5 以降	<a href="#">収集のための HTTPS のカスタ マイズ (##### 80)</a>
	ルト値				
	設定タ イプ	ブール 値			
値の範 囲	•0- サー バー は URL で 定 義 さ れ て い る プ ロ ト コ ル を 使 用 し ま す。				

名前/説明	値		影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<p>たり でき ま す。HTTPS プロ トコ ルを 有効 にし るに は、 クラ イ アン ト・ キー ワー ド _BESGather_Use_Https を 1に 設定 しま す。HTTPS を有 効に した ら、 信用</p>		<p>・1- サー バー は、 プロ トコ ルの み を 使 用 し て す べ て の サ イ ト の 収 集 を 試 み</p>	<p>HTTPS</p>		

名前/説明	値		影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<p>する 認証 パッ ケー ジを 作成 また はダ ウン ロー ドで きま す。BigFix サー バー は、 収集 プロ セス の間 に証 明書 を検 証し ます。</p>		<p>ま す。 •2- サー バー は、 最初 に HTTPS プロ トコ ルを 使用 して すべ ての サイ トの 収集</p>			

名前/説明	値		影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
		を試み ます。 を 使用 して 収 集 で き な い サ イ ト が あ っ た 場 合、 サ ー バ ー は HTT P プ ロ	HTTPS		

名前/説明	値		影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
		トコルを使用してもう一度収集を試みます。			
	使用可能なタスク	いいえ			
	コンポーネントの再起動が必要	はい			
<b>_BESGather_CACert</b> ダウン	フォルト値	なし	サーバー	9.5 以降	<a href="#">収集のための HTTPS のカスタ</a>

名前/説明	値		影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
ロード済みの信頼された証明書セットのパス。	設定タイプ	文字列 (パス)			<a href="#">マイズ (#####80)</a>

[上 \( \(ページ\) 168\)](#)


## デプロイメントのエンコーディング

名前/説明	値		影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<b>_BESClient_DeploymentEncoding_IANAName</b> サーバーにインストールされている BigFix のバージョンが	デフォルト値		クライアント、サーバー	すべて	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">TEM support for Unicode character</a></li> <li>• <a href="#">Login BigFix Console failed with error - 'The application's codepage (932) is not same as server's codepage (1252)'</a></li> </ul>
	設定タイプ	String (ストリング)			
	値の範囲	標準 IANA 値			
	プラットフォーム	すべて			
	コンポーネントの	はい			

名前/説明	値		影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<p>V9.5 以前 の環 境で は、 各 BigFix V9.5 クラ イア ント でこ の設 定 が必 須で す。 イン フラ ストラク チャー との 通信 時に 使用 する デプ ロイ メン</p>	再起動 が必要				<p>• BigFix クライ アントの後方 互換性 (### ## )</p>

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<p>ト・エンコードを指定します。Mac クライアントでは、この設定のデフォルト値は「windows-1252」です。その他の使用可能な値を以下に示します。</p>				



名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<p>す。windows-874、windows-932/ Shift_JIS、windows-936/ GBK、windows-949/ windows-949-2000、windows-950/ Big5、windows-1250、windows-1251、windows-1252、windows-1253、windows-1254、wind</p> <p> <b>注:</b> この 設定 は バー ジヨ ン 9.5 か らク ライ アン ト側 で無 視さ れま す。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Mac お よ び Android で は</li> </ul>				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
UTF-8 を 使用し、この オプションを 設定しても 変更できませ ん。 • Unix の デ フォ ルト				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<p>は、クライアントのロケール環境変数 (例: LC_ALL or LC_CTYPE) によって判別されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Windows の</li> </ul>				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
デフォルトは、Windows のコントロール・ パネルで選択した 非 Unicode プログラムの言語に				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<p>よつて判別されます。</p> <p>サーバー側では、Linuxでこの設定が必要になり、設定がないと特定の警告がログに記録されます。_BESClient_FxfEncoding_IANANameのデ</p>				


名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
フォルト値として使用されます。				

[上 \( \(ページ\) 168\)](#)

## ロギング

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<b>_BESClient_Msg_Detail</b>	0 (なし)	クライアント	9.2 以降	<a href="#">Data Collection: BigFix Client</a>
この構成設定により、BigFix クライアントは BigFix クライアント・アクティ	フォルト値 設定タイプ 値の範囲	数値 (詳細レベル) 0 ~ 10000 • 0 - なし • 1 - 重大なエラー		

名前/説明	値		影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
ビ ティー に関 する 情報 を示 すロ グ をデ バッ グで きま す。 詳 細さ のレ ベル が高 いほ ど、 より 詳 細な メッ セー ジが ファ イル およ び		・10 -デ バッ グ ・10000 -詳 細			
	使用可 能なタ スク	はい			

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<p>NT イ ベン ト・ ログ に記 載さ れま す。</p> <p> <b>注:</b> この 値を 高く 設定 しす ぎる と、 ロ グ・ ファ イル が急 速に 大き くな り、 ディ スク ・ ス</p>				



名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照	
ペー スガ ー 杯に なっ て しま う可 能性 があ りま す。					
<b>_BESClient_EMSFile</b> アク ティ ビ ティ ー・ メッ セー ジを 格納 する ファ イル の絶 対パ ス。文 字列 が空	設定 ファイル 使用可 能なタ スク	文字列 (絶対パ ス) はい	クライアント	9.2 以降	<a href="#">Data Collection: BigFix Client</a>

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
で、 コン ピュー ター が Win9x でな い場 合、 アク ティ ビ ティ ー・ メッ セー ジは NT イ ベン ト・ ログ に追 加さ れま す。 この ファ イル の名 前				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
また はパ スを 変更 する 場合 は、 文字 の表 示に 関す る問 題を 防ぐ ため に、 標準 ASCII 文字 だけ を 使用 し、 拡張 ASCII 文字 は使 用し ない でく				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照								
<p>ださい。</p> <p> <b>注:</b> このオプションを使用するには、_BESClient_EMsg_Detail設定を0より大きくする必要があります。</p>												
<p><b>_BESClient_Log_MaxSize</b></p> <p>日次ログ・ファイルのサイズ</p>	<table border="1"> <tr> <td>デフォルト値</td> <td>512000</td> </tr> <tr> <td>設定タイプ</td> <td>数値 (バイト)</td> </tr> <tr> <td>値の範囲</td> <td>0 - (2<sup>32</sup> - 1)</td> </tr> <tr> <td>使用可能なタスク</td> <td>いいえ</td> </tr> </table>	デフォルト値	512000	設定タイプ	数値 (バイト)	値の範囲	0 - (2 <sup>32</sup> - 1)	使用可能なタスク	いいえ	クライアント	9.2 以降	<a href="#">Data Collection: BigFix Client</a>
デフォルト値	512000											
設定タイプ	数値 (バイト)											
値の範囲	0 - (2 <sup>32</sup> - 1)											
使用可能なタスク	いいえ											

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<p>ズ。 ログ が大 きく なっ た ら、'date'.back と名 前が 変更 され (こ の ファ イル が既 に存 在す る場 合を 除 く)、 その 日の ログ が再 開さ れま す。 この</p>				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
結果、どの特定の日についても、その日の最初の部分と最後の部分が保持されます。				
<b>_BESClient_LogDays</b> クライアント・ログ・ファイルを保	10 クライアント値 設定タイプ 値の範囲 使用可能なタスク	クライアント	9.2 以降	<a href="#">Data Collection: BigFix Client</a>

名前/説明	値		影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
存する日数。					
<b>_BESRelay_Log_Verbose</b> ゼロ以外の値を指定すると、トラブルシューティングのために BigFix リレーで詳細なロギングが有効になります。	Verbose ルト値	0 (使用不可)	リレー		<a href="#">Enabling (debug level) verbose logging for the BES Root Server and BES Relay services</a>
	設定タイプ	ブール値			
	値の範囲	(True): 詳細ログが有効、0 (False): 詳細ログが無効			
	使用可能なタスク	いいえ			

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
この設定によつて既存の logfile.txt に書き込まれる情報が増加するため、通常操作ではオンにしたままにしないでください。				

**監査**



名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照	
<p><b>_BESRootServer_AuditVerbosity</b></p> <p>SSL 接続がサーバー監査ログに記録されるかどうかを制御します。失敗した SSL 接続と成功した SSL 接続についてのすべての情報</p>	ト値		サーバー	すべて		
	設定タイプ	String (ストリング)				コンポーネント:
	値の範囲	すべて、null				
	使用可能なタスク	いいえ				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>を記録するには、<code>_BESRootServer_Audit_Verbosity = all</code> を指定します。SSL 接続の記録を無効にするには、<code>_BESRootServer_Audit_Verbosity = null</code> を指定するか、このオプションを設定から削</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>除します。</p> <p>この設定は、besclient.config ファイルで、またはコンソールでコンピューターのドメインにアクセスし、SSL 情報を記録するクライアント</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>トを右クリックして「設定の編集」を選択することで指定できます。</p>				

[上 \( ページ 168 \)](#)

## CPU 使用率

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照										
<p><b>_BESClient_Resource_Usage</b></p> <p>BigFix クライアントは、指定された時間だけ動作してから</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="386 625 483 737">結果値</td> <td data-bbox="483 625 581 737">10</td> </tr> <tr> <td data-bbox="386 737 483 894">設定タイプ</td> <td data-bbox="483 737 581 894">数値 (ミリ秒)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="386 894 483 995">値の範囲</td> <td data-bbox="483 894 581 995">1 ~ 500</td> </tr> <tr> <td data-bbox="386 995 483 1157">使用可能なタスク</td> <td data-bbox="483 995 581 1157">はい</td> </tr> <tr> <td data-bbox="386 1157 483 1360">プラットフォーム</td> <td data-bbox="483 1157 581 1360">すべて</td> </tr> </table>	結果値	10	設定タイプ	数値 (ミリ秒)	値の範囲	1 ~ 500	使用可能なタスク	はい	プラットフォーム	すべて	すべてクライアント	すべて	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">仮想化環境および仮想マシン (##### 1019)</a></li> <li>• <a href="#">BigFix Client CPU Utilization</a></li> </ul>
結果値	10													
設定タイプ	数値 (ミリ秒)													
値の範囲	1 ~ 500													
使用可能なタスク	はい													
プラットフォーム	すべて													

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
(関連度の評価)、指定された時間だけスリープします。この設定				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
では、各サイクルでスリープ状態に入る前に動作するミリ秒				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>を制御します。この数値が</p> <p><code>_BESClient_Resource_SleepIdle</code></p> <p>設定と比べて高い場合、BigFix クライ</p>				



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>アントは Fixlet の関連度を迅速に評価しますが、CPU 使用率は高く</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
なりません。				
<p><b>_BESClient_Resource_WorkNormal</b></p> <p>通常評価モードは、BigFix クライアントは CPU の動作制限</p>	<p>50</p> <p>ルト値</p> <p>設定タイプ</p> <p>値の範囲</p> <p>1 ~ 500</p> <p>すべて</p> <p>プラットフォーム</p> <p>コンポーネントの再起動が必要</p>	<p>すべて</p> <p>クライアント</p>		<ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">仮想化環境および仮想マシン (##### 1019)</a></li> <li>• <a href="#">How should I configure the Bigfix Client to run on a virtual server that hosts multiple images?</a></li> <li>• <a href="#">High CPU utilization is experienced by the BESClient.exe process while taking an action</a></li> <li>• <a href="#">BigFix Client CPU Utilization</a></li> </ul>

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
を制御します。通常モードの場合に、CPUのバランスを取るために				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
クライアントが動作するミリ秒を表します。通常モードの場合				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
合、デフォルトでは、BigFix クライアントは 50 ミリ秒動作してから、50 ミ				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>リ秒スリープします (_BESClient_Resource_SleepNormal)。</p>				
<p><b>_BESClient_Resource_SleepNormal</b> BigFix クライアントは、指定された時間</p>	<p>デフォルト値 設定タイプ 値の範囲 プラットフォーム 使用可能なタスク</p>	<p>48 数値 (ミリ秒) 1 ~ 500 すべて はい</p>	<p>すべて</p>	<p><a href="#">BigFix Client CPU Utilization</a></p>

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>だけ動作してから (関連度の評価)、指定された時間だけスリー</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
プ状態に入ります。この設定では、各サイクルで動作した後				



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>にスリープするミリ秒を制御します。この数値が</p> <p><code>_BESClient_Resource_WorkIdle</code></p> <p>設定と比</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
べて高い場合、BigFix クライアントが Fixlet の関連度を評価するのに				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>かかる時間は長くなりますが、CPU使用率は低くなります。</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
通常評価モードでは、「アイドル」モードとは異なり、BigFixクライアント	_BESClient_Resource_SleepNormal ルト値 (V9.0 以前のバージョンでは 1) 設定タイプ 値の範囲 使用可能なタスク プラットフォーム コンポーネントの	50 SleepNormal すべて イアント	すべて	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">仮想化環境および仮想マシン (##### 1019)</a></li> <li>• <a href="#">How should I configure the Bigfix Client to run on an virtual server that hosts multiple images?</a></li> <li>• <a href="#">High CPU utilization is experienced by the BESClient.exe process while taking an action</a></li> <li>• <a href="#">BigFix Client CPU Utilization</a></li> </ul>

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
トは CPU スリープ間隔を制御します。の時間 (ミリ秒) を評価した	再起動が必要			_BESClient_Resource_WorkNormal

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
後にスリープする時間 (ミリ秒) を表します。CPU 使用率のバランス				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
を取るために、BigFix クライアントは最大 1000 ミリ秒のみスリープし				


名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照	
ます。					
静 止 モ ー ド で は、BigFix ク ラ イ ア ン ト は Fixlet の 処 理、 レ ポ ー ト の 送	_BESClient_Resource_Quiet	Enable	すべて	<a href="#">仮想化環境および仮想マシン (##### 1019)</a>	
	ルト値 (False) 設定タイプ 値	(False) ブール 値	イア ント		
	値の範囲 困 は、BigFix	1 (True): 静止 モー ドが有 効、0 (False) 静止 モー ドが無効			
	プ ラット フォー ム 使用可 能なタ スク	すべて  いいえ			



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
信、コマンドへの応答などをアクティブに実行しません。ウェイ				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
ク ア ッ プ 時 間 が 有 効 に な る ま で、 基 本 的 に ア イ ド ル 状 態 に な				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>ります。BigFix クライアントは、最大で1日20時間静止モードにする</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>ことができません。</p> <p> <b>注:</b> 静止モードにすると、BigFix クライアントは BigFix サー</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
バーへのレポートの送信やコマンドへの応答を行わないため、				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照				
この設定を有効にする際は注意してください。								
静 止 モード	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="386 1600 483 1705">_BESClient_Resource_QuietSeconds</td> <td data-bbox="483 1600 581 1705">デフォルト値</td> </tr> <tr> <td data-bbox="386 1705 483 1810">タイプ</td> <td data-bbox="483 1705 581 1810">設定タ 数値</td> </tr> </table>	_BESClient_Resource_QuietSeconds	デフォルト値	タイプ	設定タ 数値	クライアント	すべて	<a href="#">仮想化環境および仮想マシン (##### 1019)</a>
_BESClient_Resource_QuietSeconds	デフォルト値							
タイプ	設定タ 数値							

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照						
<p>が有効になっている場合、BigFix クライアントを静止状態にすべき</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="386 562 483 772">値の範囲</td> <td data-bbox="483 562 581 772">0 ~ 72,000 (20 時間)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="386 772 483 982">プラットフォーム</td> <td data-bbox="483 772 581 982">すべて</td> </tr> <tr> <td data-bbox="386 982 483 1136">使用可能なタスク</td> <td data-bbox="483 982 581 1136">いいえ</td> </tr> </table>	値の範囲	0 ~ 72,000 (20 時間)	プラットフォーム	すべて	使用可能なタスク	いいえ			
値の範囲	0 ~ 72,000 (20 時間)									
プラットフォーム	すべて									
使用可能なタスク	いいえ									

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
秒数を指定できます。BigFix クライアントを静止モードにするには、				



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
この数値が0より大きく72000 (20時間)以下でなければなりません				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
せん。静止モードでは、BigFix クライアントは1分に1回、静止時間が				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>経過したかどうかを確認します。ただし、BigFix クライアントはサー</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
ビス・シャットダウン要求にはいつでも迅速に応答します。				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p><code>_BESClient_Resource_QuietStart</code></p> <p>静 止 モー ド が 有 効 に な っ て い る 場 合、 ク ラ イ ア ン ト が 静 止 モー</p>	<p>ルト値</p> <p>設定タイプ</p> <p>値の範囲</p> <p>プラットフォーム</p> <p>使用可能なタグ</p>	<p>QuietStart</p> <p>クライアント</p>	<p>Time</p>	<p><a href="#">仮想化環境および仮想マシン (##### 1019)</a></p>

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
ドになる時間を指定できます。時間を hh:mm 形式の文字列で設				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>定します。hh は 0 から 23 の数字で、mm は 0 から 59 の数字です。これ</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
は、BigFix クライアントにアクティビティがなく静止している状態の				



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
ローカル時間です。値の形式が正しくない場合、クライアント				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
は静止モードに入りません。				
<p><b>_BESClient_Resource_InterruptSeconds</b></p> <p>BigFix クライアントが UDP メッセージを</p>	<p>ルト値</p> <p>設定タイプ</p> <p>値の範囲</p> <p>すべてのプラットフォーム</p> <p>使用可能なタスク</p>	<p>60</p> <p>数値 (秒)</p> <p>1 ~ 600</p> <p>すべて</p> <p>はい</p>	<p>クライアント</p>	

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
受信したが、ビジー状態のために関連句を処理できない場合、				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
この BigFix 6.0 構成設定で、BigFix クライアントが UDP メッセージを処理する				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
ために関連句の評価を停止するまで待機する時間の長さ				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照	
を決定します。					
新規クライアントがすべてのコンテンツ	_BESClient_Resource_StartupNormalSpeed	クライアント	クライアント		
	ルト値				
	設定タイプ				ブール値
	値の範囲				0 または 1
	使用可能なタスク				いいえ
	プラットフォーム				すべて
コンポーネントの再起動が必要	はい				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
の完全なパスを完遂するまで、作業(関連性の評価)を行うよ				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
うに設定します。このようにして、新規クライアントはサイ				



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
トにサブスクライブして最初の完全なパスを迅速に完遂				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
できません。				
<p><b>_BESClient_Resource_PowerSaveDeepSleepEnable</b></p> <p>指定した時間、クライアントをディスプレイ・スリープ・モード</p>	<p>ルト値</p> <p>設定タイプ</p> <p>値の範囲</p> <p>使用可能なタスク</p> <p>プラットフォーム</p> <p>コンポーネントの再起動が必要</p>	<p>イアント</p>		<p>参照</p>

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>に設定します。クライアントはUDPメッセージを無視してキューに入</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
れます (「クライアント・アラート要求の送信」メッセージを除く)。1に設				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
定 す る と、 ク ラ イ ア ン ト は デ ィ ー プ ・ ス リ ー プ ・ モ ー ド に 切 り 替 わ り				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
ます。				
この設定は、_BESClient_Resource_AccelerateForPendingMessage が UDP メッセージを受信した際の動作に影響	ルト値 設定タイプ 値の範囲 使用可能なプラットフォーム コンポーネントの再起動が必要	加速 ブール値 0 または 1 いいえ すべて いいえ	AccelerateForPendingMessage PowerSaveEnable	参照


名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
します。 <sup>1</sup> に設定した場合、クライアントは保留中のコマンド				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
を検出したときにスリープ状態になるのを回避します。つま				



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
り、クライアントは保留中のコマンドがあるとすぐに起動				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
します。0 に設定した場合、クライアントは常にタイマーの期限				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>切れを待ちます。</p> <p> <b>注:</b> この設定は、いかなる場合でも</p> <p><code>_BESClient_Resource_PowerSaveDeepSleepEnable</code> の設定</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
には影響しません。				
指定した時間、クライアントをスリープ。	<p><b>_BESClient_Resource_PowerSaveEnable</b></p> <p>ルト値</p> <p>設定タイプ</p> <p>値の範囲</p> <p>使用可能なタスク</p> <p>プラットフォーム</p> <p>コンポーネントの</p>	<p>クライアント</p>		<p><a href="#">Mobile Battery Usage</a> (deprecated)</p>

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>モードに設定します。クライアントは引き続き</p> <p><code>_BESClient_Resource_AccelerateForPendingMessage</code></p> <p>で設定した</p>	<p>再起動が必要</p>			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
値に基づきUDPメッセージを処理します。 <sup>1</sup> に設定すると、クライアント				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>ントは単純なスリープ・モードに切り替わります。このオプション</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
は、タブレットやラップトップでは便利です。				
<p>BESClient_Resource_PowerSaveTimeoutX にはクライアントがスリープする時間 (分数) を制御する 6 個の値があります (X は 0 ~ 5 の範囲)。これはネットワークと電源両方の状態に基づき適用されます。</p>				
ネットワーク	累乗	適用されたタイムアウト		デフォルト値
接続済み	AC またはバッテリー - 高	BESClient_Resource_PowerSaveTimeout0		10



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
ネットワーク	累乗	適用されたタイムアウト		デフォルト値
接続済み	バッテリー - 中	BESClient_Resource_PowerSave	20	Timeout1
接続済み	バッテリー - 低	BESClient_Resource_PowerSave	60	Timeout2
接続されていません	AC またはバッテリー - 高	BESClient_Resource_PowerSave	720	Timeout3
接続されていません	バッテリー - 中	BESClient_Resource_PowerSave	1440	Timeout4
接続されていません	バッテリー - 低	BESClient_Resource_PowerSave	2880	Timeout5
ネットワークが「接続済み」の場合、最低 1 個のネットワーク・インターフェースがインターネット接続している場合、バッテリー電源は次のように評価されます。				
OS	バッテリー - 高	バッテリー - 中	バッテリー - 低	
Windows/OS X	BatteryLifePercent > 66%	33% <= BatteryLifePercent <= 66%	BatteryLifePercent < 33%	
Unix/Android	BatteryLifePercent = 100%	100% <= BatteryLifePercent <= 20%	BatteryLifePercent < 20%	

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
-------	---	---------------	------------	----

**注:**

- エンタープライズ・サーバー (通常はバッテリーは使用しない) の場合、\_BESClient\_Resource\_PowerSaveTimeout0 と \_BESClient\_Resource\_PowerSaveTimeout3 のみで使用されます。
- これらのパラメーターは \_BESClient\_Resource\_PowerSaveEnable または \_BESClient\_Resource\_PowerSaveDeepSleepEnable が 1 に設定された場合のみ有効になります。

この設定は、ネットワークワークの負荷が高い場	_BESClient_Resource_PowerSaveTimeout0	仮想化環境および仮想マシン (##### 1019)		
	ルト値	イア		
	設定タイプ	数値 (分)	ント	
	値の範囲	0 ~ 2,147,483,647		
	使用可能なタスク	いいえ		
	プラットフォーム	すべて		
コンポーネントの	いいえ			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
合にクライアントがスリープする時間(分数)を制御します。	再起動が必要			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p><b>_BESClient_Resource_PowerSaveTimeout</b></p> <p>この設定は、ネットワークワークの負荷が中程度の場合にクライアント</p>	<p>ルト値</p> <p>設定タイプ</p> <p>値の範囲</p> <p>使用可能なタスク</p> <p>プラットフォーム</p> <p>コンポーネントの再起動が必要</p>	<p>20</p> <p>数値 (分)</p> <p>0 ~ 2,147,483,647</p> <p>いいえ</p> <p>すべて</p> <p>いいえ</p>	<p>クライアント</p>	<p><a href="#">仮想化環境および仮想マシン (##### 1019)</a></p>

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>ントがスリープする時間 (分数) を制御します。</p>				
<p>この設定は、ネッ</p>	<p><b>_BESClient_Resource_PowerSaveTimeout</b></p> <p>ルト値</p> <p>設定タイプ</p> <p>数値 (分)</p> <p>値の範囲</p> <p>0 ~ 2,147,483,647</p>	<p>クライアント</p>		<p>仮想化環境および仮想マシン (<a href="#">##### 1019</a>)</p>

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
トワークの負荷が低い場合にクライアントがスリープする時	使用可能なタスク	いいえ			
	プラットフォーム	すべて			
	コンポーネントの再起動が必要	いいえ			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
間 (分数) を制御します。				
この設定は、ネットワークの負荷が高く	<p><b>_BESClient_Resource_PowerSaveTimeout</b></p> <p>ルト値</p> <p>設定タイプ</p> <p>値の範囲</p> <p>使用可能なタスク</p> <p>プラットフォーム</p> <p>コンポーネントの</p>	<p>72</p> <p>数値 (分)</p> <p>0 ~ 2,147,483,647</p> <p>いいえ</p> <p>すべて</p> <p>いいえ</p>	<p>仮想化環境および仮想マシン (##### 1019)</p> <p>インタ</p> <p>ント</p>	

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
ない場合にクライアントがスリープする時間(分数)を制御し	再起動が必要			



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照												
ます。																
この設定は、ネットワークの負荷が中程度でない場合に	<p><b>_BESClient_Resource_PowerSaveTimeout</b></p> <table border="1"> <tr> <td>ルト値</td> <td></td> </tr> <tr> <td>設定タイプ</td> <td>数値 (分)</td> </tr> <tr> <td>値の範囲</td> <td>0 ~ 2,147,483,647</td> </tr> <tr> <td>使用可能なタスク</td> <td>いいえ</td> </tr> <tr> <td>プラットフォーム</td> <td>すべて</td> </tr> <tr> <td>コンポーネントの再起動が必要</td> <td>いいえ</td> </tr> </table>	ルト値		設定タイプ	数値 (分)	値の範囲	0 ~ 2,147,483,647	使用可能なタスク	いいえ	プラットフォーム	すべて	コンポーネントの再起動が必要	いいえ	クライアント		<a href="#">仮想化環境および仮想マシン (##### 1019)</a>
ルト値																
設定タイプ	数値 (分)															
値の範囲	0 ~ 2,147,483,647															
使用可能なタスク	いいえ															
プラットフォーム	すべて															
コンポーネントの再起動が必要	いいえ															

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
クライアントがスリープする時間 (分数) を制御します。				
この	<p><code>_BESClient_ResourcePowerSaveTimeout</code></p> <p>結果値</p>	クライアント		<a href="#">仮想化環境および仮想マシン (##### 1019)</a>

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
設定は、ネットワークワークの負荷が低い場合にクライアントがスリー	設定タイプ	数値 (分)			
	値の範囲	0 ~ 2,147,483,647			
	使用可能なタスク	いいえ			
	プラットフォーム	すべて			
	コンポーネントの再起動が必要	いいえ			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>プ す る 時 間 (分 数) を 制 御 し ま す。</p>				
<p><b>_BESClient_Query_WorkTime</b></p> <p>こ の 設 定 を プ ラ ット フ ォ ー ム に 使</p>	<p>ラット 設定タ イプ 値の範 囲</p> <p>数値 (秒) 1 ~ 500</p> <p><b>_BESClient_Query_SleepTime</b></p> <p>ラット フ ォ ー ム コ ン ポー ネ</p> <p>いいえ</p>	<p>ク ラ イ ア ン ト</p>	<p>9.5 以 降</p>	<p><a href="#">照会 (##### 728)</a></p>

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>用して、Qn CPU スロットリングを構成します。スリープする前に照会</p>	<p>ントの再起動が必要</p>			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照				
<p>を処理する QnA を実行する時間を決定します。</p>								
<p><code>_BESClient_Query_SkipTime</code></p> <p>この設定を</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="386 1549 483 1654">結果値</td> <td data-bbox="483 1549 581 1654"></td> </tr> <tr> <td data-bbox="386 1654 483 1810">設定タイプ</td> <td data-bbox="483 1654 581 1810">数値 (ミリ秒)</td> </tr> </table>	結果値		設定タイプ	数値 (ミリ秒)	クライアント	9.5 以降	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">照会 (##### 728)</a></li> <li>• <a href="#">Open Mic: Capabilities of the BigFix REST API in accessing the BigFix Query channel</a></li> </ul>
結果値								
設定タイプ	数値 (ミリ秒)							

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照						
<p><b>_BESClientQuery_WorkTime</b></p> <p>とともにもに使用して、QnA CPU スロットリングを構成します。実行を</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="386 562 483 667">値の範囲</td> <td data-bbox="483 562 581 667">3600000</td> </tr> <tr> <td data-bbox="386 667 483 930">コンポーネントの再起動が必要</td> <td data-bbox="483 667 581 930">いいえ</td> </tr> <tr> <td data-bbox="386 930 483 1140">プラットフォーム</td> <td data-bbox="483 930 581 1140">すべて</td> </tr> </table>	値の範囲	3600000	コンポーネントの再起動が必要	いいえ	プラットフォーム	すべて			
値の範囲	3600000									
コンポーネントの再起動が必要	いいえ									
プラットフォーム	すべて									

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
継続する前に照会を処理する QnA がスリープする時間を決定				



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
します。				

[上 \( \(ページ\) 168\)](#)

## プロキシ構成

### クライアント

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
_BESClient_CommunicationsProxyServer プロキシに到達するために使用されるホスト名を設定	ProxyServer	クライアント	すべて	クライアントでのプロキシ接続のセットアップ (##### )
	設定タイプ	String (ストリング)		
	値の範囲	N/A		
	プラットフォーム	すべて		
	コンポーネントの	いいえ		

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
定めます。	再起動が必要				
<p><b>_BESClient_CommProxyPort</b></p> <p>プロキシとの通信に使用するポートを設定します。</p>	ProxyPort値	なし	クライアント	すべて	クライアントでのプロキシ接続のセットアップ (##### )
設定タイプ	数値				
値の範囲	0 ~ 65535				
プラットフォーム	すべて				
コンポーネントの再起動が必要	いいえ				
<p><b>_BESClient_CommProxyUser</b></p> <p>プロキシが認証を必要とする場合に、プロキシで認証するため</p>	ProxyUser値	なし	クライアント	すべて	クライアントでのプロキシ接続のセットアップ (##### )
設定タイプ	String (ストリング)				
値の範囲	N/A				
プラットフォーム	すべて				
コンポーネントの再起動が必要	いいえ				

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
に使用するユーザー名を設定します。	必須	いいえ (認証方法による)			
_BESClient_Comm_ProxyPass  プロキシが認証を必要とする場合に、プロキシで認証するために使用するパスワードを設定します。	必須	なし	クライアント	すべて	クライアントでのプロキシ接続のセットアップ (##### )
	設定タイプ	String (ストリング)			
	値の範囲	N/A			
	プラットフォーム	すべて			
	コンポーネントの再起動が必要	いいえ			
	必須	いいえ (認証方法による)			

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p><b>_BESClient_Comm_ProxyManualTryDirect</b></p> <p>直接接続を使用できるかどうかを指定します。この設定は、プロキシへの接続で、_BESClient_Comm_ProxyServer および _BESClient_Comm_ProxyPort 内で指定されたホスト名または IP アドレスおよびポート番号</p>	<p>ト値</p> <p>設定タイプ</p> <p>値の範囲</p>	<p>0a1TryDirect</p> <p>数値</p> <p>0 ~ 2</p> <p><b>0</b></p> <p>直接接続を試行しません。</p> <p><b>1</b></p> <p>プロキシ接続</p>	<p>クライアント</p>	<p>すべて</p>	<p>クライアントでのプロキシ接続のセットアップ (##### )</p>

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>が使用される場合に適用されます。以下の値を使用できます。</p>		<p>を確立できない場合に直接接続を試行します。</p> <p><b>2</b> 直接接続</p>			

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
		を最初に試行します。			
	プラットフォーム	すべて			
	コンポーネントの再起動が必要	いいえ			
	必須	いいえ			
<p><b>_BESClient_Comm_ProxyAutoDetect</b></p> <p>Internet Explorer について指定されたプロキシ構成設定</p>	プラットフォーム値	すべて (Default)	クライアント	すべて	クライアントでのプロキシ接続のセットアップ (##### )  _BESClient_Comm_ProxyServer お
	設定タイプ	ブール値			
	値の範囲	0 ~ 1  0			


名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>をシステムが使用するかどうかを指定します。</p> <p><b>⚠ 重要:</b> Internet Explorer の構成設定を取得できるようにするために、少なくとも1人のユーザーがクライアント</p>		<p>よび</p> <p><code>_BESClient_Comm_ProxyPort</code></p> <p>に指定された値を使用します。</p> <p><b>1</b></p> <p>Internet Explorer の構成設定を</p>			

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
にログインしているようにしてください。		使用し ます。			
	コンポーネントの再起動が必要	いいえ			
	プラットフォーム	Windows			
	必須	いいえ			
<b>_BESClient_Comm_ProxyAutoDetectTryDirect</b> Internet Explorer について指定されたプロキシ構成設定をシステムが使用すると	プロキシAutoDetectTryDirect ト値		クライアント	すべて	クライアントでのプロキシ接続のセットアップ (##### )
設定タイプ	数値				
値の範囲	0 ~ 2  0  直接接続を試				




名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>き、直接接続を使用できるかどうかを指定します。この設定は、<code>_BESClient_Comm_ProxyAutoDetect = 1</code> の場合にのみ有効です。</p>		<p>1</p> <p>行しません。プロキシ接続を確立できない場合に直接接</p>			

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
		続 を 試 行 し ま す。  <b>2</b>  直 接 接 続 を 最 初 に 試 行 し ま す。			
	プラットフォーム	Windows			
	コンポーネントの	いいえ			

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
	再起動が必要				
	必須	いいえ			
<p><b>AutoProxyRawProxyList</b></p> <p>接続の試行先のプロキシを示す、空白スペースで区切られたリストを指定します。</p> <p> <b>注:</b> この設定はユーザー構成の設</p>	デフォルト値	なし	クライアント	すべて	クライアントでのプロキシ接続のセットアップ (##### )
設定タイプ	String (ストリング)				
値の範囲	該当なし				
プラットフォーム	Windows				
コンポーネントの再起動が必要	いいえ				
必須	いいえ				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>定ではなく、レジストリーのキー HKLM \Software \BigFix \EnterpriseClient \GlobalOptions に保存されます。この情報は、トラブルシューティング目的でのみ提供されます。</p>				

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p><b>AutoProxyRawBypassList</b></p> <p>プロキシを経由せずに直接接続する URL を示す、空白スペースで区切られたリストを指定します。ワイルドカードとして「*」を使用することが</p>	リスト値	なし	クライアント	すべて	クライアントでのプロキシ接続のセットアップ (##### )
	設定タイプ	String (ストリング)			
	値の範囲	該当なし			
	プラットフォーム	Windows			
	コンポーネントの再起動が必要	いいえ			
	必須	いいえ			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>できません。</p> <p> <b>注:</b> この設定はユーザー構成の設定ではなく、レジストリーのキー <code>HKLM\Software\BigFix\EnterpriseClient\GlobalOptions</code> に保存されます。この情報は、トラブルシュー</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
ティング目的でのみ提供されます。				

[上 \( \(ページ\) 168\)](#)

## サーバー/リレー

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<b>_Enterprise Server_ClientRegister</b> ファイルのダウンロード時にプロキシ・	デフォルト値 なし <b>ProxyServer</b> 設定タイプ String (ストリング) 値の範囲 N/A 使用可能なタスク いいえ	サーバー、リレー	9.2 以降	<ul style="list-style-type: none"> <li>リレーでのプロキシ接続のセットアップ (##### )</li> <li><a href="#">BigFix server cannot gather external sites (error: 17NotASignedMessage)</a></li> <li><a href="#">Software Distribution Tasks fail with "Unexpected HTTP Response 502" error</a></li> </ul>

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>サーバーを使用するように BigFix リレーを設定できます。これは、BigFix リレーと BigFix サーバー間にプロキシがある場合、または BigFix リレーがイ</p>				



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>インターネットに直接接続してダウンロードしていて、プロキシを使用する必要がある場合に便利です。この設定は、プロキシへのアクセスに使用するホスト名を</p>				

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
制御します。					
<p><b>_Enterprise Server_ClientRegister</b></p> <p>ファイルのダウンロード時にプロキシ・サーバーを使用するように BigFix リレーを設定できます。これは、BigFix リレーと</p>	<p>デフォルト値</p> <p>設定タイプ</p> <p>値の範囲</p> <p>使用可能なタスク</p>	<p>なし</p> <p>数値</p> <p>N/A</p> <p>いいえ</p>	サーバー、リレー	9.2 以降	<ul style="list-style-type: none"> <li>リレーでのプロキシ接続のセットアップ (##### )</li> <li><a href="#">BigFix server cannot gather external sites (error: 17NotASignedMessage)</a></li> </ul>

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>BigFix サーバー間にプロキシがある場合、または BigFix リレーがインターネットに直接接続してダウンロードしていて、プロキシを使用する必要がある場合</p>				

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>に便利です。 この設定は、プロキシ・サーバーで使用されるポートを制御します。</p>					
<p><b>_Enterprise_Server_Client_Register_ProxyUser</b></p> <p>ファイルのダウンロード時にプロキシ・サーバーを使用</p>	<p>値</p> <p>設定タイプ</p> <p>値の範囲</p> <p>使用可能なタスク</p>	<p>文字列 (ユーザー名)</p> <p>N/A</p> <p>いいえ</p>	<p>User</p> <p>リレー</p>	<p>9.2 以降</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>リレーでのプロキシ接続のセットアップ (##### )</li> <li><a href="#">BigFix server cannot gather external sites (error: 17NotASignedMessage)</a></li> <li><a href="#">How to use the air gap 9.2 with a proxy on a 32 bits system?</a></li> </ul>

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>するよ うに BigFix リレー を設定 でき ます。 これ は、BigFix リレー と BigFix サー バー間 にプロ キシ がある 場合、 または BigFix リレー がイ ンター ネット に直接</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>接続してダウンロードして、プロキシを使用する必要がある場合に便利です。この設定は、プロキシが認証を必要とする場合に、プロキシで認証するため</p>				

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>に使用するユーザー名を制御します。</p>					
<p><b>_Enterprise_Server_Client_Register_Proxy_Pass</b></p> <p>ファイルのダウンロード時にプロキシ・サーバーを使用するように BigFix リレーを設定できます。</p>	<p>値</p> <p>設定タイプ</p> <p>値の範囲</p> <p>使用可能なタスク</p>	<p>String (ストリング)</p> <p>N/A</p> <p>いいえ</p>	<p>9.2 以降</p> <p>リレー</p>		<ul style="list-style-type: none"> <li>• リレーでのプロキシ接続のセットアップ (##### )</li> <li>• コンピューターの設定の編集 (##### )</li> <li>• プロキシ接続を定義する際に考慮する必要があるベスト・プラクティス (##### )</li> <li>• <a href="#">BigFix server cannot gather external sites (error: 17NotASignedMessage)</a></li> </ul>

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>これは、BigFix リレーと BigFix サーバー間にプロキシがある場合、または BigFix リレーがインターネットに直接接続してダウンロードしていて、プロキシ</p>				



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>を使用する必要がある場合に便利です。この設定は、プロキシが認証を必要とする場合に、プロキシで認証するために使用するパスワードを制御します。警告: パ</p>				

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>スワードは、レジストリー内にプレーン・テキストで保管されます。</p>					
<p><b>_Enterprise Server_ClientRegister</b></p> <p>設定した場合は、プロキシに強制的にトンネリングを試行させるかどうか</p>	<p>デフォルト値</p> <p>設定タイプ</p> <p>値の範囲</p> <p>必須</p>	<p>false</p> <p>ブール値</p> <p>false   true</p> <p>いいえ</p>	<p>リレー、サーバー</p>	<p>9.2 以降</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>リレーでのプロキシ接続のセットアップ (##### )</li> <li><a href="#">IV68384: UNABLE TO REGISTER DEVICES DUE TO "_ENTERPRISE SERVER_CLIENTREGISTER_MAXCHILDRELAY</a></li> </ul>


名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>が定義されます。デフォルトでは、プロキシはトンネリングを試行しません。</p>					
<p><b>_Enterprise Server_ClientRegisterProxyAuthMethodsAllowed</b></p> <p>使用可能な認証方法のセットを制限します。複数の値をコマで区</p>	<p>デフォルト値</p> <p>設定タイプ</p> <p>値の範囲</p> <p>必須</p>	<p>なし (いずれか)</p> <p>String (ストリング)</p> <p>basic   digest   negotiate   nltm</p> <p>いいえ</p>	<p>リ</p> <p>サー</p> <p>バー</p>	<p>9.2 以</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• リレーでのプロキシ接続のセットアップ (##### )</li> <li>• <a href="#">IV68384: UNABLE TO REGISTER DEVICES DUE TO "_ENTERPRISE SERVER_CLIENTREGISTER_MAXCHILDRELAY</a></li> </ul>

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>切って指定できません。FIPSの使用時に、サポートされる認証方法に影響を与える制限については、プロキシ接続のサーバー上での設定(#####)を参照し</p>				

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>てください。</p>					
<p><b>_Enterprise Server_ClientRegister</b></p> <p>1 に設定した場合、この設定はご使用の Endpoint Manager 環境内のすべてのダウンストリーム通信がプロキシを経由することを指示します。</p>	<p>デフォルト値</p> <p>0</p> <p>設定タイプ</p> <p>ブール値</p> <p>値の範囲</p> <p>0 (false)   1 (true)</p> <p>必須</p> <p>いいえ</p>	<p>0</p> <p>ブール値</p> <p>0 (false)   1 (true)</p> <p>いいえ</p>	<p>リレーサーバー</p>	<p>9.2 以降</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• リレーでのプロキシ接続のセットアップ (##### )</li> <li>• <a href="#">IV68384: UNABLE TO REGISTER DEVICES DUE TO "_ENTERPRISE_SERVER_CLIENTREGISTER_MAXCHILDRELAY</a></li> </ul>

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p><b>_Enterprise Server_ClientRegister</b></p> <p>プロキシを経由せずにリレーによってアクセスする必要がある、コンピューター(親リレーなど)、ドメイン、およびサブネットワークを指定しま</p>	デフォルト値	localhost, ProxyExceptionList (内部通信はプロキシを経由しません)	リレー、サーバー	9.2 以降	<ul style="list-style-type: none"> <li>リレーでのプロキシ接続のセットアップ (##### )</li> <li><a href="#">IV68384: UNABLE TO REGISTER DEVICES DUE TO "_ENTERPRISE SERVER_CLIENTREGISTER_MAXCHILDRELAY</a></li> </ul>
	設定タイプ	String (ストリング)			
	値の範囲	N/A			
	必須	いいえ			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>す。 次の形式を使用します。</p> <pre data-bbox="298 840 630 1207">"localhost, 127.0.0.1, hostname1, hostname2, IP_Addr_A, IP_Addr_B, domain_Z, domain_Y, ..."</pre> <p>デフォルトでは、内部通信はプロキシに送信されません。この動作を維持する</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>には、この設定の値を指定するときに、例外のリストに localhost, 127.0.0.1 を含めるようにします。</p> <p> <b>注:</b> リレーに関するプロキシ例外リストの使用について、サ</p>				



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>サンプルを通じて学習するには、プロキシ接続のセットアップ(#####)を参照してください。</p>				

[上 \( ページ 168 \)](#)

## 登録

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p><b>_BESClient_Register_StepOnFlushError</b></p> <p>BESClient ファイル・システムが一時的に読み取り専用モードになるときに、コンソールで重複するコンピューターが生成されるのを防ぎます。</p>	ト値	0 (false)	クライアント	9.5.8 以降	
設定タイプ	ブール値				
値の範囲	0 (false) - 1 (true)				

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p><b>_BESClient_RegisterIntervalSeconds</b></p> <p>BigFix クライアントは BigFix サーバー上の ClientRegister CGI に定期的にアクセスして、IP アドレスをポートし (これは、BigFix クライアントが DHCP</p>	<p>値</p>	<p>600 (秒時間)</p>	<p>クライアント</p>	<p>すべて</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">When will "skipping relay select. Registering with current relay" occur</a></li> <li>• <a href="#">BigFix Relays -Part 1 (PDF)</a></li> <li>• <a href="#">HCL®BigFix Relays -Part 2 (PDF)</a></li> </ul>
<p>設定タイプ</p>	<p>数値 (秒)</p>				
<p>値の範囲</p>	<p>600 ~ 82800 (23 時間)</p>				
<p>使用可能なタスク</p>	<p>いいえ</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>を介して IP アドレスを変更する場合には重要です)、BigFix サーバー時間と BigFix サービス・バージョンを取得します。この設定を高くしすぎると、BigFix クライ</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>アントは新規アクションまたは新規 Fixlet コンテンツが使用可能になったときに最新サイトを収集するよう伝える UDP 「ping」を受信しないことがあります。この設</p>				

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>定を低くしすぎると、BigFix クライアントは登録要求によって BigFix サーバーをフラッシュングさせることになります。</p>					
<p><b>_BESClient_SecureRegistration</b> 認証リレーへの手動登録を行うために必</p>	<p>なし</p>	<p>String (ストリング) ASCII 文字のみ</p>	<p>クライアント</p>	<p>9.5.7 以降</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">Client couldn't register with the BigFix server successfully for "SSL protocol not supported" error</a></li> <li>• <a href="#">Reasons for large group of TEM Clients failing to register and appear offline</a></li> </ul>

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>要なパスワードの値を設定します。この設定は、新規クライアントを既存の認証リレーに登録する必要があり、認証リレーがパスワードを使用して鍵交換を</p>	プラットフォーム	すべて			<ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">Why are my BigFix Clients not choosing their specified BigFix Relay?</a></li> </ul>

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>実行する場合に便利です。この設定は、クライアントの起動時にのみ読み取られます。失敗した場合、クライアントは既存の認証リレーへの登録を再試行し、同じリ</p>				



名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
レー選択動作を行います。					
<p><b>_BESRelay_Selection_AutoSelectableRelay</b></p> <p>値が「0」の場合、次のアクション・サイトの伝播後に、BigFix リレーを自動選択に使用できません。値が「1」の場合、BigFix</p>	ト値	(有効)	レー	すべて	<a href="#">How can I control client relay selection for a particular Relay or DSA Server?</a>
設定タイプ	ブール値				
値の範囲	1 (有効) - 自動選択を有効化				
使用可能なタスク	いいえ				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照								
クライアントは自動選択に BigFix リレーを使用できます。												
この構成設定により、BigFix 6.0 クライアントはトラブルシューティングのために BigFix 5.1 リ	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="480 1031 623 1136">ト値</td> <td data-bbox="623 1031 769 1136">0 (無効)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="480 1136 623 1241">設定タイプ</td> <td data-bbox="623 1136 769 1241">ブール値</td> </tr> <tr> <td data-bbox="480 1241 623 1430">値の範囲</td> <td data-bbox="623 1241 769 1430">1 (有効) 0 (使用不可)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="480 1430 623 1535">使用可能なタスク</td> <td data-bbox="623 1430 769 1535">いいえ</td> </tr> </table>	ト値	0 (無効)	設定タイプ	ブール値	値の範囲	1 (有効) 0 (使用不可)	使用可能なタスク	いいえ	クライアント		<a href="#">How can I control client relay selection for a particular Relay or DSA Server?</a>
ト値	0 (無効)											
設定タイプ	ブール値											
値の範囲	1 (有効) 0 (使用不可)											
使用可能なタスク	いいえ											

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
レーから収集できます (TEM 6.0+)。					
<p><b>_Enterprise Server_ClientRegisterClientRegistrationExpirationPeriod</b></p> <p>この設定は、BigFix リレーがどのくらい早く BigFix クライアントを期限切れとしてマークするかを制御しま</p>	<p>デフォルト値</p> <p>設定タイプ</p> <p>値の範囲</p> <p>使用可能なタスク</p>	<p>1440 (1 数値 (分))</p> <p>1 ~ 4294967295</p> <p>いいえ</p>	リ	すべて	<p><a href="#">プロキシ構成 (サーバー/リレー) (### 503)</a></p>

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>す。BigFix クライアントは、ライセンスが別の BigFix クライアントで使用可能になるまでのこの期間に、再度登録することができます。この設定を使用して、クラ</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
イアントの合計数がライセンス・シート数を超えたときに、オフラインの BigFix クライアントからアクティブな BigFix クライアントにライセンスを移転するペース				

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
を上げることができます。					
<p><b>_Enterprise Server_ClientRegister</b></p> <p>この設定を使用して、BigFix リレーのチェーンを拡張できる最大長を制御します。この設定は、BigFix リレーの自動選択によって</p>	デフォルト値 設定タイプ 値の範囲 使用可能なタスク	32 数値 1 ~ 4,294,967,295 いいえ	リ	すべて	

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>BigFix リレー の無限 ループ が形成 される のを 防ぎ ます。 この 設定を 使用し て、BigFix リレー の長い チェー ンが形 成され るのを 阻止 した り、BigFix リレー の BigFix</p>				

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
サーバーからの最大深度を指定できます。					
<p><b>_Enterprise Server_ClientRegistrationExpirationPeriod</b></p> <p>この設定は、BigFix リレーがどのくらい早く BigFix クライアントを期限切れとしてマークするかを制</p>	デフォルト値	1440 (1 日)	リレー	すべて	
	設定タイプ	数値 (分)	サーバー		
	値の範囲	1 ~ 4,294,967,295			
	使用可能なタスク	いいえ			



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>御します。BigFix クライアントは、ライセンスが別の BigFix クライアントで使用可能になるまでのこの期間に、再度登録することができます。この設定を使用して、</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
クライアントの合計数がライセンス・シート数を超えたときに、オフラインの BigFix クライアントからアクティブな BigFix クライアントにライセンスを移転する				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
ペースを上げることができます。				

[上 \(ページ 168\)](#)

## リレーの選択


名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照						
クライアントが一時的に、目的のリレーに登録できないサブネット	<table border="1"> <tr> <td>ト値</td> <td></td> </tr> <tr> <td>設定タイプ</td> <td>ブール値</td> </tr> <tr> <td>値の範囲</td> <td>0 (false) - 1 (true)</td> </tr> </table>	ト値		設定タイプ	ブール値	値の範囲	0 (false) - 1 (true)	SelectAlways (On) ListChange アント以降	6.2.8	
ト値										
設定タイプ	ブール値									
値の範囲	0 (false) - 1 (true)									

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
ワーク上にいる場合、クライアントはルート・サーバーに登録します。後からクライアント IP の状況が変化して、クライアントが再び目的のリレーと通信できる				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>ようになった場合でも、デフォルトでは、自動リレー選択はトリガーされません。つまり、明示的なリレー選択が新たに行われるまで、クライアントは引き続きルー</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>ト・サーバーに登録されます。登録後にIPListアドレスが変更された場合、現在の登録に使用されたIPがまだ使用可能であっても、値1をこの構成設</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照								
<p>定に割り当て、デフォルトの動作を変更し、新たなリレー選択を自動的にトリガーできます。</p>												
<p><b>_BESClient_RelaySelect_Interval</b> BigFix リレー選択アルゴリズムが実行される間隔。より近くにある</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="474 1289 613 1394">ト値</td> <td data-bbox="613 1289 760 1394">21,536,000 (時間)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="474 1394 613 1499">設定タイプ</td> <td data-bbox="613 1394 760 1499">数値 (秒数)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="474 1499 613 1656">値の範囲</td> <td data-bbox="613 1499 760 1656">600 ~ 31,536,000 (1年)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="474 1656 613 1761">使用可能なタスク</td> <td data-bbox="613 1656 760 1761">はい</td> </tr> </table>	ト値	21,536,000 (時間)	設定タイプ	数値 (秒数)	値の範囲	600 ~ 31,536,000 (1年)	使用可能なタスク	はい	<p>ラ イアン ト、リレー</p>	<p>すべ て</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">When will "skipping relay select. Registering with current relay" occur</a></li> <li>• <a href="#">HCL@BigFix@Relays -Part 1 (PDF)</a></li> <li>• <a href="#">HCL@BigFix@Relays -Part 2 (PDF)</a></li> </ul>
ト値	21,536,000 (時間)											
設定タイプ	数値 (秒数)											
値の範囲	600 ~ 31,536,000 (1年)											
使用可能なタスク	はい											

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照				
<p>BigFix リレーが見つかった場合、その BigFix リレーが使用されます。</p> <p> <b>注:</b> BigFix リレーの選択に失敗した場合、この間隔は無視されます。</p>								
<p>BigFix リレー</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="474 1682 613 1787">_BESClient_RelaySelect_MinRetryIntervalSeconds</td> <td data-bbox="613 1682 760 1787">ト値</td> </tr> <tr> <td data-bbox="474 1787 613 1890"></td> <td data-bbox="613 1787 760 1890">設定タイプ 数値 (秒数)</td> </tr> </table>	_BESClient_RelaySelect_MinRetryIntervalSeconds	ト値		設定タイプ 数値 (秒数)	クライアント	で	<a href="#">Autoselection Failsafe Controls</a>
_BESClient_RelaySelect_MinRetryIntervalSeconds	ト値							
	設定タイプ 数値 (秒数)							



名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>選択アルゴリズムが失敗した場合 (BigFix リレーが見つからなかった場合)、BigFix クライアントはこの秒数後に再試行します。BigFix リレーの検出に失敗して連続して再試行するた</p>	<p>値の範囲</p>	<p>0 ~ 31,536,000 (1 年)</p>			
	<p>使用可能なタスク</p>	<p>はい</p>			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照								
<p>びに、この値は2倍になります。</p>												
<p><b>_BESClient_RelaySelect_MaxRelayIntervalSeconds</b></p> <p>BigFix リレーの検出に失敗した後、BigFix クライアントは引き続き BigFix リレーの検出を試みます。失敗するたびに、この最大値を超</p>	<table border="1"> <tr> <td>ト値</td> <td>時間)</td> </tr> <tr> <td>設定タイプ</td> <td>数値 (秒)</td> </tr> <tr> <td>値の範囲</td> <td>0 ~ 31,536,000 (1年)</td> </tr> <tr> <td>使用可能なタスク</td> <td>はい</td> </tr> </table>	ト値	時間)	設定タイプ	数値 (秒)	値の範囲	0 ~ 31,536,000 (1年)	使用可能なタスク	はい	<p>Autoselection Failsafe Controls</p> <p>アントて</p>		<p><a href="#">Autoselection Failsafe Controls</a></p>
ト値	時間)											
設定タイプ	数値 (秒)											
値の範囲	0 ~ 31,536,000 (1年)											
使用可能なタスク	はい											

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>えるまで、BigFix クライアントが費やす時間は倍増していきます。BigFix クライアントは、BigFix リレーの選択に成功するまで、この最大再試行間隔で検出を試みます。</p>				

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p><b>_BESClient_RelaySelect_MaximumTTLToPing</b></p> <p>自動リレー選択試行を失敗と見なすまで、BigFix クライアントが検索するネットワーク・ホップ (存続時間) の最大数。BigFix クライアントは、BigFix クライアントからの</p>	ト値		<p>すべてのクライアント、リレー</p>		<ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">Automatic relay selection in a high latency and/or high hop network is failing</a></li> <li>• <a href="#">Autoselection Failsafe Controls</a></li> </ul>
	設定タイプ	数値			
	値の範囲	1 ~ 255			
	使用可能なタスク	はい			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>ネットワーク・ホップが最大数未満の BigFix リレーのみ検索することができます。この設定を使用して、自動リレー選択アルゴリズムで生成される ICMP トラ</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照								
フィックを制限することができます。												
<p><b>_BESClient_RelaySelectPingDelayMicroSeconds</b></p> <p>自動リレー選択アルゴリズムの各反復間で、BigFixクライアントが待機する時間。各反復で、BigFixクライアントは前回の反復よりも</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="479 829 613 926">ト値</td> <td data-bbox="613 829 750 926"></td> </tr> <tr> <td data-bbox="479 926 613 1031">設定タイプ</td> <td data-bbox="613 926 750 1031">数値 (マイクロ秒)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="479 1031 613 1188">値の範囲</td> <td data-bbox="613 1031 750 1188">0 ~ 1,000,000 (1 秒)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="479 1188 613 1293">使用可能なタスク</td> <td data-bbox="613 1188 750 1293">いいえ</td> </tr> </table>	ト値		設定タイプ	数値 (マイクロ秒)	値の範囲	0 ~ 1,000,000 (1 秒)	使用可能なタスク	いいえ	クライアント	すべて	<a href="#">Automatic relay selection in a high latency and/or high hop network is failing</a>
ト値												
設定タイプ	数値 (マイクロ秒)											
値の範囲	0 ~ 1,000,000 (1 秒)											
使用可能なタスク	いいえ											

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>TTL が大きい ICMP パッケージを送信します。この設定を使用し、自動リレー選択アルゴリズムのペーシングを落とし、生成されるネットワーク・トラフィック</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照								
クを削減することができません。												
<p><b>_BESClient_RelaySelect_ResistanceFailureIntervalSeconds</b></p> <p>この設定は、BigFixクライアントが通信エラーを無視する時間を制御します。これを過ぎると、BigFixリレー選択が実行されます。BigFix</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="472 768 613 873">ト値</td> <td data-bbox="613 768 756 873">60 (分)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="472 873 613 978">設定タイプ</td> <td data-bbox="613 873 756 978">数値 (秒)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="472 978 613 1136">値の範囲</td> <td data-bbox="613 978 756 1136">0 ~ 21,600 (6時間)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="472 1136 613 1241">使用可能なタスク</td> <td data-bbox="613 1136 756 1241">はい</td> </tr> </table>	ト値	60 (分)	設定タイプ	数値 (秒)	値の範囲	0 ~ 21,600 (6時間)	使用可能なタスク	はい	クライアント	て	<a href="#">リレー・フェイルオーバーの構成</a>
ト値	60 (分)											
設定タイプ	数値 (秒)											
値の範囲	0 ~ 21,600 (6時間)											
使用可能なタスク	はい											



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>リレーが選択され、BigFix クライアントが正常に登録された後、別の BigFix リレーを選択することを決定する前に、BigFix クライアントはこの時間の間、結果を BigFix</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照						
リレーまたは BigFix サーバーに送付しますが、その際エラーを無視します。										
<p><b>_BESClient_RelaySelect_FailoverRelay</b></p> <p>この設定は、構成された最大距離まで TTL ping に応答する BigFix リレーがない</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="472 1129 613 1234">ト値</td> <td data-bbox="613 1129 756 1234"></td> </tr> <tr> <td data-bbox="472 1234 613 1549">設定タイプ</td> <td data-bbox="613 1234 756 1549">文字列 (フェイルオーバー・リレーの URL)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="472 1549 613 1654">使用可能なタスク</td> <td data-bbox="613 1549 756 1654">いいえ</td> </tr> </table>	ト値		設定タイプ	文字列 (フェイルオーバー・リレーの URL)	使用可能なタスク	いいえ	クライアント	すべて	<a href="#">What manual Relay selection options do I have for my clients and Relays?</a>
ト値										
設定タイプ	文字列 (フェイルオーバー・リレーの URL)									
使用可能なタスク	いいえ									

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>場合に、BigFix クライアントが何をを行うかを決定します。この場合、BigFix クライアントは指定されたフェイルオーバー BigFix リレーに登録を試みた後、BigFix サーバーに</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照				
<p>試みます。この設定は、BigFix 5.1 で最初に導入されました。</p> <p><b>注:</b> この形式は、__RelayServer1 と __RelayServer2 の設定で同じです。 例:<a href="http://servername:port/bfmirror/downloads/">http://servername:port/bfmirror/downloads/</a></p>								
<p>この設定に</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="474 1682 613 1787">__BESClient_RelayServer1</td> <td data-bbox="613 1682 760 1787">String (ストリング)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="474 1787 613 1890">__BESClient_RelayServer2</td> <td data-bbox="613 1787 760 1890">String (ストリング)</td> </tr> </table>	__BESClient_RelayServer1	String (ストリング)	__BESClient_RelayServer2	String (ストリング)	クライアント	すべて	<a href="#">BigFix Relays –Part 1 (PDF)</a>
__BESClient_RelayServer1	String (ストリング)							
__BESClient_RelayServer2	String (ストリング)							


名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>は、プライマリー、セカンダリーとしてリストされているリレーがないか、ping に応答するターシャリー・リストで指定されているリレーがない場合に、選択する</p>	値の範囲	セミコロンの区切られたリスト			
	使用可能なタスク	いいえ			
	プラットフォーム	すべて			
	コンポーネントの再起動が必要	いいえ			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>フェイルオーバー・リレーのリストが含まれます。この設定は、試行するリレーのセミコロンの区切りリストで、BigFix 9.0 で最初に導入されました。自動リレー選択について</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>は、<a href="#">リレー・アフィリエーションに関するドキュメント</a>を参照してください。指定されている場合、この設定は <code>_BESClient_RelaySelect_FailoverRelay</code> をオーバーライドします。 (例: <code>relay1.company.com;192.168.123.32;relay2.company.com)</code>)</p>				

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p><b>__RelaySelect_Automatic</b></p> <p>この設定を使用して、クライアントが自動親リレー選択用に構成されているかどうかを指定します。設定「__RelaySelect_Automatic = 1」は、クライアントが自動親リレー選択を</p>	デフォルト値	0 (無効)	クライアント	すべて	
	設定タイプ	ブール値			
	値の範囲	1 (有効)、0 (無効)			
	使用可能なタスク	はい			



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>使用することを示します。</p> <p> <b>注:</b> 自動親リレー選択が構成されているクライアントは、リレーに対して ping を実行できなければならないため、プロキシ経由で親リレー</p>				

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
と通信できません。					
<p><b>_BESClient_RelaySelectTertiaryRelayList</b></p> <p>手動リレー選択を使用している場合、この設定で、プライマリーおよびセカンダリー・リレーにアクセスできない場合に選択するフェイルオー</p>	<p>ト値</p> <p>設定タイプ</p> <p>値の範囲</p> <p>使用可能なタスク</p>	<p>String (ストリング)</p> <p>セミコロンで区切られたリスト</p> <p>いいえ</p>	プライマリー	すべて	<p><a href="#">What manual Relay selection options do I have for my clients and Relays?</a></p>

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>バー・リレーのリストを指定します。この設定は、試行するリレーのセミコロンの区切りリストです。手動選択は、プライマリー/セカンダリー/ターシャリー・</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>リスト/フェイルオーバー/ルートの順で行います。自動リレー選択については、<a href="#">リレー・アフィリエーションに関するドキュメント</a>を参照してください。</p> <p>(例:relay1.company.com;192.168.123.32;relay2.company.com)</p>				

[上 \( ページ \) 168](#)

## リレーの管理


名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p><b>_BESClient_Relay_NameOverride</b></p> <p>BigFix リレーがすべての BigFix クライアントからアクセスできない DNS 名を使用している場合、オーバーライドを使用することができ</p>	<p><b>NameOverride</b></p> <p>ト値</p> <p>設定タイプ</p> <p>値の範囲</p> <p>使用可能なタスク</p>	<p>文字列 (オーバーライド名)</p> <p>hostname または ipaddress (ポート番号は含めないでください)</p> <p>はい</p>	リレー	すべて	<p><a href="#">BigFix クライアントが指定の BigFix リレーを使用しないのはなぜですか。</a></p>

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>ます。 この値が BigFix リレー・コンピューターで設定されている場合、dns 名インスペクターにこの設定が返され、それが BigFix サーバーにレポートされ、</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>他の BigFix クライアントはこの値を使用して BigFix リレーを見つけます。 BigFix クライアントが DNS 名ルックアップではなく IP アドレスでリレーを見つけられるようにす</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>るためにも、この値を使用できます。例えば、BigFix リレーが relay1:52311 でレポートされた場合、この設定を使用して relay1.company.com:52311 または 192.168.100.123:52311 で BigFix リレーにアクセスで</p>				



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>きるようにすることができます。</p> <p> <b>注:</b> この値は、すべての BigFix クライアント・コンピューターではなく、1 つの BigFix リレー・コンピューターのみ設</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照						
定する必要がありません。										
<p><code>_BESClient_RelayChain_Days</code></p> <p>リレー・チェーン情報は、BES グローバル・ディレクトリーにある <code>RelayChain</code> という新規クライアント・フォルダー内の <code>.txt</code></p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="474 718 613 823">ト値</td> <td data-bbox="613 718 758 823">0</td> </tr> <tr> <td data-bbox="474 823 613 928">設定タイプ</td> <td data-bbox="613 823 758 928">数値 (日数)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="474 928 613 980">値の範囲</td> <td data-bbox="613 928 758 980">0 - 366</td> </tr> </table>	ト値	0	設定タイプ	数値 (日数)	値の範囲	0 - 366	クライアント	9.5.13以降	リレー・チェーンのクライアントでの表示 (##### )
ト値	0									
設定タイプ	数値 (日数)									
値の範囲	0 - 366									

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>ファイルに保存されています。この設定を使用して、フォルダーにファイルを保存する日数を指定します。</p>				

[上 \( \(ページ\) 168\)](#)

**アフィリエイト**

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p><b>_BESRelay_Register_Affiliation_Advertisements</b></p> <p>この BigFix クライアント設定も、セミコロン (;) に よって 区切ら れた <a href="#">リレー・アフィリエーション・グループ</a> のリス トに設 定する 必要が ありま す。例: AsiaPacific;DMZ;*</p>	<p>ト値</p> <p>設定タイプ</p> <p>使用可能なタスク</p>	<p>文字列 (セミコロ ンで区切 られたリス ト)</p> <p>いいえ</p>		<p>て</p>	<p><a href="#">Relay Affiliation</a></p>

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p><b>_BESClient_Register_Affiliation_SeeList</b></p> <p>この BigFix クライアント設定を、セミコロンの (;) によって区切られた <a href="#">リレー・アフィリエーション・グループ</a> のリストに設定する必要があります。例: AsiaPacific;Americas;DMZ</p>	<p>値</p> <p>設定タイプ</p> <p>使用可能なタスク</p>	<p>文字列 (セミコロンの (;) で区切られたリスト)</p> <p>いいえ</p>	<p>クライアント</p>	<p>すべて</p>	<p><a href="#">Relay Affiliation</a></p>

[上 \( ページ \) 168](#)

子の数の制限

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p><b>_Enterprise Server_ClientRegister</b></p> <p>BigFix リレーが登録できるクライアントの最大数。この限度に達すると、接続は拒否されます。</p>	デフォルト値	0 (無制限)	サーバー、リレー	すべて	<p><a href="#">Logics about automatic relay selection</a></p>
	設定タイプ	数値			
	値の範囲	0 ~ 4,294,967,295			
	使用可能なタスク	いいえ			
<p><b>_Enterprise Server_ClientRegister</b></p> <p>BigFix リレーが親に登録さ</p>	デフォルト値	0 (無制限)	サーバー、リレー	すべて	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">Logics about automatic relay selection</a></li> <li>• <a href="#">IV68384: UNABLE TO REGISTER DEVICES DUE TO "_ENTERPRISE SERVER_CLIENTREGISTER_MAXCHILDRELAY</a></li> </ul>
	設定タイプ	数値			
	値の範囲	0 ~ 4,294,967,295			

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>れて いる BigFix クライアントの最大許容数。この制限には、実行中でないが、登録リストには入っている登録済みBigFixリレーも含まれます。実行中でないBigFix</p>	使用可能なタスク	いいえ			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
リレーは、24 時間後に登録リストから削除されます。この制限は、MaxChildCount 設定とは別個に計算されます。				

[上 \( ページ 168 \)](#)

## クライアント通知

### コマンド・ポーリング

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照				
<code>_BESClient_CommandPollingEnable</code>	クライアント	クライアント	9.2 以降	• クライアント・ポーリングの有効				
この構成設定	<table border="1"> <tr> <td>デフォルト値</td> <td></td> </tr> <tr> <td>設定タイプ</td> <td>ブール値</td> </tr> </table>	デフォルト値		設定タイプ	ブール値			
デフォルト値								
設定タイプ	ブール値							



名前/説明	値		影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<p>が有効な場合、コンピューターは逃したUDPコマンドがないかどうか親リレーをポーリングします (TEM 6.0+)。 「1」に設定した場合、</p>	<p>値の範囲</p>	<p>1 (True)、0 (False)</p>			<p>化 (##### )</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">Changing the gather interval for a BigFix Client via the command polling client settings</a></li> </ul>
	<p>使用可能なタスク</p>	<p>はい</p>			

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<p>「_BESClient_Comm_CommandPollIntervalSeconds elapses.999999」 で指 定さ れた 秒数 が経 過す る と、BigFix クラ イア ント は新 しい 収集 や更 新が ない かど うか BigFix リ レー を チェッ ク しま す。</p>				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照								
<p><b>_BESClient_CommandPollIntervalSeconds</b></p> <p>「BESClient_CommandPollEnable = 1」の場合、この構成設定は、収集物や更新がないかどうか BigFix クライアントが BigFix リレーをチェックする間隔を</p>	<table border="1"> <tr> <td>デフォルト値</td> <td>300</td> </tr> <tr> <td>設定タイプ</td> <td>数値 (秒)</td> </tr> <tr> <td>値の範囲</td> <td>60 ~ 31,536,000 (1 年)</td> </tr> <tr> <td>使用可能なタスク</td> <td>はい</td> </tr> </table>	デフォルト値	300	設定タイプ	数値 (秒)	値の範囲	60 ~ 31,536,000 (1 年)	使用可能なタスク	はい	<p><b>IntervalSeconds</b></p>	9.2 以降	<p><a href="#">Changing the gather interval for a BigFix Client via the command polling client settings</a></p>
デフォルト値	300											
設定タイプ	数値 (秒)											
値の範囲	60 ~ 31,536,000 (1 年)											
使用可能なタスク	はい											

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
決定 しま す。 パ フォー マン スに 影響 する た め、900 秒未 満に は設 定し ない でく ださ い (TEM 6.0+)。				

[上 \( \(ページ\) 168\)](#)

### UDP 通知

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<b>_Enterprise Server_ClientRegisterBatchCount</b>  この 設定	デフォ ルト値 なし	サーバー、クライ アント、リレー	9.2 以降	

名前/説明	値		影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<p>は、一定期間遅延する前に、BigFix リレーが送信する UDP ping の数を制御します。遅延する長さは、_Enterprise Server_ClientRegister_BatchDelay によって制御されます。</p>	設定タイプ	String (ストリング)			
	値の範囲	N/A			
	使用可能なタスク	いいえ			

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
この設定を使用して、このネットワーク・トラフィックが何らかの原因で有害な場合に BigFix リレーが UDP ping を送信するペー				

名前/説明	値		影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
ス 制 限 で き ま す。					
<b>_Enterprise Server_ClientRegisterBatchDelay</b>  この 設定 は、BigFix リ レー が次 の UDP ping の バッ チを BigFix クラ イア ント に送 信す るま でに 待機 する 時間	デフォ ルト値	1000	サーバー、クライ アント、リレー	9.2 以降	
	設定タ イプ	数値 (ミ リ秒)			
	値の範 囲	1 ~ 4,294,967,296			
	使用可 能なタ スク	いいえ			

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
を制御 します。 この設定 を使用し て、この ネット ワーク・ トラフ フィック が何ら かの原 因で有 害な場 合に BigFix リレー がUDP ping				



名前/説明	値		影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照		
を送信するペースを制限できます。							
<p><b>_Enterprise Server_ClientRegister</b></p> <p>BigFix クライアントの子に送信される UDP 通知を制御するため、BigFix サーバーまたは</p>	デフォルト値	0	<p>サーバー、クライアント、UDP Messages</p>	9.2 以降			
設定タイプ	ブール値						
値の範囲	0 ~ 1						
使用可能なタスク	いいえ						
コンポーネントの再起動が必要	はい						

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
BigFix リ レー に 設定 でき るク ライ アン ト設 定。 1に 設 定し た場 合、 その マシ ンか ら接 続さ れて いる BigFix クラ イア ント に UDP 通				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
知は送信されません。この場合、その親リレーにサブスクライブしている BigFix クライアントは、通知やダウンロードを捜すために、				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<p>定期的に親をポーリングする必要があるあります。<b>_BESClient_Comm_CommandPollEnable</b> および <b>_BESClient_Comm_CommandPollIntervalSeconds</b></p> <p>クライアント設定も参照してください。この設定は、リリースまたは</p>				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
サーバーにインストールされている BigFix クライアントの動作には影響せず、クライアントは引き続き UDP メッセージを受信します。				

名前/説明	値		影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<p><b>_BESClient_ConfirmListenEnable</b></p> <p>0 に設定されている場合、BigFix クライアントは UDP メッセージをリスンしません。BigFix クライアントが UDP メッセージを受信しない場</p>	デフォルト値		クライアント	9.2 以降	<a href="#">UDP messages on BigFix Agent</a>
	設定タイプ	ブール値			
	値の範囲	1 (True): UDP をリスン、0 (False): UDP を無視			
	使用可能なタスク	いいえ			

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
合、BigFix クラ イア ント に新 規ア ク ショ ンや コン テン ツを 伝え るた めに BigFix サー バー から 送信 され る ping を受 信し ませ ん。				

[上 \( ページ \) 168](#)

**永続的な TCP 接続**

永続的な TCP 接続を管理する詳細なドキュメントについては、[永続的な接続 \(ページ 148\)](#)を参照してください。

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
クラ イア ント 上で 永続 的な 接続 を作 成す る機 能を 制御 しま す。 クラ イア ント 上で 永続 的な 接続 を作 成す るプ ロセ スを	PersistentConnectionsEnabled 設定タ イプ 値の範 囲	クライアント	9.5.11 以降	<a href="#">永続的な接続 (##### 148)</a>
	プール 値			
	0 ~ 1			
	いいえ			
	タスク			



名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
有効にする場合、この設定の値を1 (True) に設定します。TCP 永続接続は、クライアントとその親リレーの間で確立されます。				
<b>_BESRelay_PersistentConnections_Enabled</b>	0 (False) 以降 ルト値	Enabled	9.5.11 以降	<a href="#">永続的な接続 (##### 148)</a>


名前/説明	値		影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
リレー上で永続的な接続を作成する機能を制御します。リレー上で永続的な接続を作成するプロセスを有効にする場合、この設定	設定タイプ	ブール値			
	値の範囲	0 ~ 1			
	使用可能なタスク	いいえ			

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照						
<p>の値を 1 (True) に設定します。TCP 永続接続は、クライアントとその親リレーの間で確立されます。</p>										
<p><b>_BESRelay_PersistentConnectionNumberPerSubnet</b></p> <p>リレーが各サブネットに確立</p>	<table border="1"> <tr> <td>ルト値</td> <td></td> </tr> <tr> <td>設定タイプ</td> <td>数値 (秒)</td> </tr> <tr> <td>コンポーネントの</td> <td>はい</td> </tr> </table>	ルト値		設定タイプ	数値 (秒)	コンポーネントの	はい		0.5.11 以降	<a href="#">永続的な接続 (##### 148)</a>
ルト値										
設定タイプ	数値 (秒)									
コンポーネントの	はい									

名前/説明	値		影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<p>できる同時永続接続の数を定義します。この値は、クライアントに影響を及ぼす接続エラーがサブネットで発生した場合に、リ</p>	再起動 が必要				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
レー の フォー ルト・ トレ ラン ス機 能を 決定 しま す。				
_BESRelay_PersistentConnection_MaxNumber  リ レー が 確立 でき る同 時永 続接 続の 最大 数を 定義 しま す。この 設定 は、	ポート値	100	9.5.11 以降	<a href="#">永続的な接続 (##### 148)</a>
	設定タイプ	数値 (秒)		
	コンポーネントの再起動が必要	はい		

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
リレー であり あまり に多く の接続 が開 いた まま にな るの を防 ぎま す。				
<b>_BESRelay_PersistentConnection_KeepAliveSeconds</b>	600		9.5.11 以降	<a href="#">永続的な接続 (##### 148)</a>
リレー が確 立さ れた 永続 接続 の状 態 チェツ クを 実行 する 頻度	ルト値			
	設定タ イプ	数値 (秒)		
	コン ポーネ ントの 再起動 が必要	はい		

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照												
を決定 しま す。																
<b>_BESClient_PersistentConnection_SubnetCidrOverride</b>  クライアントによって検出されたサブネット値をオーバーライドし、永続接続のコンテキストでのみ有	<table border="1"> <tr> <td>システム設定</td> <td>値</td> <td>説明</td> </tr> <tr> <td></td> <td>し</td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td>有効な CIDR 形式 (例: 192.168.1.0/24)</td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td>いいえ</td> <td></td> </tr> </table> <p> <b>注:</b> この設定は、次のクライアント登録後に有効になります。</p>	システム設定	値	説明		し			有効な CIDR 形式 (例: 192.168.1.0/24)			いいえ		SubnetCidrOverride	5.11 以降	<a href="#">永続的な接続 (##### 148)</a>
システム設定	値	説明														
	し															
	有効な CIDR 形式 (例: 192.168.1.0/24)															
	いいえ															

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
効です。 この設定は、クライアントによって検出されたサブネット値により永続接続が正しく機能しなくなる可能性がある、複				



名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<p>雑なネットワーク内では有用です。この設定は、 <b>_BESClient_PersistentConnection_Enabled</b> が1に設定されているクライアントでのみ有効です。</p>				

## 通信

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p><b>_BESClient_CommunicationSkipInternet (Active Test)</b></p> <p>BigFix クライアントが収集を試みる前に、Windows API 接続テストを確認して、インターネット接続が使用可能かどうかを特定します。この設定によ</p>	ト値	0 (Active Test)	クライアント	9.2以降	
	設定タイプ	ブール値			
	値の範囲	1 (True): 接続テストを無視、0 (False): 接続テストを実行			
	使用可能なタスク	いいえ			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照										
り、BigFix クライアントは接続テストの結果を無視して、収集を試行することができます。														
<p><b>_BESClient_CommunicationsMode</b></p> <p>この設定では、ネットワーク・ポートの選択を決定し</p>	<p><b>IPCommunicationsMode</b></p> <table border="1" data-bbox="479 1287 766 1871"> <tr> <td>ト値</td> <td></td> </tr> <tr> <td>設定タイプ</td> <td>String (ストリング)</td> </tr> <tr> <td>値の範囲</td> <td>Ipv4ThenIpv6、Ipv6ThenIpv4、OnlyIpv4</td> </tr> <tr> <td>使用可能なタスク</td> <td>いいえ</td> </tr> <tr> <td>コンポーネントの再起動が必要</td> <td>いいえ</td> </tr> </table>	ト値		設定タイプ	String (ストリング)	値の範囲	Ipv4ThenIpv6、Ipv6ThenIpv4、OnlyIpv4	使用可能なタスク	いいえ	コンポーネントの再起動が必要	いいえ	<p>クライアント</p>	<p>9.2以降</p>	<p></p>
ト値														
設定タイプ	String (ストリング)													
値の範囲	Ipv4ThenIpv6、Ipv6ThenIpv4、OnlyIpv4													
使用可能なタスク	いいえ													
コンポーネントの再起動が必要	いいえ													

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>ます。 この設定に使用できる値: 「Ipv4ThenIpv6」、 「Ipv6ThenIpv4」、 「OnlyIpv4」。</p> <p>この設定は、BigFix 9.0 で最初に追加されました。</p>				

[上\( \(ページ\) 168\)](#)

### 認証

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p><b>_BESRelay_CommandKeyExchangePassword</b></p> <p>エージェント値</p>			9.2 以降	手動での鍵交換 (##### )

名前/説明	値		影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
ント が証 明書 を保 有し てお ら ず、 イン ター ネットを 介し て接 続さ れた ネット ワーク上 の認 証リ レー への みの 到達 でき る場 合、 認証	設定タ イプ	String (ストリ ング)			
	コン ポーネ ントの 再起動 が必要	いいえ			

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
リレーとの鍵交換を有効にすることができます。クライアントは認証リレーとの鍵交換にパスワードを含めます。これにより、				

名前/説明	値		影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
鍵交換をその親に転送する前にクライアントが検証されます。					
認証リレーを構成するには、 <sup>1</sup> に設定するか、または BES サ	認証リレーを構成するに	0 (使用不可)	リレー	9.2 以降	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 認証リレー (##### )</li> <li>• インターネット・リレーの設定 (##### )</li> <li>• 新規 BigFix 仮想リレー・インスタンスの手動デプロイ (##### )</li> </ul>
_BESRelay_ComponentAuthenticating	ルト値	ブール値			
設定タイプ	値の範囲	0 (使用不可) 1 (有効)			
コンポーネントの再起動が必要		はい			

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
ポート・サイトで関連タスクを使用します。オープン・リレーを構成するには、パラメータを0に設定するか、またはBES				



名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
サ ポ ー ト ・ サイ ト で 関 連 タ ス ク を 使 用 し ま す。				

[上 \( \(ページ\) 168\)](#)

## ダウンロード

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<code>_BESClient_DownloadSizeLimit</code>	フォ ルト 値	unsigned int32 (4,294,967,295)	5.9 以降	<a href="#">ダウンロードの管理 (##### 987)</a>
こ の 設 定				

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
を使用して、アクションに関連するダウンロードの場合	設定タイプ	数値 (MB)			
値の範囲	0 ~ 4,294,967,295				
使用可能なタスク	いいえ				
コンポーネントの再起動が必要	いいえ				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
計サイズが超えてはならないサイズを MB で指定				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
します。アクションに関連するダウンロードの合計サ				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>イズが指定された値を超える場合、アクションは実</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
行されません。このチェックは、1つ以上のファイルのダウ				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>ダウンロードが必要なアクションごとに、ターゲット・エージェント</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>によって行われます。条件 download &lt;url&gt;: ダウンロードのサイズ</p>				



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>は予測できないため、デフォルトでは最大値 (4,294,967,295) と見</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>なされます。このため、接続されているリレーが上述</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>の ダ ウ ン ロ ー ド 条 件 で 優 先 さ れ る リ レ ー で な い 場 合、</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>アクションは実行されません。条件 download now &lt;url&gt;: リレー階層</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>は使用せず、チェックは実行されません。設定が定義さ</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>れていない場合と同じ条件です。動的ダウンロード</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>の場合、アクションごとに、プリフェッチ検査でダウンロードさ</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
れたファイルの合計サイズに対してチェックが実行さ				



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
れます。しきい値に達すると、ダウンロードは停止し				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
ます。				
<p><b>_BESClient_Download_Direct</b></p> <p>一般に、BigFix クライアントは BigFix リレーに接続して</p>	<p>フォルト値</p> <p>設定タイプ</p> <p>値の範囲</p>	<p>(False)</p> <p>ブール値</p> <p>1 (True):</p> <p>インターネットからダウンロード、0 (False):</p> <p>通</p>	<p>すべて</p>	<p><a href="#">ダウンロードの管理 (##### 987)</a></p>

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
インターネットからダウンロードを受け取ります。この		常どおりダウンロード			
	使用可能なタスク	いいえ			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
設定は、BigFix クライアントが指定された URL を使用して				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
インターネットから直接ファイルをダウンロードするよ				


名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>う強制します。この設定は、他のダウンロード設定よ</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
りも優先されます。				
<p><b>_BESClient_Download_DirectOnFail</b></p> <p>BigFix クライアントが BigFix サーバ</p>	<p>フォルト値</p> <p>設定タイプ</p> <p>値の範囲</p>	<p>(False)</p> <p>ブール値</p> <p>1 (True): 失敗した場合、</p>	<p>クライアント</p>	<p>ダウンロードの管理 (<a href="#">##### 987</a>)</p>

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>または BigFix リレーからのファイルのダウンロードに失敗し</p>		<p>インターネットからダウンロードする、0 (False): 失敗した場合、インターネットからダウンロード</p>		



名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
た場合、インターネットから直接ファイルのダウンロード	使用可能なタスク	<div data-bbox="505 768 602 873">ドしない</div> <div data-bbox="505 873 602 1083">いいえ</div>			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>を試みることができません。</p> <p> <b>注:</b> ネットワーク内にインター</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
ネットへの認証されていないアクセスをブロックす				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
る プ ロ キ シー が あ る 場 合、 こ の 設 定 を 1 (True) に で き な				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
い こ と が あ り ま す。				
ク ラ イ ア ン ト が ダ ウ ン ロ ー ド	フォルト 値  設定 タイプ  値の 範囲  使用 可能な タ スク	数値 (MB 単位)  0 ~ 4294967295  いい え	クラ イア ン ト  て  67295	<a href="#">_BESClient_DownloadMinimumDiskFreeMB</a> <a href="#">クライアントの管理 (##### 987)</a>

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>を格納するディスク領域がこの設定の値よりも小</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>さい場合、この設定は、ダウンロード・ステージを両方と</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
も停止します (通常ステージと事前キャッシュ・ステージ)。				




名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
クライアントが既に通常ステージのダウンロード・	フォルト値		クライアント	て	<a href="#">_BESClient_DownloadNormalStageDiskLimitMB</a> の管理 (##### 987) • <a href="#">JobDiskLimited message in the BigFix Client log</a>
	設定タイプ	数値 (MB 単位)			
	値の範囲	0 ~ 4,294,967,295			
	使用可能なタスク	いいえ			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
ディスク領域を大量に使用している場合、この設定				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>は、通常ステージのダウンロードを停止します。ダウン</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
ロードに使用された合計領域がこの制限を超えた				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
場合、通常ダウンロードのマークが付いたアクションは				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>制約付きをレポートします。</p> <p> <b>注:</b> 空きがある場合に、事</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
前 キャッシュ・ ステージ領域 からいくらか 領域を借りるこ				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
とで、通常ステージのダウンロードがこの制限を超え				



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
てしまうことがあります。				
この設定は、グループ・ア	<p><code>_BESClient_Download_PreCacheStagesContinueWhenDiskLimited</code> (無効)</p> <p>フォルト値</p> <p>設定タイプ</p> <p>値の範囲</p>	クライアント	以降	<p><a href="#">有効化 (##### 990)</a></p>

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
クシヨンのために事前にキャッシュされたファイルをクライ		たは1 (有効)			
	使用可能なタスク	いいえ			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>アント・システムで削除できるかどうかを指定し、</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
エージェントがグループ内の後続のサブ・アクションのため				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
めにアクション・ダウンロード要求を続行できるよう				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
に し ま す。 ク ラ イ ア ン ト の 事 前 キ ャ ッ シ ュ 領 域 か ら 削 除				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
されたファイルがサブ・アクションで必要になった場合、				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
実行時に親リレーから再度ダウンロードする必要がある				



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
あります。				
クライアントが既に事前キャッシュステージ	フォルト値 設定タイプ 値の範囲 使用可能なタスク	250 数値 (MB 単位) 0 ~ 4,294,967,295 いいえ	すべて	<a href="#">クライアントの管理 (##### 987)</a> • <a href="#">JobDiskLimited message in the BigFix Client log</a>

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>の ダ ウ ン ロー ド・ ディ スク 領域 を大 量に 使用 して いる</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
場合、この設定は、事前キャッシュ・ステージのダウンロードを				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>停止します。ダウンロードに使用された合計領域が</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
この制限を超えた場合、事前キャッシュのマークが付いた				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>アクションは制約付きをレポートします。</p>				
<p>この設定</p>	<p><b>_BESClient_Download_PreCacheStageEnabled</b>                      (有効)                      フォルト値</p>		<p>クライアント</p>	

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
は、事前キャッシュ・ダウンロード機能が有効かどうかを特	設定タイプ	ブール値			
	値の範囲	1 (有効)、0 (無効)			
	使用可能なタスク	いいえ			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
定します。ダウンロードの事前キャッシュを無効にするに				



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照				
は、これをゼロ (0) に設定します。								
<p><b>_BESClient_Download_RetryMinutes</b></p> <p>アクション中に BigFix</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="415 1444 505 1654">フォルト値</td> <td data-bbox="505 1444 594 1654"></td> </tr> <tr> <td data-bbox="415 1654 505 1873">設定タイプ</td> <td data-bbox="505 1654 594 1873">数値 (分)</td> </tr> </table>	フォルト値		設定タイプ	数値 (分)	クライアント	すべて	<a href="#">BigFix Troubleshooting Downloads</a>
フォルト値								
設定タイプ	数値 (分)							


名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
クライアントが BigFix サーバーまたは BigFix リレーからのファイ	値の範囲	0 ~ 480 (8 時間)			
	使用可能なタスク	いいえ			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
ルのダウンロードに失敗した場合、指定された時間				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>の間待機してから再試行します。それぞれの試行</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
に失敗すると、上限の10分に達するまで前回の再				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
試行の間隔は2倍になります(ハードコードされて				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>いる)。</p> <p> <b>注:</b> RetryMinutes</p> <p>値の意味: x 分間、別のダウンロードの試行</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
は開始しません。いつ実際に試行が行われるかは、				



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
クライアントのアクティビティと負荷によって変わり				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照								
ます。												
<p><b>_BESClient_Download_RetryLimit</b></p> <p>アクション中に BigFix クライアントが BigFix サーバ</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="415 873 505 1083">フォルト値</td> <td data-bbox="505 873 602 1083"></td> </tr> <tr> <td data-bbox="415 1083 505 1293">設定タイプ</td> <td data-bbox="505 1083 602 1293">数値 (再試行制限)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="415 1293 505 1398">値の範囲</td> <td data-bbox="505 1293 602 1398">0 ~ 100</td> </tr> <tr> <td data-bbox="415 1398 505 1608">使用可能なタスク</td> <td data-bbox="505 1398 602 1608">いいえ</td> </tr> </table>	フォルト値		設定タイプ	数値 (再試行制限)	値の範囲	0 ~ 100	使用可能なタスク	いいえ	クライアント	すべて	<a href="#">BigFix Troubleshooting Downloads</a>
フォルト値												
設定タイプ	数値 (再試行制限)											
値の範囲	0 ~ 100											
使用可能なタスク	いいえ											

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
または BigFix リレーからのファイルのダウンロードに失敗し				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>た場合、指定された回数再試行します。再試行の間</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>隔は _BESClient_Download_RetryMinutes 設定で管理されます。</p>				
<p><b>_BESClient_Download_Change_Threshold</b>  BigFix クライアントは、BES</p>	<p>フォルト値 設定 タイプ 値の範囲</p>	<p>50000 数値 (バイト) 1~ 100,000,000</p>	<p>クライアント</p>	

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
ルート・サーバーに添付されている場合、1つの「メイン・チャネ		(シン・チャネルを無効にするには、0に設定します)			
	使用可能なタスク	いいえ			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>ル」と1つの「シン・チャネル」を使用して、一度に2つの</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>ファイルを同時にダウンロードできます。メイン・チャネ</p>				



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
ルはすべてのダウンロードに使用されますが、メイ				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>ン・チャンネルが現在大きいファイルダウンロード中の</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
場合、ダウンロード・サイズが指定されたしきい値よ				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>りも小さければ、シン・チャネルを使用して小さいファ</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
イルをダウンロードできません。この設定が高く指定				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>されている場合、BigFix クライアントはシン・チャネルを使</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
用して大きいファイルをダウンロードしますが、ファイ				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>ルを1つずつダウンロードするのではなく、同時に</p>				



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
2 つの大きいファイルをダウンロードするため (それ				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
それが帯域幅の半分を使用)、アクションが遅くなる				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>ことがあります。この設定が低く指定されている</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
場合、シン・チャネルは非常に小さいファイルのダウン				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
ロードにのみ使用されます。				
BigFix クライアントが BigFix	<p><code>_BESClient_DownloadActivityTimeout</code></p> <p>フォルト値</p> <p>設定タイプ</p> <p>値の範囲</p>	<p>30(分)</p> <p>数値(秒)</p> <p>0 ~ 4294967295</p>	<p>クライアント</p>	<p><a href="#">BigFix Troubleshooting Downloads</a></p>

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
サーバーまたはBigFixリレーからファイルをダウンロードする	使用可能なタスク	いいえ			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>際、ネットワークの問題、切断などにより、無操作状態が</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
発生することがあります。無操作状態が発生して				



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>いる場合、BigFix クライアントはダウンロードを中止する</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
前に指定された秒数の間、データを受信するのを待				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照								
機 し ま す。												
<p><b>_BESClient_DownloadLimitMB</b></p> <p>この構成設定は、BigFix クライアントのダウンロード</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="415 978 505 1188">フォルト値</td> <td data-bbox="505 978 602 1188"></td> </tr> <tr> <td data-bbox="415 1188 505 1346">設定タイプ</td> <td data-bbox="505 1188 602 1346">数値 (MB 単位)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="415 1346 505 1451">値の範囲</td> <td data-bbox="505 1346 602 1451">0 ~ 4294967295</td> </tr> <tr> <td data-bbox="415 1451 505 1661">使用可能なタスク</td> <td data-bbox="505 1451 602 1661">いいえ</td> </tr> </table>	フォルト値		設定タイプ	数値 (MB 単位)	値の範囲	0 ~ 4294967295	使用可能なタスク	いいえ	クライアント	て	
フォルト値												
設定タイプ	数値 (MB 単位)											
値の範囲	0 ~ 4294967295											
使用可能なタスク	いいえ											

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>ン ロー ド・ キャッ シュ 制限 を設 定し ます (TEM 6.0+)。Endpoint Manager ク ラ イ ア ン</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
トは、ダウンロード・キャッシュ制限に関係なく、同じ日にキャッシュ				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
シュ された たす べて の ファ イル を 保 持 し ま す。 構 成 さ れ				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>ただダウンロード・キャッシュ・サイズよりも大きいファイルが</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
1 つのみの場合、 存続時間や ダウンロード・ キャッシュ 制限				



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>に 関 係 な く、Endpoint Manager ク ラ イ ア ン ト は こ の フ ア イ ル を 保 持</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照								
します。												
この構成設定は、ユーザーリテュー・キャッシュ制限を設定	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="415 926 505 1136">フォルト値</td> <td data-bbox="505 926 602 1136"></td> </tr> <tr> <td data-bbox="415 1136 505 1293">設定タイプ</td> <td data-bbox="505 1136 602 1293">数値 (MB 単位)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="415 1293 505 1398">値の範囲</td> <td data-bbox="505 1293 602 1398">0 ~ 4294967295</td> </tr> <tr> <td data-bbox="415 1398 505 1608">使用可能なタスク</td> <td data-bbox="505 1398 602 1608">いいえ</td> </tr> </table>	フォルト値		設定タイプ	数値 (MB 単位)	値の範囲	0 ~ 4294967295	使用可能なタスク	いいえ	クライアント	て	<p><b>_BESClient_DownloadUtilitiesCacheLimitMB</b></p>
フォルト値												
設定タイプ	数値 (MB 単位)											
値の範囲	0 ~ 4294967295											
使用可能なタスク	いいえ											


名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照								
定し ま す (TEM 6.0+)。												
この設定は、ダウンロードされたファ	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="415 1083 505 1293">フォルト値</td> <td data-bbox="505 1083 602 1293"></td> </tr> <tr> <td data-bbox="415 1293 505 1451">設定タイプ</td> <td data-bbox="505 1293 602 1451">数値 (日数)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="415 1451 505 1556">値の範囲</td> <td data-bbox="505 1451 602 1556">0 ~ 2,147,483,647</td> </tr> <tr> <td data-bbox="415 1556 505 1766">使用可能なタスク</td> <td data-bbox="505 1556 602 1766">いいえ</td> </tr> </table>	フォルト値		設定タイプ	数値 (日数)	値の範囲	0 ~ 2,147,483,647	使用可能なタスク	いいえ	レ	て	<a href="#">_BESRelay_Downloads_OlderThanInDays Download Status Report Clean-up</a>
フォルト値												
設定タイプ	数値 (日数)											
値の範囲	0 ~ 2,147,483,647											
使用可能なタスク	いいえ											

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
イルを示す行のうち、リレー上の Mirror Server/ Config/ DownloadState.db データベース				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
で ク リ ン ア ッ プ ・ タ ス ク に よ っ て 削 除 す べ き 行 を 指 定				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
します。ファイルを表す行のうち、この設定で指定さ				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
れた値よりも古い行はデータベースから削除され				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>ます。</p> <p> <b>注:</b></p> <p>ダウンロードされたファイルについての情</p>				



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>報は、以下で参照できません</p> <p>す:http://server_host:52311/cgi-bin/bfenterprise/BESMirrorRequest.exe。</p>				

[上 \(ページ 168\)](#)

## レポート管理

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p><b>_BESClient_ReportMinimumInterval</b></p> <p>BigFix クライアントはアクションを実行する際にアクション・ステータス・レポートを送信します (評価中、待機中、実行中、修正済みなど)。この設</p>	<p>MinimumInterval</p> <p>ト値</p>	<p>0</p>	<p>クライアント</p>	<p>すべて</p>	
	<p>設定タイプ</p>	<p>数値 (秒単位)</p>			
	<p>値の範囲</p>	<p>0 ~ 86400</p>			
	<p>使用可能なタスク</p>	<p>いいえ</p>			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>定は、レポートを送信する最小間隔 (秒数) を制御します。この数値が高すぎる場合、BigFix クライアントがアクション・ステータスを更新するのに長時間かかります。こ</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照						
<p>の数値が低すぎる場合、BigFix サーバーに追加のアクション・ステータス・レポートを処理するための余分な負荷がかかります。</p>										
<p><b>_BESRelay_PostResults_ResultTimeLimit</b> BigFix リレーは BigFix クライ</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="474 1549 613 1654">ト値</td> <td data-bbox="613 1549 760 1654"></td> </tr> <tr> <td data-bbox="474 1654 613 1759">設定タイム</td> <td data-bbox="613 1654 760 1759">数値 (秒)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="474 1759 613 1871">値の範囲</td> <td data-bbox="613 1759 760 1871">1 ~ 4,294,967,295</td> </tr> </table>	ト値		設定タイム	数値 (秒)	値の範囲	1 ~ 4,294,967,295	リレー	すべて	<a href="#">BES Client report interval vs BES Relay post</a>
ト値										
設定タイム	数値 (秒)									
値の範囲	1 ~ 4,294,967,295									

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>アントからのレポートを蓄積して圧縮し、指定された時間だけ待機してから、親 BigFix リレーまたは BigFix サーバーに送信します。この設定では、レポートを送信</p>	使用可能なタスク	いいえ			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>するまで待機する時間を設定します。待機時間が長い程、BigFix サーバーが BigFix クライアントからレポートを受信するまでの待ち時間が長くなりますが、システムの効率は向</p>				


名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照				
上します (ネットワーク・トラフィックの減少)。								
<p><b>_BESRelay_PostResultsRawCarbonCopyPath</b></p> <p>指定されている場合、この設定は、トラブルシューティングのために BigFix レポートのコピーを保存</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="474 978 613 1083">ト値</td> <td data-bbox="613 978 756 1083"></td> </tr> <tr> <td data-bbox="474 1083 613 1188">設定タイプ</td> <td data-bbox="613 1083 756 1188">文字列 (パス)</td> </tr> </table>	ト値		設定タイプ	文字列 (パス)		すべて	
ト値								
設定タイプ	文字列 (パス)							

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照				
<p>するリリースのパスを定義します。デフォルトでは、コピーは保存されません。</p>								
<p>指定されている場合、この設定は、トラブルシューティングのために BigFix 照会レ</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="474 1131 613 1241">ト値</td> <td data-bbox="613 1131 760 1241"></td> </tr> <tr> <td data-bbox="474 1241 613 1350">設定タイプ</td> <td data-bbox="613 1241 760 1350">文字列 (パス)</td> </tr> </table>	ト値		設定タイプ	文字列 (パス)	<p><b>_BESRelay_PostResults_QueryRawCarbonCopyPath</b></p>	以降	
ト値								
設定タイプ	文字列 (パス)							



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照						
<p>ポートのコピーを保存するリレーのパスを定義します。デフォルトでは、コピーは保存されません。</p>										
<p><b>_BESRelay_PostResults_Results_SizeLimit</b></p> <p>リレーが親に送信するアーカイブへの入力の最大サイズ (バ</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="474 1339 613 1444">デフォルト値</td> <td data-bbox="613 1339 760 1444">10000</td> </tr> <tr> <td data-bbox="474 1444 613 1549">設定タイプ</td> <td data-bbox="613 1444 760 1549">数値 (バイト単位)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="474 1549 613 1759">コンポーネントの再起動が必要</td> <td data-bbox="613 1549 760 1759">はい</td> </tr> </table>	デフォルト値	10000	設定タイプ	数値 (バイト単位)	コンポーネントの再起動が必要	はい	リレー	すべて	
デフォルト値	10000									
設定タイプ	数値 (バイト単位)									
コンポーネントの再起動が必要	はい									

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>イト単位)です。この限度に達すると、アーカイブにファイルが追加されなくなりま す(たとえ、最後に追加したファイルによってサイズが限度を超えた場合でも)。</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p> 注:</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• 圧縮されていないレポートおよび暗号化されていないレポート</li></ul>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
トのアーカイブは自ら圧縮されるため、限度に達した場合でも、				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
アーカイブ・プロセスの出力が ResultSizeLimit より小さくなる可能性があります				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>ます。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>この限度に達した後でも、リレーは次の再送信を即時には</li></ul>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
開始しないため、この設定はリレーのスループット・リミッターとして機				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
能 し ま す。				

[上 \( \(ページ\) 168\)](#)

## クエリー

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照						
<p><b>_BESClient_Query_Max_Query_Time</b></p> <p>この設定は、処理を停止し、要求を破</p>	<table border="1"> <tr> <td>ルット値</td> <td>600</td> </tr> <tr> <td>設定タイプ</td> <td>数値 (秒)</td> </tr> <tr> <td>値の範囲</td> <td>1 ~ 3600</td> </tr> </table>	ルット値	600	設定タイプ	数値 (秒)	値の範囲	1 ~ 3600	クライアント	9.5.2以降	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">BigFix Query の使用によるクライアント情報の取得 (##### 138)</a></li> <li>• <a href="#">BigFix Query Unleashed</a></li> </ul>
ルット値	600									
設定タイプ	数値 (秒)									
値の範囲	1 ~ 3600									



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>棄して、最大処理時間が経過したので要求を完了できなかったことをエージェントに回答するまでに、QnA</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照				
<p>がマ ス ター・ オペ レーター によっ て 発行 され た照 会を 処理 でき る時 間を 決定 しま す。</p>								
<p><b>_BESClient_Query_Time</b>  この 設定 は、</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="440 1650 565 1717">グループ ルト値</td> <td data-bbox="565 1650 688 1717"></td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 1717 565 1862">設定タ イプ</td> <td data-bbox="565 1717 688 1862">数値 (秒)</td> </tr> </table>	グループ ルト値		設定タ イプ	数値 (秒)	クライアント	9.5.2 以降	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">BigFix Query の使用によるクライアント情報の取得 (##### 138)</a></li> <li>• <a href="#">BigFix Query Unleashed</a></li> </ul>
グループ ルト値								
設定タ イプ	数値 (秒)							

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
処理を停止し、要求を破棄して、最大処理時間が経過したので要求を完了できなかったことをエージェント	値の範囲	1 ~ 3600			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>ント に 応 答 す る ま で に、QnA が非 マス ター・ オペ レー ター に よっ て 発行 され た照 会を 処理 でき る時 間を 決定</p>				

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照						
します。											
<p><b>_BESClient_QueryIdleTimeout</b></p> <p>この設定は、停止されるまでに QnA が新規レポートが処理されるのを待機する時間を決定します。</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="440 716 561 821">デフォルト値</td> <td data-bbox="561 716 688 821">600</td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 821 561 926">設定タイプ</td> <td data-bbox="561 821 688 926">数値 (秒)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 926 561 1037">値の範囲</td> <td data-bbox="561 926 688 1037">60 ~ 3600</td> </tr> </table>	デフォルト値	600	設定タイプ	数値 (秒)	値の範囲	60 ~ 3600		クライアント	9.5.2以降	<a href="#">BigFix Query の使用によるクライアント情報の取得 (##### 138)</a>
デフォルト値	600										
設定タイプ	数値 (秒)										
値の範囲	60 ~ 3600										

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照				
<p>す。 エージェントが処理対象の新しい照会を受信すると、QnAは自動的に起動します。</p>								
<p><b>_BESRelay_Query_RemoveTask</b></p> <p>この設定は、リ</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="440 1598 565 1703">デフォルト値</td> <td data-bbox="565 1598 688 1703">10</td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 1703 565 1808">設定タイプ</td> <td data-bbox="565 1703 688 1808">数値 (分)</td> </tr> </table>	デフォルト値	10	設定タイプ	数値 (分)	リレー	9.5.2以降	<a href="#">BigFix Query の使用によるクライアント情報の取得 (##### 138)</a>
デフォルト値	10							
設定タイプ	数値 (分)							

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>レー の キャッ シュ 領域 を空 ける ため に、BigFix 照会 要求 のク リー ン アッ プ・ タス ク を実 行す る頻 度を 決定</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照				
します。								
<p><b>_BESRelay_Query_MinTime</b></p> <p>この設定は、BigFix 照会要求を削除するためのクリーンアップ・タスクで使用される条件を決定</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="440 716 561 821">ルト値</td> <td data-bbox="561 716 683 821">60</td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 821 561 926">設定タイプ</td> <td data-bbox="561 821 683 926">数値 (分)</td> </tr> </table>	ルト値	60	設定タイプ	数値 (分)	リレー	9.5.2以降	<a href="#">BigFix Query の使用によるクライアント情報の取得 (##### 138)</a>
ルト値	60							
設定タイプ	数値 (分)							



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
します。クリーンアップ・タスクが実行されると、設定で指定された値以上の経過期間を持つ要求				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照				
が削除されます。								
<p><b>_BESRelay_Query_MemoryLimit</b></p> <p>この設定は、リレーで BigFix 照会要求を格納するために使用できるキャッシュの最</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="440 823 561 928">ルト値</td> <td data-bbox="561 823 683 928"></td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 928 561 1033">設定タイプ</td> <td data-bbox="561 928 683 1033">数値 (MB)</td> </tr> </table>	ルト値		設定タイプ	数値 (MB)	リレー	9.5.2以降	<a href="#">BigFix Query の使用によるクライアント情報の取得 (##### 138)</a>
ルト値								
設定タイプ	数値 (MB)							

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>大サイズを指定します。指定されたしきい値を超えた場合、再びしきい値が満たされるまで、古いエ</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照				
<p>ントリーが削除されます。</p>								
<p><b>_BESRelay_Query_ResultsMemoryLimit</b></p> <p>この設定は、リレーで BigFix 照会結果を格納するために使用できるキャッ</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="440 926 558 1031">ルト値</td> <td data-bbox="558 926 688 1031"></td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 1031 558 1136">設定タイプ</td> <td data-bbox="558 1031 688 1136">数値 (MB)</td> </tr> </table>	ルト値		設定タイプ	数値 (MB)	<p>レー</p>	<p>9.5.2 以降</p>	<p><a href="#">BigFix Query の使用によるクライアント情報の取得 (##### 138)</a></p>
ルト値								
設定タイプ	数値 (MB)							

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>シュの最大サイズを指定します。指定されたしきい値を超えた場合、存続期間に関係なく、再びしきい</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
値が満たされるまで、古いエントリーが削除されます。				

[上 \( \(ページ\) 168\)](#)

## アプリケーション使用状況の収集

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
この構成設定を1に設定した場合、クライアント・システムでアプリケーション使用状	_BESClient_UsageManager (Enable)	ルト値	App Usage アイア 降 ント		
	設定タイプ	ブール値			
	値の範囲	0 または 1			
	プラットフォーム	すべて			
	コンポーネントの再起動が必要	いいえ			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>況トラッキングが有効化されます。有効化することで、アプリケーションのインスタンス</p>				




名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
が実行されている場合に、アプリケーション使用状況トラッキングのインスペクターは				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照										
時間間隔をレポートできます。														
この構成設定では、エージェントが使用状況の要約情報	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="440 1134 560 1239">_BESClient_UsageManager.EnableAppUsageSummaryApps</td> <td data-bbox="560 1134 688 1239">ルト値</td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 1239 560 1396">設定タイプ</td> <td data-bbox="560 1239 688 1396">String (ストリング)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 1396 560 1501">値の範囲</td> <td data-bbox="560 1396 688 1501">Null</td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 1501 560 1711">プラットフォーム</td> <td data-bbox="560 1501 688 1711">すべて</td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 1711 560 1869">コンポーネントの</td> <td data-bbox="560 1711 688 1869">いいえ</td> </tr> </table>	_BESClient_UsageManager.EnableAppUsageSummaryApps	ルト値	設定タイプ	String (ストリング)	値の範囲	Null	プラットフォーム	すべて	コンポーネントの	いいえ	クライアント	降	
_BESClient_UsageManager.EnableAppUsageSummaryApps	ルト値													
設定タイプ	String (ストリング)													
値の範囲	Null													
プラットフォーム	すべて													
コンポーネントの	いいえ													

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>を収集すべきアプリケーション名のリストを指定できます。次の例のように、分離文字とし</p>	再起動が必要				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>て            文字を使用します。</p> <p>「+:app1:app2」            は、app1            と            app2            を追跡することを意味します。</p> <p>「-:app1:app2」            は、app1            と            app2</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>以外のすべてのアプリケーションを追跡することを意味します。この設定では、<b><code>_BESClient_UsageManager_EnableAppUsageSummary</code></b>を</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>1 に設定する必要があります。</p> <p> <b>注:</b> この構成設定では、エージェントが使用状況の要約情報</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>を収集すべきアプリケーション名のリストを指定できます。次の例のように、分離文字とし</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>て</p> <p>❗ 文字を使用します。</p> <p>「+:app1:app2」は、app1 と app2 を追跡することを意味し、</p> <p>「-:app1:app2」は、app1 と app2 以外</p>				



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>のすべてのアプリケーションを追跡することを意味します。この設定では、_BESClient_UsageManager_EnableAppUsageSummaryを1に設定</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照										
する必要はありません。														
<p><b>_BESClient_UsageManager (False)</b></p> <p>クライアント・システムでアプリケーションの使用状況の要約</p>	<table border="1"> <tr> <td>ルト値</td> <td></td> </tr> <tr> <td>設定タイプ</td> <td>ブール値</td> </tr> <tr> <td>値の範囲</td> <td>0 または 1</td> </tr> <tr> <td>プラットフォーム</td> <td>すべて</td> </tr> <tr> <td>コンポーネントの再起動が必要</td> <td>いいえ</td> </tr> </table>	ルト値		設定タイプ	ブール値	値の範囲	0 または 1	プラットフォーム	すべて	コンポーネントの再起動が必要	いいえ	クライアント	降	<p><a href="#">Application usage summary</a></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">エージェントでのアプリケーション使用状況のモニターの有効化</a></li> </ul>
ルト値														
設定タイプ	ブール値													
値の範囲	0 または 1													
プラットフォーム	すべて													
コンポーネントの再起動が必要	いいえ													

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照				
<p>データの収集を有効にするには、この構成設定を 1 に設定します。</p>								
<p>この設定を使用し</p>	<p><b>_BESClient_UsageManager (False)</b></p> <table border="1" data-bbox="440 1654 565 1812"> <tr> <td>ルト値</td> <td></td> </tr> <tr> <td>設定タイプ</td> <td>ブール値</td> </tr> </table>	ルト値		設定タイプ	ブール値	<p><b>AppUsageSummaryPath</b></p>	<p>以降</p>	
ルト値								
設定タイプ	ブール値							

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
て、クライアントがアプリケーションの実行可能ファイルの絶対パス情報を収集して保存する	値の範囲	0 または 1			
	プラットフォーム	AIX を除くすべてのプラットフォーム			
	コンポーネントの再起動が必要	いいえ			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>必要があるかどうかを決定します。この情報を取得するには、クライアント・システムでア</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>プリケーションの使用状況の要約のインスペクターを実行します。この設定がオンになっ</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
ている場合 (値 1)、エージェントは UsageData stat ファイルに実行可能ファイルの絶対パス・				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
データを収集して保存します。 この設定がオフになっている場合 (値 0)、保存された絶対パ				



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>ス・データは削除され、使用されていたディスク領域は解放されます。</p> <p><b>_BESClient_UsageManager_EnableAppUsageSummaryPath</b> が 0 に設定</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
されている場合、アプリケーションの使用状況の要約のインスペクターは「存在しない				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>オブジェクト」エラーを返します。この設定では、<b>_BESClient_UsageManager_EnableAppUsageSummary</b> を 1 に設定する必要があります。</p>				

[上 \(ページ\) 168](#)

## 帯域幅スロットリング

BigFix サーバーまたは BigFix リレーに設定して、収集フェーズでファイルをダウンロードする方法を制御します。

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
BigFix 収集は1秒間にダウンロードするバイト量を制限することで、ダウンロード速	<code>_BESGather_Download_Limit</code> (単位: Bytes Per Second) ルト値 設定タイプ 値の範囲	不可) 数値 (バイト) 0 ~ 4,294,967,255 (ダウンロード・スロットリングを無効にして最大許容帯域幅を使用する場合は、0 に設定)	バー、 リ レー	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">帯域幅スロットリング (##### 976)</a></li> <li>• <a href="#">How do I limit the bandwidth used by BigFix Clients or the BigFix Server?</a></li> </ul>


名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
度を「スロットリング」することができます。この設定は、ネットワークの帯域幅が懸念される場合(ダ	コンポーネントの再起動が必要	はい			
	使用可能なタスク	はい			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
イアルアップ接続など)に特に有効です。BigFix リレーでこの設定が使用されている場合、BigFix サーバーまたは親 BigFix				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>リリースからダウンロードする際、BigFix リリースはダウンロード速度を制限します。BigFix 5.0 以降、この設定によ</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照				
<p>りすべてのダウンロード・トラフィックがスロットリングされます。</p>								
<p><b>_BESGather_Download_ThrottleGroup</b> 親は、このリレーがここで指定</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="440 1392 558 1499">デフォルト値</td> <td data-bbox="558 1392 688 1499">リング</td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 1499 558 1656">設定タイプ</td> <td data-bbox="558 1499 688 1656">String (ストリング)</td> </tr> </table>	デフォルト値	リング	設定タイプ	String (ストリング)	すべて		<ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">帯域幅スロットリング (##### 976)</a></li> <li>• <a href="#">静的スロットリング (##### 983)</a></li> </ul>
デフォルト値	リング							
設定タイプ	String (ストリング)							



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照				
<p>されたグループの一部であると見なします。</p> <p> <b>注:</b> Windows の場合にのみ適用されます。</p>								
<p><b>_BESClient_DownloadThrottleGroup</b></p> <p>親は、このクラ</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="440 1577 558 1682">ルット値</td> <td data-bbox="558 1577 688 1682">リング</td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 1682 558 1848">設定タイプ</td> <td data-bbox="558 1682 688 1848">String (ストリング)</td> </tr> </table>	ルット値	リング	設定タイプ	String (ストリング)	クライアント	すべて	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">帯域幅スロットリング (##### 976)</a></li> <li>• <a href="#">静的スロットリング (##### 983)</a></li> </ul>
ルット値	リング							
設定タイプ	String (ストリング)							

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照								
<p>クライアントがここで指定されたグループの一部であると見なします。</p>												
<p><b>_BESRelay_HTTPServer_Throttling</b> BigFix リ レー/ サー バー から BigFix クラ イア</p>	<table border="1"> <tr> <td>ルット値</td> <td>不可)</td> </tr> <tr> <td>設定タイプ</td> <td>数値 (KBPS)</td> </tr> <tr> <td>値の範囲</td> <td>1 ~ 65536</td> </tr> <tr> <td>使用可能なタスク</td> <td>はい</td> </tr> </table>	ルット値	不可)	設定タイプ	数値 (KBPS)	値の範囲	1 ~ 65536	使用可能なタスク	はい	<p>すべて</p>	<p>すべて</p>	<p><a href="#">帯域幅スロットリング (##### 976)</a></p>
ルット値	不可)											
設定タイプ	数値 (KBPS)											
値の範囲	1 ~ 65536											
使用可能なタスク	はい											

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
ントへの送信データの「グローバル」スロットリング (0 は無制限を意味します)。値が 1000 で、100 のクライ	コンポーネントの再起動が必要	はい			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>アン トが 同時 にダ ウン ロー ドし てい る場 合、BigFix リ レー/ サー バー は各 BigFix クラ イア ント に 10KBPS で デー タを 送信</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>し ま す (合 計 1000KBPS)。 ス ロ ッ ト リ ン グ は、 デー タ・ チャ ンク をフル・ スピー ドで 送信 した 後、 次の チャ ン</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
クを送信するまでチャック・サイズ/KBPS 秒待機することで実行されるため、すべての要求がチャック・				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>サイズよりも小さい場合、スロットリングはまったく行われない可能性があります。この設定では、他の</p>				

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
BigFix リ レー/ サー バー への デー タの アッ プ ロー ド はス ロッ トリ ング され ませ ん (PostResults デー タ)。 _BESClient_Download_Limit(Bytes Per Second)	結果値	(変更不可)	イア ント	て	<a href="#">帯域幅スロットリング (##### 976)</a>
BigFix クラ					



名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
イア ント は1 秒間 にダ ウン ロー ドす るバ イト 量を 制限 する こと で、 ダ ウン ロー ド速 度を 「ス ロッ ト リン グ」	設定タイプ	数値 (バイト/秒)			
	値の範囲	0 ~ 4,294,967,255 (ダウ ンロー ド・ス ロット リング を無効 にする 場合は0 に設定)			
	使用可能なタスク	はい			
	コンポーネントの再起動が必要	いいえ			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>することができません。この設定は、ネットワークの帯域幅が懸念される場合 (ダイヤルアップ接続など)</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>に特に有効です。スロットリングを使用するために BigFix サーバーまたは BigFix リレーも設定する場合は、2</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照								
<p>この値のうち低い方がダウンロード速度として使用されます。</p>												
<p><b>_WebReports_HTTPServer (使用)</b>                      サーバー側の静的スロットリング設定</p>	<table border="1"> <tr> <td>ルト値</td> <td>不可)</td> </tr> <tr> <td>設定タイプ</td> <td>数値 (KBPS)</td> </tr> <tr> <td>値の範囲</td> <td>1 ~ 65536</td> </tr> <tr> <td>使用可能なタスク</td> <td>はい</td> </tr> </table>	ルト値	不可)	設定タイプ	数値 (KBPS)	値の範囲	1 ~ 65536	使用可能なタスク	はい	<p>レポート</p>	<p>て</p>	<p><a href="#">帯域幅スロットリング (##### 976)</a></p>
ルト値	不可)											
設定タイプ	数値 (KBPS)											
値の範囲	1 ~ 65536											
使用可能なタスク	はい											

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
定では、サーバーが静的スロットリングを使用してクライアントに送信するダウンロード・トラフィックの合計	コンポーネントの再起動が必要	はい			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
量を制御します。この設定は、任意の書き込み接続に割り当てられる帯域幅の量をアクティブな書き込み接続の数で				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照								
割ったものです。												
<p><b>_BESRelay_HTTPServer_DynamicThrottlingEnabled</b></p> <p>任意の指定されたリンクに対して動的スロットリングを有効にすると、BigFix は既存のデータの</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="440 772 561 877">ルット値</td> <td data-bbox="561 772 688 877">不可)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 877 561 982">設定タイプ</td> <td data-bbox="561 877 688 982">ブール値</td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 982 561 1140">使用可能なタスク</td> <td data-bbox="561 982 688 1140">はい</td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 1140 561 1402">コンポーネントの再起動が必要</td> <td data-bbox="561 1140 688 1402">はい</td> </tr> </table>	ルット値	不可)	設定タイプ	ブール値	使用可能なタスク	はい	コンポーネントの再起動が必要	はい	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	<p><a href="#">帯域幅スロットリング (##### 976)</a></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">動的スロットリング (##### 985)</a></li> </ul>
ルット値	不可)											
設定タイプ	ブール値											
使用可能なタスク	はい											
コンポーネントの再起動が必要	はい											

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
スループットをモニターおよび分析して、適切なデータ転送速度を設定します。競合するトラフィックが存在				



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>しない場合は、スループットが最大レートに設定されます。既存のトラフィックがある場合は、データ</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照				
<p>転送速度を、指定された割合または最小速度のいずれか高い方にスロットリングします。</p>								
<p>この設定は、通</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="440 1598 561 1703">_BESRelay_HTTPServer_DynamicThrottlingMaxKBPS</td> <td data-bbox="561 1598 688 1703">なし)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 1703 561 1808">設定タイプ</td> <td data-bbox="561 1703 688 1808">数値 (KBPS)</td> </tr> </table>	_BESRelay_HTTPServer_DynamicThrottlingMaxKBPS	なし)	設定タイプ	数値 (KBPS)	<p>バー、リレー</p>	<p>て</p>	<p><a href="#">帯域幅スロットリング (##### 976)</a></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">動的スロットリング (##### 985)</a></li> </ul>
_BESRelay_HTTPServer_DynamicThrottlingMaxKBPS	なし)							
設定タイプ	数値 (KBPS)							

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>常、デフォルトでは最大の符号なし整数値になります。これはフルロットルを示します。リンクによって</p>	値の範囲	0 ~ 4,294,967,255			
	使用可能なタスク	はい			
	コンポーネントの再起動が必要	はい			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
は、この値に、最大データ転送速度 (1 秒あたりのビット数またはKビット数) が設定されます。				

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p><b>_BESRelay_HTTPServer_DynamicThrottlingMinKBPS</b></p> <p>この設定のデフォルトはゼロです。リンクに応じて、この値に、最小データ転送速度 (1 秒あたりの</p>	<p>デフォルト値</p> <p>設定タイプ</p> <p>値の範囲</p> <p>使用可能なタスク</p> <p>コンポーネントの再起動が必要</p>	<p>DynamicThrottling</p> <p>数値 (KBPS)</p> <p>0 ~ 4,294,967,255</p> <p>はい</p> <p>はい</p>	<p>バー、リレー</p>	<p>て</p>	<p><a href="#">帯域幅スロットリング (##### 976)</a></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">動的スロットリング (##### 985)</a></li> </ul>

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>ビット数 またはK ビット 数) が設 定さ れま す。 こ の値 は、 以 下 に 示 す パー セン テー ジ・ レー トの 下 限 を設</p>				

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
定めます。					
1～100のターゲット・パーセンテージを指定します (0 は 100 と同じように扱わ	_BESRelay_HTTPServer_DynamicThrottlingPercentage	ルト値 設定タイプ 値の範囲 使用可能なタスク コンポーネントの再起動が必要	バー、リレー	て	<a href="#">帯域幅スロットリング (##### 976)</a> • <a href="#">動的スロットリング (##### 985)</a>

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照										
れま す)。														
と同じ	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="440 667 561 877">_BESClient_Download_DynamicThrottleEnabled</td> <td data-bbox="561 667 683 877">(使用不可)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 877 561 1035">_BESRelay_HTTPServer_DynamicThrottleEnabled</td> <td data-bbox="561 877 683 1035">ブール値</td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 1035 561 1297">使用可能なタスク</td> <td data-bbox="561 1035 683 1297">はい</td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 1297 561 1297">コンポーネントの再起動が必要</td> <td data-bbox="561 1297 683 1297">はい</td> </tr> </table>	_BESClient_Download_DynamicThrottleEnabled	(使用不可)	_BESRelay_HTTPServer_DynamicThrottleEnabled	ブール値	使用可能なタスク	はい	コンポーネントの再起動が必要	はい	クライアント	イアテ	<ul style="list-style-type: none"> <li>帯域幅スロットリング (##### 976)</li> <li>動的スロットリング (##### 985)</li> </ul>		
_BESClient_Download_DynamicThrottleEnabled	(使用不可)													
_BESRelay_HTTPServer_DynamicThrottleEnabled	ブール値													
使用可能なタスク	はい													
コンポーネントの再起動が必要	はい													
	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="440 1297 561 1402">_BESClient_Download_DynamicThrottleMaxBytesPerSecond</td> <td data-bbox="561 1297 683 1402">(制限なし)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 1402 561 1518">設定タイプ</td> <td data-bbox="561 1402 683 1518">数値 (BPS)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 1518 561 1623">値の範囲</td> <td data-bbox="561 1518 683 1623">0 ~ 4,294,967,255</td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 1623 561 1770">使用可能なタスク</td> <td data-bbox="561 1623 683 1770">はい</td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 1770 561 1875">コンポーネ</td> <td data-bbox="561 1770 683 1875">はい</td> </tr> </table>	_BESClient_Download_DynamicThrottleMaxBytesPerSecond	(制限なし)	設定タイプ	数値 (BPS)	値の範囲	0 ~ 4,294,967,255	使用可能なタスク	はい	コンポーネ	はい	クライアント	イアテ	<ul style="list-style-type: none"> <li>帯域幅スロットリング (##### 976)</li> <li>動的スロットリング (##### 985)</li> </ul>
_BESClient_Download_DynamicThrottleMaxBytesPerSecond	(制限なし)													
設定タイプ	数値 (BPS)													
値の範囲	0 ~ 4,294,967,255													
使用可能なタスク	はい													
コンポーネ	はい													



名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
	ントの再起動が必要				
<p><b>_BESClient_Download_DynamicThrottleMinBytesPerSecond</b></p>	ルト値		イア て ント		<p><a href="#">帯域幅スロットリング (##### 976)</a></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>動的スロットリング (<a href="#">##### 985</a>)</li> </ul>
設定タイプ	数値 (KBPS)				
値の範囲	0 ~ 4,294,967,255				
使用可能なタスク	はい				
コンポーネントの再起動が必要	はい				
<p><b>_BESClient_Download_DynamicThrottlePercentage</b></p> <p>1 ~ 100 のターゲット・パー</p>	ルト値		イア て ント		<p><a href="#">帯域幅スロットリング (##### 976)</a></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>動的スロットリング (<a href="#">##### 985</a>)</li> </ul>
設定タイプ	数値				
値の範囲	0 ~ 100				

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照		
センターページを指定します (0 は 100 と同じように扱われます)。	使用可能なタスク	はい					
	コンポーネントの再起動が必要	はい					
同じ	<b>_BESGather_Download_DynamicThrottleEnabled</b>				<a href="#">帯域幅スロットリング (##### 976)</a>		
	<b>_BESRelay_HTTPServer_DynamicThrottleEnabled</b>				<a href="#">動的スロットリング (##### 985)</a>		
	設定タイプ	ブール値					
	使用可能なタスク	はい					
コンポーネントの	はい						

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
	再起動が必要				
<b>_BESGather_Download_DynamicThrottleMaxBytesPerSecond</b>	デフォルト値	なし	レ	て	<a href="#">動的スロットリング (##### 976)</a> • <a href="#">動的スロットリング (##### 985)</a>
設定タイプ	数値 (BPS)				
値の範囲	0 ~ 4,294,967,255				
使用可能なタスク	はい				
コンポーネントの再起動が必要	はい				
<b>_BESGather_Download_DynamicThrottleMinBytesPerSecond</b>	デフォルト値		レ	て	<a href="#">動的スロットリング (##### 976)</a> • <a href="#">動的スロットリング (##### 985)</a>
設定タイプ	数値 (KBPS)				
値の範囲	0 ~ 4,294,967,255				
使用可能なタスク	はい				

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照	
	コンポーネントの再起動が必要	はい				
<p><b>_BESGather_Download_DynamicThrottlePercentage</b></p> <p>1～100のターゲット・パーセンテージを指定します (0 は 100 と同じように</p>	ルト値		レ	て	<p><a href="#">帯域幅スロットリング (##### 976)</a></p> <p>• <a href="#">動的スロットリング (##### 985)</a></p>	
設定タイプ	数値					
値の範囲	0～100					
使用可能なタスク	はい					
コンポーネントの再起動が必要	はい					

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
扱われます)。				

[上 \( \(ページ\) 168\)](#)

## Airgap モード

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照																				
この設定では、サーバーがイ	<table border="1"> <tr> <td>この設定では、サーバーがイ</td> <td>この設定では、サーバーがイ</td> <td>この設定では、サーバーがイ</td> <td>この設定では、サーバーがイ</td> <td>この設定では、サーバーがイ</td> </tr> <tr> <td>この設定では、サーバーがイ</td> <td>この設定では、サーバーがイ</td> <td>この設定では、サーバーがイ</td> <td>この設定では、サーバーがイ</td> <td>この設定では、サーバーがイ</td> </tr> <tr> <td>この設定では、サーバーがイ</td> <td>この設定では、サーバーがイ</td> <td>この設定では、サーバーがイ</td> <td>この設定では、サーバーがイ</td> <td>この設定では、サーバーがイ</td> </tr> <tr> <td>この設定では、サーバーがイ</td> <td>この設定では、サーバーがイ</td> <td>この設定では、サーバーがイ</td> <td>この設定では、サーバーがイ</td> <td>この設定では、サーバーがイ</td> </tr> </table>	この設定では、サーバーがイ	この設定では、サーバーがイ	この設定では、サーバーがイ	この設定では、サーバーがイ	この設定では、サーバーがイ	この設定では、サーバーがイ	この設定では、サーバーがイ	この設定では、サーバーがイ	この設定では、サーバーがイ	この設定では、サーバーがイ	この設定では、サーバーがイ	この設定では、サーバーがイ	この設定では、サーバーがイ	この設定では、サーバーがイ	この設定では、サーバーがイ	この設定では、サーバーがイ	この設定では、サーバーがイ	この設定では、サーバーがイ	この設定では、サーバーがイ	この設定では、サーバーがイ	サーバー	9.5.11以降	
この設定では、サーバーがイ	この設定では、サーバーがイ	この設定では、サーバーがイ	この設定では、サーバーがイ	この設定では、サーバーがイ																				
この設定では、サーバーがイ	この設定では、サーバーがイ	この設定では、サーバーがイ	この設定では、サーバーがイ	この設定では、サーバーがイ																				
この設定では、サーバーがイ	この設定では、サーバーがイ	この設定では、サーバーがイ	この設定では、サーバーがイ	この設定では、サーバーがイ																				
この設定では、サーバーがイ	この設定では、サーバーがイ	この設定では、サーバーがイ	この設定では、サーバーがイ	この設定では、サーバーがイ																				

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
インターネットにアクセスし、ライセンスを更新してサイトを収集するかどうかを指定	コンポーネントの再起動が必要	はい			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>しません。 この設定は、プリフェッチまたはダウンロード手順を含むアクションには影響し</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
ません。 サーバーがインターネットにアクセスし、ライセンスを更新して新規サイトを収集				



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
できないようにするには、1に設定します。この場合、ログ・ファイルにエラーは表示				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
されません。 サーバーがインターネットに接続して、ライセンス更新が利用可能かどうか				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>か、および新規サイト・バージョンを収集できるかどうかを確認できるようにするには、0</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
に設定します。このケースでは、サーバーがインターネットに接続できない場合、口				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
グ・ファイルにエラーが表示されます。				

[上 \( \(ページ\) 168\)](#)

## HTTP サーバー

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
リレーまたは RootServer HTTP Server が扱える最大接続数。スロットリング・パラメータとして使	<code>_BESRelay_HTTPServer_MaxConnections</code> ルト値	(Windows) 512 (Linux)	すべてのルート・サーバー	すべての	
	設定タイプ	数値 (スレッド数)			
	値の範囲	1 ~ 65536			
	使用可能なタスク	いいえ			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照						
用できます。										
<p><b>_HTTPServer_Referrer_Check_Enabled</b></p> <p>HTTP プロトコルの任意のヘッダーでチェックを有効または無効にします。これは、要求</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="440 768 561 873">ルト値</td> <td data-bbox="561 768 688 873">不可)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 873 561 1052">値の範囲</td> <td data-bbox="561 873 688 1052">0 (使用不可) 1 (有効)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 1052 561 1157">設定タイプ</td> <td data-bbox="561 1052 688 1157">ブール値</td> </tr> </table>	ルト値	不可)	値の範囲	0 (使用不可) 1 (有効)	設定タイプ	ブール値	<p>レ、ルール・サーバー、レポート</p>	<p>9.5.2 以降</p> <p>Web</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">セキュリティ・ブルティン: BigFix Platform</a> には、パッチ・リリースで解決された脆弱性があります。</li> <li>• <a href="#">セキュリティ・ブルティン: BigFix Platform</a> は、クロスサイト・リクエスト・フォージェリーの脆弱性の影響を受けます (CVE-2016-0295)。</li> <li>• <a href="#">セキュリティ・ブルティン: BigFix Platform バージョン 9.5</a> には、パッチ・リリース 9.5.6 で解決済みのセキュリティ上の脆弱性があります。</li> <li>• <a href="#">前提事項と要件 (##### 61)</a></li> </ul>
ルト値	不可)									
値の範囲	0 (使用不可) 1 (有効)									
設定タイプ	ブール値									

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>されているリソースへのリンク元である Web ページのアドレス (URI または IRI) を識別します。参照者</p>				



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>チェックが有効な場合、BigFix は参照者が存在しないかどうかをチェックし、存在する場合は、要求を生成したホ</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
スト名が含まれるかどうかをチェックします。これら2つの条件がいずれも満たされない場合、要求は				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>「参照者が無効」なために拒否されます。SAMLが有効な場合、BigFixはWebレポートの実行時に参照者を自動</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>的に チェッ クし ませ ん。 そう しな い と、SAML バッ クエ ンド から の要 求が 拒否 され るた めで す。</p>				

[上 \( ページ 168 \)](#)

**HTTPS**

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p><b>_WebReports_HTTPServer</b> (使用)</p> <p>有効な場合、この設定はホスト URL を構築する際にデフォルトのポート番号としてポート 443 の</p>	デフォルト値	不可)	レポート	すべて	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">Web レポートでの HTTPS のカスタマイズ (##### 84)</a></li> <li>• <a href="#">セキュア通信の構成 (##### 83)</a></li> </ul>
設定タイプ	ブール値	ポート			
値の範囲	0 (無効) および 1 (有効)				
コンポーネントの再起動が必要	はい				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照						
HTTPS の使用を強制します。										
<p><b>_WebReports_HTTPS_Server_SSLCertificateFilePath</b></p> <p>この設定は Web レポートの SSL 証明書ファイルの場所を示します。</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="440 926 565 1031">ルット値</td> <td data-bbox="565 926 688 1031"></td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 1031 565 1188">設定タイプ</td> <td data-bbox="565 1031 688 1188">String (ストリング)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 1188 565 1346">使用可能なタスク</td> <td data-bbox="565 1188 688 1346">いいえ</td> </tr> </table>	ルット値		設定タイプ	String (ストリング)	使用可能なタスク	いいえ	レポート	て	<p>Web レポート用の HTTPS の構成 (##### )</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">Web レポートでの HTTPS のカスタマイズ (##### 84)</a></li> </ul>
ルット値										
設定タイプ	String (ストリング)									
使用可能なタスク	いいえ									

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p><b>_WebReports_HTTPSPrivateKeyFilePath</b></p> <p>この設定は Web レポートの SSL 秘密鍵ファイルの場所を示します。</p>	<p>ルート値</p> <p>設定タイプ</p> <p>使用可能なタスク</p>	<p>String (ストリング)</p> <p>いいえ</p>	レポート	て	<p>Web レポート用の HTTPS の構成 (##### )</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">Web レポートでの HTTPS のカスタマイズ (##### 84)</a></li> </ul>
<p><b>_WebReports_HTTPSPort</b></p> <p>この設定は Web レ</p>	困	<p>が有効な場合、値は 443 です。そ</p>	レポート	て	<p>Web レポート用の HTTPS の構成 (##### )</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">Web レポートでの HTTPS のカスタマイズ (##### 84)</a></li> </ul>

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
ポートの HTTP ポートを示します。		れ以外では 80 です。			
この設定は、HTTP リダイレクトが Web レポートで有効かどうかを示	設定タイプ	数値	Web レポート	すべて	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Web レポート用の HTTPS の構成 (##### )</li> <li>• <a href="#">Web レポートでの HTTPS のカスタマイズ (##### 84)</a></li> </ul>
_WebReports_HTTPRedirectEnabled	設定タイプ	1 (有効)			
	値の範囲	0 (使用不可)			
	設定タイプ	1 (有効)			
	設定タイプ	ブール値			
	コンポーネントの再起動が必要	はい			



名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
します。					
<p><b>_WebReports_HTTPRedirect_PortNumber</b></p> <p>この設定は Web レポートの HTTP ポート番号を示します。</p>	<p>デフォルト値</p> <p>設定タイプ</p>	<p>80</p> <p>数値</p>	レポート	すべて	<ul style="list-style-type: none"> <li>Web レポート用の HTTPS の構成 (##### )</li> <li><a href="#">Web レポートでの HTTPS のカスタマイズ (##### 84)</a></li> </ul>
<p><b>_WebReports_HTTPS_Server_Require_TLS12</b></p> <p>この設定は、TLS 1.2 の使用を</p>	<p>デフォルト値</p> <p>値の範囲</p> <p>設定タイプ</p>	<p>不可)</p> <p>0 (使用不可)</p> <p>1 (有効)</p> <p>ブール値</p>	レポート	すべて	<ul style="list-style-type: none"> <li>Web レポート用の HTTPS の構成 (##### )</li> <li><a href="#">Web レポートでの HTTPS のカスタマイズ (##### 84)</a></li> </ul>

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
有効 または無効に します。	コンポーネントの再起動が必要	はい			
<b>_BESRelay_HTTPServer_UseSSLFlag</b>	ルート値 設定タイプ	はい 不可) ブール値	すべて レー、 ルー ト・ サー バー		<ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">REST API での HTTPS のカスタマイズ (##### 89)</a></li> <li>• <a href="#">セキュア通信の構成 (##### 83)</a></li> </ul>
この設定は SSL 証明書ファイル	ルート値	\certfile.pem • Linux /var/opt/BESRelay/certfile.pem	すべて レー、 ルー ト・ サー バー		<ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">REST API での HTTPS のカスタマイズ (##### 89)</a></li> <li>• <a href="#">セキュア通信の構成 (##### 83)</a></li> </ul>

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>へのパスを示します。 .pem ファイルには、リレーまたはルート・サーバーの証明書と秘密鍵の両方、</p>	設定タイプ	String (ストリング)			
	使用可能なタスク	いいえ			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
もしくは証明書のみが含まれる可能性があります。セキュリティ上の理由のため、ファイルはリリース				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照						
診断に含まれません。										
<p><b>_BESRelay_HTTPServer_SSLPrivateKeyFilePath</b></p> <p>この設定は、リレーまたはルート・サーバーのSSL秘密鍵ファイルへの</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="440 873 565 1346">ルート値</td> <td data-bbox="565 873 688 1346">                     \                      \private.key                      • Linux                      /                      var/                      opt/                      BESRelay/                      private.key                 </td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 1346 565 1503">設定タイプ</td> <td data-bbox="565 1346 688 1503">String (ストリング)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 1503 565 1661">使用可能なタスク</td> <td data-bbox="565 1503 688 1661">いいえ</td> </tr> </table>	ルート値	\ \private.key • Linux / var/ opt/ BESRelay/ private.key	設定タイプ	String (ストリング)	使用可能なタスク	いいえ	<p>レ、て                      ー、                      ー                      ー</p>		<p>• <a href="#">REST APIでのHTTPSのカスタマイズ (##### 89)</a></p> <p>• <a href="#">セキュア通信の構成 (##### 83)</a></p>
ルート値	\ \private.key • Linux / var/ opt/ BESRelay/ private.key									
設定タイプ	String (ストリング)									
使用可能なタスク	いいえ									

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照						
パスを示します。										
_BESRelay_HTTPServer_RequireTLS12	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="440 821 561 926">デフォルト値</td> <td data-bbox="561 821 688 926">(使用不可)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 926 561 1031">設定タイプ</td> <td data-bbox="561 926 688 1031">ブール値</td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 1031 561 1287">コンポーネントの再起動が必要</td> <td data-bbox="561 1031 688 1287">はい</td> </tr> </table>	デフォルト値	(使用不可)	設定タイプ	ブール値	コンポーネントの再起動が必要	はい	TLS12	すべて	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">REST API での HTTPS のカスタマイズ (##### 89)</a></li> <li>• <a href="#">セキュア通信の構成 (##### 83)</a></li> </ul>
デフォルト値	(使用不可)									
設定タイプ	ブール値									
コンポーネントの再起動が必要	はい									

[上 \( \(ページ\) 168\)](#)

## ロギング

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p><code>_BESRelay_HTTPServer_LogFilePath</code></p> <p>ログ・ファイルへのパス。</p>	<p>サーバのルート値</p>	<p>バレー、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◦ <code>&lt;BESRelayInstallationPath&gt;/BESRelay.log</code> (Windows)</li> <li>◦ <code>/var/log/BESRelay.log</code> (Linux)</li> </ul> <p>リレー</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◦ <code>&lt;BESRelayInstallationPath&gt;/logfile.txt</code> (Windows)</li> <li>◦ <code>/var/log/</code></li> </ul>	<p>すべて</p>	<p><a href="#">Get Computer</a></p>

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
	設定タイプ	String (ストリング)	BESRelay.log (Linux)		
この設定を使用して、ログ・ファイルの最大サイズ (バ	_BESRelay_HTTPServer_LogFileSizeLimit	ルート値	サーバー、サーバー	サーバー	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">Relay log rotates automatically even without setting '_BESRelay_HTTPServer_LogFileSizeLimit'</a></li> <li>• <a href="#">Enabling (debug level) verbose logging for the BES Root Server and BES Relay services</a></li> </ul>
値の範囲	0 ~ 4,294,967,295				
設定タイプ	数値 (バイト)				
使用可能なタスク	いいえ				



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
イト単位)を制御します。アクティブ・ログ・ファイルの他に、最大10のログ・ファイルの循環コ				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>ピーが保持されます (例えばリレーでは、アクティブ・ログ・ファイル logfile.txt と循環コピー logfile.txt_0、logfile.txt_1、...、logfile.txt_9)。</p> <p>アク</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>タイプ・ログ・ファイルには、指定された最大サイズに達するまでログ・データが入力されます。</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
最大サイズに達すると、最も古いログ・ファイルのコンテンツが上書きされます。アクティブ・ロ				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>グ・ファイルは空になり、新しいログ・データを収集し続けることができます。</p> <p>例えば、10個のファイル(そ</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>それぞれ最大 100 KB) でログをローテーションする場合、「LogFileSizeLimit」は 100,000 に設定する必要があります。</p>				

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p><b>_BESRelay_HTTPServer_LogFileRotationLimit</b></p> <p>この設定は、サーバーまたはリレーが書き込む最大ファイル数を定義するために使用されます。</p>	デフォルト値		レール、	以降	
	値の範囲	0 ~ 4,294,967,295	ルール	295	
	設定タイプ	数値	サーバー	バー	
	使用可能なタスク	いいえ			
	コンポーネントの再起動が必要	はい			

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>設定されている場合、接続ログがこのパスに書き込まれます。ファイル名が日付の新しいログ・ファ</p>	_BESRelay_HTTPServer_	HttpLogDirectoryPath	<p>レ、て ルー ト・ サー バー</p>		<p><a href="#">BigFix Logging Guide</a></p>
	ルート値				
	設定タイプ	文字列 (パス)			
	値の範囲	N/A			
使用可能なタスク	いいえ				



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>イルが、毎日作成されます。接続ログは非常に大きくなる可能性があるため (ギガバイト/日)、この</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照								
設定はトラブルシューティングのためにのみ使用してください。												
<p><b>_BESRelay_HTTPServer_HttpLogExpirationDays</b></p> <p>接続ログを保持する日数を設定します</p>	<table border="1"> <tr> <td>ルト値</td> <td></td> </tr> <tr> <td>設定タイプ</td> <td>数値</td> </tr> <tr> <td>値の範囲</td> <td>0 ~ 4294967295</td> </tr> <tr> <td>使用可能なタスク</td> <td>いいえ</td> </tr> </table>	ルト値		設定タイプ	数値	値の範囲	0 ~ 4294967295	使用可能なタスク	いいえ	<p>レー、て</p> <p>ルー</p> <p>ト・サー</p> <p>295-</p>		<p><a href="#">BigFix Logging Guide</a></p>
ルト値												
設定タイプ	数値											
値の範囲	0 ~ 4294967295											
使用可能なタスク	いいえ											

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>す。 この 日 数が 経過 する と、 古い 接続 ログ は削 除さ れま す。</p>				

## リレーの正常性チェック

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照		
<p><b>_BESRelay_HealthCheck_Enabled</b></p> <p>この設定は、リレーコンポーネントの状態チェックを有効または無効にします。リ</p>	結果値	0 (使用不可)	リレー	9.2以降	<a href="#">BES Client report interval vs BES Relay post</a>		
設定タイプ	ブール値						
値の範囲	0 (使用不可) 1 (有効)						
使用可能なタスク	いいえ						

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>レーが損傷または破壊された場合、修正処置が自動的に適用されます。修正処置とは、損傷</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
した ファ イ ルま たは ディ レク ト リー のリ カバ リー、 また は欠 落す る ファ イル ま たは ディ				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>レクトリ の作成を示します。変更内容を有効にするには、リレー・コンポーネントを</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照						
再起動する必要がありません。										
<p><b>_BESRelay_HealthCheckIntervalMinutes</b></p> <p>この設定では、ある状態チェックと次の状態チェックの間の</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="440 1131 565 1241">ルト値</td> <td data-bbox="565 1131 688 1241"></td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 1241 565 1350">設定タイプ</td> <td data-bbox="565 1241 688 1350">数値 (分)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 1350 565 1503">使用可能なタスク</td> <td data-bbox="565 1350 688 1503">いいえ</td> </tr> </table>	ルト値		設定タイプ	数値 (分)	使用可能なタスク	いいえ	レー	以降	
ルト値										
設定タイプ	数値 (分)									
使用可能なタスク	いいえ									



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>経過時間(分)を指定します。この設定を有効にするには、リレー・コンポーネントを再起</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照								
<p>動する必要がありません。</p>												
<p><b>_BESRelay_HealthCheck(EnableAtStartup)</b></p> <p>この設定は、リレー起動時の状態チェックを有効または無効に</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="440 1081 561 1188">ルト値</td> <td data-bbox="561 1081 688 1188">不可)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 1188 561 1295">設定タイプ</td> <td data-bbox="561 1188 688 1295">ブール値</td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 1295 561 1470">値の範囲</td> <td data-bbox="561 1295 688 1470">0 (使用不可) 1 (有効)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 1470 561 1623">使用可能なタスク</td> <td data-bbox="561 1470 688 1623">いいえ</td> </tr> </table>	ルト値	不可)	設定タイプ	ブール値	値の範囲	0 (使用不可) 1 (有効)	使用可能なタスク	いいえ	<p>レー</p>	<p>以降</p>	
ルト値	不可)											
設定タイプ	ブール値											
値の範囲	0 (使用不可) 1 (有効)											
使用可能なタスク	いいえ											

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
します。				

[上 \( \(ページ\) 168\)](#)

## リレー診断

http://<computer\_name>:52311/RelayDiagnostics または http://<computer\_name>:52311/rd にあるリレー診断ページへのアクセスを有効にして、ユーザーがリレー診断情報にアクセスできるようにします。<computer\_name> はチェックするサーバーまたはリレーがインストールされているワークステーションのアドレスです。有効な場合、リレー診断ページには有効な設定が示され、バッファ・ディレクトリー・サイズ、サイト収集、クライアントの登録とダウンロードに関する情報が表示されます。

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p><b>_BESRelay_Diagnostics_Enabled</b></p> <p>この設定を使用して、リレー診断ページを有効または無効にします。<b>_BESRelay_Diagnostic_Password</b>に値を指定した場</p>	<p>デフォルト値</p>	<p>不可(使用不可)</p>	<p>リレー</p>	<p>9.2.12以降</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">リレーおよびサーバーの診断 (#####1016)</a></li> <li>• <a href="#">Enabling (debug level) verbose logging for the BES Root Server and BES Relay services</a></li> </ul>
<p>設定タイプ</p>	<p>ブール値</p>	<p>ブール値</p>		<p>9.5.6以降</p>	
<p>値の範囲</p>	<p>0 (使用不可) 1 (有効)</p>	<p>サーバー</p>			
<p>コンポーネントの再起動が必要</p>	<p>いいえ</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
合、ユーザーはそのページにアクセスするために、指定されたパスワードを入力すること				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
を要求されます。 V9.5.6 以降、新規インストールの場合、およびこの設定が定義されて				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>いなかったバージョンをアップグレードする場合、この設定に割り当てられているデフォ</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>ルト値は0 (無効) です。この設定の値が指定されていたバージョンをアップグレードす</p>				




名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照						
<p>る場合、その値は変更されません。</p>										
<p><b>_BESRelay_Diagnostics_Password</b></p> <p>この設定を使用して、リレー診断ページへのアクセス</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="440 1188 561 1289">ルト値</td> <td data-bbox="561 1188 688 1289"></td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 1289 561 1451">設定タイプ</td> <td data-bbox="561 1289 688 1451">String (ストリング)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 1451 561 1709">コンポーネントの再起動が必要</td> <td data-bbox="561 1451 688 1709">はい</td> </tr> </table>	ルト値		設定タイプ	String (ストリング)	コンポーネントの再起動が必要	はい	リレー	9.2.12以降 9.5.6以降	<a href="#">リレーおよびサーバーの診断 (#####1016)</a>
ルト値										
設定タイプ	String (ストリング)									
コンポーネントの再起動が必要	はい									


名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>スに使用するパスワードを指定します。この設定が考慮されるのは、<code>_BESRelay_Diagnostics_Enable=1</code>の場合のみです。</p>				

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン  参照
<p><b>_BESRelay_Diagnostics_MaxLoginAttempts</b></p> <p>この設定を使用して、ユーザーがリレー診断ページへのアクセスを阻止されるまでに試行</p>	デフォルト値		<p>10 以降</p> <p>ルー ト・ サー バ</p>	<p><a href="#">リレーおよびサーバーの診断 (#####1016)</a></p>
	設定タイプ	数値		
	値の範囲	0 ~ 4294967295		
	使用可能なタスク	いいえ		
	コンポーネントの再起動が必要	はい		

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>に失敗する回数を指定します。このしきい値に達すると、リレー診断ページは</p> <p><code>_BESRelay_Diagnostics_LockoutDurationMinutes</code></p> <p>で指定さ</p>				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照								
<p>れた分数だけロックされます</p> <p> <b>注:</b> この値の変更を有効にするには、BESRelay サービスを再始動します。</p>												
<p>この設定を使用して、アクセス</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="440 1423 561 1535">ルト値</td> <td data-bbox="561 1423 688 1535"></td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 1535 561 1633">設定タイプ</td> <td data-bbox="561 1535 688 1633">数値 (分)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 1633 561 1793">使用可能なタスク</td> <td data-bbox="561 1633 688 1793">いいえ</td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 1793 561 1892">コンポーネ</td> <td data-bbox="561 1793 688 1892">はい</td> </tr> </table>	ルト値		設定タイプ	数値 (分)	使用可能なタスク	いいえ	コンポーネ	はい	<p>レール</p>	<p>以降</p>	<p><a href="#">レールおよびサーバーの診断 (#####1016)</a></p>
ルト値												
設定タイプ	数値 (分)											
使用可能なタスク	いいえ											
コンポーネ	はい											

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
試行の最大失敗回数に達した後、リレー診断ページをロックしたままにすべき分数を指定	ントの再起動が必要				

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>します。</p> <p> <b>注:</b> この値の変更を有効にするには、BESRelay サービスを再始動します。</p>				

[上 \(ページ 168\)](#)

## ユーザー認証

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p><b>_BESDataServerAuthenticationTimeoutMinutes</b></p> <p>この設定では、BigFix コンソールに</p>	<p>デフォルト値</p>	<p>設定タイプ</p>	<p>コンポーネント:</p>	<p>すべて</p>	<p><a href="#">SAML 2.0 と統合するように BigFix を構成する方法 (##### 64)</a></p>
<p>数値 (分)</p>	<p>値の範囲</p>	<p>0 ~ 4,294,967,295</p>			
<p>困</p>					

名前/説明	値		影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
ログ イン する とき の SAML 認証 セッ ショ ンの 時間 の長 さを 指定 で きま す。 この 設定 の値 は、 分単 位で 指定 され ます。  <b>注:</b> この	使用可 能なタ スク	いいえ			
	コン ポーネ ントの 再起動 が必要	いいえ			



名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
設定 に は、BigFix コン ソール の詳細 設定 で設 定し た値 より も大 きい 値を 設定 して く ださ い。				

[上 \( \(ページ\) 168\)](#)

## Web レポート

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<b>_WebReports_HTTPServerHostName</b> この 設定 によ り、BigFix	URL 設定タ イプ	レポート localhost:52311 String (ストリ ング)	9.2.5 以降	<a href="#">BigFix Web レ ポート・サーバ ーのホスト名を 変 更した際に BigFix コンソールを更</a>

名前/説明	値		影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
コンソールから Web レポートのインターフェースを開くように Web レポート URL を指定できます。	コンポーネントの再起動が必要	Web レポートの再起動が必要			<a href="#">新するBigFix コンソールで Web レポートへの URL リンクはどのように変更できますか。</a>
<b>_WebReports_Properties.Blacklist</b> この設定では、Web レ	コンソール値	Blacklist (既定が存在しない)	Web レポート	9.5.9 以降	<a href="#">IJ07915: THE WEB REPORTS BLACKLIST FEATURE DOES NOT HIDE PROPERTIES</a>

名前/説明	値		影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<p>ポートに 関し てブ ラッ クリ スト に登 録さ れて いる 一連 のプ ロパ ティ を列 挙し ます。 この 設定 の値 は BigFix コン ソー ル で、Web レ ポー</p>	設定タ イプ	String (ストリ ング)			<a href="#">THAT HAVE TRAILING SPACES</a>
	コン ポーネ ントの 再起動 が必要	Web レ ポート の再起 動が必 要			

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
ト・ コン ポー ネ ント ガイ ンス トー ルさ れて いる コン ピュー ター を選 択 し、「コ ン ピュー ター 設定 の編 集」ダ イア ログ を使 用し て設 定				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<p>しま す。 Web レ ポー ト・ コン ポー ネ ント は起 動時 にこ の設 定を 読み 込ん で、 サー バー から プロ パ ティ ーを ロー ドす る間 に、 ブ</p>				


名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
ラックリストに登録されているいずれかのプロパティと名前が一致するプロパティを廃棄します。分離文字として「 」を使用し				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<p>ま す。 例: _WebReports_Properties_Blacklist=Installed Applications Windows  Services - Windows  OS Type - Windows</p> <p>は、 これ らの プロ パ ティ ー に 関 連 付 け ら れ る 値 が Web レ ポ ー ト に 表 示</p>				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
され てい ない こと を示 しま す。  ま た、 指定 され たプ ロパ ティ は -コ ン ピュ ター・ ペ ージ で 選択 でき ませ ん。 -レ ポー トに 含め				



名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<p>ることができません。</p> <p>- これらのいずれかが保存されたレポートに含まれていた場合、レポートを開くとすぐに、Webレポート・</p>				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<p>コンポーネントは指定された1つ以上のプロパティが存在しないことをユーザーに通知し、レポートに含めません。</p> <p> 注: 好ま</p>				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
しく ない 動作 を防 ぐ ため に、 ブ ラッ クリ スト に登 録す るプ ロパ ティ とし て、 組み 込み プロ パ ティ など の基 本的 なプ ロパ ティ は指				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
定し ない でく ださ い。				

[上 \( \(ページ\) 168\)](#)

## テレメトリのデプロイメント

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<b>_Enterprise_Server_Metrics_Collection_Period</b>			9.5.13 以降	
この 設定 は、2 つの デー タ収 集間 隔と アッ プ ロー ド間 隔の 間の 日数 を示 しま す。 値 0	ルト値			
	設定タ イプ	数値 (日 数)		
	値の範 囲	0 ~ 60		
	使用可 能なタ スク	いいえ		

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照				
<p>は、 メトリック収集が無効化されていることを示します。</p>								
<p><b>_Enterprise_Series_Metrics_Collection_Schedule</b></p> <p>この設定では、タスクを実行する時期を決定する1つのルールを指</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="440 978 565 1083">設定タイプ</td> <td data-bbox="565 978 688 1083">(&lt;Day&gt;&lt;hh:mm&gt;)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 1083 565 1241">使用可能なタスク</td> <td data-bbox="565 1083 688 1241">いいえ</td> </tr> </table>	設定タイプ	(<Day><hh:mm>)	使用可能なタスク	いいえ		9.5.13 以降	
設定タイプ	(<Day><hh:mm>)							
使用可能なタスク	いいえ							

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<p>定 で き ま す。 大/ 小文 字を 区別 する &lt;Day&gt;&lt;hh:mm&gt; 形式 で値 を 入 力 し ま す。 各 部 の 意 味 は 以 下 の と お り で す。 &lt;Day&gt; に は、 月、 火、 水、 木、</p>				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<p>金、土、日を指定できます。</p> <p>&lt;hh:mm&gt;は24時間クロック形式です。</p> <p>例えば、この値は、毎週日曜9amのメトリック収集をスケ</p>				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照						
<p>ジュールします。 _Enterprise Server_MetricsCollection_Schedule=Sun09:00</p>										
<p><b>_Enterprise Server_MetricsCollection_UploadURL</b></p> <p>この設定は、デプロイメント・メトリック・サーバーを指す URL を示します。この設定のデフォルト</p>	<table border="1"> <tr> <td>デフォルト値</td> <td>空スト</td> </tr> <tr> <td>設定タイプ</td> <td>String (ストリング)</td> </tr> <tr> <td>使用可能なタスク</td> <td>いいえ</td> </tr> </table>	デフォルト値	空スト	設定タイプ	String (ストリング)	使用可能なタスク	いいえ	サーバー	9.5.13 以降	
デフォルト値	空スト									
設定タイプ	String (ストリング)									
使用可能なタスク	いいえ									



名前/説明	値		影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
ト値 は、 空ス ト リン グで す。					
<b>_Enterprise Server_MetricsCollection_UploadTaskCheckPeriod</b>	デフォ ルト値	15	サーバー	9.5.13 以降	
この 設定 は、 収集 され た 新規 デー タが ある かど うか を チェッ クす るま でに タスク が待機 する	設定タ イプ	数値			
	使用可 能なタ スク	いいえ			

名前/説明	値		影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<p>時間 (分 単 位) を示 しま す。 この 設定 のデ フォ ルト 値は 15 で す。</p>					
<p><b>_Enterprise Server_MetricsCollection</b>  値を 1に 設定 する と、 翌 12 時 間の 任意 の時 点で</p>	<p>デフォ ルト 設定 タイプ 使用可 能なタ スク</p>	<p>1  数値  いいえ</p>	<p>サーバー</p>	<p>9.5.13 以降</p>	

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<p>アップロードが行われます。それ以外の場合、アップロードは新規データが収集されたときに行われます。いずれの場合も、最</p>				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<p>後のアップロードが収集の最終実行の<b>前</b>に行われた場合は、アップロードが実行されます。この設定のデフォルト値は1です。</p>				

[上 \( ページ \) 168](#)

## UI 履歴

クライアントの UI 履歴を制御するために、BigFix サーバーで設定されます。

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<code>_BESClient_ActionManager_HistoryMode</code>	プラットフォーム コンポーネントの再起動が必要	すべての ユーザー	すべて	
これは、UI の標準ユーザーに表示される履歴モードです。このモードと「技術者」モードの両方が「なし」	<p>ルト値</p> <p>すべて</p> <p>はい</p> <p>可能性のある履歴モード:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「None」: 履歴オプションは有効ではなく、アクション履歴は表示されません。</li> <li>「UI」: 履歴オプションは有効ですが、ユーザーは UI を表示したアクション</li> </ul>			

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照				
<p>に設定されている場合、クライアントは履歴情報を記録しません。</p>	<p>のみ参照できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「NonTrivial」：履歴オプションは有効ですが、ユーザーは「トリビアル」とマークされた一部のアクションを参照できません(これには、サブスクリプションおよび設定アクションが含まれます)。</li> <li>「All」：履歴オプションは有効で、マシンで実行されるすべてのアクションが表示されます。</li> </ul>							
<p>これは、UIの「技術</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="440 1547 561 1650">_BESClient_ActionManager</td> <td data-bbox="561 1547 688 1650">「履歴」</td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 1650 561 1871">プラットフォーム</td> <td data-bbox="561 1650 688 1871">すべて</td> </tr> </table>	_BESClient_ActionManager	「履歴」	プラットフォーム	すべて	<p>すべて</p>	<p>すべて</p>	
_BESClient_ActionManager	「履歴」							
プラットフォーム	すべて							

名前/説明	値		影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<p>者」 ユー ザー に表 示さ れる 履歴 モー ドで す。 この モー ドと 「ユー ザー」 モー ドの 両 方が 「なし」 に 設定 され てい る場 合、 クラ イア ント</p>	<p>コン ポーネ ントの 再起動 が必要</p>	<p>はい</p>			
	<p>可能性のある履歴 モード:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 「None」: 履 歴オプション は有効ではな く、アクショ ン履歴は表示 されません。</li> <li>• 「UI」: 履歴 オプションは 有効ですが、 ユーザーは UIを表示し たアクション のみ参照でき ます。</li> <li>• 「NonTrivial」: 履歴オプショ ンは有効です が、ユーザー は「トリビア ル」とマーク された一部の アクションを</li> </ul>				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照										
<p>は履歴情報を記録しません。</p>	<p>参照できません (これには、サブスクリプションおよび設定アクションが含まれます)。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「All」: 履歴オプションは有効で、マシンで実行されるすべてのアクションが表示されます。</li> </ul>													
<p>この設定は、履歴が有効な場合に、クライアントが UI に送信す</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="440 1031 565 1134">_BESClient_ActionManager</td> <td data-bbox="565 1031 688 1134">HistoryDisplayDays</td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 1134 565 1239">Type (タイプ)</td> <td data-bbox="565 1134 688 1239">数値</td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 1239 565 1344">値の範囲</td> <td data-bbox="565 1239 688 1344">0 ~ 4,294,967,295</td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 1344 565 1554">プラットフォーム</td> <td data-bbox="565 1344 688 1554">すべて</td> </tr> <tr> <td data-bbox="440 1554 565 1871">コンポーネントの再起動が必要</td> <td data-bbox="565 1554 688 1871">はい</td> </tr> </table>	_BESClient_ActionManager	HistoryDisplayDays	Type (タイプ)	数値	値の範囲	0 ~ 4,294,967,295	プラットフォーム	すべて	コンポーネントの再起動が必要	はい	すべて		
_BESClient_ActionManager	HistoryDisplayDays													
Type (タイプ)	数値													
値の範囲	0 ~ 4,294,967,295													
プラットフォーム	すべて													
コンポーネントの再起動が必要	はい													



名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<p>る履歴情報の最大量を制御します。</p>	<p>可能性のある履歴モード:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 「None」: 履歴オプションは有効ではなく、アクション履歴は表示されません。</li> <li>• 「UI」: 履歴オプションは有効ですが、ユーザーはUIを表示したアクションのみ参照できます。</li> <li>• 「NonTrivial」: 履歴オプションは有効ですが、ユーザーは「トリビアル」とマークされた一部のアクションを参照できません (これには、サブスクリプションおよび設定アク</li> </ul>			



名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<p>ント が UI に送 信す る履 歴情 報の 最大 量を 制御 しま す。</p>	<p>く、アクション履歴は表示されません。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 「UI」: 履歴オプションは有効ですが、ユーザーはUIを表示したアクションのみ参照できます。</li> <li>• 「NonTrivial」: 履歴オプションは有効ですが、ユーザーは「トリビアル」とマークされた一部のアクションを参照できません (これには、サブスクリプションおよび設定アクションが含まれます)。</li> <li>• 「NonTrivial」: 履歴オプションは有効ですが、ユーザー</li> </ul>			

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
	は「トリビアル」とマークされた一部のアクションを参照できません (これには、サブスクリプションおよび設定アクションが含まれます)。			

[上 \( \(ページ\) 168\)](#)

## DMZ 内のリレー

### 親リレー

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照	
<b>_BESRelay_DMZParentEnable</b>  1 (有効) に 設定 され ている場 合、 親リ レー	ブール値	リレー	9.5.13 以降	<a href="#">DMZ 内のリレー (##### 151)</a>	
	設定タイプ				ブール値
	値の範囲				0 ~ 1
	使用可能なタスク				はい
	コンポーネントの				はい

名前/説明	値		影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
は永続的なTCP接続を確立できません。	再起動 が必要				
<b>_BESRelay_DMZ_ChildRelayHosts</b>	リレー		リレー	9.5.13 以降	<a href="#">DMZ 内のリレー (##### 151)</a>
この新しい機能を使用する必要があるのは DMZ 内のどの子リレーかを確認するため、	ルット値				
	設定タイプ	String (ストリング)			
	使用可能なタスク	はい			
	コンポーネントの再起動が必要	はい			

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
親リ レー に よっ て使 用さ れま す。 デ フォ ルト で は、 これ は空 スト リン グで す。 値 を指 定す るに は、 カッ プルの形 式で コン マ区				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<p>切りのリスト</p> <pre data-bbox="300 493 470 787">&lt;Hostname/ IP Address&gt;, &lt;Hostname/ IP Address&gt;</pre> <p><b>注:</b> この値が空のままの場合、親リレーを有効にしても、その親リレーは子リレーと通</p>				

名前/説明	値		影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
信じ ませ ん。					
<p><b>_BESRelay_DMZ_ConnectionKeepAliveSeconds</b></p> <p>これは、ソケットが引き続き開かれていることを確認するために親子間で定期的に ping メッセージが送信される時</p>	ルト値			9.5.13 以降	<a href="#">DMZ 内のリレー (##### 151)</a>
	設定タイプ	数値			
	使用可能なタスク	いいえ			
	コンポーネントの再起動が必要	いいえ			



名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<p>間 (秒 数) を 定義 しま す。 デ フォ ルト で は、60 秒に 設定 され てい ます。 これ は、 子と 親の 両方 に適 用で きま す。 親リ レー と</p>				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照								
子リレーに同じ値を設定する必要があります。												
<b>_BESRelay_DMZ_OpenChildIntervalSeconds</b>			9.5.13 以降	<a href="#">DMZ 内のリレー (##### 151)</a>								
これは、子リレーへの DMZ 接続を試みる前に親リレーが待機する時間を定義しま	<table border="1"> <tr> <td>ルト値</td> <td></td> </tr> <tr> <td>設定タイプ</td> <td>数値</td> </tr> <tr> <td>使用可能なタスク</td> <td>いいえ</td> </tr> <tr> <td>コンポーネントの再起動が必要</td> <td>いいえ</td> </tr> </table>	ルト値		設定タイプ	数値	使用可能なタスク	いいえ	コンポーネントの再起動が必要	いいえ			
ルト値												
設定タイプ	数値											
使用可能なタスク	いいえ											
コンポーネントの再起動が必要	いいえ											

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
す。 デ フォ ルト で は、60 秒に 設定 さ れて いま す。				
<b>_BESRelay_DMZ_CleanupSeconds</b>  DMZ 接続 に割 り当 てら れて い るリ ソー スを定 期的 に解 放す るタ スクの期	デ フォ ルト値 設定タ イプ 使用可 能なタ スク コン ポーネ ントの 再起動 が必要	リレー	9.5.13 以降	<a href="#">DMZ 内のリレー (##### 151)</a>

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
間を定義します。デフォルトでは、60秒に設定されています。これは、子と親の両方に適用できます。				

### 子リレー

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<code>_BESRelay_DMZChildEnable</code>	デフォルト値	リレー	9.5.13 以降	<a href="#">DMZ 内のリレー (##### 151)</a>

名前/説明	値		影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
1 (有効) に 設定 され てい る場 合、 子リ レー は永 続的 な TCP 接続 を確 立で きま す。	設定タイプ	ブール値			
	値の範囲	0 ~ 1			
	使用可能なタスク	はい			
	コンポーネントの再起動が必要	はい			
<b>_BESRelay_DMZ_ParentRelayIPs</b> 子と の DMZ 通信 を開 始す るこ とが 許可	子と の DMZ 通信 を開 始す るこ とが 許可	ParentRelayIPs の 値 String (スト リング) いいえ いいえ	リレー	9.5.13 以降	<a href="#">DMZ 内のリレー (##### 151)</a>

名前/説明	値		影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<p>されている 親リレーを フィルター するために、 必要に応じて 子 DMZ リレーによっ て使われます。 デフォルト では、</p>	<p>ントの 再起動 が必要</p>				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<p>これは空 スト リン グで す。 値を 設定 する に は、DMZ リ レー と の通 信が どの 親リ レー に許 可 され るか を定 義す る、 コン マ区 切りの</p>				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照								
IP ア ドレ ス・ リス トを 指定 しま す。												
<b>_BESRelay_DMZ_ConnectionKeepAliveSeconds</b>			9.5.13 以降	<a href="#">DMZ 内のリレー (##### 151)</a>								
これ は、 ソ ケッ トが 引き 続き 開か れて いる こと を確 認す るた めに 親子 間で 定期 的に ping	<table border="1"> <tr> <td>ルト値</td> <td></td> </tr> <tr> <td>設定タ イプ</td> <td>数値</td> </tr> <tr> <td>使用可 能なタ スク</td> <td>いいえ</td> </tr> <tr> <td>コン ポーネ ントの 再起動 が必要</td> <td>いいえ</td> </tr> </table>	ルト値		設定タ イプ	数値	使用可 能なタ スク	いいえ	コン ポーネ ントの 再起動 が必要	いいえ			
ルト値												
設定タ イプ	数値											
使用可 能なタ スク	いいえ											
コン ポーネ ントの 再起動 が必要	いいえ											




名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<p>メッセージが送信される時間 (秒数) を定義します。デフォルトでは、60 秒に設定されています。これは、子と親の両方に適</p>				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
用 で き ま す。 親 リ レー と 子 リ レー に 同 じ 値 を 設 定 す る 必 要 が あ り ま す。				
<b>_BESRelay_DMZ_CleanupSeconds</b>	リレー	リレー	9.5.13 以降	<a href="#">DMZ 内のリレー (##### 151)</a>
DMZ	ルト値			
接続	設定タ	数値		
に割	イプ			
り当	使用可	いいえ		
てら	能なタ			
れて	スク			
い	コン	いいえ		
るリ	ポーネ			
ソー	ントの			
スを	再起動			
を定	が必要			
期的				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<p>に解放するタスクの期間を定義します。デフォルトでは、60秒に設定されています。これは、子と親の両方に適用できます。</p>				

## ピアツーピア・モード

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照	
<b>_BESClient_PeerToPeerEnabled</b> 1 (有効) に 設定 され ている場 合、こ の設 定によっ てピア ツー ピア・ モードが 有効にな ります。 リレー に	デフォルト値	クライアント	9.5.11 以降	<a href="#">ピアツーピア・ モード (##### 155)</a>	
	設定タイプ				ブール 値
	値の範囲				0 ~ 1
	コンポーネントの再起動が必要				はい

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<p>フォー ル バックす る前 に、 ク ライ アン トは ピア から ファ イル をダ ウン ロー ドし よ うと しま す。</p> <p> <b>注:</b> BigFix サー バー また はリ レー でこ</p>				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照	
の設定を有効にすると、設定は無視され、値は false に設定されます。					
<b>_BESClient_PeerNestIsPassive</b> 1 (有効) に 設定 され ている 場合、 クラ イア ント は他	<b>PeerNestIsPassive</b> ルト値	クライアント	9.5.11 以降	<a href="#">ピアツーピア・モード (#####155)</a>	
	設定タイプ				ブール値
	値の範囲				0 ~ 1
	コンポーネントの再起動が必要				はい

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
のピアからのみダウンロードします。他のピアとはコンテンツを共有しません。				
<b>_BESClient_PeerNextPriority</b> リリースからダウンロードするため	<b>NextPriority</b> ルト値 設定タイプ コンポーネントの再起動が必要	クライアント	9.5.11 以降	<a href="#">ピアツーピア・モード (#####155)</a>

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
同じサブネット内のピアによって使用される優先順位を指定します。1から1000の範囲の値を指定できます。サブネット内で優先順				



名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
位の 高い クライアント が、 リ レー から ファ イル をダ ウン ロー ドす る クラ イア ント にな りま す。 この 優先 順位 は、 他の ピア とコ ンテ				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照						
<p>ンツ を共 有す るク ライ アン トも 指定 しま す。</p>										
<p><b>_BESClient_PeerNextResponseTimeoutSeconds</b></p> <p>これは、ピアに対してブロードキャストで送る要求 (ファイルを提供できるかを</p>	<table border="1"> <tr> <td>ルト値</td> <td></td> </tr> <tr> <td>設定タイプ</td> <td>数値 (秒)</td> </tr> <tr> <td>コンポーネントの再起動が必要</td> <td>いいえ</td> </tr> </table>	ルト値		設定タイプ	数値 (秒)	コンポーネントの再起動が必要	いいえ		9.5.11 以降	<a href="#">ピアツーピア・モード (#####155)</a>
ルト値										
設定タイプ	数値 (秒)									
コンポーネントの再起動が必要	いいえ									

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
確認 する ため の要 求な ど) に対 する 応答 をク ライ アン トが 待機 する 時間 (秒 数) を 定義 しま す。 デ フォ ルト 値は 30 秒 です が、				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
クライアントが多数存在する複雑なネットワークの場合、この値を増やすことができます。5から300秒の範囲の値を指定で				

名前/説明	値		影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
きま す。					
<b>_BESClient_PeerNest_MaxActiveFileDownloads</b>  他の ピア から の最 大許 容同 時ダ ウン ロー ド操 作数 を 定義 しま す。	ルト値			9.5.11 以降	<a href="#">ピアツーピア・ モード (##### 155)</a>
設定タ イプ	数値				
コン ポーネ ントの 再起動 が必要	いいえ				
<b>_BESClient_PeerNest_MaxDownloadsCacheLimitMB</b>  他の ピア で使 用で きる ファ イル を含 む ディ レ	ルト値			9.5.11 以降	<a href="#">ピアツーピア・ モード (##### 155)</a>
設定タ イプ	数値				
コン ポーネ ントの 再起動 が必要	いいえ				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
ク ト リ ー で 使 用 さ れ る 、 最 大 デ ィ ス ク 容 量 を 定 義 し ま す。 デ フ ォ ル ト 値 は 2048 MB で す。				
<b>_BESClient_PeerNestMidNumDiskFreeMB</b>  この 設 定 は、 ク ラ ィ ア ン ト が	デ フ ォ ル ト 値 設定 タ ィ プ コン ポー ネ ント の	コン ポー ネ ント	9.5.11 以降	<a href="#">ピアツーピア・ モード (##### 155)</a>


名前/説明	値		影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
ファイルを保存するディスクの空きスペースがこの設定値未満の場合、他のピアが利用可能なキャッシュを停止します。	再起動が必要				

名前/説明	値		影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<b>_BESClient_PeerNest_MinimumCacheDays</b> _BESClient_PeerNest_MinimumCacheDays に指 定さ れた 値よ り古 い ファ イル は、 使 用済 みバ イト 制限 と空 きス ペー ス制 限に よっ て、 新し い ファ イル 用 のス ペー	PeerNest_MinimumCacheDays	PeerNest_MinimumCacheDays	コンポーネント	9.5.11 以降	<a href="#">ピアツーピア・モード (#####155)</a>
	設定タイプ	数値			
	コンポーネントの再起動が必要	いいえ			



名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
ス を確 保す るた めに すべ て削 除さ れま す。				
<b>_BESClient_PeerNest_MaximumCacheDays</b>	20	クライアント	9.5.11 以降	<a href="#">ピアツーピア・モード (#####155)</a>
ス ペー スが 必要 でな い場 合で も、 <b>_BESClient_PeerNest_MaximumCacheDays</b> に指 定さ れた 値よ り古 い ファ イル は削 除さ	ルト値 設定タ イプ コン ポーネ ントの 再起動 が必要	数値 いいえ		

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
れま す。				
次 のロ グ・ メ カニ ズム を有 効に しま す。 指 定さ れた ディ レク ト リー の 専用 ファ イル に PeerNest ログ が書 き 込ま	<b>_BESClient_PeerNest_DebugOutPath</b>	クライアント	9.5.11 以降	<a href="#">ピアツーピア・モード (#####155)</a>
	ルト値			
	設定タイプ	String (スト リング)		
	コン ポーネ ントの 再起動 が必要	いいえ		

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<p>れま す。 設定 を次 のよ うに 有効 にし ま す。 _BESClient_PeerNest_DebugOutPath=&lt;PeerNest ログ・ ファ イル の絶 対パ ス&gt;</p> <p> <b>注:</b> 絶対 パス は既 存の フォル ダー 内の ファ イルを 指す</p>				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
必要 がありま す。 ファ イル がま だ存 在し ない 場 合 は、 ク ラ イ ア ン ト に よ っ て 作 成 さ れ ま す。				

## 各種

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<b>EnableLockHints</b> Windows の HKEY_LOCAL_MACHINE \SOFTWARE	デフォ ルト値 設定タ ブ イ プ 値	サーバー	9.5.11 以降	


名前/説明	値		影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
\Wow6432M \BigFix \Enterprise Server \Database の下 で使 用で きる 新し い サー バー 設定 1に 設定 した 場 合、BES サー バー は SQL Server への 内部 照 会で ロッ ク・	値の範 囲	0 ~ 1			
	使用可 能なタ スク	いいえ			
	コン ポーネ ントの 再起動 が必要	はい			

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<p>ヒントを使用できます。この設定は、サーバーがデッドロックに巻き込まれているが、パフォーマンスはあまり低下していない</p>				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
場合に役立ちます。				
<b>_BESServer_Database_Password</b>	<b>Database Password</b>	サーバー	すべて	
データベースの更新時にパスワードを設定するように構成します。パスワード・テキストは二重引用符	ルト値			
	設定タイプ	String (ストリング)		
	コンポーネントの再起動が必要	はい		

名前/説明	値		影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
で困 みま す。					
<p><b>_BESClient_Cryptography_FipsMode</b></p> <p>9.5.6 以 降、 各 BigFix コン ポー ネ ント は、 クラ イア ント 設定 <b>_BESClient_Cryptography_FipsMode</b> の有 無、 およ びク ライ アン ト・ マス ト ヘッ ドに</p>	<p>ルット値</p> <p>設定タ イプ</p> <p>値の範 囲</p> <p>使用可 能なタ スク</p> <p>コン ポーネ ントの 再起動 が必要</p>	<p>すべて</p> <p>ブール 値</p> <p>0 ~ 1</p> <p>いいえ</p> <p>はい</p>	<p>すべて</p>	<p>すべて</p>	<p><a href="#">BigFix サーバー での FIPS 140-2 の構成 (##### 959)</a></p>



名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
<p>基づいて FIPS モードで OpenSSL を初期化します。</p> <p> <b>注:</b> クライアント設定 <code>_BESClient_Cryptography_FipsMode</code> は BES クライアントと Web レポート・コンポーネント</p>				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
のマ スト ヘッ ドで 指定 した FIPS 設定 を上 書き しま す。 値 を「 <b>なし</b> 」に 設定 する と、BES クラ イア ント と Web レ ポー ト・ コン ポー ネン トは				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照						
FIPS ライ ブラ リー を使 用し ませ ん。 値を <b>required</b> に設 定す る と、FIPS ライ ブラ リー を使 用し ま す。										
<b>_BESClient_LicenseType</b> この 構成 パラ メー ター を設 定す るこ	<table border="1"> <tr> <td>デフォルト値</td> <td></td> </tr> <tr> <td>設定タイプ</td> <td>String (スト リング)</td> </tr> <tr> <td>コンポーネントの</td> <td>いいえ</td> </tr> </table>	デフォルト値		設定タイプ	String (スト リング)	コンポーネントの	いいえ	クライアント	すべて	クライアントのカ テゴリ化 (### ## )
デフォルト値										
設定タイプ	String (スト リング)									
コンポーネントの	いいえ									

名前/説明	値		影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
と で、 クライアントをカテゴリー化する際、ライセンス交付を受けた製品から、選択した製品ごとにデフォルト以外のメトリック	再起動 が必要				

名前/説明	値	影響を受ける コンポーネント	適用可能な バージョン	参照
クを クラ イア ント に割 り当 てま す。				

[上 \( \(ページ\) 168\)](#)

## 第 章16. 追加の構成手順

これ以降の各トピックでは、現在の環境で実行できる追加の構成手順について説明します。

### E メール通知サービスのインストールおよび構成

E メール通知サービスを使用して、実行した の完了状況を通知する自動 E メール通知を送信できます。この通知機能を使用するには、最初に を実行して通知サービスをインストールする必要があります。サービスをインストールした後、別の を実行してサービスを構成します。

BigFix サーバーに BigFix Server Plugin Service をインストールし、BES サポートの Fixlet 1294 を使用して REST API マスター・オペレーターの資格情報を構成する必要があります。

通知サービスをインストールおよびセットアップするには、BES サポート・サイトをサブスクライブしている必要があります。インストールおよびセットアップのが、BES サポート・サイトに用意されています。が確実に正しい順序で実行されるように、インストールおよびセットアップのは、実行する必要がある順序で「関連」状態になります。つまり、が「関連」状態になるのは、それを実行する必要があるときだけです。

以下のステップを実行して、通知サービスをインストールおよびセットアップします。

1. 通知サービスをインストールするには、BES サポートのナビゲーション・ツリーの「Fixlet とタスク」ノードから、通知サービスを Windows または Linux のどちらかにインストールするかに応じて、以下のいずれかの を選択します。
  - タスク 2238 「Install Latest Notification Service」 (Windows オペレーティング・システムに通知サービスをインストールする場合)。このを実行する際に、BigFix サーバーをターゲットにし、通知サービスで listen するポート番号を入力します。このタスクにより、通知サービスがダウンロードされ、インストールされます。
  - タスク 2241 「Install Latest Notification Service (RHEL)」 (Linux に通知サービスをインストールする場合)。このを実行する際に、BigFix サーバーをター

ゲットにし、通知サービスで listen するポート番号を入力します。このタスクにより、通知サービスがダウンロードされ、インストールされます。インストールが正常に完了しない場合、「通知」>「警告」フォルダー内だが「関連」状態になっていないか確認してください。「警告」フォルダー内に「関連」状態のが存在する場合、その関連を実行します。そのの完了後、インストールを再度実行します。


2. 分析 2243 「Notification Service Details」をアクティブにします。

3. 2240 「Configure Settings for Notification Service」を実行して、Eメール通知サービス用の SMTP ログイン設定を構成します。以下のようにフォームに入力し、「アクションの実行」をクリックします。

- **通知サービス・ポート:** この値を変更して、通知サービスが listen するポート番号を、2238 「Install Latest Notification Service」または 2241 「Install Latest Notification Service (RHEL)」で設定した値に更新できます。
- **差出人メールアドレス:** この値を変更して、通知 Eメールの「From」フィールドに表示されるデフォルトの From アドレスおよび Eメール・アドレスを、タスク 165 「Eメール通知の送信」(Eメール通知を送信するために使用する)で構成したとおりに更新できます。
- **SMTP メソッド:** 通知サービスの SMTP メソッド(「標準」または「なし」のいずれか)を選択します。「なし」を選択した場合、SMTP 認証は使用されず、「ユーザー名」フィールドと「パスワード」フィールドは無効になります。「標準」を選択した場合、ユーザー名とパスワードを使用した認証が必要になります。
- **SMTP ホスト:** SMTP サーバーの IP アドレス、ホスト名、または完全修飾ホスト名を入力します。これは必須フィールドです。
- **SMTP ポート:** デフォルトのポート番号値 25 を受け入れるか、SMTP サーバーのポート番号として別の値を入力します。これは必須フィールドです。
- **ユーザー名:** Eメール・アカウント用のユーザー名を入力します。これは、SMTP メソッドとして「標準」を選択した場合は必須フィールドです。
- **パスワード:** Eメール・アカウント用のパスワードを入力します。これは、SMTP メソッドとして「標準」を選択した場合は必須フィールドです。
- **確認パスワード:** 前のフィールドに入力したパスワードを確認します。これは、SMTP メソッドとして「標準」を選択した場合は必須フィールドです。

このステップを完了すると、通知サービスがセットアップされ、作動可能になります。

通知サービスがセットアップされ、設定に従って構成されました。

 **注:** 通知サービスをアンインストールするには、Task 2239 Uninstall Notification Service を使用して Microsoft Windows プラットフォームからアンインストールするか、Task 2242 Uninstall Notification Service (RHEL) を使用して Linux プラットフォームからアンインストールします。

## E メール通知の送信

E メール通知サービスを使用して、実行したベースラインの完了状況を通知する自動 E メール通知を送信できます。

E メール通知を送信するには、通知サービスをセットアップおよび構成する必要があります。

通知サービスをインストールおよび構成した後、ベースラインの完了状況を通知する E メール通知を送信できます。

E メールを通知を送信するには、以下のステップを実行します。

1. 通知サービスを使用するために、2245 「Sample Task: Send an Email Notification」の変更済みコピーを、通知を送信するポイントでコンポーネントとして追加します。例えば、が完了したときに E メール通知を送信する場合、の最後のコンポーネントとしてを追加します。をコピーして、以下のように変更します。
  - 2245 「Sample Task: Send an Email Notification using Static Action Script Content」をコピーします。
  - アクション・スクリプト内の詳細を変更して、以下のキーに対して具体的な設定を含めることで、のコピーを変更します。以下の例に含まれているキーは、通知を送信するために最低限必要なキーを表しています。

```
// NOTIFICATION_START
// to: "< your comma separated list of receipient email addresses
goes here >"
```



```
// from: "< your single email address that will be shown as the
sender of
        the email goes here >"
// subject: "< your email title goes here >"
// body: "< your main email detail content goes here >"
// NOTIFICATION_END
```

キーの完全なリストを以下の表に示します。

**表 2. 通知のキー**

キー	説明
to	通知の送信先の E メール・アドレス。有効な値は、有効な E メール・アドレスのコンマ (,) 区切りリストです。これは必須キーです。
from	通知 Eメールの送信者として表示される E メール・アドレス。この E メール・アドレスは存在する必要はありませんが、指定する値は有効な E メール・アドレス形式でなければなりません。これは必須キーです。
subject	Eメールの件名として表示される通知の要約。任意のテキストがこのキーに対して有効な入力です。入力するテキストには、実行時に置換されるトークンを含めることができます。これは必須フィールドです。
body	Eメールのメインの通知テキスト・コンテンツ。実行時に置換されるトークンを含む、任意のテキストをこのキーに対して入力できます。これは必須フィールドです。
failure-trigger	通知が送信されることになる失敗の回数を定義します。このキーを指定すると、指定した数の失敗が発生したときに通知が送信されます。このキーを省略すると、通知は完了時に送信されます。0 より大きい整数を入力してください。これはオプションのキーです。
scope	アクションが失敗したか正常に完了したかを判別する際に、結果状況についてどのアクションを検査するかを決定します。このキーを省略すると、これらの通知コンポーネントを含むアクションの結果が検査されます。有効な値は

キー	説明
	parent です。これは、通知コンポーネントを含むアクションの代わりに、親の結果を検査することを意味します。これはオプションのキーです。

- 変更したのコピーを保存します。
- 変更済みのコピーを、Eメール通知送信の対象であるに追加します。

の変更方法に関する完全な情報についての説明をレビューして、に含めます。サンプルが以下の「**サンプル**」セクションに記載されています。

2. を実行します。が完了すると、指定した E メール・アドレスに E メール通知が送信されます。

以下のサンプルは、キーの使用方を示しています。

以下の通知コメントを設定したタスクをコンポーネントとしてベースラインに追加すると、このタスク (コンポーネント) の完了時に E メールが送信されます (例えば、ベースラインの中間に追加すると役に立ちます)。

```
// NOTIFICATION_START
// to: "me@me.com, you@you.com"
// from: "noreply@bigfixteam.mycompany.com"
// subject: "Baseline component '{actionName}' has completed successfully"
// body: "Baseline is 50% complete now"
// NOTIFICATION_END
```

以下の通知コメントで構成されたをコンポーネントとしてに追加すると、その全体が完了したときに E メールが送信されます。

```
// NOTIFICATION_START
// to: "me@me.com, you@you.com"
// from: "noreply@bigfixteam.mycompany.com"
// subject: "Baseline '{actionName}' with ID {actionID} has completed
successfully"
// body: "The Baseline is complete!"
// scope: "parent"
```

```
// NOTIFICATION_END
```

上記 2 つのサンプルは、静的にターゲット設定されたベースラインにのみ追加できます。グループ、プロパティ、または名前リストによりターゲット設定されたベースラインでは、通知の送信が有効になりません。

静的または動的にターゲット設定されるベースラインでは、以下のサンプルを指定できません。

```
// NOTIFICATION_START
// to: "me@me.com, you@you.com"
// from: "noreply@bigfixteam.mycompany.com"
// subject: "Baseline '{actionName}' with ID {actionID} has failed on 5 or
more computers"
// body: "Review the results of Baseline '{actionName}' (ID: {actionID})"
// failure-trigger: "5"
// scope: "parent"
// NOTIFICATION_END
```

## FillDB の構成

FillDB プロセスは、BigFix サーバー・システムで実行され、BigFix エージェントから返された情報を BigFix データベースに保管します。この情報には、以下のようなものがあります。

- データ (取得されたプロパティの値や、適用性の関連度の評価結果、Fixlet とタスクの成功条件など)。
- BigFix Query の結果を返すレポートに含まれる情報。

FillDB 処理を構成する方法は以下のとおりです。

- [FillDB データベースのパフォーマンスの構成 \(##### 932\)](#)
- [FillDB バッファ・ディレクトリーのサイズの増加 \(##### 933\)](#)
- [FillDB 並列処理の有効化 \(##### 935\)](#)

## FillDB データベースのパフォーマンスの構成

### DatabaseBoostLevel パラメーター

FillDB ユーティリティには、BigFix のパフォーマンスを最適化するための DatabaseBoostLevel というパラメーターが用意されています。

9.5 Windows システムの場合: DatabaseBoostLevel パラメーターに指定できる値は、1 (有効) と 0 (無効) です。デフォルト値は 1 です。

9.5 Linux システム (フレッシュ・インストールおよびアップグレード) の場合: DatabaseBoostLevel パラメーター値は常に、「Database Boost Level」が「ON」で、maxBatchSize = 1000 です。

BigFix のパフォーマンスの向上は、BigFix が実行されている環境によって異なります。ご使用の環境に対してパフォーマンス構成を最適化するには、以下のように FillDB データベースでデータ挿入メカニズムを調整します。

1. パフォーマンス・ログを有効にします。

以下のstring値を [HKLM\Software\Wow6432Node\BigFix\Enterprise Server\FillDB] レジストリーに設定します。

```
"PerformanceDataPath"[REG_SZ] = "[BigFix Server folder]\FillDB
\FillDBperf.log"
```

2. FillDB サービスを再始動し、しばらくパフォーマンス・ログをモニターして、さまざまな表の「行/秒 (rows per second)」のデータベース挿入レートを記録します。
3. DatabaseBoostLevel DWord 値をレジストリー・キー HKLM\Software\Wow6432Node\BigFix\Enterprise Server\FillDB に追加し、これを 0 に設定します。
4. FillDB サービスを再始動し、再度しばらくパフォーマンス・ログをモニターして、さまざまな表の「行/秒 (rows per second)」のデータベース挿入レートを記録します。
5. DatabaseBoostLevel パラメーターの新しい値を設定する前と後で挿入レートを比較します。モニター中は作業負荷のレベルを同じに保ってください。秒あたりに処理される行数が多いほど、パフォーマンスは向上します。モニター対象とする主な表は、questionresults、fixletresults、actionresults、および longquestionresults です。表あたりに処理される行数は、ご使用の環境内でのその表の重要度を示します。

### DisableReplicationOfNextTables パラメーター

FillDB ユーティリティには、DSA インフラストラクチャーでサーバー間の WebUI テーブルの複製を無効化するための `DisableReplicationOfNextTables` というパラメーターが用意されています。

**9.5 Windows システムの場合:** 以下の DWORD 値を `[HKLM\Software\Wow6432Node\BigFix\Enterprise Server\FillDB]` レジストリーに設定します。

```
"DisableReplicationOfNextTables"=1
```

**9.5 Linux システムの場合:** `[Software\BigFix\Enterprise Server\FillDB]` セクションの下の `BESServer` 構成ファイルで、以下のパラメーターを設定します。

```
DisableReplicationOfNextTables=1
```

9.5 パッチ 9 以降、このパラメーターは、APAR IJ05097の影響を緩和するために使用可能です。 [IJ05097](#)

この設定を有効にすると、WebUI テーブルが DSA サーバー間で複製されるのを防止します。複製処理の速度が向上します。複製サーバー上で災害復旧およびフェイルオーバーが発生した場合、WebUI データを複製サーバー上で使用できなくなります。このため、このパラメーターはサポート管理下においてのみ設定することを強くお勧めします。

## FillDB バッファ・ディレクトリーのサイズの増加

FillDB バッファ・ディレクトリーは、クライアントからのレポートがデータベースに保管される前に、それらを一時的に保管します。

デフォルトでは、ディレクトリーがいっぱいになるのは、含まれるファイルの合計が 3MB を超える場合、または含まれるファイルが 10,000 個を超える場合です。その結果、情報が BigFix サーバーに迅速に送信されず、深刻な問題となる可能性があります。


以下の手順を実行して、FillDB バッファ・ディレクトリーと、保持ファイルの最大数を構成することができます。

### Windows システムの場合:

1. 以下のキーをレジストリー・パスに追加します。 `HKLM\Software\Wow6432Node\BigFix\Enterprise Server\PostResults:`

### BufferDirectoryMaxSize


FillDB バッファ・ディレクトリーの最大サイズをバイト単位で定義します。デフォルト値は 3MB です。

 **注:** HCL サポートからの具体的な指示がない限り、この値を 20MB よりも大きくしないでください。

### BufferDirectoryMaxCount

FillDB バッファ・ディレクトリーに許可されるファイルの最大数を定義します。デフォルト値は 10,000 です。

2. FillDB サービスを再始動します。

 **注:** Windows システムの場合、これらのキーを BigFix サーバーではなく、BigFix リレーに追加すると、キーを追加するレジストリー・パスは `HKLM\Software\BigFix\Enterprise Server\PostResults` になります。

### Linux システムの場合:

1. 以下の行を `/var/opt/BESServer/besserver.config` ファイルに追加します。

```
[Software\BigFix\Enterprise Server\PostResults]
BufferDirectoryMaxSize = <SIZE_IN_BYTES>

[Software\BigFix\Enterprise Server\PostResults]
BufferDirectoryMaxCount = <MAX_NUMBER_OF_FILES>
```

各部の意味は以下のとおりです。

### BufferDirectoryMaxSize

FillDB バッファ・ディレクトリーの最大サイズをバイト単位で定義します。デフォルト値は 3MB です。

### BufferDirectoryMaxCount

FillDB バッファ・ディレクトリーに許可されるファイルの最大数を定義します。デフォルト値は 10,000 です。

2. FillDB サービスを再始動します。

## FillDB 並列処理の有効化

BigFix サーバーで、FillDB プロセスは、以下のアクティビティを単一スレッドで実行します。

- バッファ・ディレクトリー・コンテンツの読み取り。
- 以下を含む、レポートの解析。
  - 暗号化されたレポートの復号。
  - 圧縮されたレポートの解凍。
- データベースへのレポート・データの保管。
- 他の DSA サーバーからのコンテンツの複製 (オプション)。

追加のスレッドが、BigFix Query 処理によって返されたレポートに対して同じタイプの処理を実行します。

V9.5 パッチ 5 以降、フレッシュ・インストール時およびアップグレード時に以下のルールに従い、並列処理はデフォルトで有効になります。

- マシンに 6 個から 9 個のコアがある場合、3 個の解析スレッドおよび 3 個のデータベース更新スレッドを構成することにより、並列処理は標準レポートに対して有効になります。
- マシンに少なくとも 10 個のコアがある場合、並列処理は標準レポートと照会レポートの両方に対して有効になります。それぞれのレポート用に 3 個の解析スレッドおよび 3 個のデータベース更新スレッド、合計で 12 個のスレッドを構成します。

BigFix サーバーで以下の設定を構成することにより、FillDB 並列処理を手動で有効または無効にすることができます。

- `ParallelismEnabled`
- `ParallelismEnabledForQuery`

FillDB 並列処理を有効にした後、BigFix サーバーで以下の設定を指定することによって、その動作を構成できます。

- NumberOfParsingThreads
- NumberOfDBUpdatingThreads
- MaxNumberOfReportsReadyForDB
- MinNumberOfReportsReadyForDB
- MaxNumberOfReportsInParsingQueue
- NumberOfParsingThreadsForQuery
- NumberOfDBUpdatingThreadsForQuery
- MaxNumberOfQueryReportsReadyForDB
- MinNumberOfQueryReportsReadyForDB
- MaxNumberOfQueryReportsInParsingQueue

これらの設定について詳しくは、[並列 FillDB の構成 \(##### 936\)](#) を参照してください。  
上記の 1 つ以上の設定に対する変更をアクティブ化するには、以下のステップを実行します。

**BigFix サーバーが Windows システムにインストールされている場合:**

1. BES FillDB サービスを停止します。
2. Windows レジストリーで設定の値を必要に応じて更新します。
3. BES FillDB サービスを開始します。

**BigFix サーバーが Linux システムにインストールされている場合:**

1. besfilldb を停止します (例: `/etc/init.d/besfilldb stop`)。
2. besserver を停止します (例: `/etc/init.d/besserver stop`)。
3. `besserver.config` ファイルで設定の値を必要に応じて更新します。
4. besserver を開始します (例: `/etc/init.d/besserver start`)。
5. besfilldb を開始します (例: `/etc/init.d/besfilldb start`)。

## 並列 FillDB の構成



名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<b>ParallelismEnabled</b>  この設定では、エージェント・レポートの並列処理を有効にできません。並列が有効になる状況についての詳細は、 <a href="#">「FillDB 並列処理の有効化 (#####)」</a>	デフォルト値	1 (有効)	サーバー Linux	9.5.5 以降	<a href="#">FillDB 並列処理の有効化 (##### 935)</a>
設定タイプ	Windows では REG_DWORD、 では besserver.config のエントリ				
値の範囲	0 ~ 1				
使用可能なタスク	いいえ				
再起動が必要	Windows システムでは FillDB の再起動、Linux では FillDB および BesRootServer の再起動				

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<a href="#">935</a> 」を参照してください。					
<b>NumberOfParsingThreads</b>  この設定では、レポートの解析を担当するスレッド数を定義します。並列が有効な場合のみ使用されます。	デフォルト値	3	サーバー、Linux	9.5.5以降	<a href="#">FillDB 並列処理の有効化 (##### 935)</a>
	設定タイプ	Windows では REG_DWORD、Linux では besserver.config のエントリー			
	値の範囲	1 ~ 5			
	使用可能なタスク	いいえ			
	再起動が必要	Windows システムでは FillDB の再起動、Linux では FillDB および BesRootServer の再起動			

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p><b>NumberOfDBUpdatingThreads</b></p> <p>この設定では、DB にレポート・データを保管するスレッド数を定義します。並列が有効な場合にのみ使用されます。</p>	値	3	サーバーバージョン Linux	9.5.5以降	<a href="#">FillDB 並列処理の有効化 (##### 935)</a>
	設定タイプ	Windows では REG_DWORD、 では besserver.config のエントリ			
	値の範囲	1 ~ 5			
	使用可能なタスク	いいえ			
	再起動が必要	Windows システムでは FillDB の再起動、Linux では FillDB および BesRootServer の再起動			
<p><b>MaxNumberOfReportsReadyForDB</b></p> <p>この設定は、スレッ</p>	値	1000/ NumberOfDBUpdatingThreads	サーバーバージョン Linux	9.5.5以降	<a href="#">FillDB 並列処理の有効化 (#### 935)</a>
	設定タイプ	Windows では REG_DWORD、			

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>ドを更新する DB が 1 回の実行で処理できる最大レポート数を示します。並列が有効な場合のみ使用されます。</p>		<p>では <code>besserver.config</code> のエントリー</p>			
	値の範囲	500 ~ 5000/ <code>NumberOfDBUpdatingThreadsStandard</code>			
	使用可能なタスク	いいえ			
	再起動が必要	Windows システムでは <code>FillDB</code> の再起動、Linux では <code>FillDB</code> および <code>BesRootServer</code> の再起動			
<p><b>MinNumberOfReportsReadyForDB</b></p> <p>この設定は、スレッドを更新する DB が 1</p>	<p><b>MaxNumberOfReportsReadyForDB</b></p> <p>設定タイプ</p>	<p>Windows では <code>REG_DWORD</code>、Linux では <code>besserver.config</code> のエントリー</p>	<p>バ</p>	<p>以降</p>	<p><a href="#">FillDB/2 処理の有効化 (##### 935)</a></p>

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>回の実行で処理できる最小レポート数を示します。並列が有効な場合のみ使用されます。</p>	値の範囲	MaxNumberOfReportsReadyForDB/1 ～ 3			
	使用可能なタスク	いいえ			
	再起動が必要	Windows システムでは FillDB の再起動、Linux では FillDB および BesRootServer の再起動			
<p><b>MaxNumberOfReportsInParsingQueue</b></p> <p>この設定は、解析スレッドが処理するのを待機している</p>	値の範囲	NumberOfParsingThreads* NumberOfParsingThreads	サーバー以降	9.5.5以降	<a href="#">FillDB 並列処理の有効化 (##### 935)</a>
	設定タイプ	Windows では REG_DWORD、Linux では besserver.config のエントリー			
	値の範囲	(2 ~ 20) * NumberOfParsingThreads			

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>キューに入れることのできる最大レポート数を示します。並列が有効な場合にのみ使用されます。</p>	使用可能なタスク	いいえ			
<p><b>ParallelismEnabledForQuery</b></p> <p>この設定では、BigFix 照会レポートの並列処理を有効に</p>	設定タイプ	0	サーバー	9.5.5以降	なし
	設定タイプ	Windows では REG_DWORD、Linux では besserver.config のエントリー	Linux		
	値の範囲	0 ~ 1			
	使用可能なタスク	いいえ			

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
できます。	再起動が必要	Windows システムでは FillDB の再起動、Linux では FillDB および BesRootServer の再起動			
<b>NumberOfParsingThreadsForQuery</b>  この設定では、BigFix 照会レポートの解析を担当するスレッド数を定義します。BigFix 照会レポートの並列処理	値	3	サーバーバージョン以降	9.5.5以降	<a href="#">FillDB 並列処理の有効化 (##### 935)</a>
	設定タイプ	Windows では REG_DWORD、Linux では besserver.config のエントリー			
	値の範囲	1 ~ 5			
	使用可能なタスク	いいえ			
	再起動が必要	Windows システムでは FillDB の再起動、Linux では FillDB および BesRootServer の再起動			

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
が有効化されている場合のみ使用されます。					
<p><b>NumberOfDBUpdatingThreadsPerQuery</b></p> <p>この設定では、DBにBigFix照会レポート・データを保管するスレッド数を定義します。BigFix照会</p>	設定タイプ	Windows では REG_DWORD、Linux では besserver.config のエントリー	サーバーバージョン以降	9.5.5	<a href="#">FillDB 並列処理の有効化 (##### 935)</a>
	値の範囲	1 ~ 5			
	使用可能なタスク	いいえ			
	再起動が必要	Windows システムでは FillDB の再起動、Linux では FillDB および BesRootServer の再起動			



名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
レポートの並列処理が有効化されている場合のみ使用されます。				
<p><b>MaxNumberOfQueryReportsReadyForDB/</b></p> <p>この設定は、スレッドを更新する DB が 1 回の実行で処理できる BigFix 照会レポート</p>	<p>値</p>	<p>NumberOfDBUpdatingThreads</p>	<p>サーバー</p>	<p>9.5.5 <a href="#">FillDB 並列処理の有効化 (FillDB) (FillDB) (FillDB)</a></p>
	<p>設定タイプ</p>	<p>Windows では REG_DWORD、Linux では besserver.config のエントリー</p>	<p>Linux</p>	
	<p>値の範囲</p>	<p>(500 ~ 5000)/ NumberOfDBUpdatingThreadsForQuery</p>		
	<p>使用可能なタスク</p>	<p>いいえ</p>		
	<p>再起動が必要</p>	<p>Windows システムでは FillDB の再起</p>		

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>トの最大数を示します。BigFix 照会レポートの並列処理が有効化されている場合のみ使用されます。</p>		<p>動、Linux では FillDB および BesRootServer の再起動</p>			
<p><b>MinNumberOfQueryReportsReadyForDB</b></p> <p>この設定は、スレッドを更新する DB が 1 回の実行</p>	<p>設定タイプ</p>	<p>Windows では REG_DWORD、Linux では besserver.config のエントリー</p>	<p>バースタート以降</p>	<p>以降</p>	<p><a href="#">MinNumberOfQueryReportsReadyForDB/2 の有効化 (##### 935)</a></p>
	<p>値の範囲</p>	<p>MaxNumberOfQueryReportsReadyForDB/ (3 ~ 1)</p>			

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
<p>で処理できる BigFix 照会 レポートの最小数を示します。 BigFix 照会 レポートの並列処理が有効化されている場合のみ使用されます。</p>	使用可能なタスク	いいえ			
	再起動が必要	Windows システムでは FillDB の再起動、Linux では FillDB および BesRootServer の再起動			
<p><b>MaxNumberOfQueryReportsInParsingQueue</b></p> <p>この設定は、解析</p>	この設定は、解析	<p>NumberOfParsingThreads</p>	サーバー	9.5.5以降	<a href="#">FillDB 並列処理の有効化 (#Query935)</a>
	設定タイプ	Windows では REG_DWORD、Linux			

名前/説明	値		影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
スレッドが処理するのを待機しているキューに入ることできる BigFix 照会レポートの最大数を示します。BigFix 照会レポートの並列処理が有効化され		では besserver.config のエントリー			
	値の範囲	(2 ~ 20) * NumberOfParsingThreadsForQuery			
	使用可能なタスク	いいえ			
	再起動が必要	Windows システムでは FillDB の再起動、Linux では FillDB および BesRootServer の再起動			

名前/説明	値	影響を受けるコンポーネント	適用可能なバージョン	参照
ている場合のみ使用されます。				

## ODBC の構成

このトピックでは、Open DataBase Connectivity (ODBC) を使用して、BigFix とともに ODBC データ・ソースをセットアップおよび構成する方法について説明します。各 ODBC データ・ソースは、Microsoft SQL や HCL DB2 などのさまざまな DBMS 内のデータにより簡単な方法でアクセスするのに使用される ODBC データ・ソース名 (DSN) (`bes_bfenterprise` など) によって識別されます。DSN は、データベースに到達するために使用されるコンピューター上にローカルに保管されます。各 DSN を使用して、データベース接続のための認証および設定情報を保存することができます。このようにして、ユーザーはデータベースと 1 回接続し、将来使用するために情報を保存することができます。

データベースにより簡単にアクセスするために、DSN を使用して、データベース接続のための認証および設定情報を保存することができます。このようにして、ユーザーはデータベースと 1 回接続し、将来使用するために情報を保存することができます。DSN は、データベースに到達するために使用されるコンピューター上にローカルに保管されます。各 DSN は、`bes_bfenterprise` のような名前によって識別されます。

BigFix は、複数の DSN を使用して同一データベースに接続することができます。各 DSN の設定は異なり、各 DSN を使用して別々の方法でデータベースに接続でき

ます。例えば、`bes_bfenterprise` DSNと `bes_EnterpriseServer` DSN の主な違いは、`bes_bfenterprise` が Windows NT 認証を使用して BigFix データベースに接続するのに対して、`bes_EnterpriseServer` は SQL 認証を使用して接続することです。

Windows システムで DSN を表示するには、「コントロールパネル」>「管理ツール」>「データソース (ODBC)」を実行し、ODBC データ・ソース・アドミニストレーター・ツールを起動します。1 つ目のタブ、「ユーザー DSN」では、現在ログインしているユーザーのみが使用可能な DSN を指定します。BigFix DSN のほとんどが「システム DSN」で見つかるか作成されます。これには、マシンを使用しているすべてのユーザーが使用可能な DSN、およびマシン自体のシステム・アカウントで使用可能な DSN が含まれます。管理者特権を持つユーザーのみが「システム DSN」タブで変更を行うことができます。新規 DSN を作成する場合、ドライバーとして SQL Server が使用されます。

## Microsoft SQL データベース接続

Microsoft SQL データベースの ODBC 接続を構成するには、BigFix によって使用される DSN の以下の設定を定義する必要があります。

### Name (名前)

保管されている ODBC データ・ソースを識別するのに使用される DSN の名前。BigFix は、`enterprise_setup` や `bes_bfenterprise` のような名前を持つ DSN を探します。BigFix コンポーネントは、特定の名前が付いた DSN が存在することを想定し、自動的にこれらの DSN を使用してデータベースに接続しようとします。例えば、コンソールと管理ツールは、起動時に接頭部 `bes_` が付いていない DSN が表示された場合でも、この接頭部を持つ任意の DSN を使用します。

### サーバー

このフィールドは、DSN の接続先の BigFix データベースが存在するマシンを指定します。リモート・データベースを設定する場合は、BigFix インストーラーによって自動的に作成されたすべての DSN について、そのデータベース・マシンを指すように、このフィールドを変更します。

アップグレードを行うと、BigFix サーバーを指すように DSN がリセットされます。したがって、BigFix コンソールまたは BigFix サーバーに対してアップ

グレードを行った後は、DSN に以前指定されていた値を必ず再設定してください。

## 認証方式

設定できる認証方式はWindows NT 認証と SQL 認証の 2 種類です。

Windows NT 認証方式では、データベースへのログイン ID およびパスワードとして、Windows のログインおよびパスワードを使用します。

SQL 認証方式では、データベースへの接続が行われるたびに、ログイン ID およびパスワードを手動で指定する必要があります。

BigFix コンポーネントは、これらの 2 つの認証方式のいずれかを使用するようにセットアップできます。方式を 1 つ選択して、SQL 認証を常に使用する必要がある `bes_EnterpriseServer` DSN を除き、DSN の構成においてその方式の使用を維持してください。

## デフォルト・データベース

デフォルト・データベースは、この DSN が使用するデータベース・インスタンスです。デフォルト BigFix データベース・インスタンスは、デフォルトでは `bfenterprise` と `BESReporting` です。DSN が Web レポートに使用される場合は、デフォルトは `BESReporting` データベース・インスタンスになります。それ以外の場合、DSN はデフォルトで `bfenterprise` を使用します。認証情報は、このデータベース・インスタンスにアクセスするためにも使用されます。SQL Server でのアクセス許可には 2 つのレベルがあり、1 つ目はデータベース自体へのアクセス、2 つ目はデータベース・インスタンスへのアクセスです。



 **注:** 接続をテストする場合のみ、「SQL Server に接続して追加の構成オプションの既定設定を取得する」を選択し、ID とパスワードを指定します。このログイン ID とパスワードは DSN とともに保管されません。これらは、デフォルト設定を取得して DSN をテストするのに使用されます。DSN の構成が完了した後、この情報は破棄されます。SQL 認証された DSN がデータベースに接続しようとするたびに、同じ資格情報を指定する必要があります。

表 3. BigFix コンポーネントと DSN

BigFix コン ポー ネント	DSN	認 証 方 式
BigFix サー バー・ インス トール	enterprise_setup	NT
BigFix サー バー	bes_bfenterprise	NT ま た は SQL
BigFix コン ソール	bes_ で始まる任意の DSN	NT ま た は SQL
BigFix 管理 ツール	bes_ で始まる任意の DSN	NT ま た は SQL
BigFix Web レ ポート	LocalBESReportingServer	NT
	<p> <b>注:</b> DSN LocalBESReportingServer には、構成データとログイン・データが含まれますが、Web レポートに表示されるデータは含まれません。新規データベースの追加時やリモート・データベースの構成時は、「データベース設定」ページの「Web レポート」で、DSN bes_bfenterprise を使用してください。</p>	



## DB2 データベース接続

サーバー ODBC 接続を設定する前に、最新バージョンの BES\Shared\Database\DB2Schema をダウンロードし、次のコマンドを使用して、Windows オペレーティング・システム上に BigFix データベースを作成します。

```
<script_location>\DB2createdb.bat <DB2 Admin User> <DB2 Admin Password>  
<drive letter>
```

例えば、次のようになります。

```
C:\TEMDB2\DB2createdb.bat db2admin db2_password C:
```

データベースを作成したら、以下の手順を実行して、サーバー ODBC 接続を設定します。

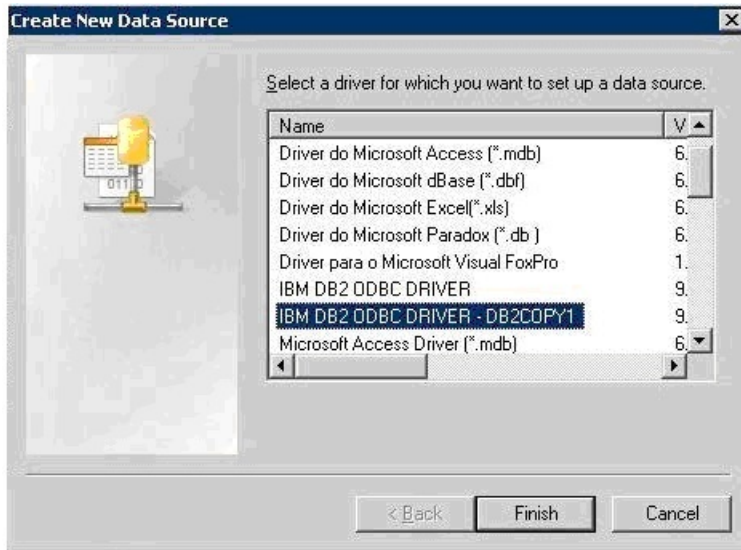
1. Microsoft Open Database Connectivity (ODBC) データ・ソース・アドミニストレーター・ツールを開き、以下の手順に示されているとおりに、新規データ・ソース bes\_bfenterprise\_db2 を作成します。

64 ビット・バージョンの Windows オペレーティング・システム (Windows 2008 R2 など) には、以下のバージョンの ODBC データ ソース アドミニストレーター・ツール (Odbcad32.exe) が含まれています。

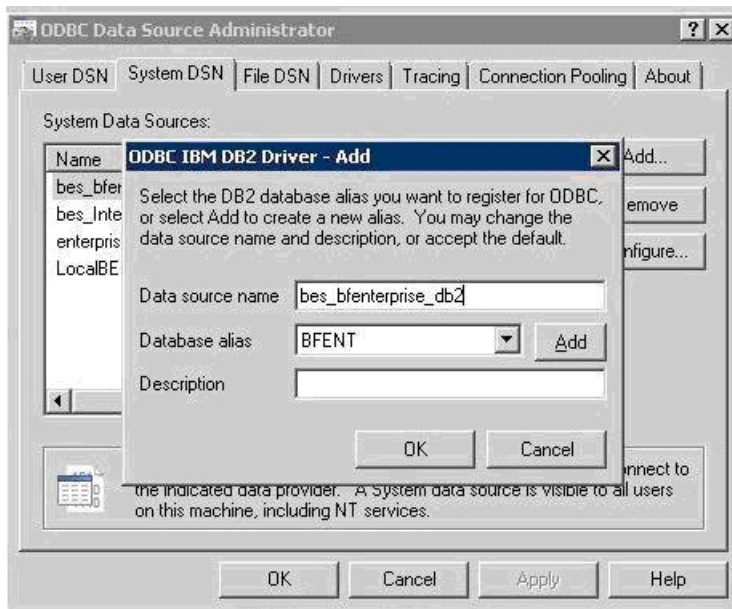
- 32 ビット・バージョンの Odbcad32.exe ファイルは、%systemdrive%\Windows \SysWoW64 フォルダーにあります。
- 64 ビット・バージョンの Odbcad32.exe ファイルは、%systemdrive%\Windows \System32 フォルダーにあります。

このツールにより、新規ユーザー・データ・ソースが追加されます。

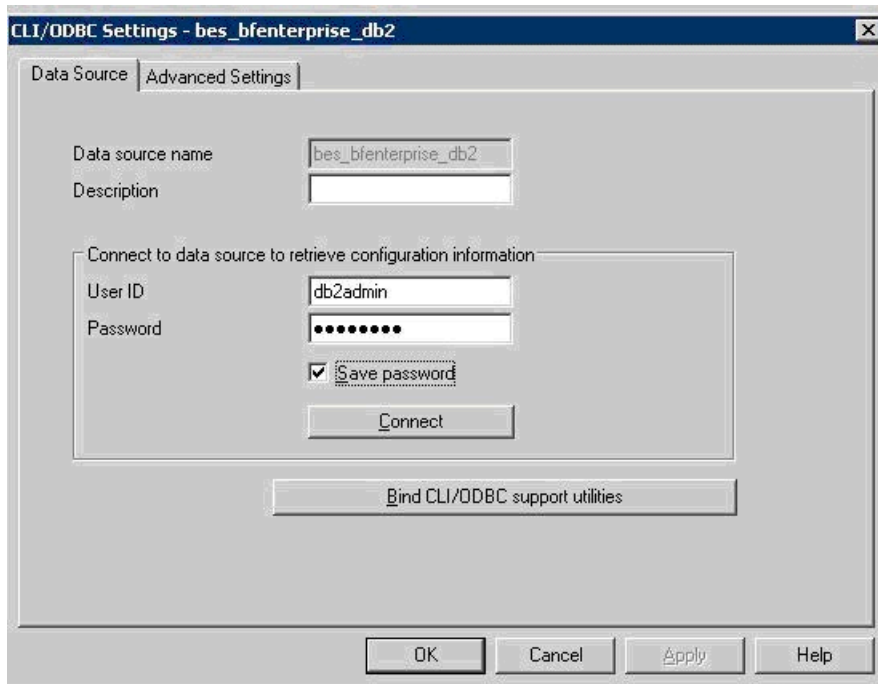
2. 「新規データ・ソースの作成」ウィンドウで、新規ユーザー・データ・ソースを追加するドライバーを選択し、「完了」をクリックします。



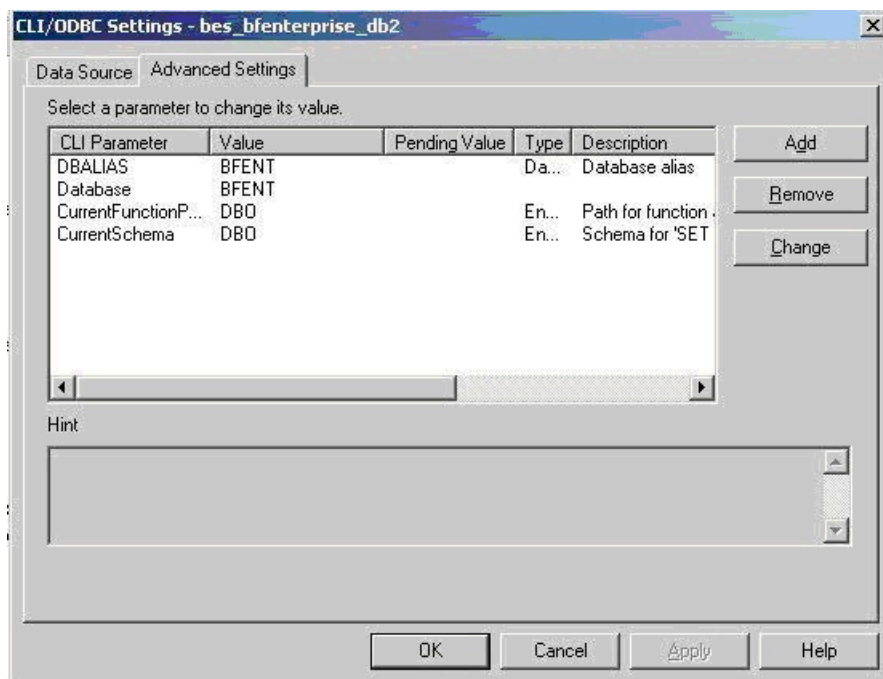
3. ドライバー固有のセットアップ・ダイアログ・ボックスで、データ・ソース名、DB2 データベース別名、および説明を入力します。



4. 「CLI/ODBC 設定」ウィンドウで、「詳細設定」をクリックします。



5. 以下の ODBC パラメーターを追加します。



6. ODBC 接続をテストしてから、BigFix のインストールで作成された MSSQL ODBC を削除します。

7. BESAdmin 管理ツールを実行するために、以下のレジストリー・キーを作成します。

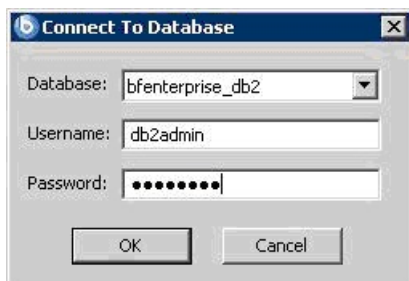
- HKEY\_CURRENT\_USER\Software\BigFix\BFAdmin\Database

```
name = dsn
type = REG_SZ
Value = bes_bfenterprise_db2
```

- HKEY\_CURRENT\_USER\Software\BigFix\BFEadmin\Settings

```
name = AllowCustomUsername
type = REG_DWORD
Value = 1
```

8. BESAdmin.exe を実行して、スキーマを作成し、データベースにデータを設定します。以下のログ・ファイルを参照してください。C:\Documents にある BESAdmin.log と、Settings\Administrator\Local Settings\Application Data\BigFix にある BESAdminDebugOut.txt のログ・ファイルです。
9. データベースに接続するためのユーザー名とパスワードを入力します。



10. 以下のレジストリー・キーを作成して、BESRootServer サービスを DB2 に接続します。

```
name = User
type = REG_SZ
Value = db2admin
name = Password
type = REG_SZ
Value = Bigfix11
name = DSN
type = REG_SZ
Value = bes_bfenterprise_db2
```

これらを `HKEY_LOCAL_MACHINE\Software\Wow6432Node\BigFix\Enterprise Server\Database` の下に作成します。

11. DB2 データベースを使用する前に、以下のサーバー・フォルダーの内容を削除します。

```
%PROGRAM FILES%\BigFix Enterprise\BES Server\wwwrootbes\bfmirror
\bfsites
%PROGRAM FILES%\BigFix Enterprise\BES Server\wwwrootbes\bfsites
%PROGRAM FILES%\BigFix Enterprise\BES Server\Mirror Server\Inbox
```

12. すべての BigFix サービスを再始動します。

## Web レポートの結果数の構成

Web レポートの結果を `Explore Computers` レポートに表示する際のメモリの過剰使用を防ぐために、`MaxReportResults` キーワードを設定できます。このキーワードにより、Web レポートに表示できる最大行数が設定されます。デフォルト値は 1000000 です。キーワードの有効な値の範囲は 1 から 4294967295 までです。

以下のメッセージがレポート・ページに表示された場合:

```
Unable to update data table: server aborted or there was an error
processing your request
```

かつ、以下の例外がログ・ファイルに表示された場合:

```
Too many results returned from computer report. Report execution has been
aborted
```

この例外は、表示される行数がデフォルト値を超えていることを示しています。この場合、レポートのタイプ、コンピューターのプロパティ、および Web レポートが実行されているシステムのリソースを考慮に入れて、キーワード値を調整します。

以下の手順を実行すると、Web レポートが実行されている Windows システムおよび Linux システムのいずれでも、このキーワードを設定できます。

**Windows システムの場合:**

**regedit** を実行してパス `HKEY_LOCAL_MACHINE\Software\Wow6432Node\BigFix\Enterprise Server\BESReports` を見つけます。

文字列値 (reg\_sz) `MaxReportResults` を作成し、それを指定された値に設定します。

```
"MaxReportResults" [REG_SZ] = "1000000"
```

### Linux システムの場合:

`MaxReportResults` キーワードを `beswebreports.config` ファイルの `[Software\BigFix\Enterprise Server\BESReports]` セクションに追加し、それを指定された値に設定します。

```
MaxReportResults = 1000000
```

## Web レポート用の夏時間 (DST) の管理

Web レポートはデフォルトでは、ローカル・タイム・ゾーンではなく UTC を使用して、スケジュール済みアクティビティの次の試行時間を管理します。したがって、ローカル・タイム・ゾーンが変更される (例えば、夏時間から非夏時間に変更される) と、レポートは変更の方向に応じて、1 時間早くまたは 1 時間遅く実行されます。

BigFix バージョン 9.5 以降では、`AdjustScheduleForDST` キーワードを 1 に設定することで、夏時間による変更が原因でスケジュール済みレポートが 1 時間早くまたは 1 時間遅く実行されることを防ぐことができます。

以下の手順を実行すると、Web レポートが実行されている Windows システムおよび Linux システムのいずれでも、このキーワードを設定できます。

### Windows システムの場合:

**regedit** を実行してパス `HKEY_LOCAL_MACHINE\Software\Wow6432Node\BigFix\Enterprise Server\BESReports` を見つけます。

文字列値 `AdjustScheduleForDST` を作成し、これを 1 に設定します。

```
"AdjustScheduleForDST" = "1"
```

### Linux システムの場合:

AdjustScheduleForDST キーワードを `beswebreports.config` ファイルの [Software \BigFix\Enterprise Server\BESReports] セクションに追加し、これを 1 に設定します。

```
AdjustScheduleForDST = 1
```

**⚠ 重要:** 夏時間の設定は、変更した後に最初のイベントがトリガーされるときに有効になります。

## BigFix 環境での FIPS 140-2 暗号方式

BigFix は BigFix 暗号モジュールを使用して、その環境全体で暗号機能を実行します。例えば、オペレーターが BigFix コンソールにログインし、新規ユーザーを作成し、アクションを開始し、新規コンテンツをサブスクライブするたびに、このモジュールによって暗号化操作が実行されます。

BigFix 暗号モジュールは、FIPS (連邦情報処理標準) 140-2 標準に準拠するものとして NIST から認定されている OpenSSL FIPS Object Module 2.0 を使用します。FIPS 140-2 標準での検証に合格したことは、これらのソフトウェア・ルーチンが政府公認の研究所による極めて厳格な試験を受けていることを意味します。FIPS 140-2 には 4 つの評価レベルがあり、レベル 1 とレベル 2 はソフトウェアに適用されます。BigFix は、より厳格なレベル 2 で検証を受け、12 個のコンピューター・プラットフォームで認定されました。BigFix は、BigFix 暗号モジュールがエラー状態になると、実行を停止するか始動しなくなります。

## BigFix サーバーでの FIPS 140-2 の構成

FIPS 140-2 を使用するように BigFix サーバーを構成することができます。そうすることで、BigFix 暗号モジュールの状態がエラーである場合、BigFix は始動しないか、実行を停止します。

モジュールの適切なセットアップと初期化を検証するには、以下の手順を実行してクライアント・ログ・ファイルを確認する必要があります。

1. BigFix サーバーで、「スタート」 > 「すべてのプログラム」 > 「Tivoli BigFix」 > 「Tivoli BigFix 管理ツール」を選択して、BigFix 管理ツールを起動します。

2. サイト・ライセンスのロケーションを参照し、「OK」をクリックします。
3. 「マストヘッドの管理」タブを選択します。
4. 「マストヘッドの編集」をクリックします。
5. 「FIPS 140-2 に準拠した暗号を使用する必要がある」にチェック・マークを付けて、FIPS 140-2 を有効にします。
6. 「OK」をクリックします。
7. アクションを実行するための管理者パスワードを入力します。
8. 設定が有効になったことを確認するには、クライアント・ログ・ファイル (ログのデフォルト・パスは) で C:\Program Files\BigFix Enterprise\BES Client\\_\_BESData\\_\_Global\Logs\YYYYMMDD.log 以下のタイプのメッセージを確認します。


#### • FIPS 140-2 有効のログ・ファイル・メッセージ

```
At 14:36:12 -0700 -
FIPS mode enabled by masthead.
At 14:36:13 -0700 -
Cryptographic module initialized successfully in FIPS mode.
```

#### • FIPS 140-2 無効のログ・ファイル・メッセージ

```
At 14:58:28 -0700 -
FIPS mode disabled by default.
Unrestricted mode
```

クライアントで `_BESClient_Cryptography_FipsMode` 値を設定することで FIPS モードを強制できます。

 **注:** クライアント設定 `_BESClient_Cryptography_FipsMode` は BES クライアントと Web レポート・コンポーネントのマストヘッドで指定した FIPS 設定を上書きします。値を「なし」に設定すると、BES クライアントと Web レポート・コンポーネントは FIPS ライブラリーを使用しません。値を **required** に設定すると、FIPS ライブラリーを使用します。

そうすることで、始動時に暗号モジュールでエラーが発生した場合に、クライアントは FIPS モードでは実行されなくなります。

FIPS で検証された暗号ライブラリーのみを使用するように BigFix コンポーネントを強制させるには、以下の手順を実行します。



1. BigFix コンソールを起動します。
2. 「コンピューター」タブで、リストされている任意のコンピューターを右クリックして、「コンピューター設定の編集」を選択します。
3. [追加] をクリックします。
4. 「カスタム設定を追加」ダイアログで、次を入力します。「設定名」に `_BESClient_Cryptography_FipsMode`、「設定値」に `required`

 注:

5. 「OK」 をクリックします。
6. 「対象」タブで `All computers` を選択します。FIPS モードが有効な場合、デジタル署名、暗号化、SHA1/SHA2 ハッシュなどのすべての暗号操作は、FIPS 140-2 レベル 2 の認定を受けた暗号モジュールを使用して実行されます。
7. ダイアログの「実行」タブで「再び関連状態になるときは常にこのアクションを再適用する」を選択し、「OK」 をクリックします。

 注:

- FIPS モジュールを有効にする場合、OpenSSL ライブラリーは、独自の自己診断テストを満たすために静的アドレスでロードされる必要があります。
- FIPS モードの始動に関連するエラーで最もよく発生するのは、AIX システムおよび HP-UX システムで暗号モジュールに使用できるシステム・エントロピーが不足している場合のエラーです。
- FIPS モードの設定とメッセージ・レベルの暗号化 (MLE) の設定は互いに独立しています。FIPS は MLE を設定しなくても設定できます。また、その逆も同様です。

メッセージ・レベルの暗号化については、[メッセージ・レベルの暗号化 \(MLE\) の概要 \( \(ページ\) 966\)](#)および[メッセージ・レベルの暗号化と DSA \( \(ページ\) 71\)](#)を参照してください。

## クライアントの暗号化の管理

機密情報への無許可アクセスを防ぐために、クライアントからサーバーおよびリレーへの通信を暗号化できます。これを有効にするには、キーを生成

し、\_BESClient\_Report\_Encryption という設定のためにクライアントに値を与える必要があります。デフォルトでは、この設定の値は **オプション** に設定されています。この値はコンソールで設定します。この値については、の「Enabling encryption on Clients ( (ページ) )」を参照してください。

Windows サーバーでは、キーは BigFix 管理ツールの「暗号化」タブで生成します。

1. 「スタート」>「すべてのプログラム」>「BigFix」>「BigFix 管理ツール」を選択して BigFix 管理ツールを起動します。
2. 「暗号化」タブを選択します。ダイアログの上部に、現在の状態を示す記述があります。

クライアントの暗号化には 4 つの状態(「無効」、「保留中」、「有効」、および「ローテーションの保留中」)があります。

### 無効

この状態は、暗号化証明書が適用マストヘッドに含まれていないことを示します。したがって、クライアントは、レポートを暗号化するように指示されても、暗号化できません。暗号化証明書 (および、受信終了時にレポートを復号化するために使用できる、対応する秘密鍵) を作成するには、「**キーの生成**」をクリックします。状態は、「**保留中**」に設定されます。

### 保留

この状態では、暗号化証明書が生成されており、適用の準備ができていますが、復号化する必要があるすべてのリレーおよびサーバーに秘密鍵がまだ配布されていません。秘密鍵を手動で配布した場合、「**暗号化の有効化**」ボタンをクリックして、証明書をマストヘッドに組み込み、それをすべてのクライアントに送信します。状態は、「有効」に設定されます。「無効」状態に戻るには「**キャンセル**」をクリックします。

### 使用可能

この状態では、適用マストヘッド内に暗号化証明書があり、したがって、適用環境内のすべてのクライアントに対して (前に説明した設定を使用して) 暗号化をオンにすることができます。いつでも「**新しいキーの生成**」をクリックすることで、新しい暗号化証明書を作成できます。これは、キー・ロー

テーション・ポリシーを使用する場合、または暗号化キーがこれまでに漏えいされたことがある場合 (次のセクションを参照) に役立ちます。新しいキーを生成すると、「保留中」状態に戻ります (ただし、次のセクションで説明するように、直ちに適用することを選択した場合は除きます)。また、「無効」をクリックして、「無効」状態に戻ることもできます。

### ローテーションの保留中 (Pending Rotation)

この状態では、暗号化証明書が適用マストヘッドに組み込まれており、新しい証明書が生成されていて、既存の証明書と置き換える準備ができています。

Linux サーバーでは、スーパーユーザーとして以下のステップを実行することによりクライアントを暗号化できます。

1. 以下を実行してキーを生成します。

```
./BESAdmin.sh -reportencryption -generatekey -privateKeySize=max -
deploynow=yes
-sitePvkLocation=<path+license.pvk> -sitePvkPassword=<password>
```

2. 以下を実行してキーをアクティブにします。

```
./BESAdmin.sh -reportencryption -enablekey -sitePvkLocation=<path
+license.pvk>
-sitePvkPassword=<password>
```

使用可能なすべてのオプションをリストするには、以下を実行します。

```
./BESAdmin.sh -reportencryption -h
```

## 新規暗号化キーの生成

秘密鍵が漏えいしたか、またはキーのローテーションのポリシーを使用している場合、**BigFix管理ツール** から、新規キーを生成できます。

1. 「スタート」 > 「すべてのプログラム」 > 「BigFix」 > 「BigFix 管理ツール」 を選択して BigFix 管理ツールを起動します。
2. 「暗号化」 タブを選択します。
3. 「キーの生成」 ボタンをクリックします。「暗号化認証ファイルの作成」ダイアログが開きます。



4. このダイアログで、キー・サイズを選択します。デフォルトは 2048 です。これは、ほとんどの目的で十分な値です。このキーを直ちに使用するには、ボックスにチェック・マークを付けます。ただし、暗号化を使用するリレーを設定した場合は、新規キーをそれらのリレーに配布できるようになるまで、このボックスをチェック・マークなしのままにしてください。
5. 「OK」 をクリックして、この新規キーをクライアントに配布します。アクションを伝達するには、サイト管理秘密鍵を入力する必要があります。最後のダイアログで、確認を求められます。暗号化キー・サイズおよびサーバー要件について詳しくは、BigFix サポート・サイトの [サーバー要件](#) に関する知識ベースの記事を参照してください。

## 最上位の復号化を行うリレーの作成

アクションがデプロイされると、短い時間フレーム内に数千のクライアントが (通常はリレーに対して) レポートを返す可能性があります。これらのレポートを暗号化することを選択した場合、リレーはレポートを 1 つにまとめてサーバーに渡します。サーバーは、それを分割して、それぞれのレポートを復号化する必要があります。何千ものクライアントがある場合、これによりサーバーに対して著しい計算負荷がかかる可能性があります。

パフォーマンスを向上させるために、最上位のリレーが復号化の大部分を実行できるようにすることで、サーバーの負荷を軽減することができます。50,000 を超えるクライアントがある場合、復号化の作業をリレー・チェーンに移すことによって、サーバーの負荷を大

幅に削減できる可能性があります。リレーに独自の復号化キーがある場合、リレーはまずクライアント・メッセージを平文に復号化してから、数千のメッセージを単一のアーカイブにまとめることができます。これを圧縮し、暗号化して、サーバーに渡すことができます。その時点で、サーバーはアーカイブ全体に対して復号化を 1 回だけ実行すればよく、オーバーヘッドが著しく削減されます。

復号化タスクを分散させるには、暗号化キーを最上位リレーに配布します。通常のサーバー・レベルの暗号化の場合、HCL がユーザーに代わって暗号化キーを作成し、それをプログラム・フォルダーに入れます。

Windows システムの場合:

```
%PROGRAM FILES%\BigFix Enterprise\BES Server\Encryption Keys
```

Linux システムの場合:

```
var/opt/BES Server/Encryption Keys
```

負荷を最上位リレーに割り振るには、暗号化キーを、対応するリレー・ディレクトリーに入れます。

Windows システムの場合:

```
%PROGRAM FILES%\BigFix Enterprise\BES Relay\Encryption Keys
```

Linux システムの場合:

```
var/opt/BES Relay/Encryption Keys
```

これらの最上位リレーは、受け取ったすべての文書を復号化し、それらを 1 つにまとめ、単一の署名によって再署名します。フォルダーにキーを必要な数だけ入れることができます。リレーは、暗号化されたクライアント・レポートを取得したときに、それぞれのキーの使用を試みます。クライアントは、マストヘッド・ファイルで検出したキーを使用して暗号化を行います。そのキーは、最後に作成されたキーでなければなりません。ただし、クライアントが、何らかの理由で最新のアクション・サイトを収集しなかった場合、古いバージョンのマストヘッド (すなわち異なる暗号化キー) を使用してレポートを送信する可能性があります。

最上位の暗号化を使用する場合は、以下のベスト・プラクティスについて考慮してください。

- 新しい暗号化キーを作成するたびに、キー・ファイルを手動でサーバーからリレーに転送する必要があります。
- 転送処理中に、秘密鍵ファイルを公開しないようにすることが重要です。これは、インターネットを介してキーを移動してはならないことを意味します。listen している誰かが秘密鍵ファイルのコピーを作成できる可能性があるからです。代わりに、USB キーなどを使用して、あるコンピューターから別のコンピューターへ物理的にキーを転送します。
- 暗号化キーの作成処理中に、秘密鍵ファイルを作成するが、マストヘッドに伝達しないという選択肢があります。このステップによって、クライアントがそのキーを使用して暗号化メッセージの送信を開始する前に、新しいキー・ファイルをリレーに転送する時間の猶予が与えられます。

## メッセージ・レベルの暗号化 (MLE) の概要

メッセージ・レベルの暗号化 (MLE) により、クライアントは、RSA 公開鍵と RSA 秘密鍵のペアと AES セッション・キーの組み合わせを使用して、アップストリーム・データを暗号化できます。

RSA キーのペアとして、2048 ビット長または 4096 ビット長のキーを使用できます。キーが長いほどセキュリティは向上しますが、サーバーで復号化するための処理能力もより多く必要になります。AES セッション・キーでは、FIPS 推奨最大長の 256 ビットが使用されます。クライアント・データをリレーする前に復号化および再パッケージ化することで、サーバーの負荷を軽減するようにリレーを構成できます。

RSA 公開鍵により、セッション・キーが暗号化され、そのキーが AES 暗号化レポートに追加されます。BigFix サーバー (または復号化を実行するリレー) で、対応する RSA 秘密鍵を使用して AES セッション・キーが復号化され、次にそのキーを使用してクライアント・レポートが復号化されます。

レポートの暗号化には 3 つのレベルがあります。

### 必須

クライアントで、レポートおよびアップロードの暗号化が必須となります。クライアントが暗号化証明書を検出できない場合、またはクライアントの親リレーが暗号化済み文書の受信をサポートしていない場合、クライアントはファイルのレポートもアップロードも行いません。

## オプション

クライアントで、レポートおよびアップロードの暗号化が優先されますが、必須ではありません。暗号化を実行できない場合、レポートおよびアップロードは平文で実行されます。

## なし

暗号化証明書がある場合でも、クライアントは暗号化を行いません。

クライアントでの暗号化の設定方法について詳しくは、「クライアントでの暗号化の有効化( (ページ) )」を参照してください。

# クライアント・アイコンの変更

デフォルトでは、クライアント UI の左上隅のアイコンは、BigFix のロゴです。この同じアイコンが、アクションが保留中の場合はトレイに表示され、プログラムが実行中の場合はタスクバーに表示されます。このアイコンは、アクションのソースが誰であるかをユーザーに明確に示すために、また、企業のブランドおよび商標の要件に従うために変更することができます。このアイコンを変更するには、以下の手順を実行します。

### • Windows システムの場合:

1. 「スタート」 > 「すべてのプログラム」 > 「BigFix」 > 「BigFix 管理ツール」 から BigFix 管理ツールを実行します。
2. 「システム・オプション」 タブをクリックします。
3. 「アイコンの追加」 をクリックし、「開く」 ダイアログを使用して、アイコン (.ico) ファイルを参照します。

### Linux システムの場合:

1. 新しいアイコンのパスを調べます (例: /IEM/newicon.ico)。

2. /opt/BESServer/bin コマンド・プロンプトから、以下のようにコマンド・ラインを開始します。

```
./iem login --server=servername:serverport --user=username --  
password=password
```

3. /opt/BESServer/bin コマンド・プロンプトから、以下のコマンドを実行します。

```
./iem post /IEM/newicon.ico admin/icon
```

ここで、*/IEM/newicon.ico* は新しいアイコンの絶対パスを表し、*admin/icon* は新しいアイコンのアップロードに使用するパラメーターです。

アイコンはクライアントに伝達されますが、クライアントが再起動されるまでインターフェースには組み込まれません。その後、クライアント・インターフェースが (アクション、ダッシュボード、または提案に回答して) 開いたときに、指定したグラフィック・アイコンが組み込まれます。

## クライアント UI の主要な操作

BigFix クライアント UI を使用すると、クライアント・コンピューターにログインしているエンド・ユーザーにメッセージ・ボックスが表示されます (プレアクション・メッセージ、アクション実行中のメッセージ、再始動/シャットダウンのメッセージを含む)。

BigFix クライアント UI がユーザー・セッションで実行されていない場合、エンド・ユーザーに BigFix メッセージは表示されません。

BigFix クライアント UI がクライアント通知域 (例えば、Windows のタスクバー) にメッセージを表示します。

このトピックでは、特に、「**アクションの実行**」パネルの「**メッセージ**」タブおよび「**提案**」タブが BigFix コンソールからトリガーされる場合に、クライアント UI によってクライアント・コンピューター上に表示される事項について説明します。

### シナリオ 1 (「メッセージ・タブ」)

BigFix コンソール・オペレーターが、「**アクションの実行**」パネルの「**メッセージ**」タブで以下の設定を指定する場合:



**Take Action**

Name: Append File      Create in domain: All Content

Preset: [Custom] Default       Show only personal presets      Save Preset...

Target | Execution | **Users** | Messages | Offer | Post-Action | Applicability | Success Criteria | Action Script

Display message before running action

Title: Append File

Description: Bigfix is going to perform an action on your computer, please take one of the suggested actions

Ask user to save work

Allow user to view action script

Allow user to cancel action

Set deadline:  1 day from time action is relevant

2/26/2019 at 10:52:27 AM client local time

At deadline:  Run action automatically

Keep message topmost until user accepts action

Show confirmation message before running action:

Confirm you want to run this action

Display message while running action:

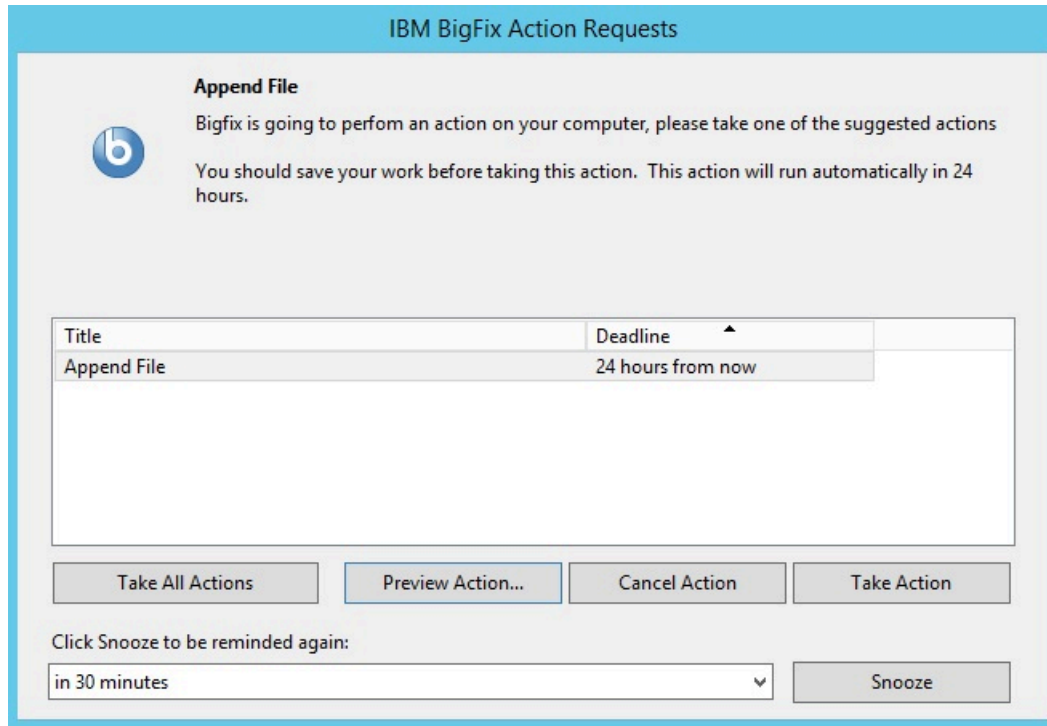
Title: Append File

Description: Bigfix is running a configuration action on your computer

You have specified on the "Users" tab that this action should run independently of user presence. If no user is present, the message will not be displayed.

OK      Cancel

以下のスクリーン・キャプチャーでは、クライアント・コンピューター上のエンド・ユーザー向けの表示事項を示します。



エンド・ユーザーが実行できる主要な操作。

### アクションの実行/すべてのアクションを実行

クライアント・コンピューター上でアクションを実行します。

### アクションのプレビュー

アクションに含まれるアクション・スクリプトを表示します。

### アクションのキャンセル

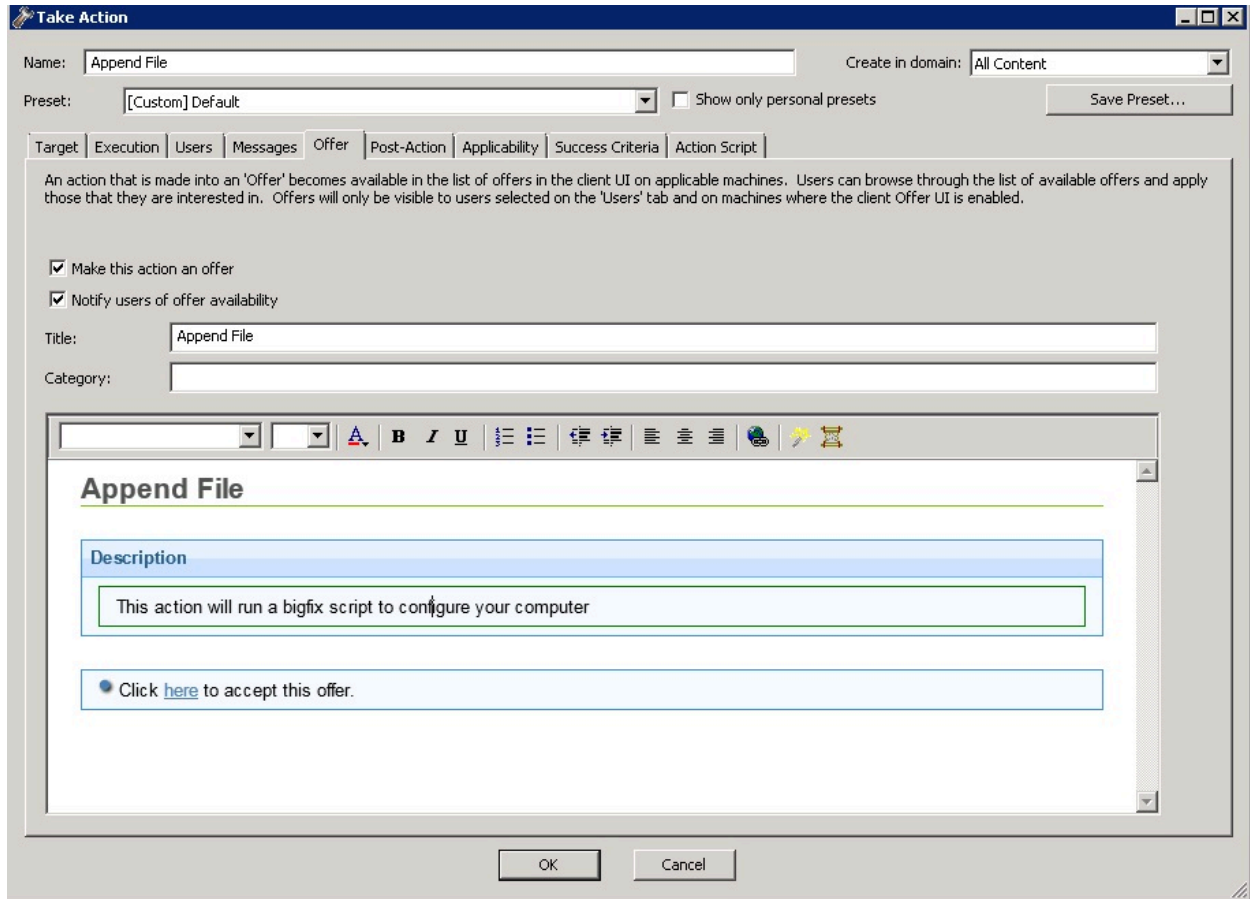
アクションを削除します。

### スヌーズ

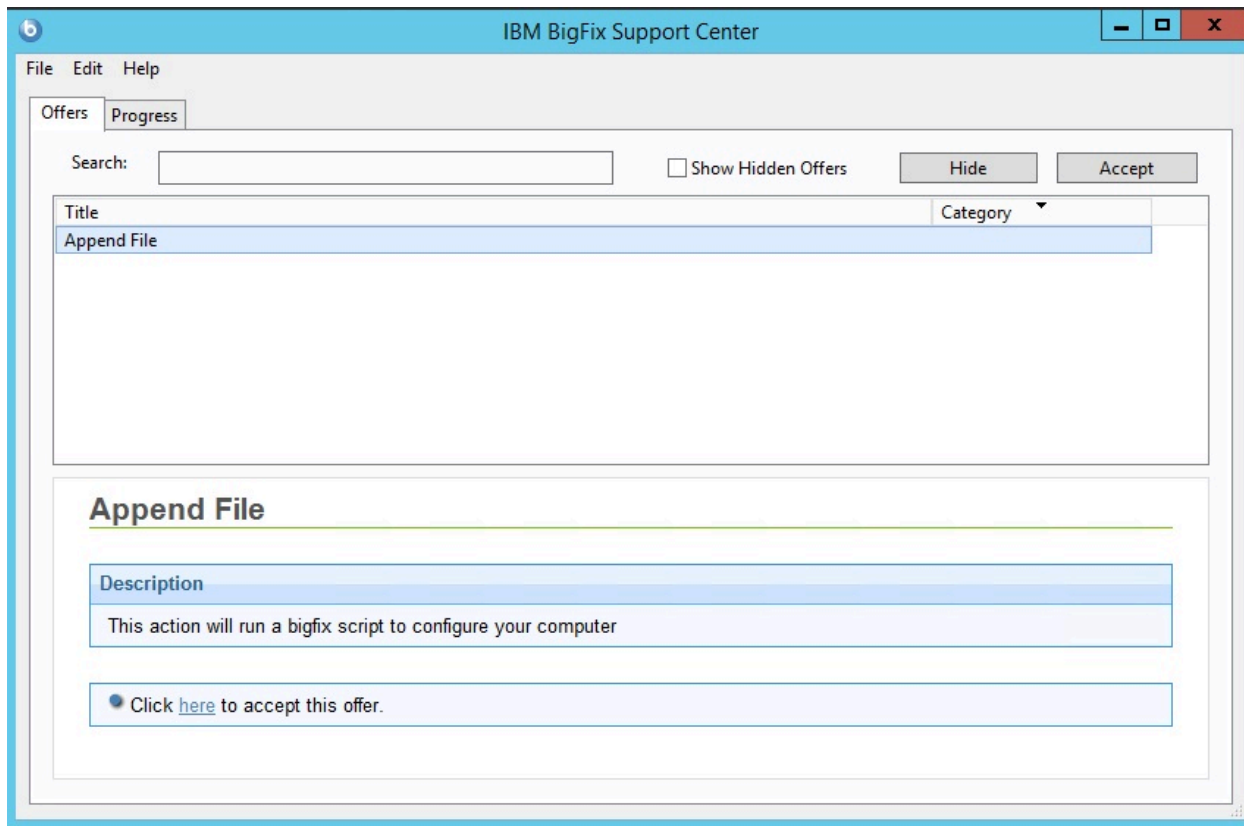
アクションを延期し、アクションの実行に関するリマインド時期を選択できます。

## シナリオ 2 (「提案タブ」)

BigFix コンソール・オペレーターが、「アクションの実行」パネルの「提案」タブで以下の設定を指定する場合:



以下のスクリーン・キャプチャーでは、クライアント・コンピューター上のエンドユーザー向けの表示事項を示します。



エンド・ユーザーが実行できる主要な操作。

### 非表示

クライアント通知パネルを非表示にします。

### 受け入れる

クライアント・コンピューター上でアクションを実行します。

**注:** 「**進行状況**」 タブが前のアクティビティーすべて (以前に受けた提案) の状況を表示しますが、主要な操作は 「**提案**」 タブで実行できます。

## サーバーの最適化

BigFix は効率的に動作し、ネットワーク・リソースには最小限の影響しか及ぼしません。ただし、推奨構成を拡張したインストールでは、割り当てられているサーバーの能力に対してクライアントの数が多すぎる場合があります。最良の解決策は、環境に対して必要な特性を備えたサーバーを選択することです。ただし、一部の環境設定を変更すること

で、パフォーマンスを向上させることができる場合があります。これらの最適化のほとんどには、スループットと反応性のトレードオフが伴うため、注意して進める必要があります。HCL ソフトウェア・サポートは、ご使用の特定 デプロイメント に対してどのような変更が最適かについて詳しい情報をご提供いたします。

以下に、使用可能な最適化手法の一部を示します。

- サーバーの負荷を軽減するために、**リレー** を適用する。これは、BigFix のパフォーマンスと反応性を向上させる最も効果的な方法です。通常、リレーが多ければ多いほど、パフォーマンスはより向上します (概して、500 から 1000 のクライアントに対して1つのリレーを使用するのが適切な選択です。専用コンピューターを使用すると、パフォーマンスはさらに向上します)。
- 「**ファイル**」 > 「**環境設定**」で、**クライアントのハートビートの速度**を下げる。これにより、クライアントが取得プロパティを更新するために定期的にディスパッチするメッセージの頻度が低下します。この頻度を下げると、生成されるネットワーク・トラフィックの量が削減されますが、取得プロパティの適時性も低下します。ただし、クライアントは、ハートビートの設定に関係なく、サーバーから更新 ping を受信するたびに常に最新情報を送信し、また Fixlet が適用対象であることを検出した場合も常に最新情報を送信します。
- 「**ファイル**」 > 「**環境設定**」で、**Fixlet の一覧の更新速度**を下げる。これにより、コンソールに表示される情報の更新頻度が低下します。同時に接続する多数のクライアントまたはコンソールがある場合、またはデータベースが非常に大規模な場合、この頻度を下げることによって、サーバーの負荷を大幅に軽減できます。複数のコンソール・オペレーターが同時にコンソールを使用する場合、BigFix データベースの負荷を軽減するために、更新速度をデフォルト (15 秒) よりもいくぶん大きい値に設定します。コンソール・オペレーターの数が多い場合、60 秒から 120 秒またはそれ以上の値に変更することを検討します。サーバーで BigFix 管理ツールを使用することで、グローバル最小更新速度を設定できます。
- データベース管理者が以下の最適化を行うことで支援できる場合があります。
  - BFEnterprise データベースの SQL Server リカバリー・モデルを「**単純トランザクション・ロギング (Simple transaction logging)**」に変更する。

- Web サーバーとオペレーティング・システムでメモリー不足が発生しないように、SQL Server に割り当てられているメモリーのパーセンテージを 100% から 85% に減らす。

その他の[パフォーマンスの推奨事項](#)については、BigFix サポート・サイトを参照してください。

## コンソールの最適化

応答性を高めるために、コンソールには適切な CPU の処理能力、メモリー、およびキャッシュ・スペースが必要です。コンソールのロード時間が長い場合、またはコンソールの実行速度が遅い場合、そのコンソールの速度を向上させる手法がいくつかあります。以下にそれらの方法を示します。

- **十分なメモリーがあることを確認する。** BigFix コンソールは、メモリーの容量が多いと非常に有利で、コンテンツ (Fixlet メッセージ、タスク、アクションなど) の表示、フィルター操作、およびソートが高速化されます。コンピューターに十分な物理メモリーが搭載されていない場合、コンソールの実行速度は非常に低下します。タスク・マネージャー (Ctrl+Shift+Esc) でメモリーの使用量を確認できます。「パフォーマンス」タブを選択し、「物理メモリー」セクションを参照します。使用可能メモリー量が合計メモリー量の 10% 未満の場合、RAM が不足しています。この場合、RAM を追加することでパフォーマンスを向上させることができます。
- コンソールとサーバーの間で **高速ネットワーク接続を使用する** (100 MBPS 以上の LAN 接続が望ましい)。大規模ネットワークの場合、BigFix データベースのサイズが大きくなる場合があります。この場合、低速接続を使用するコンピューターからコンソールを実行すると、多くの場合、ロード時間は非常に長くなります。
- **リモート制御ソフトウェアを使用する。** ロードして表示するデータが大量にある場合、低速リンクを介してリモート・オフィスのコンソールを操作することは非常に面倒です。このような状況では、Citrix、ターミナル・サービスなどのソリューションや、その他のリモート制御ソフトウェアが便利な場合があります。サーバーに高速アクセスできるコンピューターにリモート制御サーバーをセットアップします。そのマシンがコンソールのインスタンスを表示できるようにし、支社がこれらのコンソールをリモートで実行できるようにします。データベースは本社にあり、リモート・オ

フィスは最適なパフォーマンスを得ることができます。詳しくは、リモート Citrix またはターミナル・サービスの構成 (#####) を参照してください。

- **古いアクションを削除する。** BigFix データベースには、古いアクションに関する情報が保存されます。コンソールは、これらの情報を起動時にロードし、シャットダウン時に保存します。これらの古いアクションを追跡する必要がない場合、削除してかまいません。削除すると、コンソールのロードとクローズが高速になります。削除したアクションは、データベース内にはまだ存在しますが、コンソールや Web レポートにはロードされません。必要に応じて、削除を取り消すことができます。
- パフォーマンスの改善方法について詳しくは、「[Performance Configurations](#)」を参照してください。

## 帯域幅の管理

通常のインストールでは、ファイルのダウンロードで帯域幅の大部分が使用されます。この帯域幅はスロットリングにより制御できます。スロットリングにより、秒あたりのバイト数が制限されます。サーバーまたはクライアント (あるいはその両方) に対して、帯域幅スロットリングを指定することができます (両方に対して指定した場合、2つの値のうちの小さい方が使用されます)。以下の状況のような帯域幅の問題がある場合、このスロットリングが重要になります。

- シン・チャンネルを使用するリモート・オフィス
- リモート・ダイヤルイン・ユーザーまたは低速接続のユーザー
- 優先順位が高いアプリケーションが使用される共有チャンネル
- 既に飽和状態になっている WAN または LAN、あるいは厳しいロード要件がある WAN または LAN

帯域幅スロットリングの設定 (およびその他のリレー、サーバー、およびクライアントの設定) は、サポート・サイトのタスクを使用して実行できます。「**BigFix 管理**」ドメインを選択し、ナビゲーション・ツリーで「**BES コンポーネント管理**」ノードを選択して、タスク・リスト全体を表示します。

## 帯域幅スロットリング

多くのネットワーク環境では、特定の地理的位置の間、VPN を使用しているオフィス・ユーザーとホーム・ユーザーの間などで、帯域幅が制限されています。大規模な Microsoft® パッチ (例えば、Windows 7 SP1 更新プログラムは 537 MB です) をデプロイすると、帯域幅が制限された接続が圧迫され、特定のユーザーまたはアプリケーションに帯域幅の問題を引き起こすことがあります。

帯域幅の使用量に関連する問題を回避するために、BigFix では次のメカニズムを使用しています。

- 適切に実装および保守されたリレー・アーキテクチャー
- 一定期間にわたるパッチ・デプロイメントの分散
- コンポーネント間での帯域幅スロットリング構成の適用

このセクションでは、帯域幅スロットリングを使用するように BigFix コンポーネントを構成する方法について説明します。BigFix コンソール・オペレーターは、クライアント構成設定によって、ネットワーク接続を介してファイルを送信する際に使用される最大バイト数/秒を制御でき、これは BigFix サーバー・コンポーネント、リレー・コンポーネント、クライアント・コンポーネントの各レベルで行うことができます。

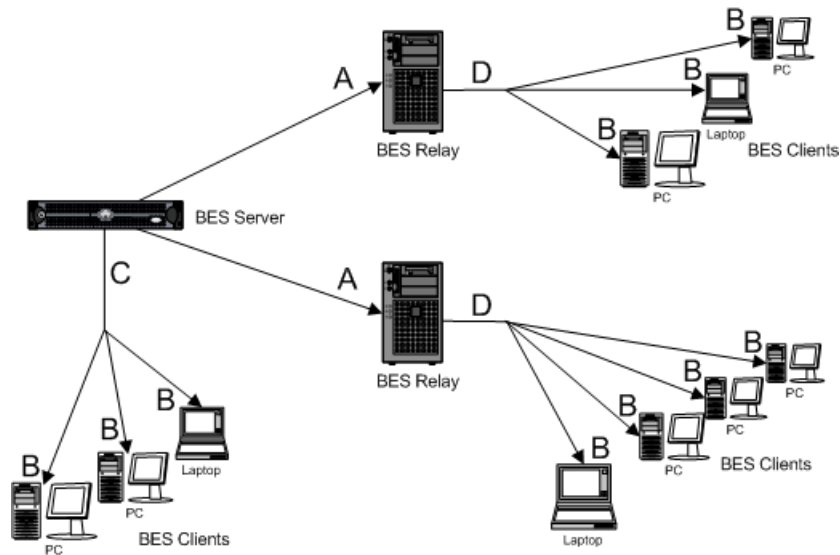
帯域幅スロットリングの設定は、BES サポート・サイト内のタスクを使用して構成できます。コンソールで「すべてのコンテンツ」 > 「Fixets とタスク」 > 「タスクのみ」 > 「サイト別」 > 「BES サポート」の順にクリックして、スロットルという用語を検索します。設定はすべて、レジストリーのクライアント・セクションのエンドポイント上のレジストリー・キー・クライアント設定として設定されます (HKEY\_LOCAL\_MACHINE\SOFTWARE\Wow6432Node\BigFix\EnterpriseClient\Settings\Client、名前付きの値を持ち、種類は String [REG\_SZ])。値は数値として入力されます。例えば、500 bps は 500 と入力されます。

関連する構成設定について詳しくは、[帯域幅スロットリング \( \(ページ\) 764\)](#) を参照してください。

### スロットリング方式



次の図は、特定セグメント・タイプの帯域幅スロットリングを構成するための設定を決定するのに役立ちます。



## リレーを使用するスロットリング (A)

### BigFix サーバーからダウンロードするリレー

BigFix リレーは、BigFix サーバーからダウンロードする際に、ファイル・ダウンロードをスロットリングするように構成できます。BigFix リレー・スロットリングが有効になっている場合、リレーは指定されたバイト数/秒以下で BigFix サーバーからダウンロードします。この設定は、サーバーへの接続が低速なリレー (56 kbps モデムで接続されたリモート・ロケーションのリレーなど) には特に有用です。

クライアント・スロットリングは、リレーで `_BESGather_Download_LimitBytesPerSecond` 設定を使用して構成できます。この設定の構成方法については、[設定のリストと詳細な説明 \( \(ページ\) 167\)](#) を参照してください。

### BigFix リレーの送信ダウンロード・トラフィック合計

BigFix バージョン 4.0 以上のリレーは、累積的ファイル・ダウンロードを常にスロットリングするように構成できます。このスロットリング設定が有効になっている場合、リレーはすべてのファイル・ダウンロードについて、指定されたバイト数/秒以下で送信します (クライアントおよび子リレーを含む)。この設定は、ローカル・エリア・ネットワークで、多くのクライアントに同時にパッチが送信される際に、非常に多くの帯域幅が使用されることが懸念される場合に特に有用です。

リレーの累積的ダウンロードのロットリングは、リレーで **\_BESRelay\_HTTPServer\_ThrottleKBPS** 設定を使用して構成できます。この数値を、リレーが結合されたすべてのクライアントに提供する秒当たりのキロバイト数合計に設定します。

## BigFix クライアントを使用するロットリング (B)

### サーバーまたはリレーからファイルをダウンロードするクライアント

BigFix クライアントは、BigFix サーバーまたは BigFix リレーからダウンロードする際に、ファイル・ダウンロードをロットリングするように構成できます。BigFix クライアント・ロットリングが有効になっている場合、クライアントは指定されたバイト数/秒以下でサーバーまたはリレーからダウンロードします。この設定は、低速で接続している個々のコンピューターには特に有用です (移動中の営業担当員やダイヤルアップを使用するホーム・ユーザーなど)。


クライアント・ロットリングは、クライアントで **\_BESClient\_Download\_LimitBytesPerSecond** 設定を使用して構成できます。この設定の構成方法について詳しくは、[設定のリストと詳細な説明 \( \(ページ\) 167\)](#) を参照してください。

## BigFix サーバー/リレーを使用するロットリング (C および D)

### サーバー/リレーの送信ダウンロード・トラフィック合計

サーバーは、累積的ファイル・ダウンロードを常にロットリングするように構成できます。このロットリング設定が有効になっている場合、サーバー/リレーはすべてのファイル・ダウンロードについて、指定されたバイト数/秒以下で送信します (クライアントおよび子リレーを含む)。この設定は、ローカル・エリア・ネットワークで、多くのクライアントに同時にパッチが送信される際に、非常に多くの帯域幅が使用されることが懸念される場合に特に有用です。

BigFix サーバーの累積的ダウンロードのロットリングは、サーバーで **\_BESRelay\_HTTPServer\_ThrottleKBPS** 設定を使用して構成できます。この設定の構成方法について詳しくは、[設定のリストと詳細な説明 \( \(ページ\) 167\)](#) を参照してください。

 **注:** 構成設定への変更を有効にするには、該当する BES ルート・サーバーまたは BES リレー・サービスを再始動する必要があります。

## スロットリング・オプション

BigFix には、異なるコンポーネントが相互にトラフィックをスロットリングする方法を制御する設定が多数あります。スロットリングは常に特定のコンポーネントに対して行われ、中にはスロットリングを使用できないコンポーネントもあります。

### スロットリングされるコンポーネント

スロットリングされるコンポーネントとは、リレー、サーバー、Web レポートの `wwwrootbes` ディレクトリーから直接ダウンロードされるファイルです。アクションのためにダウンロードされるファイル (パッチ、サービス・パックなど) はこの方法でダウンロードされます。Fixlet サイトのコンテンツも、収集インタラクション中にこの方法でダウンロードされます (ただし、サイト・ディレクトリー・リストは別個にダウンロードされます)。

### スロットリングされないコンポーネント

ただし、クライアント登録には多数の「スロットリングに似た」機能があります。生成されるダウンストリーム UDP トラフィックの量をリレー/サーバー側でレート制限したり、クライアント登録の頻度をクライアント側で減らしたり、リレー選択中に生成される ICMP トラフィックの量をクライアント側でレート制限することができます。クライアント登録は帯域幅を多く消費するわけではありませんが、負荷が高くなる可能性があります。ダウンロード要求プラグイン、ステータス・レポート・プラグイン、「Web レポート」プラグインなどです。クライアントにとって、このトラフィックはごくわずかであると予想されます。しかし、ダウンロード・ステータス・レポートのようなものは、コンソールとルート・サーバーの間に多数のトラフィックを発生させ、こうしたトラフィックはスロットリングできません。クライアントがリレーに「サイト X の最新のコンテンツを教えてください」(「GatherActionMV コマンドを受信しました。バージョンの差異を収集しています」と記録されます)と尋ねた場合、この対話はスロットリングされません。リレーの応答は一般に小規模です (0 ~ 40k)。どうしても必要な場合は、クライアントで収集間隔をあけて、この情報の取得頻度を減らすことができますが、このトラフィックはたいていはごくわずかです。

アップストリームへ向かうトラフィックの量を制御するために、「PostResults」インターフェースを使用して実行できることもあります。最も基本的な「スロットリング」メカニズムは、クライアント上で単に最小レポート間隔を大きくするか、ハートビート間隔を

長くすることです。「ResultSizeLimit」および「ResultTimeLimit」リレー設定の組み合わせを使用して、リレーが送信できるトラフィックの量に対して大まかな制限を設定することもできます。ただし、これを行う前にカスタマー・サポートに確認する必要があります。期待する動作が得られる可能性はほとんどありません。結果の送信にはクライアントの登録よりも多くの帯域幅が必要になりますが、それでもコンポーネントのダウンロードやアップロードで使用される帯域幅の量よりはずっと少量です。ほとんどのデプロイメントでは、トラフィックの量はごくわずかです。

## スロットリングの最小転送レート

スロットリングされた通信の間、BigFix クライアントはデータのチャンクを送信した後、必要以上に待機してから、次のチャンクを送信します。BigFix クライアントは、チャンクごとにデータ量と待機時間を変えることができます。チャンク当たりのデータ量を小さくして、チャンク間のデータ量を最大化することで、スロットリングの最小転送レートが設定されます。

実際のスロットリング作業は BigFix リレー・コンポーネントが行うため、BigFix をアップグレードして最小スロットリング・レートを変更する必要がある場合は、BigFix リレーと BigFix クライアントを新しいバージョンにアップグレードすることが重要です。

有効な最小スロットリング・レートは 100 バイト/秒です。

スロットリング設定はすべて BPS (バイト/秒) または KBPS で指定されます。上記の有効な最小値が指定されているため、スロットリング・レートを有効な最小値よりも低く設定しても、その値にはならず、有効な最小値になるだけです。また、有効な最小値は 1 KBPS 未満ですが、KBPS スロットリング設定に設定できる最小値は 1 のみであるため、有効な最小値には到達できません。すなわち、有効な最小レートは、設定によって制御される場合もあれば、クライアントのスロットリング制限によって制御される場合もあります。

チャンク・サイズの指定に使用される設定は、次のとおりです。

`_BESClient_UploadManager_ChunkSize`

値はバイトで指定されます (デフォルト: 131072。これは 128 KB に相当します)。

「0」は、アップロードが 1 つのチャンクで行われることを示します。

このコンピューターとアップストリーム・コンピューターとの間で値の不一致が生じた場合、チャンクのサイズは 2 つのうち小さい方の値に設定されます。

## `_BESRelay_UploadManager_ChunkSize`

値はバイトで指定されます (デフォルト: 131072。これは 128 KB に相当します)。

「0」は、アップロードが1つのチャンクで行われることを示します。

このコンピューターとアップストリーム・コンピューターとの間で値の不一致が生じた場合、チャンクのサイズは2つのうち小さい方の値に設定されます。

## アップロードのロットリング

「アップグレード・マネージャー」によって生成されるアップロードは、クライアント側またはリレー/サーバー側からロットリングできます。このコンポーネントでは、静的スロットリングのみをサポートします。着信接続に対して全体的なロットリングを設定する「PostFile」設定と、発信接続に対してロットリングを設定する「UploadManager」設定があります (1 度に 1 つの発信接続しかありません)。両方とも設定されている場合、子は 2 つの値のうち小さい方を使用する必要があります。

## `_BESRelay_PostFile_ThrottleKBPS`

「0」は「制限なし」を意味します (デフォルト: 0)

この設定は、PostFile スロットリングには不十分で、この設定を機能させるには、クライアントで `_BESClient_UploadManager_ThrottleKBPS` を 0 以外の値に設定する必要があります。制限は 2 つの値のうち小さい方になります。

アップロード・インタラクションの開始時に、PostFilePlugIn はこの数値をリレーで現在進行中のアップロード数合計で割って、結果を子に送信します。子は、結果である制限を順守する必要があります。

サーバーとリレーで同じ設定

## `_BESRelay_UploadManager_ThrottleKBPS`

デフォルト: 0

リレーにのみ関係があります (サーバーにはアップロード先がありません。ただし、DSA はある時点でこれを変更する可能性があります)

リレーがファイルを親にアップロードする際、リレーは自身をこのレートに制限します。インタラクションをチャンクに分割し、チャンクごとに接続を行って、間に待機時間を入

れることで、制限を設定します (これは、インタラクションの間ずっと 1 つの接続を保持するダウンロードのロットリングとは対照的です)。

「0」は「制限なし」を意味します

`_BESClient_UploadManager_ThrottleKBPS`

デフォルト: 0

クライアントにのみ関係があります

クライアントがファイルを親にアップロードする際、クライアントは自身をこのレートに制限します。インタラクションをチャンクに分割し、チャンクごとに接続を行って、間に待機時間を入れることで、制限を設定します (これは、インタラクションの間ずっと 1 つの接続を保持するダウンロードのロットリングとは対照的です)。

「0」は「制限なし」を意味します

「Upload Manager」を使用してエンドポイントからアップロードされるファイルです。

## ダウンロードのロットリング設定の 2 つの主軸

「サーバー側」または「クライアント側」

サーバー側のロットリング (サーバー/リレー/Web レポート) は、接続しているすべての子の中で共有される帯域幅の量として表されます。

クライアント側のロットリング (クライアント/リレー) は、1 つのアップストリーム接続で使用される帯域幅の量として表されます。クライアントが複数の同時アップストリーム接続を使用している場合、クライアントはもっと多くの帯域幅を使用する可能性があります。

静的または動的

サーバー側およびクライアント側のロットリングが有効な場合、BigFix コンポーネントは計算された帯域幅制限のうち低い方の値を使用します。動的および静的ロットリングの両方が有効な場合、静的ロットリング設定の代わりに動的ロットリング設定が使用されます。

サーバー側の静的ロットリングは、BigFix 以外のコンポーネント (Web ブラウザーなど) に影響を与える可能性のある唯一のロットリング・タイプです。

## 静的スロットリング

### サーバー側

サーバー側の静的スロットリング設定では、サーバーが静的スロットリングを使用してクライアントに送信するダウンロード・トラフィックの合計量を制御します。任意の書込み接続に割り当てられる帯域幅の量は、単純に「ThrottleKBPS」設定をアクティブな書込み接続の数で割った値です。プラグイン接続は、「書込み」接続としてカウントされないことに注意してください。ただし、静的または動的スロットリングが有効化されたファイル・ダウンロードは「書込み」接続としてカウントされます。以下の場合を考えます。

- ThrottleKBPS = 500
- 1つのクライアントが動的スロットリングなしで接続されています
- 1つのクライアントが動的スロットリングありで接続されています

この場合、動的スロットリングなしのクライアントには、帯域幅 250 KBPS が割り当てられます。動的スロットリングありのクライアントの帯域幅の使用量は、動的スロットリング・アルゴリズムによって決定されます。250 KBPS をはるかに下回るまたは上回る可能性があるため、サーバーの帯域幅の使用量合計は 500 KBPS であるとは限りません。

注: サーバー側の設定は KBPS 単位です。リレーおよびルート・サーバーの場合:

- `_BESRelay_HTTPServer_ThrottleKBPS`
  - デフォルト: 0
  - 「0」は「制限なし」を意味します
- Web レポートの場合:
  - `_WebReports_HTTPServer_ThrottleKBPS`
  - デフォルト: 0
  - 「0」は「制限なし」を意味します

### クライアント側

クライアント側の静的スロットリングは、次のような単純な設定です。「クライアント」(クライアントまたはリレー)は親に「この速度でファイルを送信してください」と伝え、親はそれに応じます。設定は BPS 単位です。BES クライアントの場合:

- `_BESClient_Download_LimitBytesPerSecond`
  - デフォルト: 0
  - 「0」は「制限なし」を意味します

親からファイルをダウンロードする BES リレーの場合:

- `_BESGather_Download_LimitBytesPerSecond`
  - デフォルト: 0
  - 「0」は「制限なし」を意味します

## スロットリング・グループ

「スロットリング・グループ」は静的スロットリング機能の一部で、スロットリング・グループを使用すると、一連のクライアントは個々にではなくグループとして自身をスロットリングできます (または、サーバー側スロットリングを使用する他の接続とともに)。クライアントが自身を「スロットリング・グループ」の一部であると識別すると、所属するグループの名前を、グループ全体に必要な速度とともに送信します。このため、クライアントは「私は「リモート」グループに属しているので、全体として 10000 BPS が必要です」などと伝えます。サーバーがそのクライアントにデータを送信する際、クライアント・グループの合計接続数に基づいてスロットリングします。従って、「リモート」グループに 5 つのアクティブな接続がある場合、クライアントは 2000 BPS を取得します。異なるクライアントが異なる「limit バイト/秒」値を送信する可能性があるため、別のクライアントが「私は「リモート」グループに属しているので、全体として 5000 BPS が必要です」と伝えて 1000 BPS を提供され、同時に最初のクライアントが 2000 BPS を提供されることもあります。特別なグループ「ipaddress」の場合、サーバーはこの接続を同じ IP アドレスの他の接続とともにグループ化します。これは、リレー・アップストリーム・トラフィックのデフォルトです。クライアントはグループ "" にデフォルト設定されているため、クライアントの「LimitBytesPerSecond」設定は現在アクティブなすべてのファイル・ダウンロードで共有されます。

- `_BESGather_Download_ThrottleGroup` (Windows Server でのみ有効)
  - デフォルト: "ipaddress"
  - 親は、このリレーがここで指定されたグループの一部であると見なします
- `_BESClient_Download_ThrottleGroup`



- デフォルト: 文字列としてのコンピューター ID
- 親は、このクライアントがここで指定されたグループの一部であると見なします
- これは文字列値です。旧バージョンの ClientSettings ドキュメントでは、これが数値であると間違っていると主張されていました。

動的スロットリングはスロットリング・グループの影響を受けません (このことの興味深い副作用として、2つのファイルを同時にダウンロードする場合、使用可能な帯域幅の 20% をターゲットに設定したクライアントは 40% を使用することになります)。

## 動的スロットリング

大規模なダウンロードが使用可能になった時、適用環境内の各リンクに、帯域幅に関する固有の問題が生じることがあります。サーバーからクライアントのリンク、サーバーからリレーへのリンク、およびリレーからクライアントへのリンクについて検討する必要があり、それぞれに個別の調整が必要な場合があります。別のセクションで説明したように、単純にデータ・レートの最大値を設定 (スロットリング) することが可能であり、そのために、順守可能な幅広いポリシーが用意されています。例えば、BigFix クライアントでリレーからのホップ数が 3 を超えている場合は、クライアントを 2 KB/秒にスロットリングすることが考えられます。ただし、最適なデータ転送速度は、現在の階層およびネットワーク環境に応じて、大幅に変わる可能性があります。

より適切な手法は、ネットワーク容量全体を監視して分析する動的な帯域幅スロットリングを使用することです。標準的なスロットリングでは最大データ・レートを指定するだけですが、動的なスロットリングでは「ビジー時間」の比率が加わります。これは、帯域幅のうち、ネットワークがビジーであるときに割り振る部分の割合です。例えば、ネットワーク・トラフィックの存在が検出された場合に、ダウンロードに使用される帯域幅を使用可能な帯域幅の 10% 以下に抑えるように指定できます。動的なスロットリングでは、ビジー率が低すぎて実際的でない場合のために、最小データ・レートも指定します。

任意のリンクに対して動的スロットリングを有効にすると、現在のデータ・スループットが監視され、分析されて、適切なデータ・レートが設定されます。競合するトラフィックが存在しない場合は、スループットが最大レートに設定されます。トラフィックが存在する場合は、指定したパーセンテージまたは最小レートのどちらか高い方までデータ・レートがスロットリングされます。動的スロットリングを正しく機能させるには、サーバー側とクライアント側の両方で動的スロットリングを有効にする必要があります。

動的な帯域幅スロットリングは、コンピューター設定で制御します。リンクごとに、以下の4つの基本的な設定があります。

### **DynamicThrottleEnabled**

この設定のデフォルトはゼロ (無効) です。その他の任意の値の場合、指定されたリンクの動的スロットリングが有効になります。

### **DynamicThrottleMax**

この設定は、通常、デフォルトでは最大の符号なし整数値になります。これはフルスロットルを示します。リンクによっては、この値に、最大データ転送速度 (1 秒あたりのビット数または K ビット数) が設定されます。

### **DynamicThrottleMin**

この設定のデフォルトはゼロです。リンクに応じて、この値に、最小データ転送速度 (1 秒あたりのビット数または K ビット数) が設定されます。この値は、以下に示すパーセンテージ・レートの下限を設定します。

### **DynamicThrottlePercentage**

この設定は、デフォルトでは 100% です。100% は、通常の (動的ではない) スロットリングと同じ効果があります。これは、最大帯域幅のうち、ネットワークがビジーであるときに使用する部分の割合です。通常は、5% から 10% の値が使用され、既存のネットワーク・トラフィックよりも優先されることがないようにします。(この設定にゼロを使用すると、100% と同じことになります。)

動的帯域幅設定は、他の設定と同じように作成または編集することができます。つまり、任意のコンピューター・リストで項目 (または項目のグループ) を右クリックし、コンテキスト・メニューから「**コンピューターの設定を編集**」を選択します。

具体的な変数名には以下のものがあります。

### **BigFix のサーバー設定とリレー設定:**

```
_BESRelay_HTTPServer_DynamicThrottleEnabled  
_BESRelay_HTTPServer_DynamicThrottleMaxKBPS
```

```
_BESRelay_HTTPServer_DynamicThrottleMinKBPS
_BESRelay_HTTPServer_DynamicThrottlePercentage
```

### BigFix クライアントの設定:

```
_BESClient_Download_DynamicThrottleEnabled
_BESClient_Download_DynamicThrottleMaxBytesPerSecond
_BESClient_Download_DynamicThrottleMinBytesPerSecond
_BESClient_Download_DynamicThrottlePercentage
```

### 一括設定:

```
_BESGather_Download_DynamicThrottleEnabled
_BESGather_Download_DynamicThrottleMaxBytesPerSecond
_BESGather_Download_DynamicThrottleMinBytesPerSecond
_BESGather_Download_DynamicThrottlePercentage
```

**注:** 上記の設定を有効にするには、影響を受けるサービス (サーバー、リレー、またはクライアント) を再起動する必要があります。

サーバーとそれに接続されたクライアントに、異なる最大値と最小値を設定した場合、接続において、2つの値のうち小さい値が選択されます。

## ダウンロードの管理

BigFix では、ダウンロードを効率的に行うため、および使用可能な帯域幅を最大限活用するために、複数の手法が使用されます。その他の手法のうち、キャッシングがサーバー、リレー、およびクライアントを含むすべての BigFix 要素で幅広く使用されます。

クライアント上のアクションによって [download](#) ファイル・コマンドが実行されると、クライアントのローカル・キャッシュで最初にファイルの存在がチェックされます。クライアントは、ローカルでファイルを検出できない場合、その親 (通常はリレー) にファイルを要求します。次に、リレーがリレー自体のキャッシュをチェックします。リレーは、ファ

イルを検出すると、要求したクライアントにそのファイルを直ちに送信します。検出できなかった場合、その親に要求を渡します。親は別のリレーである場合があり、このプロセスがこの後も続けられます。最終的に、サーバーが内部サーバーまたはインターネットからファイルを取得し、それをキャッシュし、逆の経路でそのファイルを渡します。経路上にある各リレーは、ファイルを受信した後、それをキャッシュし、ファイルの転送を続行し、元のクライアントに届けます。元のクライアントもそのファイルをキャッシュします。

アクションの実行中にエージェントが [download now](#) コマンドを実行すると、アクション・スクリプトに指定された URL からファイルが要求されて収集されます。

各キャッシュでは、スペース不足になるまで、ファイルが保持されます。スペース不足になった時点で、スペースを確保するために、最も長い期間使用されていない (LRU) ファイルがキャッシュから消去されます。BES サポート・サイトから使用できる「**分析 ID# 227 BES リレーのキャッシュ情報 (Analysis ID# 227 BES Relay Cache Information)**」をアクティブにすることで、リレーのキャッシュ・サイズなどのリレー情報を表示できます。デフォルトのキャッシュ・サイズは 1 GB ですが、BES サポート・サイトで「**タスク ID# 148 BES リレー/サーバー設定: ダウンロード・キャッシュ・サイズ (Task ID# 148 BES Relay/Server Setting: Download Cache Size)**」を使用してこのサイズを変更することができます。

ファイルを手動でダウンロードし、キャッシュする必要がある場合があります。これは主にファイルが公開されていない場合です。この場合、ファイルをソースから直接ダウンロードする必要があります。具体的な手動キャッシュ要件については、「**Fixlet の説明 (Fixlet Description)**」タブを参照してください。ファイルをダウンロード・キャッシュの場所 [\\_\\_Download](#) にコピーすることで、ダウンロード・キャッシュを事前に作成できます。これらのファイルを手動で削除することもできます。

キャッシュは、プログラム・フォルダーのサブフォルダーとして格納されます。プログラム・フォルダーは、デフォルトでは %PROGRAM FILES%\BigFix Enterprise (Windows システムの場合)、および /var/opt/BES Server (Linux システムの場合) に作成されます。サーバーのダウンロード・キャッシュは BES Server\wwwrootbes\bfmirror\downloads\sha1 で、クライアントのダウンロード・キャッシュは BES Client\\_\_BESData\\_\_Global\\_\_Cache\Downloads にあります。

ダウンロード・キャッシュに加えて、リレーは、各アクションに必要なすべてのファイルを格納するアクション・キャッシュ (これも 1 GB) を保持し、クライアントは、ユーティリティ・キャッシュを保持します。

帯域幅やダウンロードなど、リレーのトラブルシューティングについて詳しくは、「[Relay Health](#)」を参照してください。

クライアントは、以下のいずれかの方法でアクション・スクリプトにリストされた URL からファイルを要求してそのファイルを収集します。

- アクション・スクリプトを解析してダウンロード一式を計算できる場合は、サーバーによってダウンロード一式が計算されます。特定のアクションに対してプリフェッチ・ダウンロードを入手できる場合は、エージェントが単一の要求でリレーを要求できます。この要求では、エージェントがアクション ID を送信し、サーバー応答によって全ファイルが入手可能かそうでないかが示されます。ファイルがすべて入手可能である場合は、エージェントがファイルをその序数 (1 はスクリプト内の 1 番目のファイルを示し、2 はスクリプト内の 2 番目のファイルを示します) で要求する処理を開始します。ファイルが入手不可能である場合は、リレーがそのことをエージェントに通知し、ファイルをフェッチするプロセスを開始します。エージェントは、ダウンロードが入手可能になるのを待つことを通知し、そのアクションに対して 10 分間ダウンロード待ちの状態となります。10 分が経過してその特定のアクションに対してダウンロードが入手可能になった場合は、エージェントが再びリレーに要求します。

リレー上でアクションに対してダウンロードが入手可能になると、リレーの子に通知が送信され、その通知を使用してダウンロードの要求が加速されます。何らかの理由で通知メッセージがブロックされた場合は、エージェントによる 10 分間の「リレーへの再要求」動作によって最終的にダウンロードが入手可能であることが検出され、その収集が開始されます。アクション ID に基づいたダウンロード、および序数が入手可能になると、子リレーも親から通知を受けます。子リレーは、この通知を使用して再びダウンロードの要求を加速します。

- アクション・スクリプトにリストされているダウンロードの URL、サイズ、およびハッシュ値をエージェントだけが計算できるようになっているダウンロードの場合は、エージェントが、入手可能なダウンロードを項目化した要求を使用して親リレーに照会を行います。この要求には、特定のエージェントが必要とするダウンロード

項目のリストが含まれています。リレーとクライアントは、上述したとおりに動作して、後続の要求を遅らせて通知を待ちます。

## ダウンロードの再開

接続の問題が原因でダウンロードが失敗した場合、ダウンロード・プロセスは次のように再開されます。

- クライアントが BigFix のリレーまたはサーバーからダウンロードしている場合、10,000 バイトのチャンクでダウンロードを再開できます。つまり、クライアント・プロセスは、再開されると、既に受信している 10,000 バイトのブロックを検査して、検査した最後のブロックの後からダウンロードを再開します。
- クライアントが別のサーバーの URL からの直接ダウンロードを実行している場合、クライアント・プロセスの再開時に、ダウンロードは最初から開始されます。

## データの事前キャッシュの有効化

アクションの実行のためにダウンロードするデータがクライアント上で事前キャッシュされる必要があるかどうかとその方法を、クライアントごとに指定できます。

クライアント上でのアクションの実行のために要求されるデータのダウンロードを開始するタイミングとして、以下のいずれかを選択できます。

### すべての制約が満たされた後。

この場合、すべての制約が満たされた後、*pre-fetch* 領域にデータがすべてダウンロードされるまで、アクションの実行は開始されません。この場合、データのダウンロードが制約自体になります。*pre-fetch* 領域へのデータのダウンロードが完了した時点で、アクションのすべての制約が満たされ、データが *\_\_Download* 領域に移動し、アクションの実行が可能になります。リスクとしては、ダウンロードの時間が予想以上に長くなる可能性があり、最悪の場合、アクションの実行タイム・ウィンドウがデータのダウンロードが完了する前に経過し、アクションの実行が妨げられる可能性があることが挙げられます。

### すべての制約が満たされる前。

この場合、アクションがクライアントに関連付けられるとすぐに、####などの制約がすべて評価されないうちにデータのダウンロードが開始されます。データは、クライアント・ディスクの *pre-cache* 領域にダウンロードされます。すべての制約が満たされた時点で、ダウンロードされたデータが *pre-cache* 領域から *pre-fetch* 領域に移動します。アクションの開始準備が整った時点で、データが *\_\_Download* 領域に移動し、アクションの実行が開始されます。

このため、アクションを早く開始できます。ユーザーに表示されるオファーマの場合には、オファーを受け入れた後、オファーがダウンロードされるのをユーザーが待機する時間が短縮されます。

この場合の潜在的なリスクとして、ディスク容量の不足が原因となってアクションのデッドロックが発生する可能性が挙げられます。また、クライアント・システムにアクション・グループのダウンロードすべてを同時に配置することがディスク容量構成で許可されていないために、グループ・アクションを実行した場合、そのグループがまったく開始されないということも起きえます。


BigFix V9.5.10 以降では、クライアント設定

#### **`_BESClient_Download_PreCacheStageContinueWhenDiskLimited`**

を使用することにより、このリスクがグループ・アクションの処理に影響を及ぼすのを防ぐことができます

す。**`_BESClient_Download_PreCacheStageContinueWhenDiskLimited=1`**

を設定すると、ダウンロードを必要とする最初のサブアクションがそのサブアクションのためのダウンロードをすべて収集できる限り、そのクライアントでは他のすべての制約が満たされていると想定してグループ・アクションを開始できます。また、ディスク容量要件 (**DiskLimited** 制約または **DiskFreeLimited** 制約) が原因となって、すべてのサブアクションのために事前キャッシュされたダウンロードがシステム上で同時に使用できない場合でも、アクション処理を続行できます。

 **注:** この設定はシングル・アクション処理には影響を及ぼしません。つまり、その特定のアクションに必要なダウンロードを保持するだけの十分な

ディスク容量がないことが原因で引き続きシングル・アクションまたはサブアクションの実行が制約とブロックの対象になる可能性があります。

BigFix Client のデフォルトの設定

は、`_BESClient_Download_PreCacheStageContinueWhenDiskLimited=0` です。これは、グループ・アクションを開始できるのはすべてのサブアクション・ダウンロードがシステム上で同時に使用可能になった後ということです。

## 動的ダウンロードのホワイトリスト

動的ダウンロードにより、関連句を使用して URL を指定する機能が追加され、アクション・スクリプトの柔軟性が高まります。

静的ダウンロードの場合と同様に、動的ダウンロードでも、サイズまたは sha1 の確認を含むファイルを指定する必要があります。ただし、URL、サイズ、および sha1 は、アクション・スクリプトの外部にあるソースから取得されたものであってもかまいません。この外部ソースは、変動する新規ダウンロードのリストを含むマニフェストである場合があります。この手法により、アンチウィルスまたはセキュリティー・モニターなどの、短時間で変更されるファイルや、スケジュールに従って変更されるファイルにアクセスしやすくなります。

このような柔軟性があるため、十分な注意が必要になります。どのクライアントでも動的ダウンロードを使用してファイルを要求することができるため、無差別にファイルをホストするために自分のサーバーを他の人が使用する機会を与えることになります。これを回避するために、動的ダウンロードではホワイトリストを使用します。URL (アクション・スクリプト内のリテラル URL を使用して明示的に認可されたものではない) からのダウンロード要求はすべて、以下のファイルに含まれている URL のホワイトリストで指定された基準のいずれかを満たす必要があります。

### Windows システムの場合:

```
<Server Install Path>\Mirror Server\Config  
\DownloadWhitelist.txt
```

### Linux システムの場合:



```
<Server Install Path>/Mirror Server/config/  
DownloadWhitelist.txt
```

このファイルには、Perl regex 形式を使用した正規表現のリストが改行で区切られて記述されています。例えば次のようになります。

```
http://.*\.site-a\.com/.  
http://software\.site-b\.com/.  
http://download\.site-c\.com/patches/JustThisOneFile\.qfx
```

最初の行は最も制限が緩く、site-a ドメイン全体のすべてのファイルのダウンロードを許可します。2行目では、特定のドメイン・ホストを要求しており、3行目では最も制限が厳しく、URL を「JustThisOneFile.qfx」という名前の 1 つのファイルに制限しています。要求された URL がホワイトリスト内の項目に一致しなかった場合、ダウンロードは直ちに失敗となります。失敗のステータスは NotAvailable です。合格しなかった URL を含む注記が、リレー・ログに書き込まれます。ホワイトリストが空であるか、存在しない場合、すべての動的ダウンロードは失敗します。「.\*」(ドットとアスタリスク) というホワイトリスト項目があると、どの URL でもダウンロードできます。

## カスタム・クライアント・ダッシュボードの作成

コンソール内のダッシュボードに類似したカスタム・クライアント・ダッシュボードを作成できます。ダッシュボードは、ローカル・コンピューターを分析し、現在の結果を表示することができる埋め込み関連句を含む HTML ファイルです。ダッシュボードを持つクライアントには、結果のレポートを表示する追加のタブがあります。ダッシュボード・グローバル変数は、許可にかかわらず、他のオペレーターが所有するカスタム・ダッシュボードからアクセスできます。

クライアント・ダッシュボードを作成するには、\_\_BESData フォルダー内に \_\_UISupport (先頭の下線に注意してください) という名前の新規フォルダーを作成する必要があります。これは、クライアント・フォルダーのサブフォルダーであるため、最終的なパス名は次のようになります。

**Program Files/BigFix Enterprise/BES Client/\_\_BESData/\_\_UISupport**

このフォルダーに、ダッシュボード・ファイル (`_dashboard.html`) と付随するグラフィック・ファイルを置きます。次にクライアントを起動すると、クライアントはこれらのファイルをインターフェースに取り込んで「**ダッシュボード**」タブに追加します。このタブをクリックすると、ダッシュボードは各関連句の最新の値を計算し、それを表示します。

カスタム・ダッシュボードに対するそれ以上の変更は `_UISupport` フォルダーで行い、クライアント・コンピューターを再起動することによってプロモートする必要があります。

関連文は、次の形式を使用して、HTML で特殊なタグ内に埋め込まれます。

```
<?relevance statement ?>
```

例えば、時刻を見つけて表示するには、次のようにします。

```
<?relevance now ?>
```

クライアントは、この文を含むページを表示するとき、関連句「`now`」を評価し、タグの値を置き換えます。次のサンプル HTML では、「Date」という単語を表示し、次に現在の日時を表示します。

```
<html>
  <body>
    Date: <?relevance now ?>
  </body>
</html>
```

関連度の評価を更新するには、次の行をファイルに追加します。

```
<html>
  <body>
    Date: <?relevance now ?>
    <A href="cid:load?page=_dashboard.html"> Refresh </A>
  </body>
</html>
```

この「**Refresh**」というリンクによって、ページが再読み込みされます。ページが再読み込みされると、関連句が再評価されます。他の関連式をこのページに追加する方法は、簡単に分かります。

例えば、オペレーティング・システムおよびコンピューター名を表示するには、以下の2行を追加します。

```
<html>
  <body>
    Date: <?relevance now ?>
    Operating System: <?relevance name of operating system ?>
    Computer Name: <?relevance computer name ?>
    <A href="cid:load?page=_dashboard.html"> Refresh </A>
  </body>
</html>
```

スタイル・シートを使用して、出力のフォーマットを設定できます。プリセット・フォーマット用の、デフォルトのスタイル・シートである **offer.css** を使用できます。以下の例のダッシュボードは、タイトル、ヘッダー、更新リンク、および取得プロパティ値のセクションで構成されます。

```
<html>
  <head>
    <link type="text/css" rel="stylesheet" href="offer.css"></link>
    <title>BigFix Dashboard Example</title>
  </head>
  <body>

    <div class="header">
      <div class="headerTitle">
        <font size="6"><?relevance computer name ?></font>
      </div>
      <div class="headerCategory">
        <font size="1">(Last updated: <?relevance now ?>)</font><BR>
```

```
<div><font size="1">
  <a href="cid:load?page=_dashboard.html">Refresh</a></font>
</div>
</div>
</div>

<div class="section">
  <div class="sectionHeader">Computer Information</div>
  <div class="subsection">
    <table>
      <tr>
        <td valign="top">OS: </td>
        <td><?relevance operating system ?></td>
      </tr>
      <tr>
        <td valign="top">RAM: </td>
        <td><?relevance (size of ram)/1048576 ?> MB</td>
      </tr>
      <tr>
        <td valign="top">DNS Name: </td>
        <td><?relevance dns name ?></td>
      </tr>
    </table>
  </div>
</div>
</body>
</html>
```

offer.css が正しく機能するには、以下のグラフィックス・ファイルが、クライアント・ディレクトリーから \_UISupport ディレクトリーにコピーされなければなりません。

```
bodyBg.jpg,
bodyHeaderBg.jpg
```

```
bullet.gif  
sectionHeaderBG.gif
```

クライアントから実行された場合、このダッシュボードは以下の出力を生成します。

関連式についてさらに調べるには、「Relevance Language リファレンス」を参照してください。

## クライアントの地理的位置指定

クライアントは、多くの場合リモート・オフィスでインストールされるため、クライアントにその位置をレポートさせるプロパティを作成すると役立ちます。「**ロケーション・プロパティ・ウィザード**」を使用して、BigFix 内でロケーション・プロパティを作成できます。

1. コンソールで、「**BigFix 管理**」ドメインに移動し、「**コンピューター管理**」をクリックし、次に「**ロケーション・プロパティ・ウィザード**」をクリックします。ウィザード文書が開きます。
2. ウィザードは、クライアントが自身のサブネット、IP 範囲、またはその他の情報に基づいて自身を識別できるようにする名前付きプロパティを作成します。ウィザードの指示を読んで、プロパティを作成します。

## クライアントのロック

ネットワーク内の任意の BigFix クライアントのロック状態を変更することができます。これにより、Fixlet アクションの実行対象から、特定のコンピューターまたはコンピューター・グループを除外することができます。これは、例えば、特定の開発用コンピューターを変更または更新から除外したい場合に役立ちます。また、限られた一連のロック解除されたコンピューターで新規 Fixlet アクションをテストし、ネットワークの残りの部分はロックされたままにするための強力な手法を提供します。クライアント・コンピューターは、(明示的にロック解除されるまで) 永続的にロックすることも、定義した期間だけロックすることもできます。

アクションを送信することにより、クライアントのロック状態に変更を加えます。結果として、コンソール・オペレーターは、どのコンピューターをロックまたはロック解除する場合も、正しい認証を提供する必要があります。クライアントがロックされている場合でも、クロックの変更アクション、ロック解除アクション、BES サポート・サイトからのアクションなど、一部のアクションについては、引き続き、クライアントで受け入れることができます。

コンピューターをロックまたはロック解除するには、以下の手順に従います。

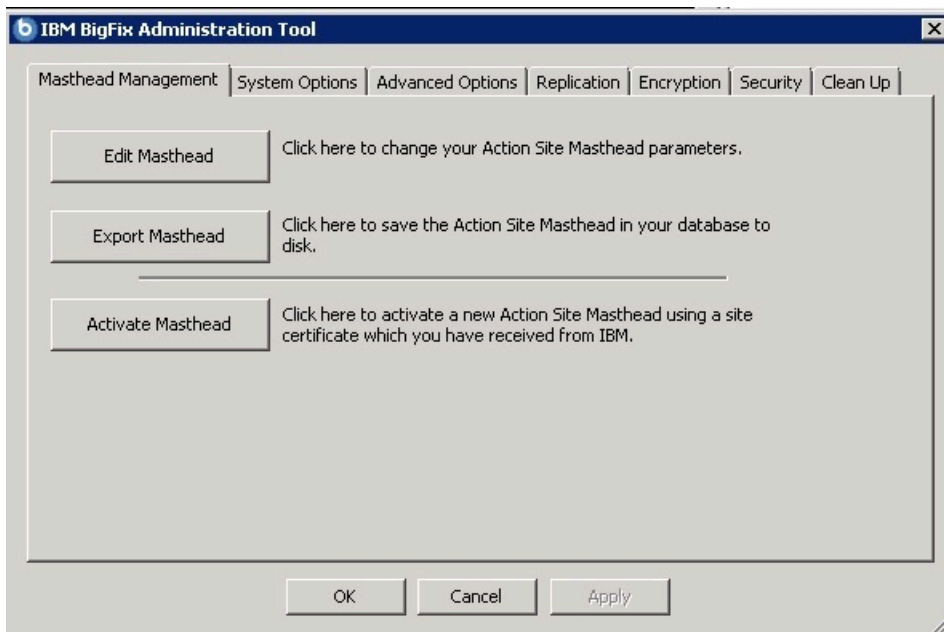
1. ドメイン・パネルのナビゲーション・ツリーで「**コンピューター**」アイコンをクリックして、ネットワーク接続された BigFix クライアント・コンピューターのリスト・パネルを表示します。
2. ロックするコンピューターを選択します。
3. 右クリックし、ポップアップ・メニューから「**コンピューターの設定を編集**」を選択します (または「**編集**」メニューから「**コンピューターの設定を編集**」を選択します)。「設定の編集」ダイアログが開きます。
4. チェック・ボックスをクリックして、コンピューターをロックまたはロック解除します。

コンソールでは、ロックに有効期限を設定するための明示的なインターフェースは用意されていませんが、この操作を実行するカスタム・アクションを作成できます。詳しくは、[BigFixDeveloper サイト](#) を参照してください。

## Windows システムでのマストヘッドの編集

「**BigFix 管理 ツール**」を使用して、マストヘッドに格納されているデフォルト・パラメーターを変更できます。

1. 「**スタート**」 > 「**すべてのプログラム**」 > 「**BigFix**」 > 「**BigFix 管理ツール**」を選択してプログラムを起動します。
2. 秘密鍵 (`license.pvk`) を参照し、「**OK**」をクリックします。
3. 「**マストヘッドの管理**」タブを選択し、「**マストヘッドの編集**」をクリックします。



4. デジタル署名を確認するために使用される公開鍵とともに構成およびライセンスの情報が含まれる、マストヘッド・ファイルのパラメーターを入力します。このファイルは資格情報フォルダーに保存されます。

Advanced Masthead Parameters

The default values for these parameters should be suitable for most IBM BigFix deployments. For further information about the implications of these parameters, please contact a IBM BigFix support technician.

Server Port Number:

Gathering Interval:

Initial Action Lock:   minutes

Action Lock Controller:

Exempt the following site URL from action locking:

Last fallback Relay for all clients (replacing Root Server)

Require use of FIPS 140-2 compliant cryptography.

Allow use of Unicode filenames in archives.

以下のオプションを編集できます。

#### **サーバーのポート番号:**

通常、この番号は変更する必要はありません。52311 が推奨ポート番号ですが、異なるポートの方が特定のネットワークでの利便性が高い場合は、異なるポートを選択できます。通常、ポートは、IANA が管理するプライベート・ポートの範囲 (49152 から 65535) から選択します。予約済みのポート番号 (ポート 1 から 1024) を使用できますが、トラフィックを正常にモニターする機能または制限する機能が低下する可能性があります。特定のアプリケーションについてポート番号を使用できなくなります。BigFix が正しく動作しないおそれがあるため、クライアントをインストールしてマストヘッドを作成した ##サーバーのポート番号を変更しないでください。追加情報については、ポート番号の変更 (#####) を参照してください。次のセクションの

#### **収集間隔:**

このオプションは、サーバーからの通知がない状態でクライアントが待機する時間を決定します。この時間が経過すると、クライアントは、新規コンテンツが使用可能であるかどうかを確認します。一般にサーバーは、新規コンテンツを収集するたびに、UDP 接続を通じて新規コンテンツが提供されていることをクライアントに通知することを試み、この遅延を回避します。ただし、UDP がファイアウォールによってブロックされているか、またはネットワーク・アドレス変換 (NAT) によってサーバーの観点からクライアントの IP アドレスが再マップされる状況では、クライアントからタイムリーに応答を得るためには、間隔を短くすることが必要になります。収集レートが高くても、差分のみが収集されるため、サーバーのパフォーマンスへの影響はほんのわずかです。クライアントは、既に保有する情報は収集しません。

#### **初期アクション・ロック:**

インストール後にクライアントが自動的にロックされるようにする場合、すべてのクライアントの初期ロック状態を指定します。ロックされたクライアントは、どの Fixlet メッセージがそのクライアントの適用対




象であるかをレポートしますが、アクションを適用しません。デフォルトでは、クライアントがロックされないままにして、後から特定のクライアントをロックします。ただし、新規にインストールされたクライアントを制御しやすくするため、最初からクライアントをロックした状態にしておき、その後個別にロック解除したい場合もあります。あるいは、一定の期間 (分単位) だけ、クライアントがロックされるように設定することもできます。

#### アクション・ロック・コントローラー:

このパラメーターによって、誰がアクション・ロック状態を変更できるかが決まります。デフォルトは「**コンソール**」です。これは、管理権限を持つすべてのコンソール・オペレーターに、ネットワーク内の任意のクライアントのロック状態を変更することを許可します。ロックの制御をエンド・ユーザーに委任したい場合は、「**クライアント**」を選択できますが、これは推奨されません。

#### アクションのロックから次のサイト URL を除外する:

まれに、特定の URL を、すべてのアクション・ロックから除外することが必要な場合があります。このボックスにチェック・マークを付け、除外する URL を入力します。指定できるサイト URL は 1 つのみであり、先頭を `http://` にする必要があります。

 **注:** ベースライン・コンポーネントは、別のサイトから取得可能であるため、アクション・ロックから除外されません。


#### すべてのクライアントに対する最近のフォールバック・リレー (ルート・サーバーに置き換え)

クライアントが設定内で指定したいいずれのリレーにも接続していない場合は、クライアントにフォールバック・リレーを定義する必要が生じることがあります。このチェック・ボックスを選択して、お使いの環境のフォールバック・リレーを次のいずれかのフォーマットに指定します。

- ホスト名。例えば、*myhostname*。
- 完全修飾ドメイン名 (FQDN)。例えば、*myhostname.mydomain.com*。

- IP アドレス。例えば、10.10.10.10。

このチェック・ボックスをオフにしてフォールバック・リレーを定義する場合は、ご自身の環境にあるルート・サーバーが使用されます。

 **注:** フォールバック・リレーを指定する前に、ルート・サーバーに直接レポートするすべてのクライアントまたはリレーにリレーと定義されたルート・サーバーがあることを確認します。


### FIPS 140-2 に準拠した暗号を使用する必要がある

ネットワークを連邦情報処理標準に準拠させるには、このボックスにチェック・マークを付けます。これにより、すべての BigFix コンポーネントが FIPS モードへの移行を試みるように、マストヘッドが変更されます。デフォルトでは、クライアントは、正しく FIPS モードに入ることができない場合、非 FIPS モードのままとなります。これは、特定のレガシー・オペレーティング・システムでは問題となる場合があります。このボックスにチェック・マークを付けると、クライアントの起動時間が 2 秒から 3 秒ほど長くなる可能性があります。

### アーカイブでの Unicode ファイル名の使用を許可する (Allow use of Unicode filenames in archives)

この設定は、BigFix アーカイブでファイル名を書き込む際に使用されるコード・ページを指定します。ファイル名を UTF-8 コード・ページで書き込むには、このボックスにチェック・マークを付けます。

ローカル適用環境のコード・ページ (例えば、Windows-1252 や Shift JIS) を使用してファイル名を書き込む場合は、このボックスにチェック・マークを付けないでください。BigFix V9.5 のフレッシュ・インストールを実行する場合、デフォルトでは、ファイル名は UTF-8 で書き込まれます。

 **注:** BigFix 環境を V9.5 にアップグレードすると、ファイル名はデフォルトでローカル・デプロイメントのコード・ページで書き込まれます。

5. 「OK」 をクリックして、変更を入力します。

**注:** マストヘッドの変更は、既にデプロイされたクライアントには影響しません  
が、管理ツール(「マストヘッドの管理」タブ)を使用してマストヘッドをエクスポートし、BigFix サーバーの BES Installers ディレクトリー (デフォルト・ディレクトリー:) 内のマストヘッドを置き換えることができます。 <drive>:\Program Files\BigFix Enterprise\BES Installers これにより、新規にデプロイされた、あるいはインストールされたクライアントがこれらの変更を使用するようになります。

## Linux システムでのマストヘッドの編集

マストヘッドを変更するには、スーパーユーザーとして以下のコマンドを実行します。

```
./BESAdmin.sh -editmasthead -sitePvkLocation=<path+license.pvk>
[ -sitePvkPassword=<password> ]
[ -display ] [ -advGatherSchedule=<0-10> ] [ -advController=<0-2> ]
[ -advInitialLockState=<0|2> | -advInitialLockState=1 -
advInitialLockDuration=<num> ]
[ -advActionLockExemptionURL=<url> ] [ -
advRequireFIPSCompliantCrypto=<true|false> ]
[ -advEnableFallbackRelay=0 | -advEnableFallbackRelay=1
-advFallbackRelay=<host> ]
```

各部の意味は以下のとおりです。

**-sitePvkLocation=<path+license.pvk>**

秘密鍵ファイル (*filename.pvk*) を指定します。管理ツールを実行するには、この秘密鍵ファイルとそのパスワードが必要です。サイト・レベルの署名鍵へのアクセス権およびパスワードを持つユーザーのみが、新規 BigFix オペレーターを作成できます。

**注:** コマンド構文で使用される表記 <path+license.pvk> は、 *path\_to\_license\_file/license.pvk* を表します。

**-sitePvkPassword=<password>**

秘密鍵ファイル (*filename.pvk*) に関連付けられたパスワードを指定します。この設定はオプションです。省略した場合は、コマンドを実行したときに対話式にパスワードの指定を求められます。

#### **-display**

マストヘッドの現行設定値を表示します。

#### **-advGatherSchedule (optional, integer)**

新規コンテンツが使用可能であるかどうかを確認する前に、サーバーからの通知なしでクライアントが待機する時間を決定します。一般にサーバーは、新規コンテンツを収集するたびに、UDP 接続を通じて新規コンテンツが提供されていることをクライアントに通知することを試み、この遅延を回避します。ただし、UDP がファイアウォールによってブロックされているか、またはネットワーク・アドレス変換 (NAT) によってサーバーの観点からクライアントの IP アドレスが再マップされる状況では、クライアントからタイムリーに応答を得るためには、間隔を短くすることが必要になります。収集レートが高くても、差分のみが収集されるため、サーバーのパフォーマンスへの影響はほんのわずかです。クライアントは、既に保有する情報は収集しません。有効な値は、以下のとおりです。

```
0=Fifteen Minutes,  
1=Half Hour, 2=Hour,  
3=Eight Hours,  
4=Half day,  
5=Day,  
6=Two Days,  
7=Week,  
8=Two Weeks,  
9=Month,  
10=Two Months
```

#### **-advController (optional, integer)**

誰がアクション・ロック状態を変更できるかを決定します。デフォルトは「コンソール」です。これは、管理権限を持つすべてのコンソール・オペ

レーターに、ネットワーク内の任意のクライアントのロック状態を変更することを許可します。ロックの制御をユーザーに委任したい場合は、「**クライアント**」を選択できますが、これは推奨されません。有効な値は、以下のとおりです。

```
0=console,
1=client,
2=nobody
```

**-advInitialLockState (optional, integer)**

すべてのクライアントの初期ロック状態を指定します。ロックされたクライアントは、どの Fixlet メッセージがそのクライアントの適用対象であるかをレポートしますが、アクションを適用しません。デフォルトでは、クライアントがロックされないままにして、後から特定のクライアントをロックします。ただし、新規にインストールされたクライアントを制御しやすくするため、最初からクライアントをロックした状態にしておき、その後個別にロック解除したい場合もあります。あるいは、一定の期間だけ、それらがロックされるように設定することもできます。有効な値は、以下のとおりです。


```
0=Locked,
1=timed (specify duration),
2=Unlocked
```

**-advInitialLockDuration (optional, integer)**

クライアントをロックしなければならない期間を秒単位で定義します。


**-advActionLockExemptionURL (optional, string)**

まれに、特定の URL を、すべてのアクション・ロックから除外することが必要な場合があります。このボックスにチェック・マークを付け、除外する URL を入力します。

 **注:** 指定できるサイト URL は 1 つのみであり、先頭を `http://` にする必要があります。

**-advRequireFIPSCompliantCrypto (optional, boolean)**

連邦情報処理標準をネットワークに実装します。これにより、すべての BigFix コンポーネントが FIPS モードへの移行を試みるように、マストヘッドが変更されます。デフォルトでは、クライアントは、正しく FIPS モードに入ることができない場合、非 FIPS モードのままとなります。これは、特定のレガシー・オペレーティング・システムでは問題となる場合があります。このボックスにチェック・マークを付けると、クライアントの起動時間が 2 秒から 3 秒ほど長くなる可能性があります。

 **注:** FIPS モードを有効にすると、プロキシへの接続時に一部の認証方式が使用できなくなります。インターネットへのアクセスや BigFix サブコンポーネントとの通信にプロキシを使用することを選択した場合は、プロキシ構成が `digest`、`negotiate` または `ntlm` 以外の認証方式を使用するようにセットアップされていることを確認してください。


#### `-advEnableFallbackRelay (optional, boolean)`

クライアントが設定内で指定したいいずれのリレーにも接続していない場合は、クライアントに対するフォールバック・リレーを有効または無効にします。フォールバック・リレーを定義しないと、環境内のルート・サーバーが使用されます。

#### `-advFallbackRelay (optional, string)`

環境内のフォールバック・リレーのホスト名を次のいずれかのフォーマットに指定します。

- ホスト名。例えば、`myhostname`。
- 完全修飾ドメイン名 (FQDN)。例えば、`myhostname.mydomain.com`。
- IP アドレス。例えば、`10.10.10.10`。

 **注:** フォールバック・リレーを指定する前に、ルート・サーバーに直接レポートするすべてのクライアントまたはリレーにリレーと定義されたルート・サーバーがあることを確認します。

## サーバーのパスワードの難読化

サーバーのパスワードを難読化されたパスワードに置き換えることができます。そのためには、置き換える元のパスワードのタイプと新規パスワードを指定します。

パスワードは難読化され、Windows システムの場合はレジストリーに保管され、Linux システムの場合は構成ファイルに保管されます。

サーバーのパスワードを難読化するには以下のコマンドを実行します。

### Windows システムの場合:

```
BESAdmin.exe /updatepassword /type:<type> [ /  
password:<password> ]  
/sitePvkFile:<path+license.pvk> [ /sitePassword:<pvk_password> ]
```

各部の意味は以下のとおりです。

**type:<type>**

以下のパスワードのタイプのいずれかを指定します。

#### **server\_db**

難読化されて更新および記録されるパスワードは、サーバー・データベースとの接続に関連しています。

#### **dsa\_db**


難読化されて更新および記録されるパスワードは、DSA データベースとの接続に関連しています。

**password:<password>**

難読化されてから記録されるパスワードを指定します。

**sitePvkFile:<path+license.pvk>**

秘密鍵ファイル (*filename.pvk*) を指定します。管理ツールを実行するには、この秘密鍵ファイルとそのパスワードが必要です。サイト・レベルの署名鍵へのアクセス権およびパスワードを持つユーザーのみが、新規 BigFix オペレーターを作成できます。

 **注:** コマンド構文で使用される表記 `<path+license.pvk>` は、`path_to_license_file\license.pvk` を表します。

`sitePassword=<password>`

秘密鍵ファイル (`filename.pvk`) に関連付けられたパスワードを指定します。この設定はオプションです。省略した場合は、コマンドを実行したときに対話式にパスワードの指定を求められます。

### Linux システムの場合:

各部の意味は以下のとおりです。

`type=<type>`

以下のパスワードのタイプのいずれかを指定します。

#### **server\_db**

難読化されて更新および記録されるパスワードは、サーバー・データベースとの接続に関連しています。

#### **dsa\_db**

難読化されて更新および記録されるパスワードは、DSA データベースとの接続に関連していません。


`password=<password>`

難読化されてから記録されるパスワードを指定します。

`sitePvkLocation=<path+license.pvk>`

秘密鍵ファイル (`filename.pvk`) を指定します。管理ツールを実行するには、この秘密鍵ファイルとそのパスワードが必要です。サイト・レベルの署名鍵へのアクセス権およびパスワードを持つユーザーのみが、新規 BigFix オペレーターを作成できません。



 **注:** コマンド構文で使用される表記 `<path+license.pvk>` は、`path_to_license_file/license.pvk` を表します。

`-sitePvkPassword=<password>`

秘密鍵ファイル (`filename.pvk`) に関連付けられたパスワードを指定します。この設定はオプションです。省略した場合は、コマンドを実行したときに対話式にパスワードの指定を求められます。

## グローバル・システム・オプションの変更

最小更新間隔や Fixlet の表示などの基本的なシステム・デフォルトを変更するには、以下の手順を実行します。

Windows システムの場合:

1. 「スタート」 > 「すべてのプログラム」 > 「BigFix」 > 「BigFix 管理ツール」 から管理ツールを起動します。
2. 「システム・オプション」 タブを選択します。
3. 上部で、グローバルな 「最小更新間隔 (Minimum Refresh)」 を設定できます。デフォルトは 15 秒です。この設定は、反応性もよく、ネットワーク負荷も低いため、バランスがとれています。これらの通信がネットワークに影響を及ぼす場合は、最小値を 60 秒以上に増やすことができます。
4. デフォルトでは、すべてのコンソール・オペレーターが外部サイトを表示できますが、「デフォルトの Fixlet 表示」というセクションでこれを変更できます。マスター・オペレーターだけが外部コンテンツを表示できるようにするには、下部のボタンをクリックします。マスター・オペレーターは、BigFix コンソールで、コンソールのツールバーにある 「非表示コンテンツの表示」 ボタンをクリックすることで、非表示になっている外部コンテンツ・サイトを表示できます。

Linux システムの場合:

1. `/opt/BESServer/bin` コマンド・プロンプトから、以下のようにコマンド・ラインを開始します。

```
./iem login --server=servername:serverport --user=username --
password=password
```

2. /opt/BESServer/bin コマンド・プロンプトから、以下のコマンドを実行します。

```
./iem get admin/options > /appo/options.xml
```

3. /appo/options.xml ファイルで、

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<BESAPI xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
  xsi:noNamespaceSchemaLocation="BESAPI.xsd">
  <SystemOptions Resource="https://nc926065:52311/api/admin/options">

    <MinimumRefreshSeconds>15</MinimumRefreshSeconds>


    <DefaultFixletVisibility>Visible</DefaultFixletVisibility>

  </SystemOptions>
</BESAPI>
```

このファイルの以下のキーワードを編集して、最小更新時間を秒単位で設定し、外部サイトをすべてのコンソール・オペレーターが表示できるようにするか、マスター・オペレーターだけが表示できるようにするかを設定します。

```
<MinimumRefreshSeconds>15</MinimumRefreshSeconds>
<DefaultFixletVisibility>Visible</DefaultFixletVisibility>
```

これらのキーワードに割り当てられている値を変更した場合は、BigFix コンソールのアクティブ・セッションを再始動して、変更を有効にする必要があります。

 **注:** マスター・オペレーターは、BigFix コンソールで、コンソールのツールバーにある「非表示コンテンツの表示」ボタンをクリックすることで、非表示になっている外部コンテンツ・サイトを表示できます。

4. 以下のコマンドを実行して、変更したファイルをアップロードします。

```
./iem post /appo/options.xml admin/options
```

## BigFix ライセンスの拡張

初めてアクション・サイト・ライセンスを要求すると、特定の期間のライセンスが発行されます。ライセンスが失効する前に、BigFix が、ライセンス更新のために十分な時間が確保されるタイミングで警告を出します。有効期限に近づくと、BigFix は Fixlet メッセージを使用してユーザーに通知します。同様に、ライセンスに割り振られているクライアント数を超過し始めた場合、BigFix が警告します。ライセンスの有効期限を延長するか、インストール済み環境に新規クライアント・ライセンスを追加するには、以下の手順に従います。

1. HCL 担当員に通知します (延長ライセンスに対する支払いを行っていない場合は、販売担当員または販売店に連絡し、延長ライセンスを購入する必要があります)。
2. サーバーは、ライセンスの新しいバージョンがあるかどうかを毎日チェックします。強制的にサーバーに直ちにチェックさせたい場合は、コンソールで、「**BigFix 管理**」ドメインに移動し、「**ライセンスの概要**」ノードをクリックし、「**ライセンスの更新を確認**」をクリックします。


ライセンスの管理方法について詳しくは、[ライセンスの管理 \(ページ\)](#) を参照してください。

## サイト認証情報の再作成

秘密鍵および公開鍵の暗号化では、BigFix ルートから、サイト管理者、各コンソール・オペレーターまでの署名権限のチェーンが作成されます。サイト認証情報を失った場合、またはサーバーの IP アドレスを変更した場合、このチェーンは途切れます。この結果は深刻です。HCL に対してサイト証明書の新規要求を再び開始する必要があります。次に、すべてのクライアントを含むシステム全体を再インストールし (クライアントを新しいサーバーに移行する方法について詳しくは、サポート技術者にお問い合わせください)、すべての

ユーザーを再作成する必要があります。これが発生した場合、サポート技術者にお問い合わせください。サイト証明書を保護するために、以下の重要なルールに従ってください。

- **サイトの証明書 (license.crt) および秘密鍵 (license.pvk) はなくさないでください。** 標準手順に従い、重要な機密情報をバックアップし、保護します。
- **サーバーの IP アドレスおよびホスト名やポート番号は変更しないでください。** これらがサイト証明書の主たる識別子であるためです。ライセンス要求時に指定した IP アドレスやポート番号を変更すると、そのライセンスは無効になり、BigFix システムをフレッシュ・インストールしなければならなくなります。サーバーを閉鎖する場合、必ず、同じ IP アドレスと同じポート番号を交換サーバーに適用してください。
- **パスワードは忘れないでください。** パスワードのメモおよび保存については、企業規定に従います。

 **注:** BigFix サイト管理者は、サイト・レベルのキーの現在のパスワードを変更することができます (そのパスワードを知っている場合)。

## 名前が FileOnlyCustomSite で始まる特別なカスタム・サイトの作成

ファイルをエージェントに誤ってまたは意図的に伝播するために生成された (例えば、収集リセットを実行する場合)、名前が FileOnlyCustomSite で始まる特別なカスタム・サイトを削除することができます。このサイトは、`PropagateFiles.exe` ツールを使用して再作成できます。

`PropagateFile.exe` を使用してログインするには、「**コンソールを使用できます**」権限を有効にする必要があります。

次の手順は、名前が FileOnlyCustomSite で始まる特別なカスタム・サイトを再作成する方法を示しています。これらの手順に従うことで、Unable to find site id for URL などのエラーを回避することができます。

1. 空のファイルを含むダミー・ディレクトリーを作成します。例:`C:\dummy` と `foo_file.txt`。

2. BigFix サーバー・ディレクトリーに移動します。例えば、`C:\Program Files (x86)\BigFix Enterprise\BES Server`。
3. ユーザーに特別なカスタム・サイトへの書き込みを許可するには、次のように `PropagateFiles.exe` ツールを実行します。

```
PropagateFiles.exe CreateFileOnlyCustomSiteUserAuthorization <site
admin pvk> <site admin password> <serverURL> <operator name> <operator
password> <site name>
```

各部の意味は以下のとおりです。

- `site admin pvk`: BigFix ライセンス・ファイル (`license.pvk`) への絶対パスです。
- `site admin password`: ライセンス・ファイルのパスワードです。
- `serverURL`: マストヘッド・ファイルからコピーされたサーバー URL です。
- `operator name`: 既存のユーザーの名前です。
- `operator password`: ユーザーのユーザー・パスワードです。
- `site name`: 特別なカスタム・サイトの名前です。サイトにはファイルのみが含まれ、名前は `FileOnlyCustomSite` で始まる必要があります。

例えば、`PropagateFiles.exe CreateFileOnlyCustomSiteUserAuthorization C:\licenses\licence.pvk lcs_password http://bigfixserver:52311 bigfixuser bfu_password FileOnlyCustomSite_FOO`。

Windows 資格情報を使用して認証することもできます。

```
PropagateFiles.exe CreateFileOnlyCustomSiteUserAuthorization
Windowsauthentication <site admin pvk> <site admin
password> <serverURL> <site name>
```

4. ダミー・ディレクトリーのコンテンツをカスタム・サイトに伝播するには、次のコマンドを実行します。

```
PropagateFiles.exe UpdateFileOnlyCustomSite <serverURL> <operator
name> <operator password> <pvk file location> <directory to
propagate> <site name>
```

例えば、`PropagateFiles.exe UpdatefileOnlyCustomSite http://bigfixserver:52311 bigfixuser bfu_password C:\licenses\licence.pvk C:\dummy FileOnlyCustomSite_FOO`。

Windows 資格情報を使用して認証することもできます。

```
PropagateFiles.exe UpdateFileOnlyCustomSite
Windowsauthentication <serverURL> <directory to propagate> <site name>
```

**⚠ 重要:** この操作により、カスタム・サイトのコンテンツはディレクトリーのコンテンツに置き換えられます。

5. カスタム・サイトとそのファイル・コンテンツをターゲットに配布するには、アクション・スクリプトでカスタム・アクションを実行します。

```
custom site subscribe CustomSite_<site name> as "<site name>" on
"{parameter "action issue date" of action}"
```

例:

```
custom site subscribe CustomSite_FileOnlyCustomSite_FOO as
"FileOnlyCustomSite_FOO" on "{now}"
```

`CustomSite_FileOnlyCustomSite_FOO` という特別なカスタム・サイトが作成されます。

特別なカスタム・サイトは、BigFix コンソールには表示されません。サイトが正しく作成されたことを確認するには、次のファイルをチェックします。

- `C:\Program Files (x86)\BigFix Enterprise\BES Server\Mirror Server\Inbox\bfemapfile.xml`
- `C:\Program Files (x86)\BigFix Enterprise\BES Server\Mirror Server\Inbox\GatherState.xml`

# 第章17. メンテナンスおよびトラブルシューティング

Windows サイトのパッチをサブスクライブすると、SQL Server データベース・サーバーに最新のアップグレードとパッチを確実に適用することができます。この場合、サーバー・コンピューターとコンソール・コンピューターを含むすべてのコンピューターにクライアントをインストールする必要があります。さらに、場合により、以下に示すその他のツールおよび手順も使用する必要があります。

- SQL Server がインストールされている場合、**MS SQL Server ツール** を使いこなす必要があります。これにより、データベースをスムーズに実行し続けることができます。
- 定期的にデータベースをバックアップすることが一般的に実践されていますが、これは BigFix データベースに対しても実践する必要があります。また、ときどきエラー・チェックを実行してデータを検証することもお勧めします。
- パフォーマンスが低下していることに気づき始めたら、フラグメント化していないか確認します。BigFix は多数の一時ファイルを書き出します。これにより、ディスクのフラグメント化が進む場合があるため、必要に応じてドライブのデフラグを実行します。定期メンテナンスでも、ときどきディスク・ドライブのエラー・チェックを実行します。
- BigFix **診断ツール** を使用すると、サーバー・コンポーネントを徹底的にテストできます。このツールは、問題が発生したときにいつでも実行できます。追加情報については、[メンテナンスおよびトラブルシューティング \(##### 1015\)](#) を参照してください。
- **「BigFix 管理」** ドメインをときどき確認します。BigFix コンポーネントに関する問題を検出できる、入手可能な Fixlet が多数あります。これにより、多くの場合、ネットワークに影響が及ぶ前に、問題を防ぐことができます。
- BigFix 知識ベース ([IBM BigFix サポート・サイト](#)) を確認してください。このサイトは絶えず更新されており、問題に関する既存の技術情報の記事を見つけることができない場合でも、HCL ソフトウェア・サポートにその問題について問い合わせることができ、その方法が示されています。
- システム全体のパフォーマンスを向上させるためにリレーを追加し、それらに細心の注意を払います。適用環境を正常にするには、リレーが正常であることが重要です。

- 「BigFix 管理」ドメインの「適用状態チェック」ダッシュボードで、最適化および障害について確認します。
- サーバーでモニタリング・アクティビティをセットアップし、ソフトウェアまたはハードウェアの障害が発生した場合に、以下に関して通知が送られるようにします。
  - サーバーの電源オフまたは使用不能
  - ディスク障害
  - サーバーのアプリケーションに関するイベント・ログ・エラー
  - サーバーのサービスの状態
  - FillDB バッファ・ディレクトリーのデータ・バックアップの状態

## リレーの正常性のモニター

BigFix では、クライアントおよびリレーのセットアップをモニターして、それらが最適に動作していることを確認できます。大規模なパッチをデプロイする前に、スムーズなロールアウトを確実に実行できるよう、リレーの状況を確認できます。

リレーの配置をモニターする際の推奨事項を以下に示します。

- 「BigFix 管理」ドメインと「分析」ノードをクリックして、リレーの状況分析をアクティブにします。この分析には、リレーの正常性の詳細ビューを表示するためのさまざまなプロパティが含まれています。
- 分析の「結果」タブをクリックして、リレー状況分析の「リレーへの距離」プロパティをモニターし、ネットワークの正常な状態を確認します。トポロジーが突然変化したり、一部のクライアントがサーバーに到達するために余分なホップを使用していることに気付いたりした場合、リレーの障害を示している可能性があります。
- サーバーに直接報告するクライアントの数を最小化するようにしてください。これは通常、リレーを使用するよりも効率性が低くなります。この分析を調査することで、どのコンピューターがどのリレーに報告しているかが分かります。

## リレーおよびサーバーの診断

BigFix 環境のセットアップと状況をモニターし、クライアント上でアクションを実行します。



以下の機能診断を使用して、サーバーおよびリレー設定の情報を取得したり、クライアント上でアクションを実行したりできます。V9.5.6 以降、リレー診断ページはデフォルトで無効になっており、有効に設定された場合はパスワードで保護されます。詳しくは次を参照してください。[リレー診断 \( \(ページ\) 843\)](#)。

診断にアクセスするには、ブラウザを開き、アドレス・フィールドに以下を入力します。

```
http://<computer_name>:52311/rd
```

または

```
http://<computer_name>:52311/RelayDiagnostics
```

各部の意味は以下のとおりです。


**<computer\_name>**

検査するサーバーまたはリレーがインストールされているワークステーションのアドレスです。

診断ページは以下のセクションに分割されています。

### リレーまたはサーバーの診断

このセクションでは、環境設定に関する情報を収集できます。+ 記号をクリックして、設定の各種タイプを展開し、その値を確認します。

 **注:** 項目「照会設定」は、BigFix 照会処理を参照しています。この機能について詳しくは、[BigFix Query の使用によるクライアント情報の取得 \(##### 138\)](#)を参照してください。

### リレー状況情報

このセクションでは、リレー上で使用されるキャッシュの、FillDB 専用のキューおよび BigFix Query 要求および結果専用のキューの情報を表示できます。

- FillDB ファイル・サイズ制限 (FillDB File Size Limit)
- FillDB ファイル・カウンター制限 (FillDB File Counter Limit)

- 「**キュー内の照会のタイムアウト**」は、BigFix Query 要求が削除されるまでのキュー内での滞在時間を示しています。
- 「**キュー内の照会のサイズ**」は、BigFix Query 要求を保管するためにリレーで使用されるキャッシュのサイズを示しています。
- 「**キュー内の結果のサイズ**」は、BigFix Query 結果を保管するためにリレーで使用されるキャッシュのサイズを示しています。

「**照会キューを空にする**」ボタンをクリックすると、リレー・キャッシュ内の BigFix Query 要求および結果を保管するキューがクリーンアップされます。

### コンソール・ユーザー情報

このセクションでは、ユーザーが BigFix へのアクセスを許可されているかどうかを確認できます。このセクションは、サーバー診断にアクセスした場合にのみ使用可能です。

「**ユーザー許可の確認**」をクリックし、ユーザーの資格情報を入力して、そのユーザーが BigFix コンソールへのアクセスを許可されているかどうかを、実際にそれらの資格情報を使用してログインする必要なしに、検証できます。

### サイト収集情報

このセクションでは、環境サイトに関連した情報を収集できます。

- 「**収集状況ページ**」をクリックして、サイト収集状況に関する情報を取得します。
- サイト・コンテンツの最新バージョンを取得するには、「**すべてのサイトを収集**」ボタンをクリックします。
- 「**Fixlet サイト要求**」では、サイトに関連する各種タイプの要求に関する情報を収集できます。要求のタイプ、表示されたリスト内のサイトの URL、CRC を使用するかどうかを選択し、「**送信**」をクリックします。

### クライアント登録

このセクションでは、単一のコンピューターまたは環境内のすべてのコンピューターに対する要求を実行できます。

- 「**コンピューター ID の取得**」 ボタンをクリックして、リレーのコンピューター ID を確認します。
- 「**単一コンピューターの要求**」 では、リスト内の要求のいずれかを選択し、「**送信**」をクリックすることで、単一コンピューターに関連するさまざまなタイプの要求を選択できます。要求タイプによっては、1つ以上のテキスト・フィールドの入力が必要な場合があります。必要なフィールドは自動的に有効になります。
- 「**すべてのコンピューターの要求**」 では、表示されたリスト内の要求のいずれかを選択し、「**送信**」をクリックすることで、環境内のすべてのコンピューターに関連するさまざまなタイプの要求を選択できます。要求タイプによっては、「**アクション ID**」の指定が必要な場合があります (有効になっている場合)。

## ダウンロード情報

このセクションでは、システムで実行されているダウンロードに関する情報を収集できます。

- 「**ダウンロード状況ページ**」 をクリックして、サーバーまたはリレー上でアクティブなダウンロードに関する情報を取得します。
- 「**ダウンロード状況テキスト・ページ**」 をクリックして、サーバーまたはリレー上でアクティブなダウンロードに関する情報を XML 言語で取得します。
- 「**ダウンロード要求**」 では、関連フィールドに「**アクション ID**」と「**サイト URL**」を指定することで、特定のサイトの特定のアクションに関する情報を収集できます。「**ダウンロード収集要求**」 ボタンをクリックして、要求を実行します。

## 仮想化環境および仮想マシン

オペレーティング・システムを複数の仮想マシンで実行できます。

BigFix では、オペレーティング・システムを複数のイメージで実行して、ハードウェアとソフトウェアのリソースを共有するメリットを得ることができます。特に、IBM z Systems では、z/VM 環境の中で Linux イメージが IBM z Systems サーバーの信頼性、可用性、保守性と内部の高速通信のメリットを得ることができます。z/VM は、Linux ワークロードを単一の物理サーバーに統合して、数百から数千の Linux イメージを実行できるようにする理想的なプラットフォームです。

BigFix の設計では、BESClient エージェントは、ループで作動し、ディレクトリー `<BESClient_installation_path>/__BESData` の内容に基づいて、実行するアクティビティをチェックします。これらのアクティビティと、z/VM 環境で一般的に見られる多数の並行仮想マシンにより、CPU 使用率が 100% になる可能性があります。この問題を防止して、プロセスへの CPU 割り当てを制御するには、[CPU 使用率 \( ページ 413 \)](#) に記載されている構成設定を使用します。

いくつかの有用なパラメーターとしては、作業の量とアイドル時間の長さのバランスを取ることで CPU 使用量を制御する `_BESClient_Resource_WorkIdle` と `_BESClient_Resource_SleepIdle` が挙げられます。これらのデフォルト値は、それぞれ 10 ミリ秒と 480 ミリ秒です。デフォルト値が使用される場合、各仮想マシンの作業は約 2% になります。さらに低いパーセンテージを得る必要がある場合は、これらの値を変更できます。この場合のマイナス面は、新規アクティビティを処理する必要があるときに、BigFix クライアントが低速になることです。新しい値を設定することで、仮想マシンの数を考慮に入れて、全 CPU の使用率が 100% になることを回避できます。

その他のパラメーターでは、エージェントを 1 日の一定時間にわたって静止状態にして、残りの時間はアクティブになるように設定することができます。静止期間中、CPU 使用量はほぼ 0% になります。この動作を制御するパラメーターは、`_BESClient_Resource_QuietEnable`、`_BESClient_Resource_QuietStartTime`、および `_BESClient_Resource_QuietSeconds` です。例えば、以下の値を設定します。

```
_BESClient_Resource_QuietEnable=1
_BESClient_Resource_QuietSeconds=43200
_BESClient_Resource_QuietStartTime=07:00
```

エージェントは、毎日 07:00 AM に静止モードになり、43,200 秒間 (12 時間) にわたってこの状態のままになり、07:00 PM にウェイクアップします。静止モード中、エージェントが使用する CPU 時間はほぼ 0% で、アクティビティを処理しません。

クライアントがスリープ・モードになっている時間の長さを制御するためのその他の有用なパラメーターは、`_BESClient_Resource_PowerSaveEnable` および `_BESClient_Resource_PowerSaveTimeoutX` (0 から 5 の範囲の X) です。特に、バッテリーの低電力の問題がある場合や、CPU 使用率を下げる必要がある場合などに役立ちます。

上記のパラメーターやその他多数のパラメーターの詳細な説明については、上記のリンクの構成設定を参照してください。

---

#### 関連資料

- [設定のリストと詳細な説明 \(##### 167\)](#)

#### 関連情報

- [CPU 使用率 \(##### 413\)](#)